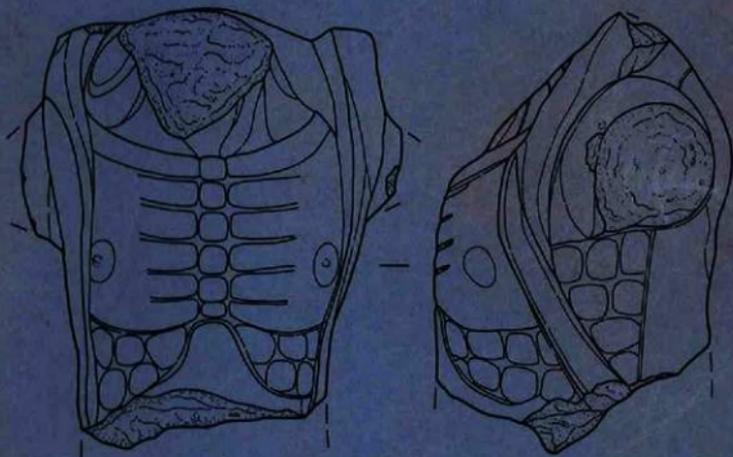


天界寺跡(II)

—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査—

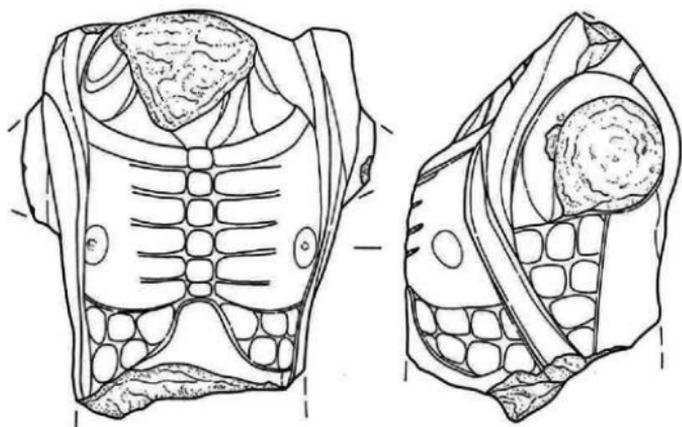


平成14年(2002年)3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

天界寺跡(II)

—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査—



平成14年(2002年)3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



調査区透景



石列



コーラル数B及び瓦葺まり



北側地山面



北側堆積状況



縄輪陶器



青磁



本土産陶器



中国産色絵・染付



沖縄産無釉陶器



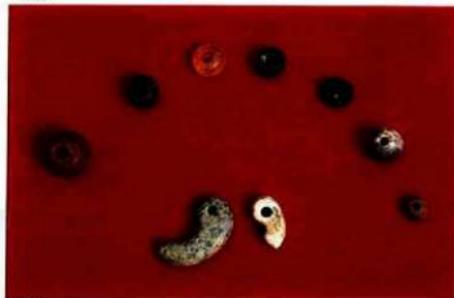
沖縄産施釉・無釉陶器



石像



石像



玉類



錢貨



青磁・白磁



屋瓦

序

本報告書は平成8年度と9年度に実施した旧天界寺跡西区緊急発掘調査の成果をまとめたものです。発掘調査は首里城公園管理棟建設に伴うもので、沖縄県土木建築部都市計画課からの依頼を受け、沖縄県教育庁文化課が分任事業として実施したものです。出土品の整理及び報告書の刊行は、平成12年度に開所しました沖縄県立埋蔵文化財センターが行いました。

首里城復元整備事業の進行に伴い、かつて威容を誇っていた琉球国の上城がその全容を蘇らせつつあります。城郭内の整備に並行して、城周辺の公園整備も進められており、毎年多くの観光客が訪れる観光名所となっております。

天界寺跡の発掘調査も首里城周辺の公園整備に伴うもので、玉陵に隣接する首里城公園管理センターが新設されることに伴うものです。平成7年度には那覇市教育委員会による発掘調査が実施され、その成果である報告書も刊行されております。

今回の発掘調査は天界寺跡の西側部分について実施しました。発掘調査の結果、赤土造成の下層からは古い時期の円形の溝状掘り込み遺構や柱穴群、石垣や石列のほか瓦だまりなどが検出され、創建当時の様子を窺い知る貴重な遺構が発見されました。また、赤土造成層の上面からは首里古地図に描かれている本殿から延びるコーラル敷きの参道が検出されるなど、記録の少ない天界寺の歴史の一端を窺い知る貴重な発見がありました。

出土品としては、中国やタイなど多くの貿易陶磁器とともに石像が発見され注目されます。石像は県下では初めての出土であり、文献資料とも符合することがわかりました。このような調査成果をまとめた本報告書が沖縄の歴史や首里城などの研究資料として活用されれば幸いです。

末尾になりましたが、本発掘調査事業の実施に際しご協力を賜りました関係各位に、発掘調査及び資料整理の際にご指導・ご助言いただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

平成14年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 知念 勇

例 言

- 1、本書は平成8年度から9年度にかけて実施した、首里城公園管理棟建設工事に係る緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2、調査は、沖縄県土木建築部都市計画課からの分任事業として沖縄県教育庁文化課が実施した。
- 3、資料整理作業は、平成11年度までは県文化課が行い、平成12年度からは沖縄県立埋蔵文化財センターが引き続き実施した。
- 4、本書に使用した1/25000地形図は国土地理院発行の資料によった。
- 5、本書に表した高度値は海拔高である。
- 6、資料整理にあたり、下記の方々へ各遺物の鑑定、または同定をお願いした。記して謝意を表したい。

陶 磁 器 (五十音順)

- 池畑 耕一氏 (鹿児島県教育庁文化課)
大橋 康二氏 (佐賀県立九州陶磁文化館)
鈴田由紀夫氏 (佐賀県立九州陶磁文化館)
手塚 直樹氏 (青山学院大学)
橋本 久和氏 (大阪府高槻市教育委員会)
石 器…神谷 厚昭氏 (沖縄県立真和志高等学校)
貝 類…名和 純氏 (濁の生態史研究会会員)
魚骨・獣骨…金子 浩昌氏 (東京国立博物館)
人 骨…譜久嶺忠彦氏 (琉球大学医学部)

- 7、本書の編集は烏袋春美・新城ゆかりの協力を得て烏袋洋が行った。
- 8、各章の執筆分担は次の通りである。

- 烏袋 洋…第I～第IV章、第V章第1節、第VI章
西銘 章…第V章第2節、第7節、第13節、第23・24節、第36節
知念 隆博…第V章第3節
山本 正昭…第V章第4～6、第9～12節
喜多 亮輔…第V章第8節
新城ゆかり…第V章第14・15節、第17・18節、第25～27節、第31～33節、第39節
出里 一寿…第V章第16節、第21・22節
新垣 力…第V章第19・20節
玉城 照美…第V章第28・29節、第40節-1
岸本 竹美…第V章第30節、第34節
伊集ゆきの…第V章第35節
仲座 久宜…第V章第37節
上原 静…第V章第38節
金子 浩昌…第V章第40節-2
譜久嶺忠彦…第V章第41節

- 9、遺物の写真撮影は宮崎典子、光嶋香による。
- 10、発掘調査で出土した遺物及び、実測図・写真等の記録は全て、沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目次

巻首図版

序

例言

報告書抄録

第I章	調査に至る経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査体制	1
第II章	位置と環境	3
第III章	調査経過	6
第IV章	層序と遺構	8
第1節	層序	8
第2節	遺構	9
第V章	出土遺物	26
第1節	青磁	26
第2節	白磁	41
第3節	染付	47
第4節	鉄釉染付	54
第5節	瑠璃釉・瑠璃釉染付	54
第6節	翡翠釉	54
第7節	中国産色絵	57
第8節	三彩	58
第9節	宜興窯系	59
第10節	産地不明陶器	59
第11節	粉青沙器	62
第12節	泉州窯系磁器	62
第13節	黒釉陶器	62
第14節	褐釉陶器	65
第15節	タイ産褐釉陶器	72
第16節	タイ産半練土器	74
第17節	本土産磁器	76
第18節	本土産陶器	79
第19節	沖縄産施釉陶器	81
第20節	沖縄産無釉陶器	94
第21節	陶質土器	102
第22節	瓦質土器	109
第23節	土器	114
第24節	類須恵器	116
第25節	土製品	116
第26節	円盤状製品	117
第27節	煙管	119
第28節	貝製品	120
第29節	骨製品	120
第30節	銭貨	123
第31節	青銅製品	127
第32節	鉄製品	128
第33節	埴埴	128
第34節	玉類	130
第35節	石器・石製品	131
第36節	滑石製品	135
第37節	石像	136
第38節	風瓦	140
第39節	埴	144
第40節	自然遺物	151
1.	貝類	151
2.	動物遺体	152
第41節	人骨	171
第VI章	総括	173

目 次

第1図	古地図に見る天界寺	3
第2図	沖繩本島及び那覇市の位置	4
第3図	天界寺の位置(那覇市歴史地図より)	5
第4図	発掘調査の範囲及びグリッド設定	7
第5図	層序 (Jライン、16ライン)	12
第6図	主な出土遺構配置	13
第7図	基壇(F・G-21~23)	14
第8図	石垣A(II-J-24)	15
第9図	石列A(G-K-24)	16
第10図	層序B、C(M-24)	17
第11図	方形堀込み遺構(H・I-22)	18
第12図	溝状石列(L-17・18)	19
第13図	溝状石列(L・M-19・20)	20
第14図	ピット検出状況	21
第15図	円弧状遺構1~6	22
第16図	青磁(1)	34
第17図	青磁(2)	35
第18図	青磁(3)	36
第19図	青磁(4)	37
第20図	青磁(5)	38
第21図	白磁(1)	44
第22図	白磁(2)	45
第23図	白磁(3)	46
第24図	染付(1)	51
第25図	染付(2)	52
第26図	染付(3)	53
第27図	鉄釉染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉	56
第28図	中国産色絵	57
第29図	三彩・宜興窯系・産地不明陶器	61
第30図	粉青沙器・泉州窯系磁器・黒釉陶器	64
第31図	褐釉陶器(1)	68
第32図	褐釉陶器(2)	69
第33図	褐釉陶器(3)	70
第34図	褐釉陶器(4)	71
第35図	タイ産褐釉陶器	73
第36図	タイ産半練土器	74
第37図	本土産磁器	78
第38図	本土産陶器	80
第39図	沖繩産施釉陶器(1)	88
第40図	沖繩産施釉陶器(2)	89
第41図	沖繩産施釉陶器(3)	90
第42図	沖繩産施釉陶器(4)	91
第43図	沖繩産施釉陶器(5)	92
第44図	沖繩産施釉陶器(6)	93
第45図	沖繩産無釉陶器(1)	98
第46図	沖繩産無釉陶器(2)	99
第47図	沖繩産無釉陶器(3)	100
第48図	沖繩産無釉陶器(4)	101
第49図	陶質土器(1)	106
第50図	陶質土器(2)	107
第51図	陶質土器(3)	108
第52図	瓦質土器(1)	112
第53図	瓦質土器(2)	113
第54図	土器	115
第55図	類須恵器	116
第56図	土製品	116
第57図	円盤状製品	118
第58図	煙管	119
第59図	貝製品・骨製品	122
第60図	銭貨(有文)	126
第61図	銭貨(無文)	127
第62図	青銅製品・鉄製品・埴埴	129

第63図	下類	130
第64図	石器・石製品(1)	133
第65図	石器・石製品(2)	134
第66図	石器・石製品(3)、滑石製品	135
第67図	石像(1)	138
第68図	石像(2)	139
第69図	高麗系瓦・大和系瓦	146
第70図	明朝系瓦	147
第71図	明朝系瓦・埴	148
第72図	ハマフエフキの計測相関	166
第73図	魚骨、ニワトリの計測位置	168
第74図	獣骨の計測位置	169
第75図	切痕	170

目 次

第1表	ピット計測一覧	23
第2表	円弧状遺構周辺ピット計測一覧	24
第3表	遺物出土状況	25
第4表	青磁出土状況	39
第5表	青磁観察一覧	28
第6表	白磁観察一覧	41
第7表	白磁出土状況	43
第8表	染付観察一覧	47
第9表	染付出土状況	50
第10表	鉄釉染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉出土状況	54
第11表	鉄釉染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉観察一覧	55
第12表	中国産色絵出土状況	57
第13表	中国産色絵観察一覧	57
第14表	三彩・宜興窯系・産地不明陶器出土状況	59
第15表	三彩・宜興窯系・産地不明陶器観察一覧	60
第16表	粉青沙器・泉州窯系磁器・黒釉陶器・青磁染付・タイ陶器出土状況	62
第17表	粉青沙器・泉州窯系磁器・黒釉陶器観察一覧	63
第18表	褐釉陶器出土状況	65
第19表	褐釉陶器観察一覧	66
第20表	タイ産褐釉陶器出土状況	72
第21表	タイ産褐釉陶器観察一覧	72
第22表	タイ産半練土器出土状況	75
第23表	タイ産半練土器観察一覧	75
第24表	本土産磁器観察一覧	76
第25表	本土産磁器出土状況	77
第26表	本土産陶器出土状況	79
第27表	本土産陶器観察一覧	80
第28表	沖繩産施釉陶器出土状況	84
第29表	沖繩産施釉陶器観察一覧	85
第30表	沖繩産無釉陶器観察一覧	95
第31表	沖繩産無釉陶器出土状況	97
第32表	陶質土器出土状況	103
第33表	陶質土器観察一覧	104
第34表	瓦質土器出土状況	110
第35表	瓦質土器観察一覧	111
第36表	土器出土状況	114
第37表	土器観察一覧	114
第38表	類須恵器出土状況	116
第39表	類須恵器観察一覧	116
第40表	円盤状製品法量一覧	117
第41表	円盤状製品出土状況	117
第42表	煙管観察一覧	119
第43表	銭貨観察一覧	123
第44表	銭貨出土状況	125

第45表	跡観察一覽	127
第46表	青銅製品・鉄製品出土状況	128
第47表	玉類観察一覽	130
第48表	石器・石製品出土状況	132
第49表	石器・石製品観察一覽	132
第50表	滑石製品観察一覽	135
第51表	高麗系瓦出土状況表	140
第52表	人和系瓦出土状況表	141
第53表	明朝系軒瓦出土状況表	142
第54表	明朝系瓦の焼成分類別の出土状況表	145
第55表	貝類出土状況(1) 巻貝	149
第56表	貝類出土状況(2) 二枚貝	150
第57表	魚類出土量	165
第58表	サカナ計測一覽	166
第59表	ノコギリガサミ出土一覽	156
第60表	サメ類出土一覽	156
第61表	ウミガメ出土一覽	156
第62表	ウミウシ出土一覽	156
第63表	カモ類出土一覽	156
第64表	トリ類出土一覽	156
第65表	キジ類出土一覽	156
第66表	ネズミ出土一覽	156
第67表	イルカ類出土一覽	156
第68表	イヌ出土一覽	156
第69表	ネコ出土一覽	156
第70表	ジュゴン出土一覽	156
第71表	ニワトリ出土量	157
第72表	ウシorウマ出土一覽	158
第73表	ウマ歯出土一覽	158
第74表	シカ歯出土一覽	158
第75表	ウシ歯出土一覽	158
第76表	ヤギ歯出土一覽	158
第77表	種不明出土一覽	158
第78表	ウマ出土量	159
第79表	ブタ歯出土量	160
第80表	ブタ出土量	161
第81表	ウシ歯出土量	163
第82表	ニワトリ計測一覽	167
第83表	イヌ計測一覽	167
第84表	ネコ計測一覽	167
第85表	ジュゴン計測一覽	167
第86表	ウマ計測一覽	167
第87表	ブタ計測一覽	167
第88表	シカ計測一覽	167
第89表	ウシ計測一覽	167
第90表	ヤギ計測一覽	167
第91表	ヒト出土一覽	171
第92表	ヒト計測一覽	172
第93表	ナンバーリング：出土地対照一覽	262

図版目次

図版1	調査区遠景	177
図版2	堆積状況及び遺構検出状況(1)	178
図版3	遺構検出状況(2)	179
図版4	遺構検出状況(3)	180
図版5	青磁(1)	181
図版6	青磁(2)	182
図版7	青磁(3)	183
図版8	青磁(4)	184
図版9	青磁(5)	185
図版10	白磁(1)	186
図版11	白磁(2)	187
図版12	白磁(3)	188
図版13	染付(1)	189

図版14	染付(2)	190
図版15	染付(3)	191
図版16	鉄胎染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉	192
図版17	中国産色絵	193
図版18	二彩・宣興窯系・産地不明陶器	194
図版19	粉青沙器・泉州窯系磁器・黒釉陶器	195
図版20	褐釉陶器(1)	196
図版21	褐釉陶器(2)	197
図版22	褐釉陶器(3)	198
図版23	褐釉陶器(4)	199
図版24	タイ産褐釉陶器	200
図版25	タイ産半練土器	201
図版26	本土産磁器	202
図版27	本土産陶器	203
図版28	沖繩産施釉陶器(1)	204
図版29	沖繩産施釉陶器(2)	205
図版30	沖繩産施釉陶器(3)	206
図版31	沖繩産施釉陶器(4)	207
図版32	沖繩産施釉陶器(5)	208
図版33	沖繩産施釉陶器(6)	209
図版34	沖繩産無釉陶器(1)	210
図版35	沖繩産無釉陶器(2)	211
図版36	沖繩産無釉陶器(3)	212
図版37	沖繩産無釉陶器(4)	213
図版38	陶質土器(1)	214
図版39	陶質土器(2)	215
図版40	陶質土器(3)	216
図版41	瓦質土器(1)	217
図版42	瓦質土器(2)	218
図版43	土器・類須恵器・土製品	219
図版44	円盤状製品	220
図版45	煙管	221
図版46	貝製品・骨製品	222
図版47	銭貨(有文)	223
図版48	上：銭貨(無文)下：玉類	224
図版49	青銅製品・鉄製品・埴埴	225
図版50	石器・石製品(1)	226
図版51	石器・石製品(2)	227
図版52	石器・石製品(3)、滑石製品	228
図版53	石像(1)	229
図版54	石像(2)	230
図版55	高麗系瓦・大和系瓦	231
図版56	明朝系瓦	232
図版57	明朝系瓦・埴	233
図版58	貝(1)	234
図版59	貝(2)	235
図版60	貝(3)	236
図版61	貝(4)	237
図版62	魚類(1)	239
図版63	魚類(2)	241
図版64	トリ・ニワトリ	243
図版65	イルカ類・ジュゴン・イヌ・ネコ	245
図版66	ウマ(1)	247
図版67	ウマ(2)	249
図版68	ブタ(1)	251
図版69	ブタ(2)	253
図版70	ウシ(1)	255
図版71	ウシ(2)	257
図版72	シカ・ヤギ・不明	259
図版73	切痕	261
図版74	人骨	172

報告書抄録

ふりがな	てんかいじあと							
書名	天界寺跡(Ⅱ)							
副書名	首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査							
巻次								
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	島袋 洋・西銘 章・知念隆博・山本正昭・喜多亮輔・新城ゆかり・田里一寿・新垣力 玉城照美・岸本竹美・伊集ゆきの・仲座久宜・上原 静・金子浩昌・瀧久嶺忠彦							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL098-835-8752							
発行年月日	西暦2002年(平成14年)3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃		m ²	
てんかいじあと 天界寺跡	沖縄県那覇市 首里金城町	47201		26° 12' 53"	127° 43' 02"	1996.6.3 } 1998.1.31	1316	首里城公園管理棟建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
天界寺跡	宗教遺跡	琉球王府時代 近世		石列遺構 石垣遺構 方形掘込遺構 溝状遺構 瓦礫集中遺構 円弧状遺構 土壌 柱穴群など		青磁 白磁 染付 褐釉陶器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 瓦質土器 陶質土器 土器 瓦・塼 鉄製品 青銅製品 石像など		石像

第I章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

首里城復元整備事業の進行とともに、琉球王国の王城が在りし日の姿を今に蘇らせつつある。呼応するように訪れる観光客の数も増え、観光バスやタクシーの往来も激しくなっている。観光メッカのひとつとして賑わいをみせる首里城周辺の整備も急ピッチになり、観光バスなどの駐車スペースの確保、渋滞を引き起こさないような進入路の整備、公園全体の管理センターの充実などが図られ、周辺の様相も変じてきている。

今回の調査の契機もそのような公園整備に係るものである。首里占地図などの古文獻にみえる天界寺の古城にも道路の整備や公園管理センターの新設などの事業が計画された。天界寺の中央部を走る道路、その道路から首里社館の地下駐車場への進入路整備に伴う緊急発掘調査が終了している¹⁾。今回は天界寺の3回目の調査ということになり、天界寺境内の西側一帯(玉陵に東接する地域)が調査対象となった。

当初、平成8年度に県都市計画課からの調整(玉陵の東側に公園管理センター棟を新設する計画)により、緊急発掘調査に着手した。しかし、調査に着手して間もなく、先に首里社館地下駐車場への進入路の範囲を発掘調査してほしいとの申し出がなされたため、その地域の発掘調査を優先して行うことになった。その調査の終了後に管理センター棟新設地域の発掘調査を行うことで県都市計画課との調整がなされた。つまり、天界寺東地区(地下駐車場への進入路地区)の調査終了後²⁾に天界寺西地区(玉陵東接地区)の本格的な発掘調査を実施することになった。

天界寺西地区(玉陵東接地区)の調査費用は改めて県都市計画課が負担し、発掘調査は引き続き県文化課が行うことでまとめ、本格的な発掘調査は平成9年2月中旬からの開始となった。

〈註〉

註1「天界寺跡—首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告」『那覇市文化財調査報告書』第43集 那覇市教育委員会 2000年3月

註2「天界寺跡(Ⅰ)—首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月

第2節 調査体制

発掘調査から資料整理および報告書の刊行まで以下の体制で行った。

事業主体	・ ・ ・ ・ ・	沖縄県教育委員会
教育長	・ ・ ・ ・ ・	仲里 長和(平成8年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	安室 肇(平成9年度～10年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	翁長 良盛(平成11年度～12年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	津嘉山朝祥(平成13年度)
文化課課長	・ ・ ・ ・ ・	大城 将保(平成8年度～10年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	當眞 嗣一(平成11年度～13年度)
文化課課長補佐	・ ・ ・ ・ ・	日越 国昭(平成8年度～9年度)
文化課副参事兼課長補佐	・ ・ ・ ・ ・	稲嶺 靖子(平成10年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	當眞 嗣一(平成10年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	千木良芳範(平成11年度～12年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	大城 慧(平成13年度)

調査事務

文化課管理係主幹	・ ・ ・ ・ ・	比屋根止治(平成8年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	大浜 節(平成9年度～11年度)
〃	主査	・ ・ ・ ・ ・ 村山 佐代(平成8年度～10年度)
〃	・ ・ ・ ・ ・	砂川 邦子(平成9年度～11年度)

文化課管理係主査・・・當間 清美（平成11年度）
 “ 副主査・・・新垣 敏子（平成8年度）
 “ “・・・當間 清美（平成10年度）
 “ 主任・・・當間 保智（平成8年度）
 “ “・・・島袋 正都（平成9～10年度）
 “ “・・・横山さゆり（平成11年度）
 “ 主事・・・上原 直樹（平成8年度～9年度）
 調査主体・・・・・・沖縄県立埋蔵文化財センター（平成12年度～13年度）
 調査統括 所長・・・・・・知念 勇（平成12年度～13年度）
 調査事務 副所長・・・・・・知念 廣義（平成12年度～13年度）
 “ 庶務課主事・・・・・・上原 浩（平成12年度～13年度）
 “ “・・・・・・城間 千賀（平成12年度～13年度）
 調査課 課長・・・・・・島袋 洋（平成12年度～13年度）

調査総括

埋蔵文化財係 係長・・・・大城 慧（平成8年度～9年度）
 “ “・・・・島袋 洋（平成10年度～11年度）
 発掘調査専門員・・・・・・島袋 洋（平成8年度～9年度）
 “ “・・・・・・金城 亀信（平成8年度～11年度）
 “ “・・・・・・仲座 久宜（平成8年度～11年度）
 “ “・・・・・・比嘉 聡（平成8年度 現：沖縄県立那覇国際高等学校）
 発掘調査補助員・・・・・・當銘由嗣、當銘清乃（旧姓：上原）、新城ゆかり（旧姓：仲與根）、比嘉優子、
 又吉純子、島袋春美、赤嶺雅子、玉寄智恵子

発掘調査作業員

新垣直美、金城さとみ、津波古美津江、大宜見より子、新垣キク、翁長スミ子、太田吉光、名嘉典朝紀、
 島袋智之、宮城利香、桃原佐恵美、与那嶺勢津子、真栄城下枝子、呉我フジ子、中塚末子、宮国恵子、島袋文子、
 古屋聡洋、真志喜千代子、上間チエ、桃原隆信、照屋栄了、柚木崎末子、森山弘恵、當真みよ子、當真フミ、
 當真喜美江、當真すみ子、當真ヨシ子、新垣裕子、城間光子

資料整理作業員

比嘉登美子、長田剛、仲宗根三枝子、城間千鶴子、玉城恵美利、大城美和子、照屋利子、大城直美、池原直美、
 瑞慶覧尚美、源河秀子、折田衣代、高良三千代、玉榮さとみ、金城京子、天願睦美、吉田昌子、比嘉孝子、
 新垣利津代、外間暉、真榮田聡子、伊集ゆきの、平良貴子、岸本竹美、玉城照美、宮崎典了、諫久村泰子、
 光嶋香、金城克子、比嘉洋子、神元逸子、石嶺敏子

第Ⅱ章 位置と環境

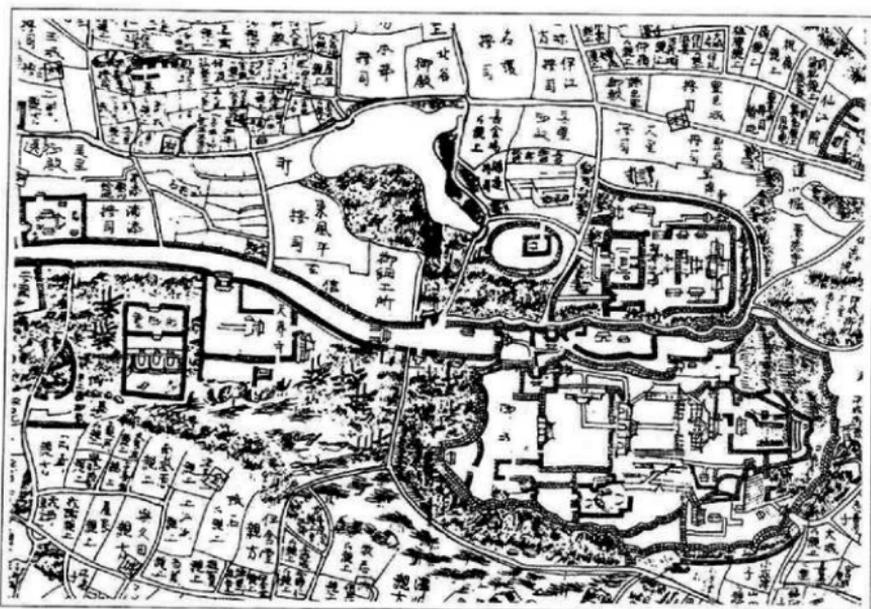
天界寺跡は那覇市首里にある。復元整備事業の進む首里城の西側に位置しており、首里占地図（1773年）をみると、守礼門の南側一帯に位置し、西側を玉陵に接している。

琉球王国の王都として栄えた首里の町は、略三角形を呈する那覇市の東南側に位置し、周辺を丘陵や川に囲まれた琉球石灰岩の台地（標高70～130m）上に展開している。基盤の青灰色粘土（クチャ）層と上部を構成する琉球石灰岩の間から流れる湧き水が豊富で、首里城の内外に樋川や井戸などが見受けられる。

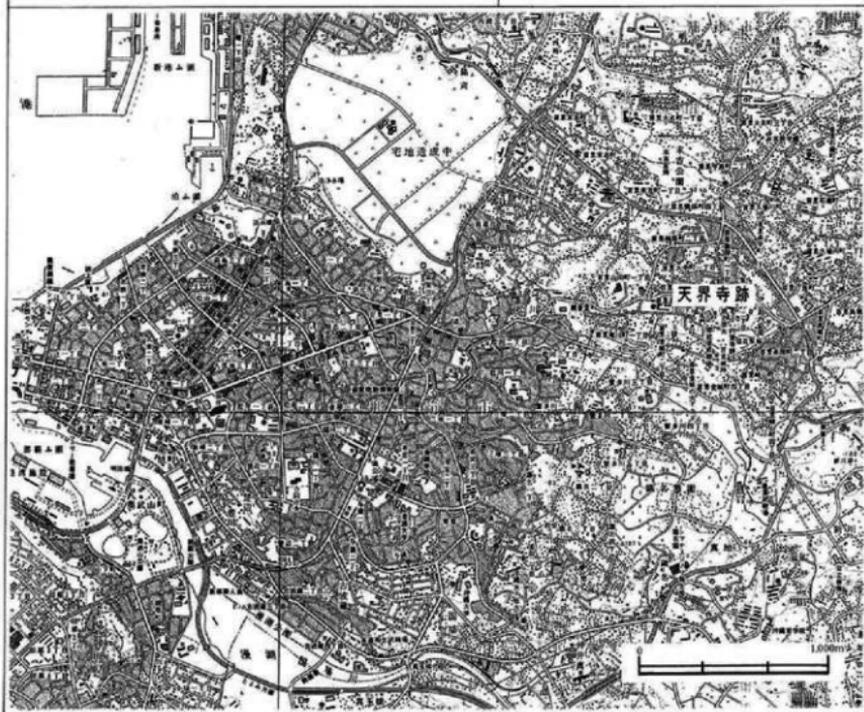
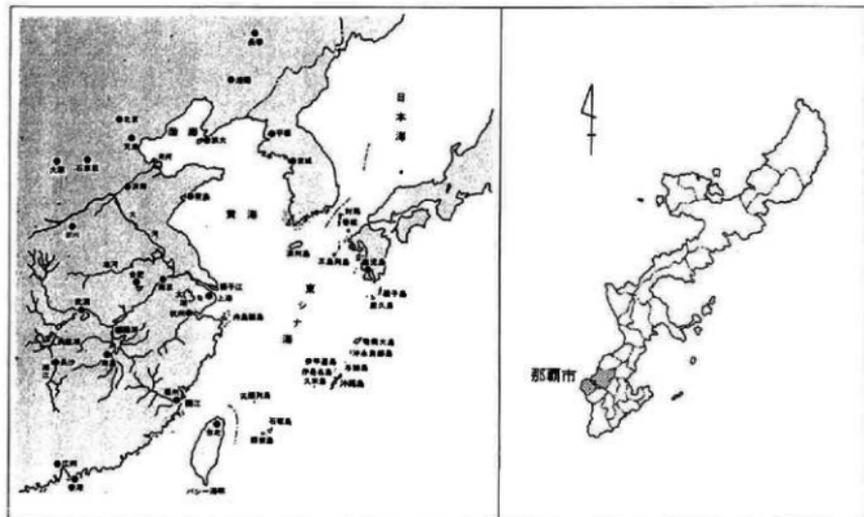
首里城を中心に形成された城下町も、沖縄戦の際に集中砲火を受け、壊滅的な打撃を被った。營々と営まれてきた生活の中に育まれてきた文化、当時の粋を集めた建造物など、多くの文化財が灰燼に帰した。しかし、復元後の首里城復元を望む声の高まりにより進められている首里城復元整備事業、それに伴い周辺の公園整備事業も活発化し、首里城内はもとよりその周辺でも往時の雰囲気を感じ出しつつある。近年は、道路や駐車場などの整備も図られ、観光名所のひとつとなり、多くの観光客で賑わいをみせている。

天界寺は首里城の西側に位置し、守礼門から那覇市街に延びる綾門大道に沿うように寺域が展開する。境内の東側が高く、西側が低い地形である。南側は琉球石灰岩の岩盤が東西に走り、寺域の南縁をつくっている。第一尚氏の菩提寺として、景泰年間（1450～56）に創建されたことが『球陽』にみえ、『琉球同由來記』には火災にあった天界寺が順治年間（1644～61）にはすべて復旧したことが記されている。

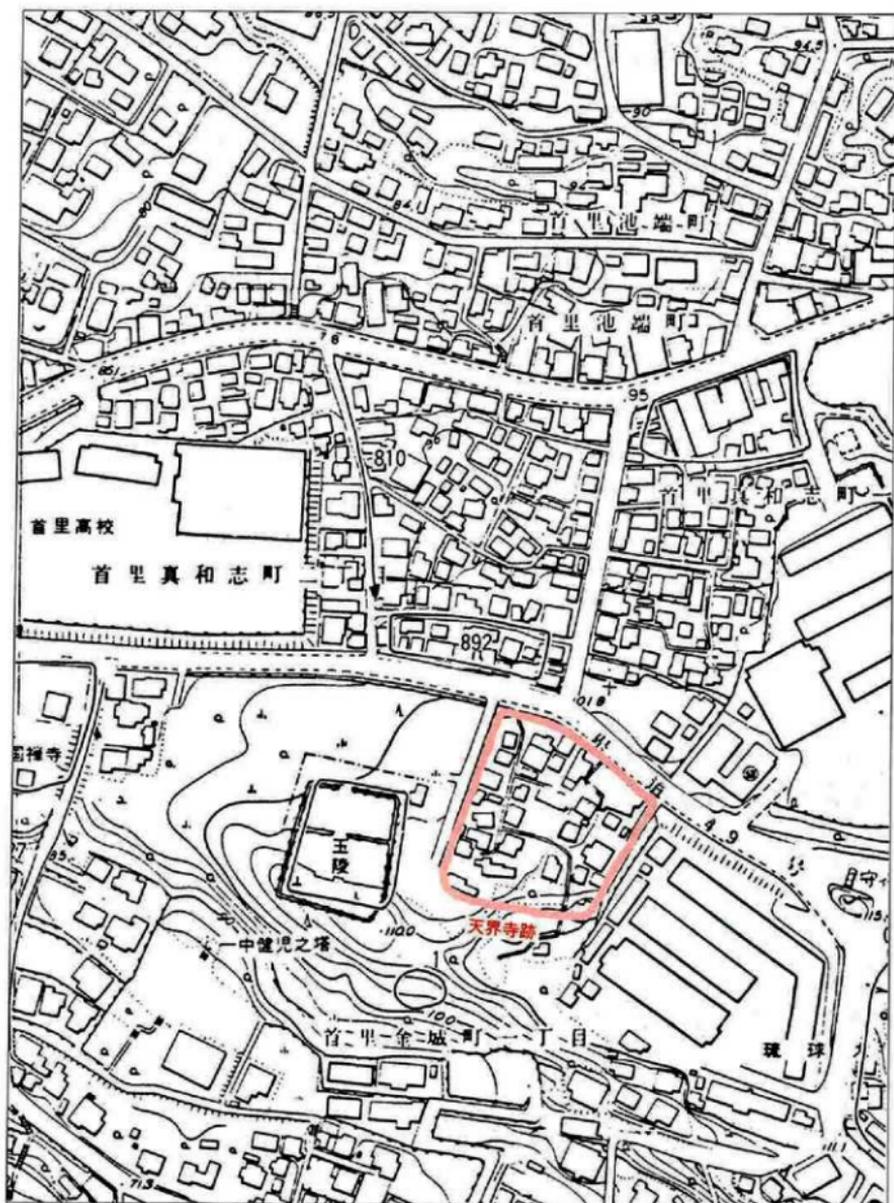
円覚寺・天王寺とともに琉球三大寺と呼ばれ、明治末頃に廃寺となるようである。400年近い歴史を有した天界寺の境内も、尚家の果樹園となり、戦前までは首里城内の三御嶽を統合した三殿内が建てられ、ノロの居室も兼ねて使用された。戦後の宅地化、現在の公園整備事業の進行により、往時の面影はほとんど消え、守礼門から延びる道（綾門大道）沿いに部分的に残る石垣や天界寺の井戸などが古の様子を偲ばせているだけである。



第1図 古地図に見る天界寺



第2図 沖縄本島及び那覇市の位置



第3図 天界寺の位置（那覇市歴史地図より）

第三章 調査経過

平成8年6月から調査を開始した。まず、調査対象範囲のほぼ中央、玉陵（西側）寄りの場所から、重機を使用して民家の立ち退きの際の残骸や表土剥ぎを行った。すぐに、拳人一人頭大の琉球石灰岩礫が集中する場所が広がり、そこから特徴的な石質の大きな礫が出土した。細かく見ると丁寧に彫刻されており、文獻にみられる石像かと考えられた（巻首図版3）が、近代の遺物に混じって出土しており、確定するまでには至らなかった。

引き続き重機による表土剥ぎを南側の方から北側の方へ進めた。所々には戦後掘った穴が地山まで掘り込まれ、いろんな痕が埋められている場所がみられ、そういう攪乱部については先に全部掘り起こすことにした。そのような場所では、地山面にピットが確認される場合もみられた（巻首図版1）。重機による表土剥ぎが調査区の中央付近まで終了した時点で、グリット設定を行った。

調査対象区のほぼ中央付近に打ち込まれている杭とアスファルト敷きの道路の反対側にある杭を結ぶ直線を基準ラインとした。この東西ラインに直交するように南北のラインを設定し、那覇市教育委員会が実施した調査の際の東西3.5m×南北4mというグリットの大きさに合わせて、調査区全体に方眼を組んだ（第4図）。東から西へアルファベット、北から南へ算用数字を付し、グリットの呼称はG-19、N-20、L-21・・・と呼んだ。基準のラインをGライン、20ラインとした。

調査は南西側（天界寺の井戸と玉陵の間）から開始した。全体的に黒褐色の小礫混入層を約20cm掘り下げると小礫混入が少なくなり、黒味の強い土層になる。その黒色上層を約10cm掘り下げると南側や西側では琉球石灰岩岩盤が露出し、中央部から北側、東側にかけては赤土の地山面が露出する。赤土の上面に黒色の石灰岩礫の集中部や溝状の遺構、ピット様のものが検出されるが、赤土を大きく掘り込んだ攪乱部（底面にコンボの爪跡が残る場合もみられる）も西側、東側で見受けられた。

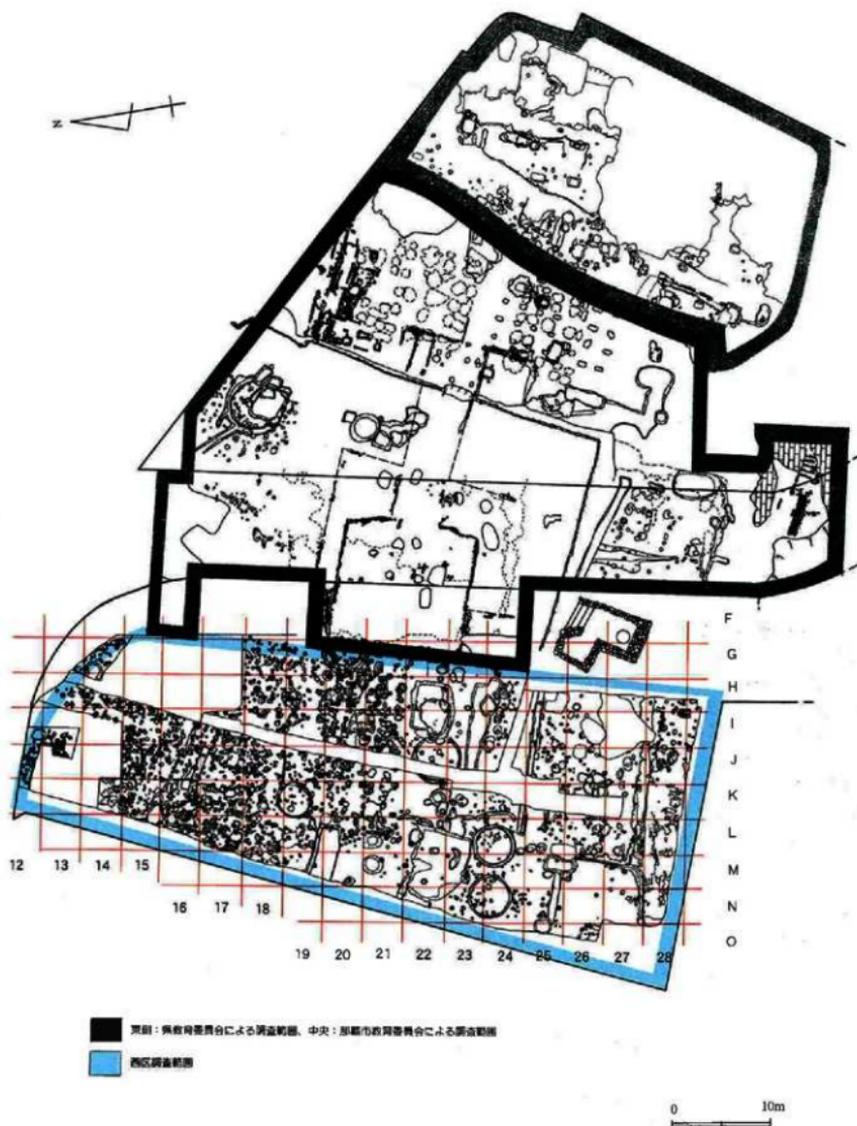
遺物は瓦類を中心に沖繩産陶器や青磁などがみられた。ほぼ全面が赤土上面になり、遺構の状況もある程度把握できたので、この地区の発掘を一時中断し、中央部の21~24ラインを中心とした発掘に移る。那覇市教委の調査により確認された基壇遺構から真直ぐに西側へ延びる小礫を敷いた道が造成層（赤土）上面に検出された（第5図）。Jラインにみられる排水管を埋設した溝の東西で状況が異なり、東側は造成層が厚く堆積し西側はかなり攪乱をうけ、造成層はほとんど残っていないかった。

中央部の発掘は基壇中央部の石畳道及びその周辺から開始し、その直下にはほぼ同じ幅で、やや大きめの礫敷き道が検出された。南側の石列周辺を掘り下げると、その下部に溝状の黒色土が50cm程の厚みで確認され、遺物はやや古手のものが主体であった。赤土を主とした造成層をさらに掘り下げていくと、基壇の西側に長方形の落ち込みがあり、下部には礫や瓦の集中部などがあり、青磁、白磁、染付、褐釉陶器、瓦類など造成層よりは古手の遺物が目立つ。

南側の溝状遺構やピット群、石敷き遺構など掘り下げ、写真撮影、実測作業など繰り返し進め、発掘を完了。中央部の発掘調査も南側の石列、石敷き道、長方形落ち込み、井戸北側から延びる石垣、造成層下の黒色土、地山面に検出された円弧状遺構、ピット群など掘り下げ、その都度写真撮影、実測作業など繰り返し行い完掘した。西側では地山直上の瓦集中部を覆ってコーラル敷きの道が検出され、関連するとみられる石列（第13図）ともども調査区外の西側（玉陵側）へ延びる。天界寺の古い時期の参道とみられ、直交するような石垣（第6図）なども検出されている。時期が下っても参道のラインは変わらなかったものと推察される。

北側部分は中央部で確認できた造成層下の黒色土の掘り下げに主目的をおき、攪乱部や造成層は一気に掘り下げた。調査区の北西側では黒色土上面の一面に砂利が敷かれて露出し、その面から立ち上がる石垣（第6図）や溝状石列（第12図）など、天界寺の古い時期のものと考えられる遺構が確認され、調査区外に延びていることも確認された。管理棟建設工事のスケジュールとの兼ね合いから、北側部分の調査中に現場引き渡しが生じた南側部分の建設工事も並行して行われた。管理棟の駐車場部分は黒色土検出面で発掘調査を終了した。

黒色土を完全に掘り下げた結果、調査区のほぼ全面に、地山面上にピットが検出され、プランも幾つか確認できた（第14図）。中央部で検出された6基の円弧状遺構（第15図）は注意されよう。造成層や包含層の発掘は、その都度実施した個々の状況写真、スカイマスターからの全体写真、平面・断面実測などを繰り返し行い、途中、2度の台風接近などによる影響もあったが、平成10年1月31日に発掘を終了し、その後2週間ほど完掘したピット群等の実測等を行い、発掘調査の現場業務を総て終了した。



第4図 発掘調査の範囲及びグリッド設定

第IV章 層序と遺構

第1節 層序

今回の調査対象地域は東西をアスファルト舗装が済んだ首里城線と玉陵の石垣に挟まれ、南北は守礼門から西側に延びる道路から玉陵の石垣までの場所である。調査の直前まで個人住宅があり、ちょうど調査範囲の中央付近を南北方向に下水道管が埋設され、調査区を東西に2分する感じになっている。この下水道管は赤土の地山まで掘り込んで埋設されており、その部分で堆積層が切られている。しかし、東西の基本的な堆積土の層相に変化は見受けられなかった。

確認された土層の状況を見ると、調査範囲の南側（天界寺の井戸の西側地域）と調査区中央から北側地域では異なる様相を呈している。前者は後者の範囲に見られる赤土を主とした造成層（17世紀の中頃の復旧の際の造成）がみられず、全体的な状況からすると天界寺の新しい時期に形成された区域かと想定される。

以下、確認された層序（第5図）について、南側地域（24ライン以南）と中央から北側地域（24ライン以北）に分けて略述する。

・南側地域（24ライン以南）

先述したように南北方向に下水道管埋設の際の掘り込みがみられるほか、地山の赤土まで掘り込んでゴミを埋めた場所などが散在し、現代の攪乱を受けた部分も多い。南西側に琉球石灰岩の岩盤が露出するものの、ほとんどは赤土面が広がる。赤土面はほぼ平坦をなし、堆積層もほとんど水平方向の堆積を示す。層序は赤土の地山を含めて3枚確認できた。以下に略述する。

- 第1層 — 暗褐色泥礫土層。本地域の全体を覆う表土層で、ジャリを多く含む。瓦類を主体に青磁・染付・褐釉陶器などの中国産陶磁器や本土産陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器などが出土。厚さ約50cmで、ほぼ水平方向に堆積。
- 第2層 — 黒褐色土層。第3層上面に薄くみられる近世の遺物包含層。5cm前後の厚みで、部分的に途切れる箇所も見受けられるほか、現代の攪乱を受けている部分もある。遺物の量は少なく、青磁・褐釉陶器などが目立つ。本層の上面には小礫が集中して広がる部分もあり、何らかの建物遺構の可能性も考えられる。
- 第3層 — 本地区の基盤をなす、琉球石灰岩風化土（赤土）の地山。無遺物層。南西側では琉球石灰岩岩盤が露出。本層の上面には黒褐色の落ち込み部のほか、溝状の遺構なども検出されている。

・中央部から北側地域（24ライン以北）

ほぼ中央付近を南北方向に下水道管の埋設工事に伴う溝が走り、調査区を東西に分断する感じになっている。しかしながら、東西の堆積層に変化はみられず、同じような層相である。現代の宅地造成等の際に大きく攪乱を受けている場所が多いものの、下層においては古の天界寺の様子を窺わせるような堆積層や遺構等が確認された。今回確認された層序は基盤をなす赤土の地山を含めて5枚で、いずれの層も基本的には水平方向の堆積を示す。

以下、確認された層序について概要を記す。

- 第1層 — 茶褐色泥礫土層（表土）。戦後の住宅建築の際の造成層。本地域のほぼ全面を覆っており、70cm前後の厚さの所が多い。しかしながら、大きく地山の赤土面まで掘り込まれている場所も見受けられ、そのような場所では2mを越す厚味を有す。現代の陶磁器やガラス片、鉄くずなどに混じって青磁や白磁、褐釉陶器などのグスク時代～近世の遺物も得られている。
- 第2層 — 黒褐色泥礫土層。本層も後世の攪乱層かとみられる。本地域の北西側でみられたが、本来的には全面に広がっていたものと考えられる。大部分が第1層の造成の際に削りとられたものとみられる。遺物の量は少なく、近代遺物に混じって青磁、褐釉陶器なども得られている。
- 第3層 — 赤土を主体とした造成層。天界寺が火災を受けた後の復興の際に行われた造成とみられる。上面の20ラインには東西に延びるジャリ敷き道が検出されている。北西側に厚く見られ、1mを越すほどである。細かくみると上部には炭やジャリが比較的混じり、中央付近は粘土質で、下部は礫が混じるという状況がみられるものの、一時期のものともみられ一括した。遺物は近代の時期のものが少なく、グスク～近世のものが主体をなす。
- 第4層 — 黒褐色土層（包含層）。天界寺の古い頃の遺物包含層で、オリジナルな未攪乱層である。20cm

前後の厚みで、上面はジャリが薄く敷かれた感じである。この面から立ち上がる石垣（第6図）なども検出されており、ある時期の地表面の可能性が考えられる。M-21では造成層上面で検出されたジャリ敷き道とほぼ同じライン上にコーラル敷きの道が調査区外の西側（玉陵側）へ延びるように検出されている。L-18・19には若干北側にカーブしながら西側（玉陵側）へ延びる溝状石列（第12図）なども検出されている。遺物は青磁、白磁、染付、褐釉陶器、古銭、青銅製品など15～16世紀頃のもの为主体をなしている。

第5層 — 本地区の基盤をなす、琉球石灰岩風化上（赤土）の地山。無遺物層。若干、北西側へ傾斜している。本層の上面には柱穴様のピットがほぼ全面に検出され、平面プランの想定されるものも見受けられた（第14図）。また、6基検出された円弧状遺構（第15図）は特異なもので注意される。天界寺の創建時の頃の遺構かと考えられる。

第2節 遺構

今回の調査で多種多様の遺構が確認できた（第14図）。南側地域（24ライン以南）では赤土の地山面にピット、土壇、溝状遺構、石列などが検出されている。中央から北側地域（24ライン以北）では赤土主体の造成層の上面及び下方から、基壇、参道、石列、石垣、溝状石列、円弧状遺構、ピット群などが確認され、天界寺の时期的な様子の一端を窺わせている。しかしながら、個々の詳細や境内での全体的な状況など不明な点も多く残った。今回検出された遺構は、すでに那覇市教育委員会が報告⁴¹⁾しているように、造成層の上下の2時期のものに大きく分けることができる。以下、今回検出された遺構について、造成層上面で検出された遺構と造成層下で検出された遺構に分けて概略を述べる。なお、M・N-21グリッドで検出された地山直上の瓦集中部を覆うように検出されたコーラル敷きの参道とみられるものは注意しておく必要があろう。

a. 造成層上面で検出された遺構

造成層上面のもの及びそれ以降に造られたとみられるものも含めた。ほとんどの遺構が調査区の中央部で検出されており、基壇、参道、石列A～C、石垣A、ピット群がある。以下、それぞれについて概述する。

・基壇

那覇市教育委員会の調査で検出されたもので、本堂跡と報告されている。今回の調査では市道の区域からはずれた西側部分を再確認した（第7図）。全体の大きさは約13m×13mの方形に検出されている⁴¹⁾。西側面、南側面の西側部分の約2mは琉球石灰岩礫の野面積みであるが、南側面の西側から約5m東側に設けられている溝は、切石により造られている。北側面のほぼ同じ位置にも、同様な溝が設けられている。溝の長さは2m余で、切石の大きさは約30×50cmのものが主体のようである。溝以外は野面積みの基壇のようであり、溝の部分には翼廊の配置が想定されている。

西側面に用いられている石灰岩礫の大きさをみると、ほぼ中央にみられる積み目の途切れる箇所を境に、北側はやや大きめの礫が主体で、南側は小さめの礫が中心である。また、北側は若干東側に下がるラインで石積みがなされている。遺物は沖繩産施釉・無釉陶器、陶質土器、瓦類が主体をなし、褐釉陶器、青磁、白磁、染付等が得られている。

・参道

本堂跡の基壇の石積みが途切れる部分、基壇西側面のほぼ中央から西側へ延びるように検出された（第6図）。基壇との接点は判然としなかったが、基壇とほぼ直交する。コーラル状になった小礫を敷き詰めており、幅は約2mで、直線的に西側へ延びる。Jラインを南北に走る排水管を埋めた溝まではコーラル状を呈すが、溝の西側ではやや大きめの礫が幅を若干広げるように、ほぼ同じライン上の縁に並んで検出された。その縁石状のものまで含めると、約16mの長さである。

この参道が首里古地図に描かれているように、北側へ折れ曲がるものかどうかは確認できなかった。また、発掘の結果、このコーラル状の礫敷きのすぐ下から、若干大きめの礫を敷いた道が検出された。若干幅広くなり、溝の西側で検出された縁石状のものは下部の礫敷き道かもしれない。それほどの時期差は感じられないが、時期が新しくなっても、参道のラインは変動しなかったものと考えられる。

・石列A

本堂の基壇跡とみられるものの南側、天界寺の井戸との間に位置し、東西方向に延びる（第9図）。本石列の東端部は基壇の西端部から約3m東側にみられる南北方向に並ぶ石垣（西側に面を有す）で、そこから約31mの

長さで検出されている。途中、攪乱等により途切れる箇所も見受けられるが、下段の1段が確認されている。

石列東端部の西側に面を有す石垣の状況を見ると、赤土の地山面を削り、整えてから50cm×30cmほどの長方形の石を設置している。その石垣の北面に合わせて北側（基壇側）に面を持つように本石列は配置されている。検出された石列の南側は1段高くなり、小礫が帯状に約50cm幅でみられた。石垣の中込石とも考えられる。

石列の中間付近（東側から約14mの箇所）にほぼ1m幅で石列の途切れる場所があり、通用口のような部分の可能性が想定された。本石列は基壇や基壇の西側に延びる小礫敷きの道にほぼ平行に走ることから、当該時期に機能していたものかとみられる。

遺物の出上量はそれほど多くなく、青磁、褐陶器（中国産・タイ産）、沖縄産施釉・無釉陶器、瓦、貝殻等が得られている。

・石列B

調査区の南西側、M・N-24グリッドで検出されている（第10図）。最下段の石列かとみられるものが、若干西側へ傾斜しながら東西方向に約6m確認でき、さらに西側へ延びようである。約40cm幅で相対するように検出され、溝状遺構かと想定される。東側延長部にジャリの広がりが見られることから、もう少し東側へ延びていたかと推察される。底面に残るジャリの状況からすると、底面にも礫が敷かれていたかと想定される。石列の高さは不明。使用されている礫の大きさは30～50cm人ものから拳人程のものが用いられている。石列の下部に暗褐色土層がみられることからすると、比較的新しい時期のものかとみられる。

・石列C

調査区の南西側、石列Bの約2m南側で検出されている（第10図）。N-25グリッドで検出され、調査区外の西側へ延びる。本石列も石列Cと同じようにジャリ様の小礫の上に大きめの礫を配置している。全体的な状況から幅約1mの屋敷囲いの石垣が想定される。本石列の東側は礫はみられず、約2m離れた箇所に礫の広がりが見られることからすると、礫のみられない部分は通用門の可能性も想定できる。本石列の下部には礫混褐色土がみられ、時期的には石列Bと同じ頃の遺構かと考えられる。

・石垣A

調査区の中央部と南側部分を分けるように東西に走る石垣である（第8図）。東側は井戸に行くように、土部をコンクリートで覆っている。24ラインにみられ、20m余り検出されている。戦後の攪乱により壊れている箇所も見受けられる。コンクリートで覆われている東側は石積みが4段みられるが、それ以来は2・3段の検出である。石垣の幅をみると、東側は約2m幅みられるものの、西側は約1.4m幅である。石垣の面を有す両側は大きめの礫を積み、小さめの礫で内部を充填している。褐色混礫土層から立ち上がる。天界寺の新しい時期のものかと推察される。

・ピット群

調査区南側、天界寺の井戸の西側で検出されたピット群である（第14図）。地山上面で検出されたものであるが、この地域の全体的な状況から造成層以降に属するものと解した。比較的まばらな感じで検出され、東側に多くみられ、調査区外の南側への展開も想定される。ほとんどが円～楕円形状のもので、径が約20cm前後、深さが約30cm前後である。南東側の長方形形状のものはピット内に灰が堆積し、魚骨が集中的に出上しており注意される。この地域を細かく区画するように、約10mの間隔で東西方向に走る溝状のものが検出され、南側の溝は西側で北に折れ曲がる。

b. 造成層の下部で検出された遺構

造成層を除去した段階で確認できた遺構で、黒褐色土面に形成されたものや地山上面で確認できたものがある。上に調査区の中央付近から北側で検出されている。掘込遺構、石列D、溝状石列、ピット群、円弧状遺構などが検出されている。以下、それぞれについて簡記する。

・掘込遺構

本堂の基壇跡とみられるものの西側（H・I-22グリッド）で検出された（第11図）。約3.5m×2mの大きさで、東西方向に長軸を有す。中央部の深さが約50cm。掘り下げた結果、約2m×1.5mの楕円形状の掘り込みを切るように、長方形（約2.4m×1.8m）の掘り込みが東側に重複している。

楕円形状のものは掘り込みの立ち上がり部はやや斜めであるが、長方形のものはほぼ垂直になっている。第11図上段に示すように楕円形状のものは9層以下が埋土で、長方形のものは第1～8層までが埋土として認められる。また、楕円形状のものは円弧状遺構の一部を壊してつくられている。

つまり、基礎が機能する以前～円弧状遺構の後の間につくられたものといえる。いずれの掘り込みの場合も底面はほぼ平坦にしている。長方形のものでは下層に15cm～20cm大の礫が中心に見られ、その上部に一回り小さな礫が集りてみられた。上部にはセンなどもみられ、本遺構の上面からはタイ産半練の土器の身が出土している。本遺構の性格等は判然としなかった。遺物は割と出土しており、瓦類を主体に青磁、白磁、染付、褐釉陶器、タイ産陶器、貝殻等が目立つ。

・石列D

調査区中央付近の西側、I・M-19・20グリッドで東西方向に約5mの長さで3列検出されている(第13図)。3列の石列は、ほぼ等間隔である。最も南側の石列は北に面を持ち、中央と北側の石列は南に面を有す。いずれの石列も石垣Bの面から始まっており、石垣Bがつくられた後に積み上げられたことが判る。使用されている礫の大きさは北側の石列が大きめ(20～30cm大)のものが主体で、南側石列、中央石列の順に主体の礫の大きさが小さくなる。南側・中央石列はほぼ直線的であるが、北側の石列は西へ行くにつれ北側にカーブしている。いずれも調査区外の西側(玉陵側)の方へ延びる。南側石列と中央石列の間には地山直上面で瓦の集中部(灰色瓦が主体)が広がり、中央石列は瓦集り上上面から立ち上がっている。礫の大きさからすると、北側石列と南側石列が対応するものかとみられ、中央石列は別の意味合いのものかと考えられるが、詳細は判然としない。

・溝状石列

調査区の北西側、L-17・18グリッドで検出されている(第12図)。地山の土層の黒褐色土層面に造られている遺構であり、天界寺の古い時代に属するものとみられる。底石として50cm大のニービ(細粒砂岩)を敷き、その底石の両側の端から立ち上がる石列で縁部をつくる。使用されている石灰岩はそれほど大きくなく、野面である。西壁から6.5mの長さで東側に延びる。東端部は底石だけがみられ、さらに東側に延びていたのか詳細は不明。両石積みは約30cm幅である。

ゆるやかに北側の方へカーブしながら、西壁にぶつかり、さらに西側へ延びる。底石は西側へ傾斜するように敷かれている。石積みの高さは約60cmである。褐釉陶器(中国産・タイ産)を主体に白磁、染付、瓦類が得られている。

・ピット群

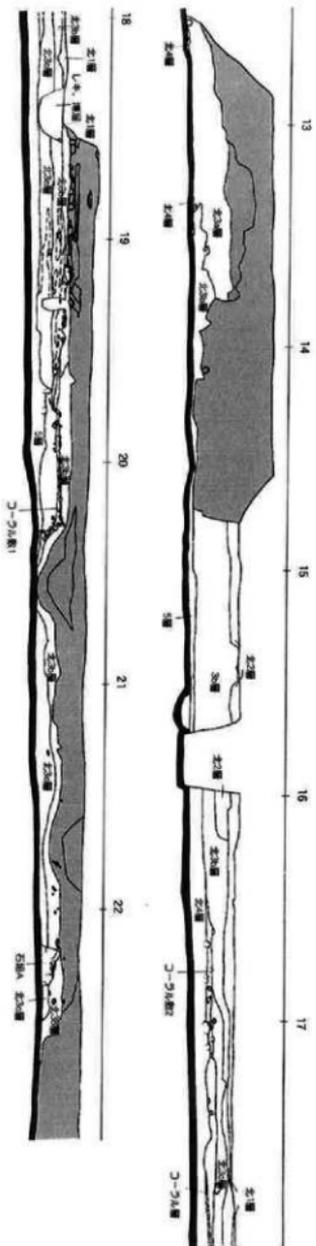
今回の調査範囲の中央付近から北側の地山上面で検出(第14図)されたピット群である。平面が円～楕円形状を呈し、径が約50～60cm前後、深さが約60～70cm前後のものが主流である。蜂の巣状に検出されたピット群の中から平面プランの想定できたものが2基みられる。調査区中央の西側と北側の中央付近で確認でき、いずれも長軸を東西方向に持つ、長方形のプランである。前者は6つのピットで構成され、全体の大きさは約2.5m×5mで、各ピットの間隔は約2.5mである。後者は北東側は未確認だが、18のピットで構成されるものとみられ、全体の大きさは約6m×10mで、東・西のピットの間隔は約1.5m、南・北のピットの間隔は約2mである。

・円弧状遺構

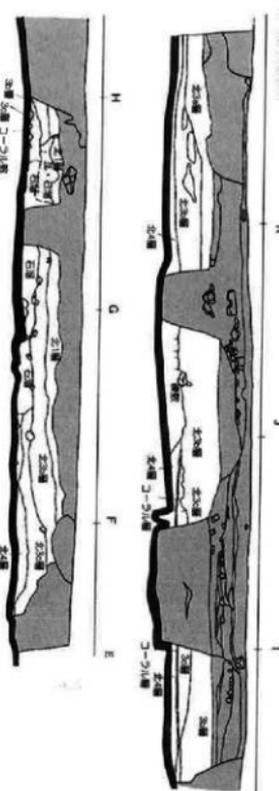
地山上面で6基確認されている(第15図)。検出された場所をみると、調査区の中央付近に集中しており、南西側に2基、中央部に1基、東側に2基、北西側に1基である(第14図)。いずれも外周に幅約30～40cmの溝を配し、その内側はほぼ平坦面をなし、ピットが検出される部分とそうでない部分を有するという似たような特徴がみられる。大きさをみると直径が約4mのもの(4・5)、4.6mを測るもの(1・2)、3.6mのもの(3)が見受けられる。また、1は溝が2重にみられ、2・3は溝が部分的に2重になる。溝の幅はほとんどが約30～40cmであるが、1の内側の溝と3の溝は幅が約20cmである。

(註)

註1. 島 弘編 「天界寺跡」 那覇市教育委員会 2000年3月

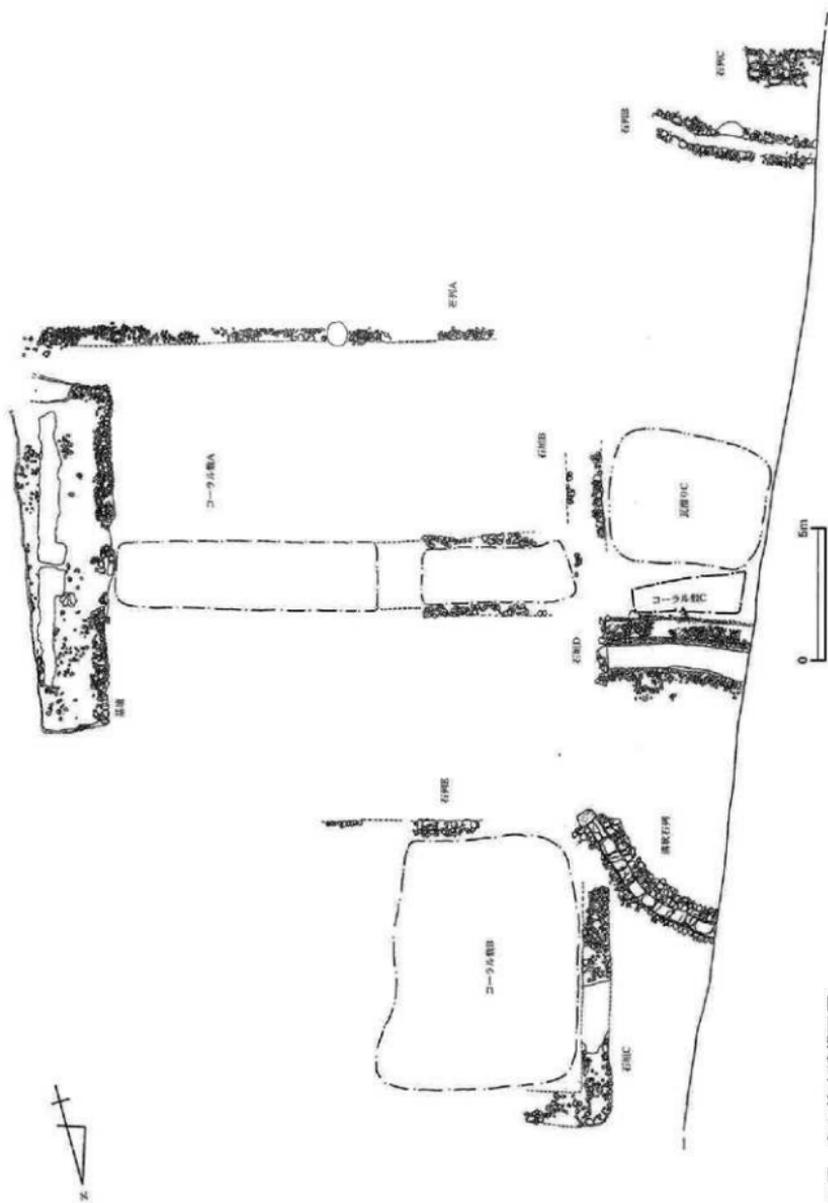


16ライン階
W RL=103100m



- 凡例
- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 浮遊砂土 | 1 浮遊砂土 |
| 2 泥質土 | 2 泥質土 |
| 3a 砂質粘土層・砂利混土 | 3b 砂質粘土層 (L<4.0) |
| 3c 砂質粘土層・粘土 | 3d 砂質粘土層・粘土 |
| 4 泥質土 (L<4.0, 硬質) | |
- 北層
 北層
 北層
 北層
 北層

第5図 層序 (16ライン, 16ライン)



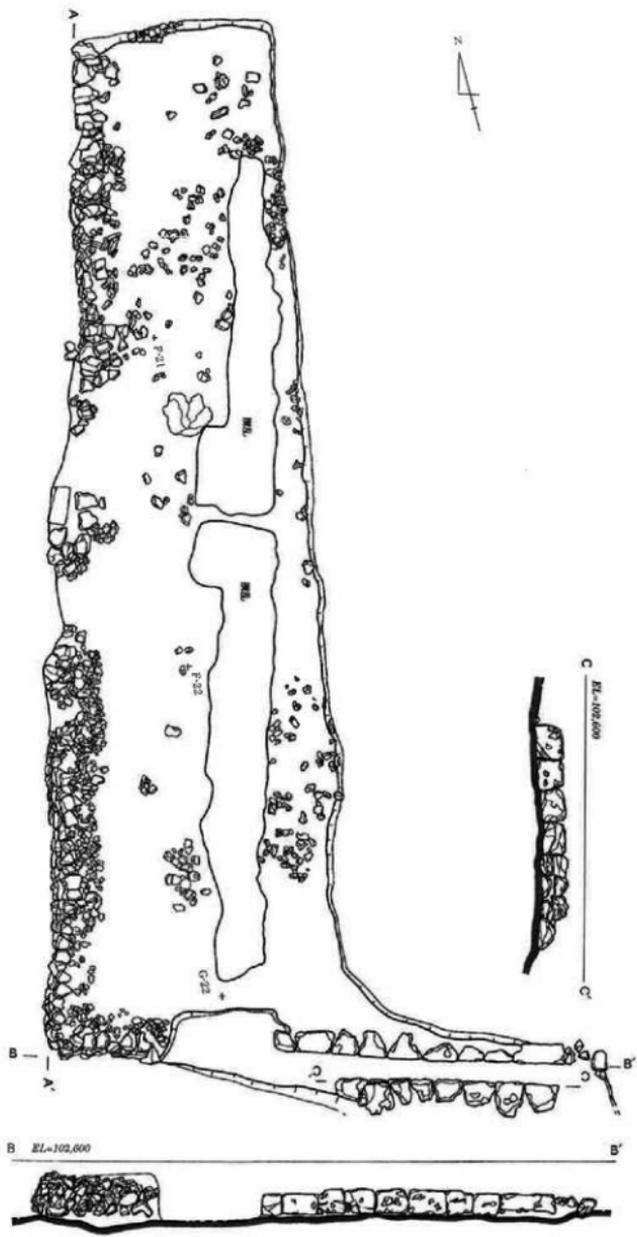
第6図 主な検出遺構配置



C EL=102,600



C



B EL=102,600

A EL=102,600

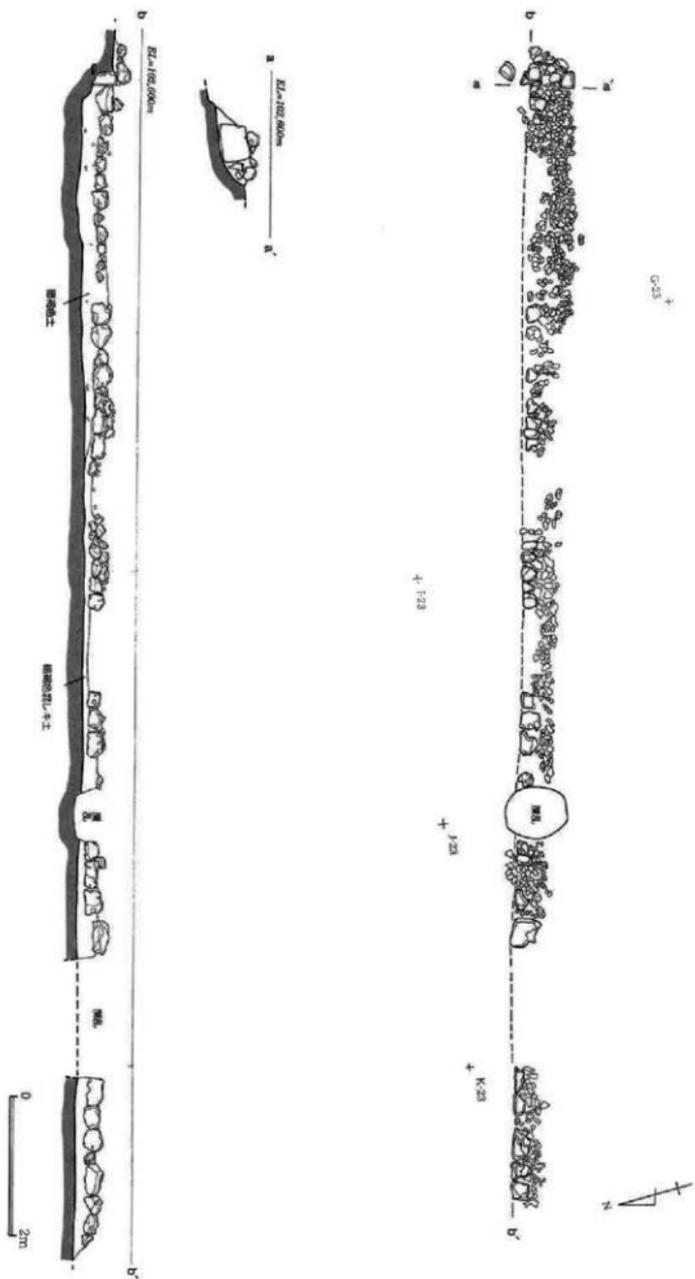


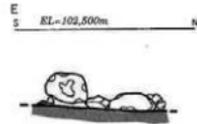
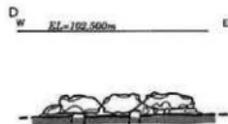
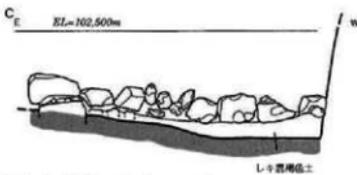
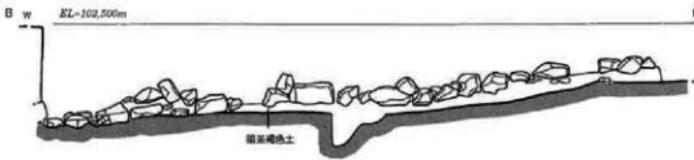
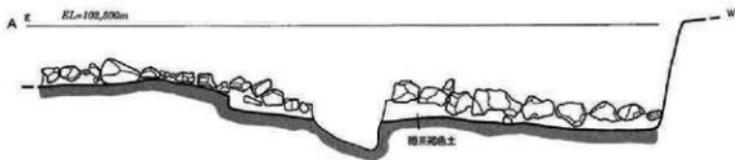
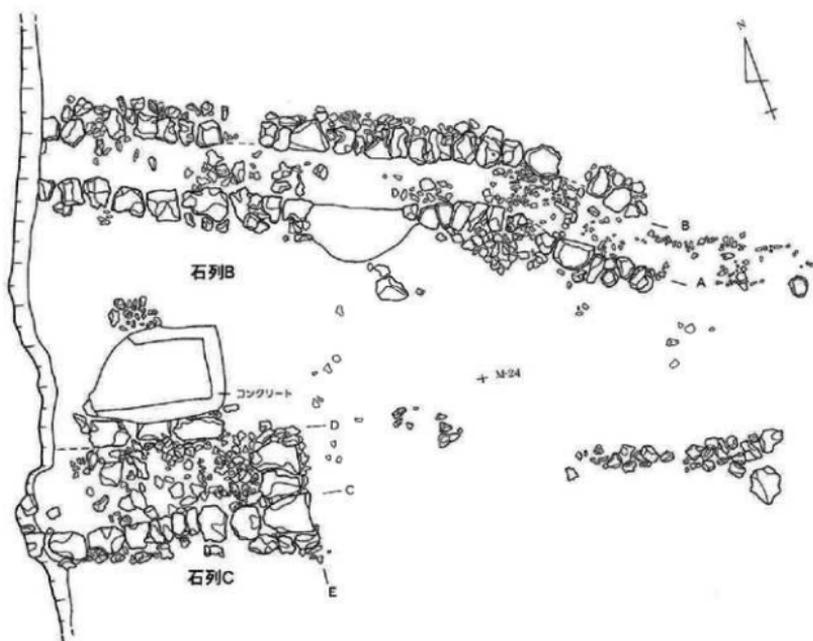
A

第7圖 基壇 (F・G-21~23)



第9图 石列A (G~K-23)

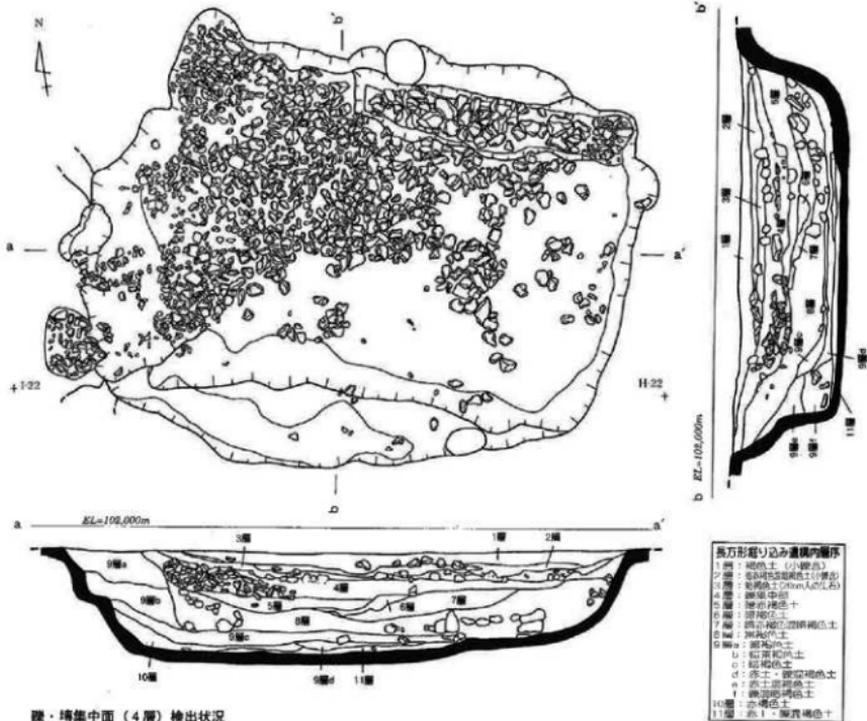




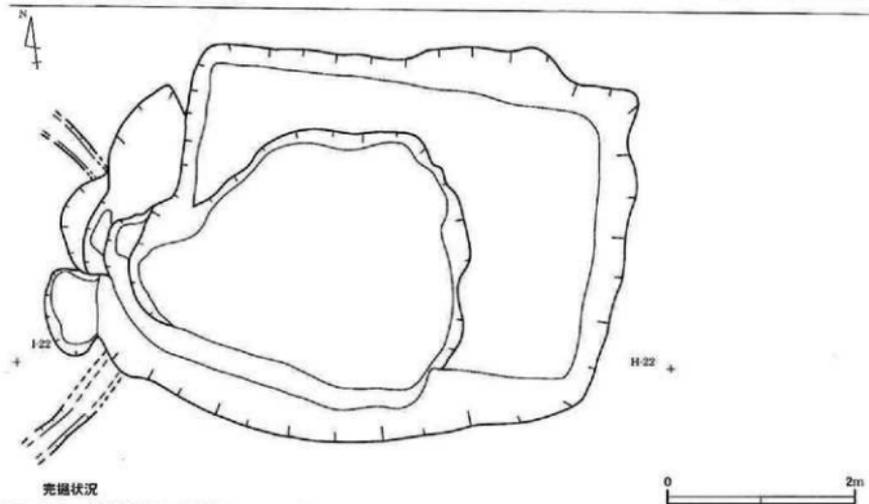
■ 地山



第10図 石列B、C (M-24)

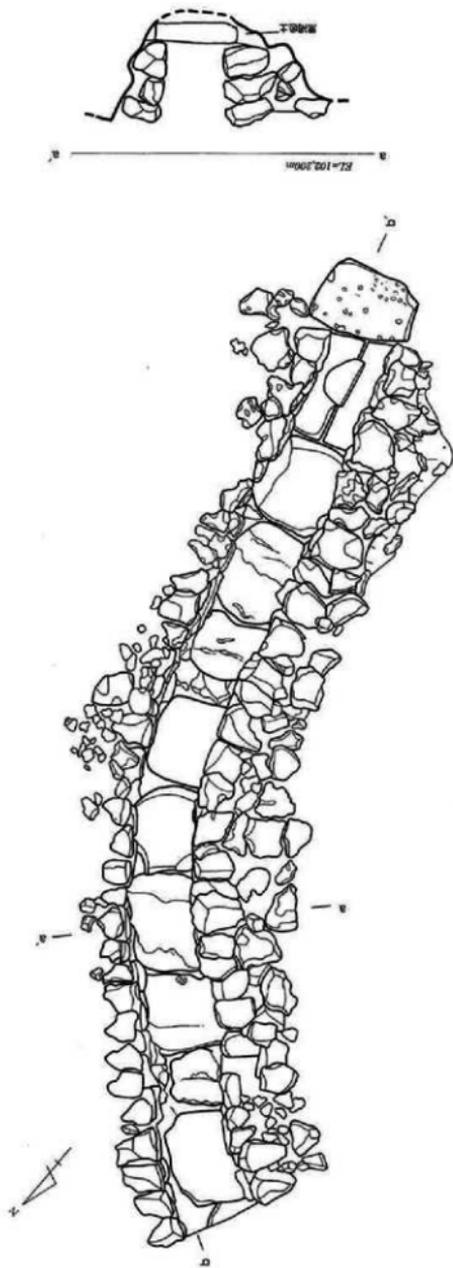


掘・埴集中面 (4層) 検出状況

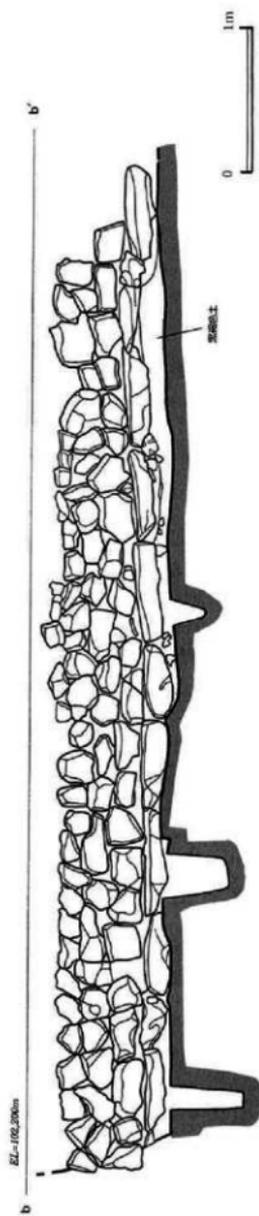


完掘状況

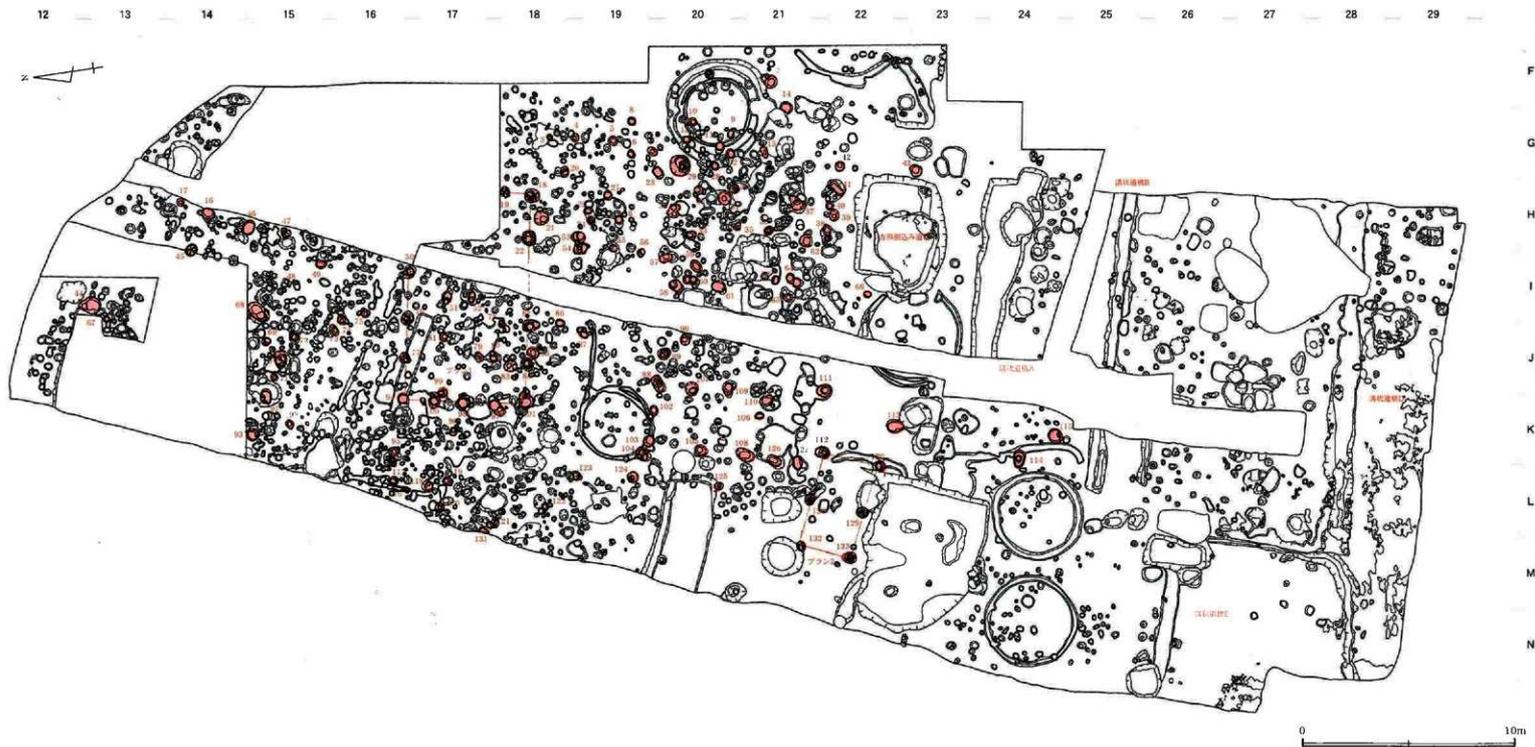
第11図 方形掘り込み遺構 (II・I-22)



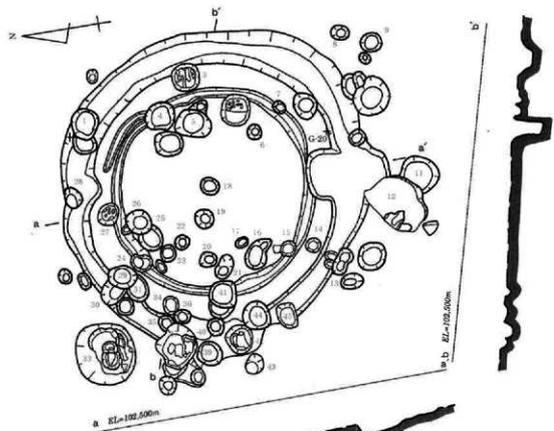
L.17 X



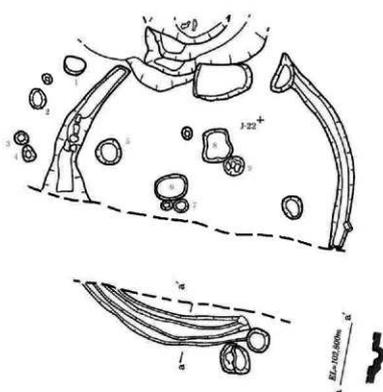
第12图 溝状石列 (L-17・18)



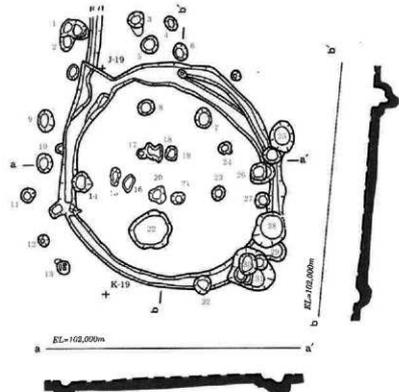
第14図 ビット検出状況 (番号: 第1表に一致)



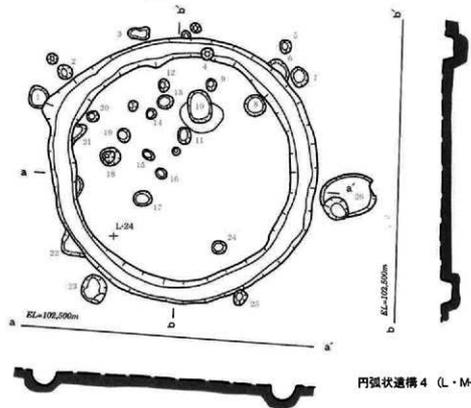
円弧状遺構 1 (G・H-20・21)



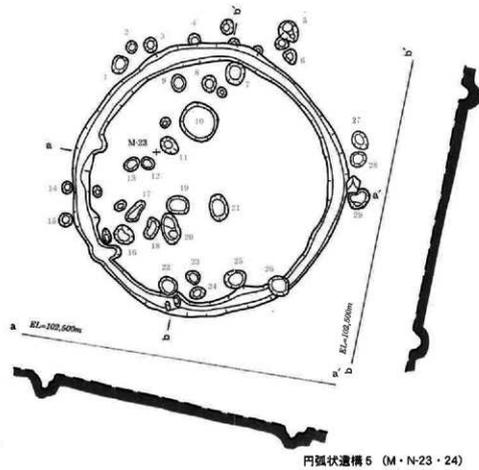
円弧状遺構 2 (I・J-22・23)



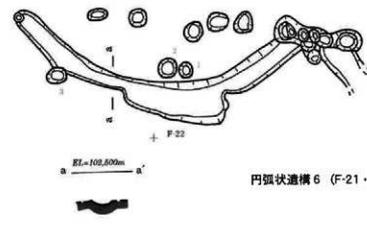
円弧状遺構 3 (K-18・19)



円弧状遺構 4 (L・M-23・24)



円弧状遺構 5 (M・N-23・24)



円弧状遺構 6 (F-21・22)

● 池山
 ※遺構 1～6とも方向は同一。
 周辺のプロット位置は第 2 表を参照。



第1表 ビット計測一覧 (第14圖に対応)

番号	グリッド	長さ 幅	長さ 幅	深さ	EL	出土遺物 (その他)	
1	D-20	44	44	64	101.200	〔※1-3〕	
2		51	60	76	101.200	〔※1-10〕	
3		38	26	60	101.080		
4	G-18	38	36	64	101.000		
5		40	40	65	100.360		
6	G-19	40	34	66	100.320		
7		50	38	78	100.280		
8		38	34	60	100.400		
9		54	34	74	101.060	〔※1-26〕	
10		44	32	86	101.000	鉄貨1 (※1-26)	
11	G-20	44	42	76	101.020	〔※1-41〕	
12		50	46	82	100.980	〔※2、土器〕、磁器1 (※1-44)	
13		45	36	77	100.960	〔白磁〕、磁器1 (※1-29)	
14	G-21	61	45	84	100.980	〔※1-11〕	
15		60	37	104	100.780		
16	H-14	56	56	90	100.260	磁器1	
17		40	32	73	100.420		
18		72	70	90	100.700	〔プラン〕	
19		50	45	81	100.760	〔プラン〕	
20		H-18	50	45	70	100.900	
21			70	65	85	100.900	
22			70	60	76	100.800	〔プラン〕
23	H-19	60	43	58	100.720		
24		40	32	80	100.100		
25		40	36	70	100.200		
26		84	45	64	100.260	タイ産陶磁器1、円蓋状磁器1、磁器2	
27		40	40	68	100.160		
28		40	38	74	101.060		
29		96	90	74	101.000	青磁3、白磁1、貝1 (※1-33)	
30	46	40	86	100.800	青磁3、磁器2、磁器2		
31	H-20	72	60	62	101.180	青磁3、鉄貨2、中国産陶磁器1、貝1	
32		54	42	52	101.240		
33		72	50	70	101.000	青磁7、鉄貨1、中国産陶磁器1、磁器1	
34		40	30	88	100.640		
35		38	20	88	100.900		
36		42	30	90	100.820		
37		64	46	100	100.820	石製品1、貝1	
38	H-21	86	54	60	101.160	青磁2、磁器1	
39		50	44	74	101.060		
40		38	26	80	101.140		
41		100	50	94	100.860		
42		50	36	82	101.120		
43		I-22	60	50	60	101.160	貝1
44		I-12	100	80	70	99.300	康徳陶器1、貝3、磁器1
45	I-14	50	36	76	100.300		
46		60	50	80	100.300		
47		52	50	94	100.280		
48	I-15	46	31	60	100.620	中国産陶磁器1、タイ産陶磁器1	
49	72	54	106	100.140			
50	I-16	62	50	70	100.700	青磁3、磁器1 (プラン)	
51	I-17	56	36	60	100.980	青磁7、中国産陶磁器1、鉄貨1、青磁製品1、鉄製品1、貝2、磁器3	
52		58	50	68	100.640	青磁1、鉄貨2、陶質土器1、磁器5、磁器3	
53	I-18	75	55	62	100.980		
54		64	62	68	100.920		
55		76	50	92	100.740		
56	I-19	40	35	60	101.000		
57		120	98	76	100.860	中国産陶磁器1、貝1、磁器1	
58	I-20	68	56	86	100.780		
59		52	50	62	100.980	磁器1	
61		70	56	68	101.000		
60		66	28	68	100.940	貝1	
62	I-21	82	68	82	101.060	中国産陶磁器1、土器1、木1、鉄製品1	
63		40	40	72	101.040		
64		26	45	76	101.060	青磁1、白磁1	
65		48	40	70	101.100		
66		I-22	38	38	63	101.110	〔※2〕

単位: 33-m, その他はcm

番号	グリッド	長さ 幅	長さ 幅	深さ	EL	出土遺物 (その他)
67	J-13	44	29	62	99.490	
68		110	78	68	100.460	青磁3、白磁1、貝1
69	J-15	56	40	86	100.300	
70		95	70	108	100.120	青磁製品1
71		36	28	60	100.600	
72		58	56	94	100.300	
73		40	40	130	100.000	
74	J-16	50	30	60	100.640	貝3、磁器1
75		43	38	55	100.680	
76		80	55	54	100.860	〔プラン〕
77		54	46	80	100.520	磁器1 (プラン)
78		36	34	56	100.960	貝1
79	J-17	46	32	58	100.920	
80		54	44	50	101.000	中国産陶磁器1
81	J-18	42	30	60	100.820	
82		80	50	56	100.000	〔プラン〕
83		56	48	72	100.820	
84		51	50	61	100.860	〔プラン〕
85		56	52	72	101.000	
86		44	38	60	100.920	中国産陶磁器1、磁器1
87		60	42	62	100.880	青磁1、土器1、中国産陶磁器1、貝1
88	J-19	84	52	96	100.560	
89		56	50	90	100.640	
90	J-20	50	48	64	100.960	
91	K-15	62	50	64	100.340	青磁3、中国産陶磁器1、貝1、磁器15、磁器13
92		44	38	64	100.460	梁付1、貝2
93		68	56	80	100.140	〔プラン〕
94	K-16	52	42	65	100.640	
95		54	52	72	100.640	中国産陶磁器1、貝1
96		44	36	60	100.780	磁器製品1
97		50	36	60	100.800	〔プラン〕
98	K-17	78	50	66	100.740	青磁1、中国産陶磁器1 (プラン)
99		50	42	60	100.800	
100	56	46	74	100.660	〔プラン〕	
101	K-18	60	60	80	100.660	青磁3、瓦質土器2、貝1、磁器2
102	K-19	48	38	67	100.810	青磁2、鉄貨1 (※3-25)
103		58	45	62	100.900	〔※3-28〕
104		33	26	55	100.970	〔※3-30〕
105		62	60	76	100.640	
106		46	30	74	100.800	
107	K-20	70	52	66	100.940	
108		88	54	76	100.800	
109		82	50	69	100.980	
110	K-21	48	42	64	100.980	
111		70	56	68	101.040	
112		50	50	68	100.940	〔プラン2〕
113	K-22	54	52	78	100.920	貝3
114	K-24	64	46	74	100.960	
115		68	60	78	101.120	貝1
116	L-16	44	36	72	100.600	
117		52	40	68	100.660	
118	L-17	58	36	58	100.780	
119		50	40	56	100.900	青磁1、鉄貨1、貝3
120		44	40	60	100.720	磁器1、貝2、磁器1
121		34	30	60	100.800	
122	L-18	44	34	68	100.720	中国産陶磁器1、貝7
123		36	32	60	100.860	
124	L-19	54	48	82	100.640	
125	L-20	44	42	62	100.900	
126	L-21	90	54	78	101.220	
127		70	45	72	99.800	
128	L-22	50	42	50	101.020	青磁1、黒磁器1 (プラン2)
129		60	59	72	100.920	〔プラン3〕
130		52	45	40	101.320	〔プラン2〕
131	M-17	49	26	76	100.960	
132	M-21	50	40	42	100.920	〔プラン2〕
133	M-22	55	50	60	100.780	〔プラン2〕

※-「第2表円蓋状遺物測定ビット」中の遺物番号

第2表 円弧状遺構周辺ピット計測一覧

単位：E1=m, その他はcm

遺構番号	長径	短径	深さ	EL	出土遺物(その他)
1	44	43	54	101.270	
2	46	22	28	101.510	
3	44	44	64	101.200	(※1)
4	48	44	52	101.320	
5	50	45	56	101.320	
6	22	22	22	101.670	
7	20	18	12	101.720	
8	27	22	12	101.860	
9	34	30	58	101.220	
10	64	60	76	101.200	(※2)
11	61	45	84	100.980	(※14)
12	92	74	52	101.380	
13	48	22	42	101.420	
14	22	22	16	101.560	
15	26	24	14	101.660	
16	54	34	74	101.060	(※9)
17	22	16	10	101.690	
18	26	25	12	101.710	
19	30	30	22	101.570	
20	27	23	24	101.560	
21	40	24	17	101.630	
22	20	20	41	101.380	
23	25	23	15	101.630	
24	23	20	17	101.530	
25	38	30	23	101.530	
26	40	32	86	101.000	銭貨1(※10)
27	34	34	82	100.960	
28	35	26	68	101.020	
29	46	36	77	100.980	白磁1、灰骨1(※13)
30	34	30	28	101.360	
31	35	28	16	101.580	
32	26	26	25	101.420	
33	96	90	74	101.000	青磁3、白磁1、貝1(※29)
34	26	24	7	101.720	
35	25	20	17	101.600	
36	23	21	18	101.640	
37	74	64	54	101.640	
38	28	28	44	101.340	白磁1
39	40	38	74	101.060	(※29)
40	28	28	16	101.680	
41	44	42	76	101.020	(※11)
42	45	45	15	101.630	
43	28	27	18	101.660	
44	50	46	82	100.980	白磁2、土器1、灰骨1(※12)
45	42	32	48	101.360	
1	38	38	63	101.110	
2	29	23	11	101.630	
3	19	18	16	101.580	
4	24	18	8	101.650	
5	41	39	15	101.580	
6	52	40	12	101.580	
7	21	19	21	101.590	
8	50	40	12	101.690	
9	32	29	28	101.520	
1	42	28	26	101.160	
2	24	22	43	101.130	
3	26	22	14	101.460	
4	20	16	14	101.480	
5	25	25	11	101.480	
6	27	23	28	101.280	中国産褐釉陶器1
7	28	24	17	101.290	
8	24	23	16	101.320	
9	35	24	14	101.320	
10	30	24	16	101.270	
11	30	27	11	101.310	
12	21	19	12	101.280	
13	20	20	24	101.200	
14	32	28	41	101.040	
15	26	14	8	101.400	
16	22	14	4	101.400	
17	18	14	10	101.380	
18	24	14	6	101.140	

遺構番号	長径	短径	深さ	EL	出土遺物(その他)
19	22	16	18	101.130	
20	26	24	16	101.310	
21	21	18	15	101.330	
22	66	57	8	101.320	円筒状製品1
23	22	20	15	101.330	
24	21	19	9	101.370	
25	48	38	67	100.810	青磁1、銭貨1(※102)
26	30	25	40	101.080	
27	22	21	22	101.260	
28	58	45	62	100.900	(※103)
29	28	25	8	101.400	
30	33	28	55	100.970	(※104)
31	38	34	16	101.320	
32	26	24	21	101.270	
1	31	29	8	101.720	
2	26	21	17	101.600	
3	31	16	10	101.690	
4	20	14	14	101.540	
5	20	18	15	101.650	
6	38	17	5	101.820	
7	30	28	13	101.780	
8	32	31	11	101.680	
9	18	16	15	101.410	
10	49	38	10	101.700	
11	26	21	10	101.680	
12	18	16	7	101.510	
13	26	21	10	101.480	
14	18	17	11	101.470	
15	19	16	14	101.640	
16	22	16	11	101.660	
17	29	23	13	101.700	
18	31	28	25	101.560	
19	22	20	7	101.500	
20	20	17	8	101.710	
21	26	21	11	101.690	
22	45	25	22	101.520	
23	45	40	16	101.560	
24	21	20	15	101.590	
25	21	19	10	101.640	
26	42	40	18	101.630	
1	36	23	22	101.420	
2	17	15	17	101.500	土器1
3	22	20	32	101.320	
4	18	15	11	101.620	
5	37	30	13	101.640	
6	23	22	18	101.580	
7	34	33	28	101.440	
8	21	21	9	101.600	
9	25	22	13	101.570	
10	61	59	30	101.410	
11	30	21	28	101.380	
12	21	18	12	101.520	
13	25	19	14	101.480	
14	18	16	5	101.560	
15	19	19	8	101.520	
16	30	27	23	101.380	
17	37	20	14	101.480	
18	30	18	11	101.510	
19	34	26	3	101.530	
20	46	28	24	101.400	
21	38	29	21	101.400	
22	31	27	27	101.310	
23	23	19	15	101.460	
24	23	18	12	101.500	
25	33	28	20	101.400	
26	30	28	16	101.470	
27	26	23	11	101.670	
28	24	23	7	101.670	
29	36	30	21	101.530	
1	22	20	15	102.000	
2	38	37	18	101.950	
3	32	24	41	101.490	

※-第1表E1+計測 箇での番号

第V章 出土遺物

今回の調査により、青磁・白磁・染付・褐釉陶器・三彩・色絵・瑠璃釉・翡翠釉・黒釉陶器（天目）などの中国産陶磁器、粉青沙器（韓国産）、タイ産の褐釉陶器・半練土器、本土産陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、瓦質土器、土器のほか、類須恵器、銭貨、玉類、滑石製品、瓦類など多種多様な人工品、骨類、貝類などの食糧残滓が得られている（第3表）。

人工品の中の陶磁器類をみると、圧倒的に中国産の陶磁器類が多く、次いで沖縄産陶器、タイ産陶器、本土産陶磁器の順である。それ以外のものでは、銭貨、玉類、石器・石製品、青銅製品などの出土量が注目されよう。時期的な面からすると創建（15世紀中）～廃寺（明治末頃）という天界寺の歴史の中で把握できるものがほとんどなのである。以下、今回得られた資料について、種別に概要を述べる。

第1節 青磁

総数で5900点余得られており、中国産の陶磁器では褐釉陶器に次いで多く得られている。器種的には碗、皿、盤、搦鉢、壺、瓶、杯、香炉、小碗、酒会壺、蓋、大瓶、鉢、花盆台などバラエティーに富んでいる。量的には碗が圧倒的で、皿、盤と続く。酒会壺や大瓶など大型のものも日立ち、また、あまり例をみないもの（第20図9・14）や花盆台（第19図12）など注意される資料も見受けられる。時期的には14世紀後半～16世紀頃までの幅広いものが得られている。

これらのほとんどが破片の資料であるが、碗、皿、盤、杯、搦鉢の中には全形の窺える資料も若干含まれる。特徴的なものを第16図～第20図に示した。以下、図示したものを中心にそれぞれの器種ごとの器形、文様について概述する。図示したものの個々の詳細については観察表に示した。

・碗

最も多く得られており、特徴的なものを第16図及び第17図に示した。全形の窺える資料も14点ある。文様からみると、蓮弁文、雷文帯、その他、無文に大きく分けられる。また、今回得られたものは腰部のあまり膨らまないタイプのものが上流をなすようである。口縁部の資料でいえば、無文のものが多く、蓮弁文、その他、雷文帯の順である。施文されている資料の口縁部形状をみると、圧倒的に直口口縁のものが多い。

蓮弁文の資料を第16図1～5・7～12・18に示した。蓮弁の幅が広く、1枚1枚描くもの（1～5）、ラフなタッチの線描きのもの（7～11）、ラマ式蓮弁を描くもの（12・18）がみられる。量的には線描き蓮弁文の資料が多いものの、ラマ式蓮弁の資料は注意されよう。また、内底面を有するもの6点をみると、4点が施文されており、内底面への施文も普通だったかと推察される。

雷文帯の資料は同図12～17に示すもので、ヘラ描きのもの（12～14）、スタンプによるもの（15～17）が見受けられる。前者は外体面に別の文様を配し、内底面も施文の対象にしている。後者には内面に雷文帯を配すものが日立つ。その他の文様を施すものは沈線文（第17図1～3）を上体に施すもので、無文のものは文様を施すものよりやや大振りのものが日立つようである。図示した底部資料（第17図13～20）のほとんどが内底面に文様を配している。

・皿

総数460点と碗に次いで多く得られており、特徴的なものを第18図に示した。全形の窺える資料も14点ある。器形的な面からみると、口折れ皿、直口口縁皿、外反皿、稜花皿、菊皿などが確認できる。全体的に外反口縁のものが主体である。直口口縁のものには小さめのもの（2・3）、大きめのもの（4・17）があり、外反口縁も11・12がやや大きめのもので、他は同じような口径のようである。

外反口縁には口縁部上端を水平方向に折り曲げるもの（1）、僅かに外反させるもの（9・11・12）、胴部中央から緩やかに外反するもの（8・10）、腰部からラッパ状に外反するもの（5・6・13～16）などが見受けられる。13～16は稜花を呈す。また、8のように口唇部が突るものも見受けられる。

文様の面からは無文のものが圧倒的である。口縁の形状と文様についてみると、2～4の直口口縁のものには文様はみられず、外反口縁のものに文様を施すものが多くみられる。有文資料の施文部位は、外面と内底面に施文するもの（1・20）、内面と内底面に施文するもの（5・14）、内面にだけ文様がみられるもの（7・13）、内底面にだけみられるもの（8～10）、内外両面に文様がみられるもの（6）などが見受けられる。

・盤

360点余得られており、特徴的なものを第20図1～4に示した。器形的にみれば、銅縁口縁(1・2)の形状を示すものが圧倒的で、他に直口口縁、外反口縁があり、外反口縁のものには稜花形の形状を呈すものも含まれる。1・2は銅縁盤の資料で、2は口縁部の上方向への幅み上げがより明瞭になっている。1は無文、2は内面に幅の広いへら状工具により1本1本、蓮弁文を配す。3は口縁部を水平方向に折り曲げるように外反させるもので、内外面に数本1組の蓮弁文を施し、外反部分にも文様を配している。4は口縁部上端を僅かに外反させるもので、底部は高台を有す。文様は内面にだけみられ、口縁部に1本の圈線、その下方に数本1組の蓮弁文を配す。

・鐏鉢

数的には少なく、3点確認できた。特徴的な2点を第20図6・7に示した。6は全形の窺える資料で、高台際から丸みを持って口縁部に向かい、上端部で僅かに外反するものである。那覇市教育委員会²¹⁾や県立埋蔵文化財センター²²⁾の報告に本器種がみられるが、器形的には若干異なるようである。しかし、推算口径は那覇市教育委員会の報告例とほぼ同じであり、県立埋蔵文化財センターの報告例のものは小さめである。若干大きさの異なるものがもたらされていたかと考えられる。また、7は基筋底の資料であり、今回確認できた。底部の形状にも数種あったかとみられる。

今回得られた資料は無文である。県立埋蔵文化財センターの報告例は外面に沈線配すが、那覇市教育委員会報告例は無文のようであることから、どちらかといえば文様を施さないものの方が多かったかと推察される。

・壺

ここでいう壺は小型の部類に入るもので、10点余の出土をみた。特徴的なものを第20図8に示した。若干内傾気味の頸部が立ち上がり、口唇部は平坦。胴部は球状に膨らむようであり、本器種に普通にみられる形状を示す。現資料に文様は見受けられない。推算口径は約9cmを測る。

・瓶

120点と比較的多く出土している。特徴的な3点を第20図11～13に示した。形状の判明する12・13はそれぞれ、双耳瓊瓊、玉壺春瓶と呼ばれるものである。首里城京の内跡の報告²³⁾などにも見受けられる。13は無文のようであるが、11・12は頸部に文様がみられる。今回得られたものからすると、若干有文のものが多いようである。

・杯

量的には少ない。10点余り確認でき、特徴的なものを第20図15・16・19に示した。前二者は馬上杯と称される脚を有すものであるが、著しく破損しており、全形の様子はつかめない。16は脚部の下端を方形に整形し、接地面を平坦にしている。また、内側は大きく抉りを入れている。15は身の外面に文様の一部がみられることから、何らかの文様を施していたものとみられる。脚部にも凸帯様のものを1本廻らしている。後者は全形の窺えるもので、腰折れの外反気味の資料である。高台を有す。外面の胴部中央付近に凸帯様のものを1本廻らしているだけで、他の文様は見受けられない。

・香炉

本器種に属すとみられる資料が50点余得られている。特徴的な2点を第20図18・20に示した。18は寄口口縁の、20は口縁部が内湾気味の資料である。前者は筒状を呈す器形が想定でき、後者は丸みのある形状を呈し、底面部の縁に足を付している。18は外面の口縁部に2本の圈線を廻らす、20は文様が見受けられない。

以上のほか、小碗(第20図10・21～24)も得られている。22は全形の窺えるもので、腰部の張らない直口口縁の資料である。外面に線描き蓮弁文を配す。他の資料からすると若干異なる器形のものも含まれるようである。また、第20図9に示すものは全形が窺えないものの注意される。六角形の各面に露胎の窓を有し、そこに人物や花文を貼り付けている。ほとんど報告例のない資料である。14も全体の形状は不明だが、注意される。似たような資料が、那覇市教育委員会報告に記載されている。

また、酒壺、蓋、大瓶、鉢、花盆台などの大型の資料も比較的みられ、大野寺の特徴的なことのひとつと考えられる。特に、第19図2に示した内面に花文を配す蓋の資料は、首里城京の内に類例が報告されているものの、あまり例をみないものである。

(註)

註1 「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第43集 那覇市教育委員会 2000年3月

註2 「天界寺跡(Ⅰ)」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月

註3 「首里城跡」『沖縄県文化財調査報告書』第132集 沖縄県教育委員会 1998年3月

第5表 青磁観察一覧

単位:cm

図番号	器種	部位	L径	高	口径	観察事項	出土地	
第14回 図版5	甗	口縁部	16	—	—	直口門縁部の口縁部資料、口唇部は丸味をもって仕上げている。文様は外面はほぼ全面に施文するようだが、全体の様子不詳、内面は口縁部に雷文を配すだけのようである。釉は淡緑色でやや透明度があり、貫入は見られない。素地は淡灰白色のやや粗かなものである。	I-15 北朝1層	
			14.8	—	—	外反口縁部の資料で、口唇部は丸味をもつ、内外面に文様を施すが、全体の様子不詳なため、内面は口縁部上縁に雷文を配し、その下にも施文している。釉は淡青色で、やや透明度がある。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	K-20 コルナル数A	
			14.6	—	—	ラマ式洋弁の弁先をそのまま口縁部の形状にした資料である。洋弁は6枚、裏面が丸味をもって口縁部に至る直口縁部、口唇部は丸味をもって仕上げている。内外面とも文様を施すようだが、洋弁の間に細いパターン状の隙間がある。口縁部上縁とその下方約1.5cmの間は内面に口唇部形状に沿うように二本一組の洗線によりラマ式文を配す。雷に施された差弁の間には花弁様のものが並び、隙間では差弁ごとに異なる文様が配されるようである。雷々については判読できない。釉は淡緑色の失透気味のもので、度資料の全面に施されている。内外面とも細かく密な貫入が著しい。素地は淡灰白色のやや粗かなものである。	M-23 石丸A	
第17回 図版6	甗	口-底	1	14.4	7.6	6.0	高台際から膝部がゆるやかなカーブを描き、やや外面へ開きながら口縁部へ至る直口門縁。口唇部は丸味をもって仕上げている。高台は方柱状につきり、やや外面へ開く。洗文は斜形に整形され内面だけが見える面となっている。内底面に開線と花文を配す。外面の口縁部にも施文しているが、釉が完全に失透しており、判読できない。釉は淡青緑色の失透気味で比較的厚く施されている。外面は釉を除去し、底縁のあと外底面の釉を削っているが、外面には施文された部分も残る。裾帯も認められる。素地は淡灰白色の粗かなものである。小さな気泡が多くみられる。	K-18 北朝4層
			2	12.4	6.5	—	高台際からゆるやかな丸味を呈し口縁部に至る直口門縁。口唇部はやや内面へ開き、高台は方柱状につきり、裏付けは平坦。裏付けの外面を斜形に面取りしている。外底面の膝部を若干高台内縁へ傾け込む。文様は外面の口縁部上縁に1本の洗線を施し、内底面に開線とその中に花文を配す。釉は淡緑色のやや失透気味のもので、全釉のあと外底面を絶えず目立たせられている。外面は厚く施され、貫入はみられない。外面には斜すじ様の施文が認められる。素地は淡灰白色のやや粗かなものである。	I-20c(1)+(11) コルナル数A 十一-20丸裂B
		口縁部	14.2	—	—	膝部からやや外面へ開きながら口縁部に至る直口門縁。上唇部は舌状を呈す。文様は外反の口唇下約1cmの範囲に1本の洗線を施す。裡資料に他の文様は見受けられない。釉は淡緑色のやや透明度のあるもので、底資料の全面に施されている。貫入はみられない。素地は淡灰白色のやや粗かなものである。	L 25清沢遺構	
		4	17.0	8.7	6.2	高台際からスムーズな弧を描いて口縁部に至る直口門縁。口縁部で11厚みを過ぎ、口唇部の方へ下厚くなる。口唇部は丸く仕上げている。高台は逆台形状に裏付けの方へ開く。裏付けは平坦。裏付けの外面を斜形に面取りしている。文様は内底面に開線の帯が認められるだけである。釉は淡青緑色のやや透明度のあるもので、厚く丁寧に施されている。外底面に施文された部分があるはずは全釉である。外面に細かなの粗い貫入がみられる。素地は淡灰白色のやや粗かなものである。	M-24南側2層 十-25-24 西溝上十-11-12 山崎十一-18石丸列E	
		5	17.0	7.8	6.4	外面が大きく膨らんで口縁部に向かい、上唇部を外反気味につきり、約7mm幅の腹帯を有する。口唇部は丸味をもって仕上げている。高台は方柱状につきり、裏付けは平坦。裏付けの外面を斜形に面取りするが、文様は施文されていない。内底面に中央部に花文を配す。それ以外は施文されていない。状況不明。釉は淡緑色の失透釉で、全釉のあと外底面と内底面を施文している。内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は粗いもので、底面部分には粗い色を呈し、腹帯部分に口縁部にかけては淡褐色を呈す。	I-20c(1)コルナル数A-K-23石丸A	
		6	17.0	7.4	5.8	高台際から膝部が膨らんで口縁部へ向かい、口縁部上縁を外反気味につきり、外面をハブラシ状に彫磨させる。口唇部は平坦にしているが、外側のかたを丸味を持って仕上げている。高台は方柱状につきり、裏付けは平坦。裏付けの外面を斜形に面取りしている。文様は内底面に開線の帯が認められる。釉は淡青緑色のやや失透気味のもので、厚く丁寧に施されている。外底面に施文された部分があるはずは全釉である。外面に細かなの粗い貫入がみられる。素地は淡灰白色の粗かなものである。	G-18 北朝4層	
		7	12.2	5.6	5.0	膝部からゆるやかに口縁部に向かい、口縁部上縁を外反させる。口唇部はやや外面をつくり、斜形になる。高台は方柱状につきり、裏付けは平坦。裏付けの外面を斜形に面取りしている。文様は施文されていない。内底面に開線の帯が認められる。釉は淡青緑色の失透釉で、高台裏付けの外反面と内底面の中間に施文されている。外面には施文された部分も認められる。内外面とも細かく密な貫入が著しい。素地は粗く、白色気泡が多く含まれている。明灰色を呈すが、底面部分は灰褐色を呈す。	K-23 南朝3層	
		8	14.4	6.0	6.3	高台際から膝部が丸味をもって口縁部へ向かい、上唇部を若干外反させる。口唇部は舌状につきり、高台は方柱状につきり、裏付けは平坦。裏付けの外面を斜形に面取りするが、外面には整形の柄が明確に現す。内面の膝部上部に文様を施すほか、文様は見受けられない。濃緑色部分向かいになる。釉は淡青緑色でやや透明度があり、薄く施される。高台裏付けから外底面にかけて濃緑色の腹帯に施文物がみられる。素地は明灰色の粗いものである。	G-18 北朝4層	
		9	20.5	—	—	膝部の方から若干外面へ開きながら口縁部に向かい、上唇部を外反させる。口唇部は丸味を持って仕上げている。裡資料に文様はみられない。釉は淡青緑色の失透釉で厚く、丁寧に施されている。裏面とも細かく密な貫入が著しい。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	L-18 表土・混乱	
		10	20	—	—	膝部の方から若干外面へ開きながら口縁部に向かい、口縁部上縁を外反させる。口唇部は丸味をもって仕上げている。裡資料に文様はみられない。暗青緑色の失透気味の釉で、割と丁寧に施されている。貫入はみられない。素地は淡灰白色のやや粗いもので、大きな気泡がみられる。	K-14コルナル数B十一-17丸裂1層	
		11	12.8	—	—	膝部の方からやや外面へ開きながら口縁部に向かい、上唇部をゆるやかな外反させる。口唇部は丸味を持って整形している。文様は見受けられない。釉は淡緑色の失透釉で、厚く丁寧に施されている。貫入はみられない。素地は淡灰白色のやや粗かなものである。	M-23 西側2層	
		12	12.8	—	—	膝部から略S字状に外面へ開き口縁部に至るもので、口唇部はゆるやかな外反を呈す。口唇部は平坦に整形している。薄すじの資料で、外面には整形時の柄が明確に現れる。無文、灰白色の失透釉を施す。内外面とも口縁部上縁に輪帯がみられ、内面は点線状の均し施文であるが、外面は不規則な失透気味を呈す。内外面とも細かく密な貫入が著しい。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	H 22 北朝3層	
13	—	—	5.2	腹帯が膨らまずに立ち上がりいく高台資料。高台は方柱状につきり、裏付けは平坦で、その外面を斜形に面取りする。内底面に縁に1本の開線、中央部・貫入を削っている。釉は淡緑色で解と透明度がある。基本的に外底面だけが施文。裏付けには釉が削れた部分が目立つ。外面の面取りされた部分に斜すじの施文が認められる。内外面に細かな貫入が著しい。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	K-15 北朝3層			
14	—	—	5.6	高台際から膝部の方へゆるやかに外反するように向かう底資料。高台は傾り付いてくり出している。逆台形状を呈し、裏付けは平坦。外面を斜形に面取りし、外面へ開きながら口縁部上縁に花文を配している。釉は淡青緑色の失透気味のもので、高台及び外底面は無釉、高台内面には施文された部分も認められる。素地は淡灰白色のやや粗いものである。裏付け部分はやや非味を帯びる。	K-19 表土・混乱			

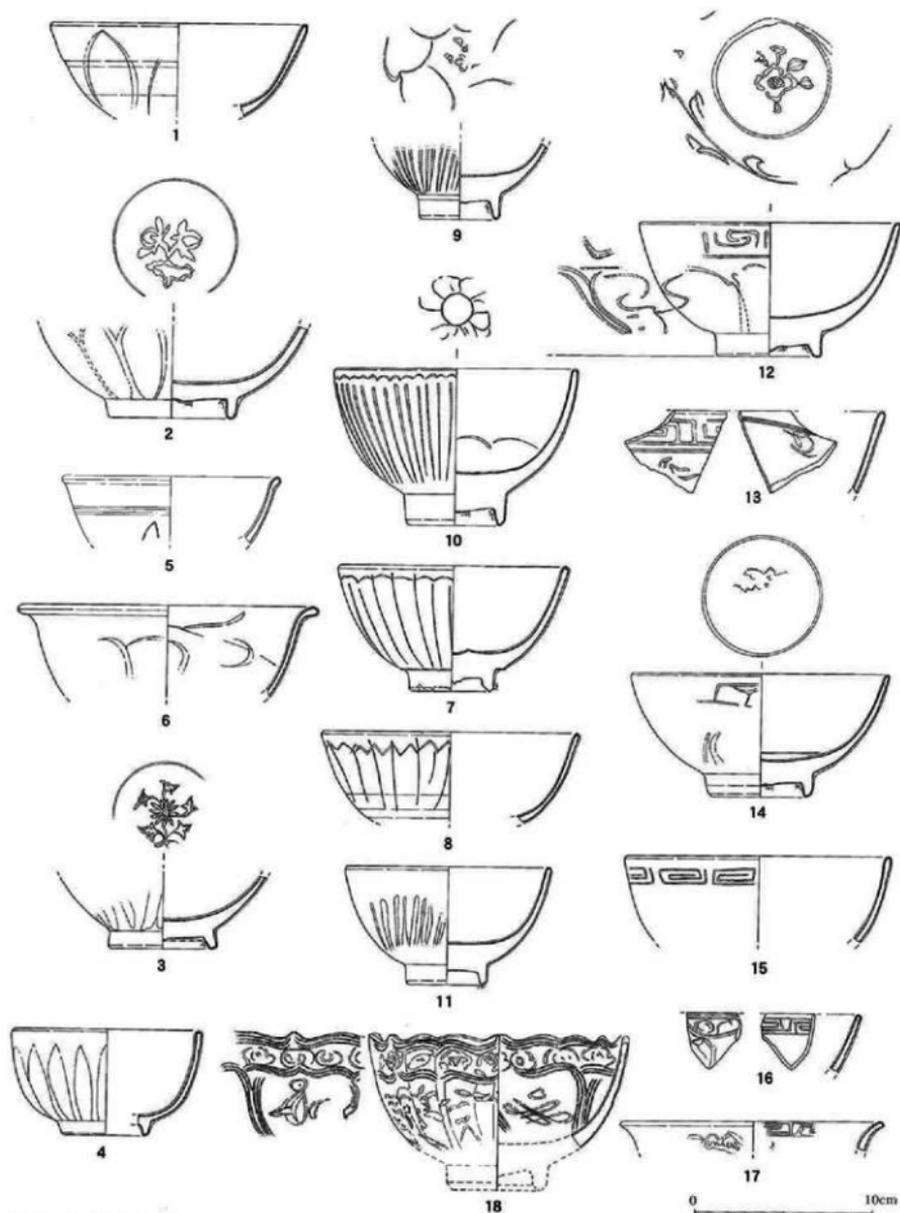
注：「—」:計測不可、「+」:接合の痕

第5表 青磁観察一覧

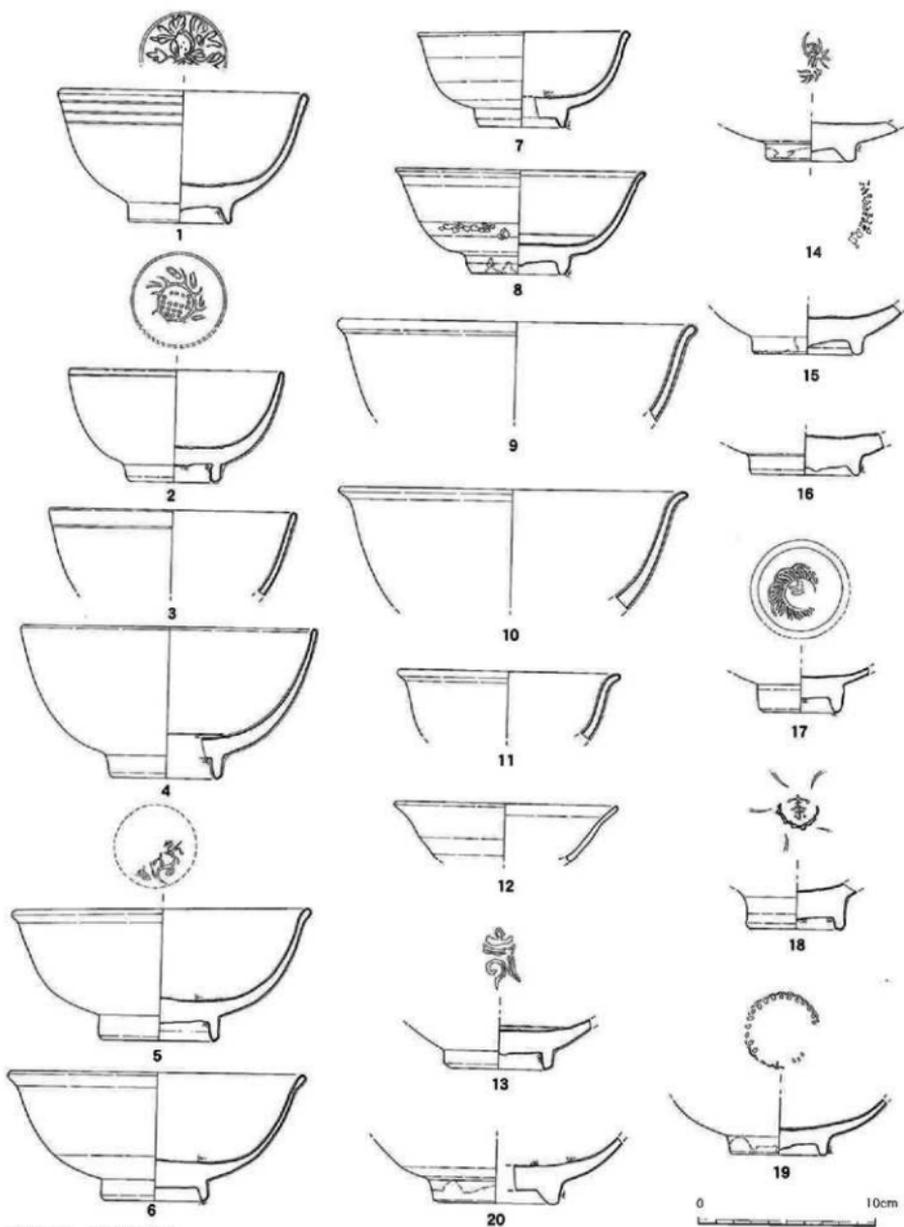
単位: cm

図番号	器種	部位	口径	高さ	底径	観察事項	出土地			
第17回・ 図版6	甗	底部	15	—	6.0	—	腹部が丸味を持って立ち上がっていく底縁資料。高台は方柱状につきり、贅付けは平直。甗台外面を斜位に面取りし、内側も若干斜めに張る。外底面の中央部は尖る。内底面には、溝を有した角の痕が認められる。文様はみられぬ。釉は淡青緑色でやや透明度がある。高台は灰白色で丸味がある。甗台外面も丸味は強いが縁がやや削がれている。内外面に細かく密な貫入が目立つ。素地は黄白色のやや粗いもので、黒色斑紋が散見される。	不明		
			16	—	6.2	—	甗台縁で破損している底縁資料。高台は甗台形状につきり、贅付けは平直。甗台外面を斜位に面取りする。釉は青緑色を呈し、完全に失調している。贅付け外面から外底面は露筋。贅付け部に釉の痕が認められる。素地は灰白色の粗いものである。	L-21 北側3層		
			17	—	4.2	—	高台前からやや側ながら腹面の方へ向かう底縁資料。高台は方柱状につきり、贅付けは平直。外面を斜位に面取りする。高台部の外面に約4mm程度の深い凹痕を認らる。内底面には約1mm幅と幅広の窪線を1本掘り出し、その中に花文と文字を配している。窪線の上方にも文様の一部が認められる。釉は淡青緑色の失透透明度のあるもので、外底面を除き全輪のようである。外底面の中央部にも露筋する。甗台内側を輪郭するが、外底面の縁部には釉が残る。底の目録割ぎをイメージさせる。素地は淡灰白色の細かなものである。	不明		
			18	—	5.2	—	高台部で破損している底縁資料。高台は方柱状につきり、贅付けは平直。外面を斜位に面取りしている。高台部から外底面と同じ部分まではすばまきように削り出し、そこから底面方向の削りを行っている。そのため底面部分に厚く残っている。釉は淡青緑色のやや失透質のもの、外底面を除き全輪のようである。外底面の中央部にも丸く窪し、底の目録割ぎのイメージを出している。内外面に細かく密な貫入が著しい。素地は淡灰白色のやや粗いもので、外底面の輪郭がみられない部分は赤味を帯びる。甗台内に花卉の弁状とその中央部に文字を配している。	H-26 溝状遺構C		
			19	—	5.4	—	腹縁が丸く膨らんで立ち上がっていく底部資料。高台は方柱状につきり、贅付けは平直。贅付けの外面を若干斜位に面取りしている。外底面の中央部を高くしている。内底面には、溝を有した角の痕が残り、そこに花文を配している。釉は青緑色で、比較的透明度があり、高台および外底面は露筋する。高台外面には輪郭線が目立つ。素地は灰白色のやや粗いものである。	L-16 L-17 30		
			20	—	7.2	—	腹縁が丸味をもった立ち上がっていく底縁資料。高台は甗台形状につきり、贅付けは平直。厚く、低くつくられた高台は安定感がある。贅付け部は削り角で、若干丸味を帯びる。釉は青緑色で、やや透明度があり、露筋する。高台外面から外底面は露筋。内底面は丸の目状に輪割ぎされている。輪割ぎの部分に粘土質の凹凸が認められる。内外面とも細かく密な貫入が著しい。素地は淡灰白色の粗かなものであるが、部分的に淡灰白色や粗粒面を呈す。	G-17 北側4層		
			1	甗	口唇部	13.0	3.2	6.5	口唇部。高台際から緩やかなカーブを描いて口唇部に至り、口唇部上端を逆U字状に外側へ折り曲げるように外反させる。口唇部の幅広。平直。内側の縁は鋭利で明瞭である。外底面は丸味をもった、平直な縁にシブーブとつきりである。高台縁状に面取りする。贅付けは削り出し、そこから底面方向の削り角を同様させる。釉は黄白色の沈澱でややツツタツと描かれている。目録り込むようにつくられている。内底面には丸味を配しているようである。釉は深緑色のやや失透質のもの、高台贅付けから外底面を除き、全輪である。素地は淡灰白色の細かなものである。	M-23 石山A
						8.4	2.75	4.4	直口口唇部の小甗。高台際から緩やかなカーブを描きながら口唇部に至る。口唇部は丸く仕上げられる。高台は甗台形状に面取りする。甗台内側を斜位に削り、外側へ傾き加えて施している。釉は青緑色の失透質で、内外面とも高台内側に釉がはじける部分が見受けられる。内外面に貫入が認められるほか、外底面には粘土質などの凹凸が認められる。素地は灰白色のやや粗いものである。	H-27 墓土・攪乱
			2	小甗	口唇部	8.8	2.6	4.6	直口口唇部の小甗。高台際で、投殺になり、その部分に縁がある。そこから甗台中央へほぼ直線的に面取り、そこから若干外側が腹内になり、口唇部に至る。口唇部は舌状を呈す。高台は方柱状につきり、露筋する。高台縁状に面取りする。贅付けの外側を斜位に削り出すが、外側の場合は丸く削って、贅付けが部位にある部分で見られる。外底面の中央部が露筋する。文様はみられない。素地は淡灰白色の粗いものである。内外底面を輪郭しているほかは全輪、内外面に細かく密な貫入が著しい。内底面の中央部及び外底面には輪郭線が認められる。素地は深緑色のやや粗いものである。	L-28 南側3層
						12.6	3.2	7.4	外反口唇部。高台際から腹縁が丸く膨らみ、口唇部に向かい、上端部で縁から外反する。口唇部は丸く仕上げられる。高台は淡青緑色につきり、贅付けは平直。贅付け外面を斜位に面取りしている。内底面及び内底面との間隙を埋めるように、文様は見受けられない。釉は淡青緑色の失透質で、内底面の中央部及び内底面から外底面を露筋している。内底面は中央部を、投殺になるように削り込んで、内外面に傾くような貫入が著しい。素地は淡灰白色の粗いものであるが、底縁部は赤味を帯び、その間に赤味を帯びる部分もある。	不明
3	甗	口唇部	11.0	2.9	5.7	外反口唇部。高台部で縁を有し、そこから大きく外反して口唇部に至る。口唇部は舌状につきり、高台は方柱状につきり、贅付けは平直。贅付けの外側を斜位に面取りしている。外底面の削り角はやや浅めで、輪割ぎの痕を認らる。文様は内底面に花文を配している。釉は淡青緑色の失透質のもの、外底面を除き全輪である。内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は淡灰白色の粗いものである。	L-M-19北側3層 L-11-19北側1層			
			13.0	—	—	外反口唇部。高台部で縁を有し、そこから大きく外反して口唇部に至る。口唇部は丸く仕上げられる。内外面に草文を帯び、釉は青緑色で、やや透明度があり資料の全面に施されている。L部及び縁部の種の周辺には細かな凹凸が認められる。内外面とも細かく密な貫入が著しい。素地は淡灰白色の粗いものである。	L-20 北側3層			
4	甗	口唇部	12.0	—	—	外反口唇部。高台部がやや丸味を帯び、口唇部を折り曲げるように外反する。口唇部は舌状に仕上げられる。内面にだけ草文が認められる。暗緑色のやや失透質のある釉が、資料の全面に厚く施される。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	L-26 溝状遺構C			
			12.2	4.3	6.4	外反口唇部。高台部が丸味を帯び、そこからゆるやかに大きく外反して口唇部に至る。口唇部は尖る。底縁部が厚く、外側から口唇部の方へ厚みを帯びる。高台は方柱状につきり、贅付けは平直。贅付けの外側を斜位に面取りする。文様は内底面にだけ認められる。花文とその隙間に「洞」の字を配している。釉は深緑色のやや失透質のあるもので、厚く施されている。全輪の外底面を能の目状に輪割ぎされている。貫入は見受けられない。外底面の縁の目録割ぎの部分に、暗色面が凹部にみられる。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	L-23 ビット5			
5	甗	口唇部	12.2	4.1	7.0	外反口唇部。高台部から胴上部までほぼ直線的に削り、そこからゆるやかに外反して口唇部に至る。胴上部で縁をつくるが、不明瞭である。口唇部は舌状に仕上げられる。高台は甗台形状に厚く厚めに削り、安定感がある。贅付けは平直で、外側を若干斜位に面取りしている。文様は内底面にだけ施されるが、自然とした。内底面の縁を明確に帯びる。釉は淡青緑色の失透質のもの、厚く削り施されている。内外面から外底面を除き全輪で輪割ぎし、外底面の中央部にも輪割ぎしている。底の目録割ぎをイメージさせる。外底面の中央部に粘土質の凹凸が認められる。内外面に散粒状の貫入が認められる。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	不明			
			11.4	3.2	6.0	外反口唇部。高台部に不明瞭な縁をもった、そこからほぼ直線的に立ち上がり、口唇部を大きく外反させる。口唇部は丸味を帯びる。高台は甗台形状に削り、丸味につきり、贅付けは平直。贅付けの外側を若干斜位に面取りする。文様は内底面にだけ認められる。花文とその隙間に「洞」の字を配している。釉は深緑色のやや失透質のあるもので、厚く施されている。全輪の外底面を能の目状に輪割ぎされている。貫入は見受けられない。外底面の縁の目録割ぎの部分に、暗色面が凹部にみられる。素地は淡灰白色のやや粗いものである。	J-19 北側3層			

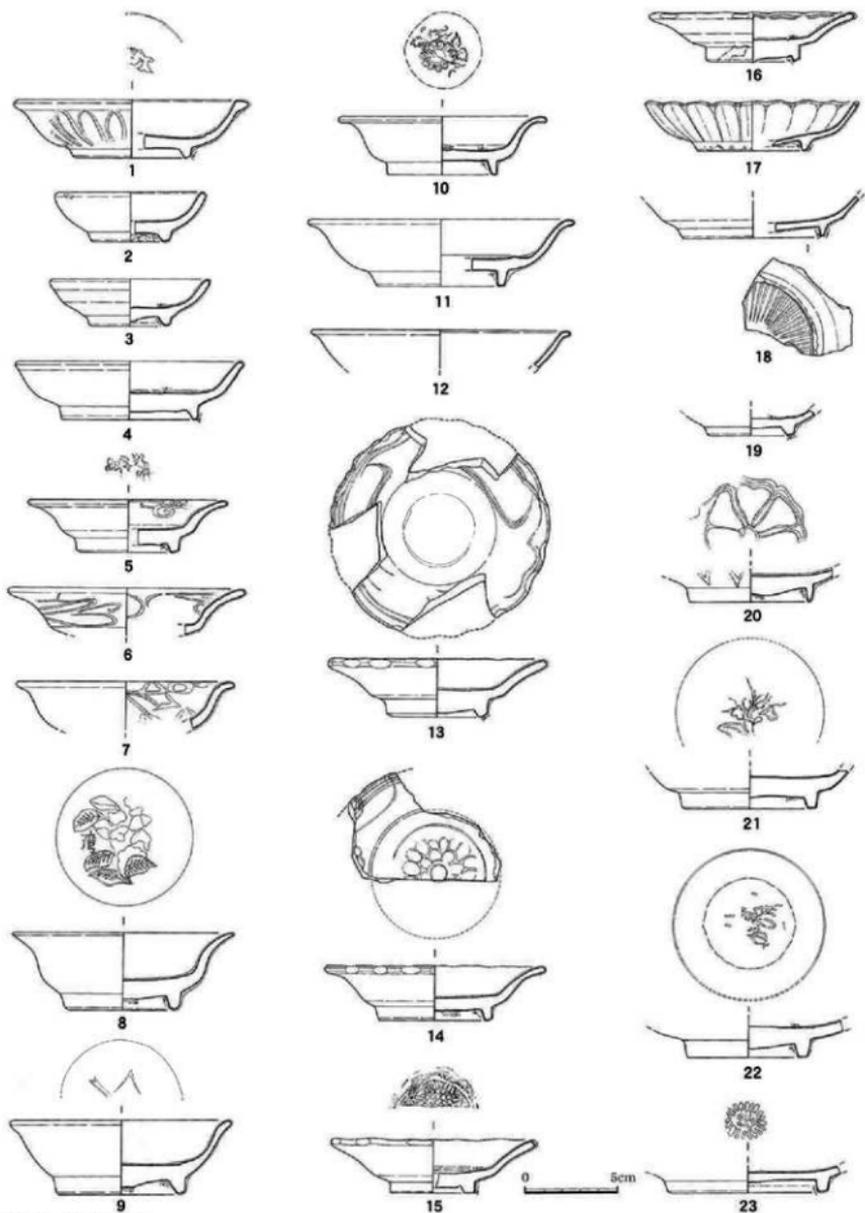
注「—」: 計測不可、「+」: 検査の痕



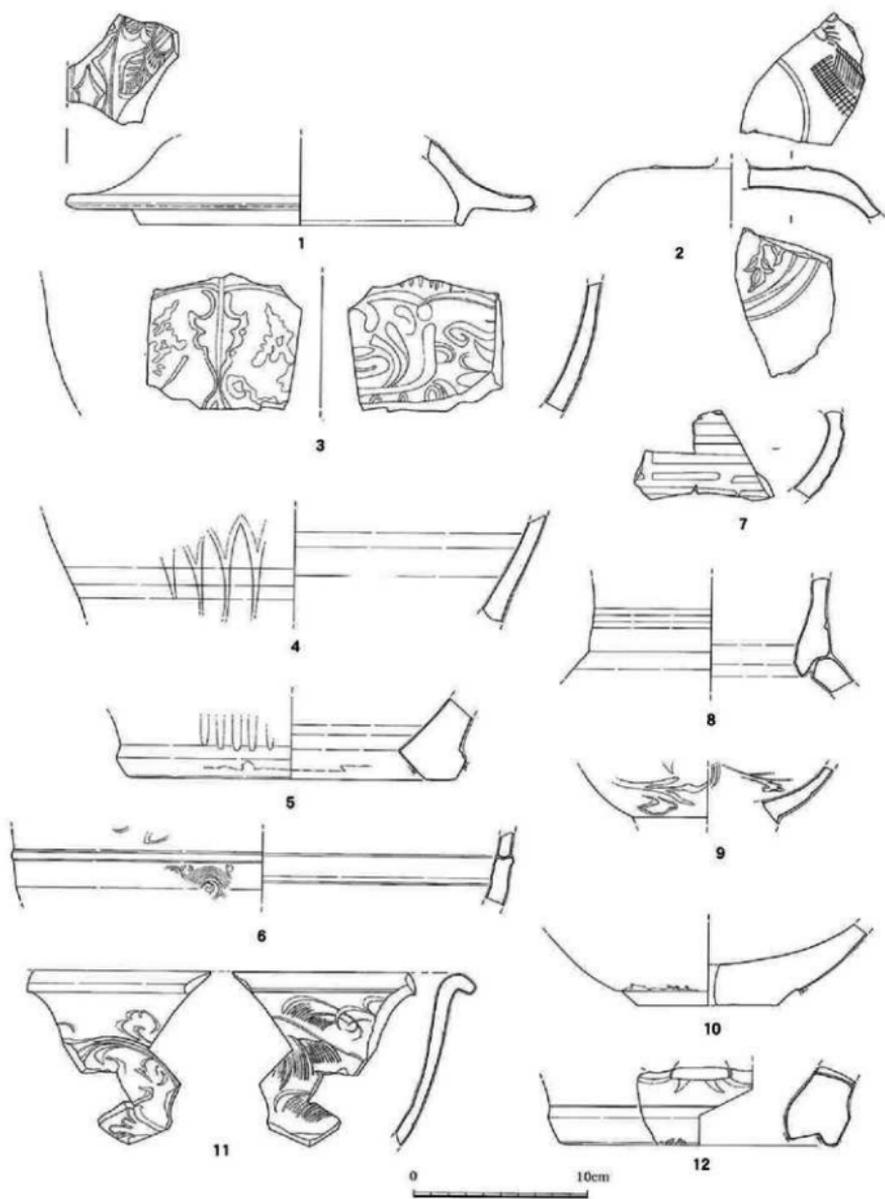
第16图 青磁 (1)



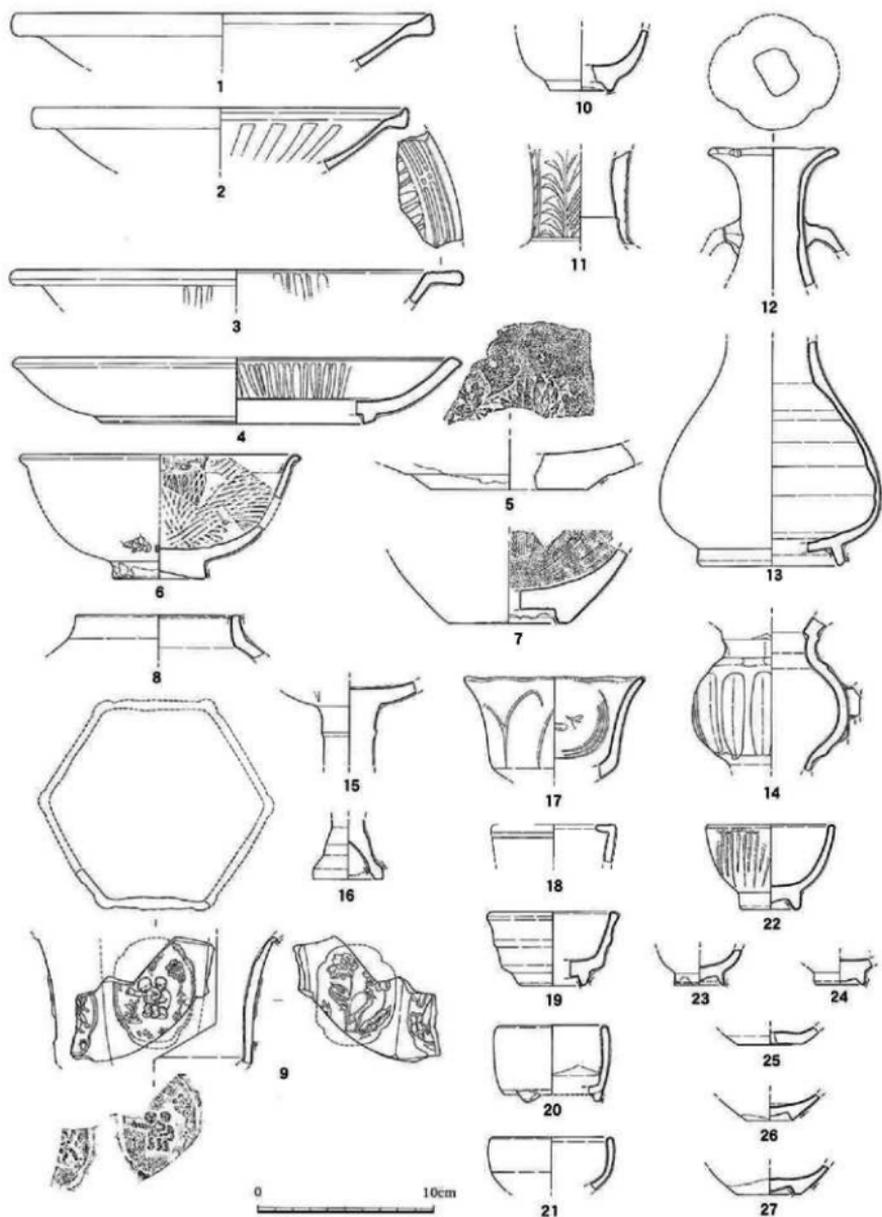
第17图 青磁(2)



第18图 青磁(3)



第19図 青磁(4)



第20図 青磁 (5)

第2節 白磁

白磁は1,049点出上し、第21～23図に示した。器種は皿が全体の半数を占め、その他に碗、壺、杯、盤などがみられる。所属年代は13～14世紀前半の玉縁碗から明代にかけての資料が多くみられる。

第21図1～9・11は碗である。碗の口縁形態は玉縁が2点の他、直口、外反、内湾がみられ、外反するタイプが約8割を占めている。同図3は内面に欄楯で文様を描き、ピロースタイプⅡの範疇に含まれるものと思われる。同図7は内面に龍文を陽刻する。ここでは中国産を扱ったが、同図11はベトナム産の可能性もある。

第21図10・第22図1～8・10～17・19～26は皿である。口縁形態は直口するタイプがほとんどである。同図1～4などは外反するタイプ、同図8・11などは直口するタイプである。また、サイズは15cm前後のものから、7cm前後の小皿がみられる。同図13は桜花皿、同図15・16は挟入高台をなすタイプである。同図21～25は灯明皿で、いずれも軸は薄く外面は無軸。

第23図1～4は壺である。同図1・2は安平壺で、1は全形をうかがうことができ、丸みを帯びた器形をなす。〔天界寺跡(1)〕において報告した資料に類する。同図3・4は底部で、厚くつくる。

第23図5～13は瓶である。器形をうかがうことのできる資料は少なく、同図6・8は肩が張る器形、同図10はナデ肩の器形をなすものと思われる。同図10は花文を陰刻する。

第23図16・17は甕である。いずれも鈎縁状口縁をなす。

第21図12～16・第23図18～23は杯である。第21図12は腰折れ杯の底部、第23図22・23は八角杯である。第21図13～15はいずれもロクロ痕が明瞭である。

第22図18は香炉、第23図15は白付きの碗もしくは鉢である。第22図26は焼成後に穿孔を施したもので、何らかの二次製品であろうか。

附記
〔天界寺跡(1)〕第2節白磁において第27図9・10を16世紀の白磁として報告したが、正しくは瀬戸美濃系の転写端反小皿である。同様な資料は東京都所在の菅谷遺跡(都立大学遺跡調査会2000)では近世の一括陶磁器に含まれている。

第6表 白磁観察一覧

図番号	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	産地・年代	出土地
第21 図	碗	口縁部	16.0	—	—	玉縁碗。軸は濁った白色、素地は白色。	13～14c前	K-20 表土・複土
			15.0	—	—	口充の外反碗。軸は灰白色、素地は白色。	13～14c前	不明
	碗or皿	口縁部	14.6	—	—	ピロースタイプⅡに属すると思われる皿もしくは碗。灰白色、素地は白色。内面に欄楯の文様。	12～14c	I-22 北側4層
			16.8	—	—	外反碗。腹部以下は無軸。軸は灰白色、素地は白色。	13～14c	I-17 北側3層
	碗	口縁部	18.0	—	—	外反碗。軸は乳白色、素地は乳白色。	14～15c	G-22 跡
			16.0	—	—	外反碗。軸は淡暗灰色、素地は淡灰色。外面はロクロ痕が残る。	13～14c	不明
	碗	口縁部	12.2	—	—	外反碗。軸は白色、素地は白色。内面に龍文を陽刻する。	14c後～15c	K-18 北側3層
			13.2	—	—	外反碗。軸は白色、素地は白色。	15c後～16c前	M-21 瓦溜まりC
	皿	底部	—	—	7.0	軸は濁った白色、素地は白色。外面は腰部以下は無軸。内底面を覗くと軸割れ。	13～14c	K-23 石垣A
			—	—	6.0	軸は乳白色、素地は淡灰白色。豊付を斜めに磨る。	14～15c	不明
	皿	底部	—	—	5.8	直縁の関く器形。軸は乳白色、素地は淡灰白色。	14～15c	F-18 北側4層
			—	—	3.0	腰折の杯。屈曲部は角が付く。軸は乳白色、素地は白色。	14～15c	F-18 北側4層
	杯	口～底	9.1	4.0	3.4	口縁が外反。全体的に二次被熱のためか軸・素地は濁った乳白色、外面はロクロ痕が明瞭。	14～15c	不明
			7.6	3.0	3.0	口縁が外反する小杯。軸は白色、素地は淡灰色。胴下半以下は無軸。外面はロクロ痕が明瞭。	14～15c	J-18 北側3層
			7.8	2.9	3.0	直口口縁の小杯。軸は白色、素地は淡灰白色。外面はロクロ痕が明瞭。	14～15c	不明
			7.2	—	—	13に類する外反口縁の小杯。藍色しており、軸・素地は濁った乳白色。外反碗。軸は濁った乳白色、素地は白色。豊付は無軸。器内に不明の蓋状。	14～15c	不明
第22 図	皿	口～底	15.8	3.6	8.9	外反碗。1に準ずる器形。軸、素地は白色。豊付は無軸。	16c	J-26 土塚
			15.4	4.0	8.8	外反碗。1に準ずる器形。軸、素地は白色。豊付は無軸。	16c	I-28 南側3層
		口～底	12.0	2.7	6.2	外反皿。器形は1に準ずる。口唇部が若干厚い。軸、素地は白色。豊付は無軸。	16c	H-122-23 方形裾込み遺構
			12.2	2.7	3.8	外反皿。器形は1に準ずる。軸、素地は白色。豊付は無軸。	16c	M-24南側3層・I-22方形裾込み遺構

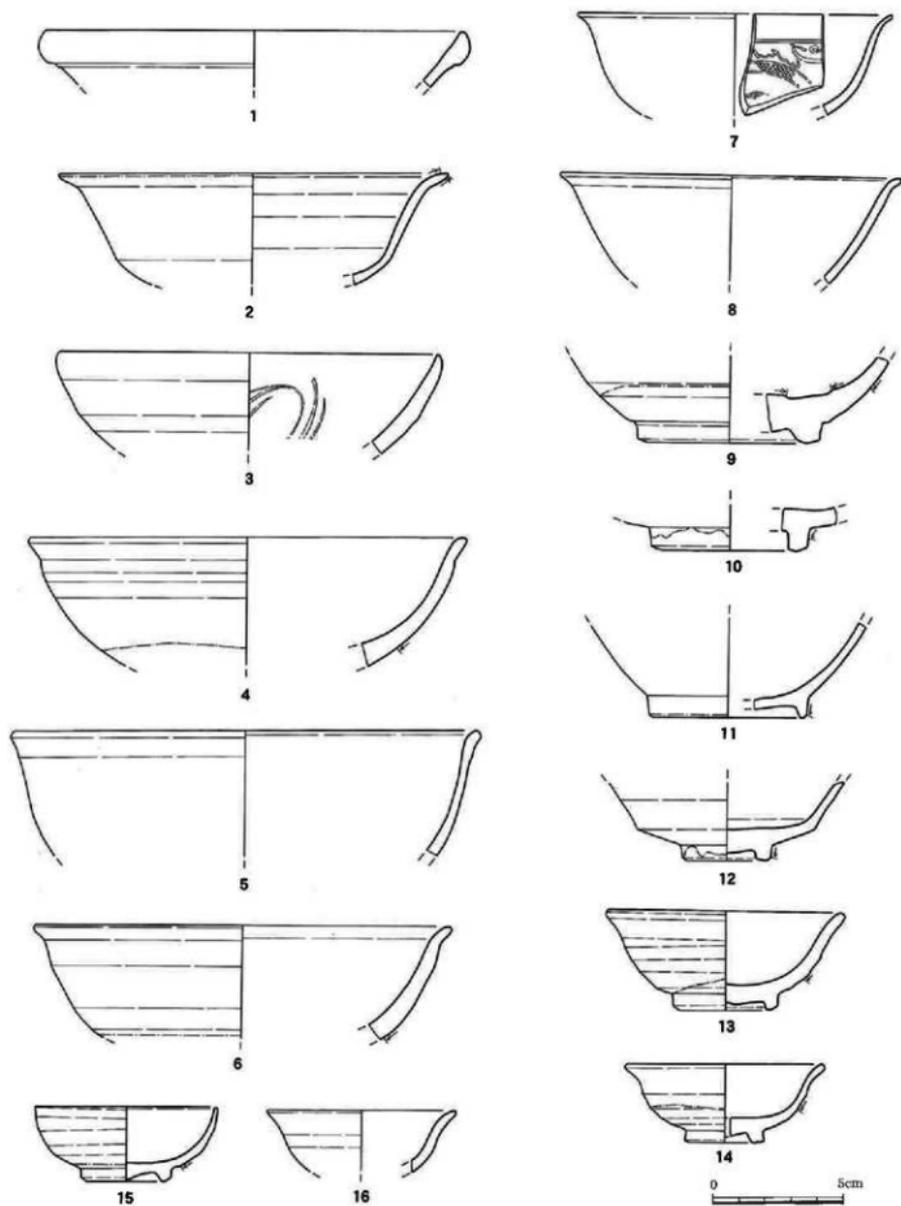
注「—」: 接合の意、「—」: 不明の意

第6表 白磁観察一覧

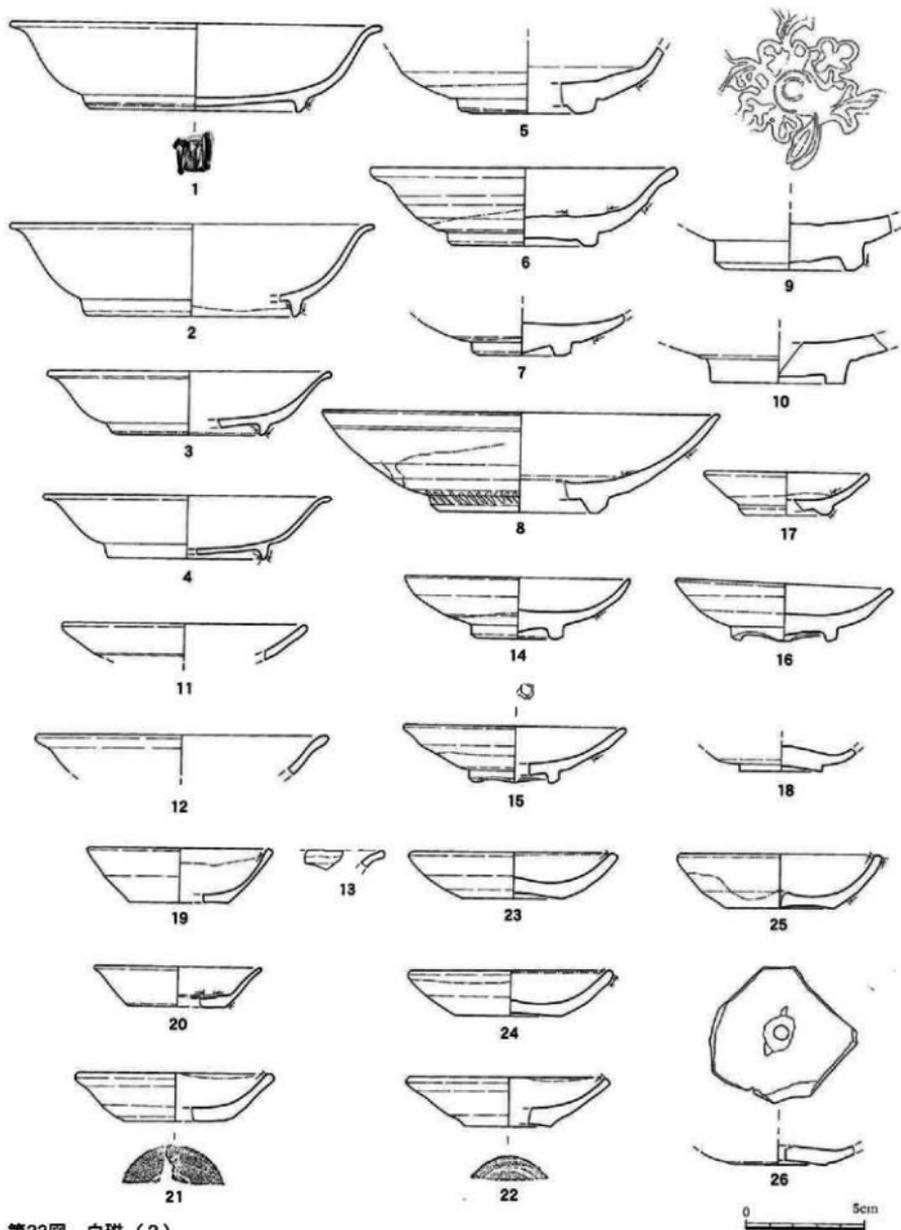
単位: cm

図番号	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	産地・年代	出土地
5	甌	底部	—	—	5.8	輪は淡暗灰色、素地は濁った白色。外面は腰部以下が無輪、内表面は蛇の目輪割き。	13-14c	J-16-17 表土・攪乱
6		口一底	13.0	3.4	6.0	外反皿。輪は濁った暗灰色、素地は濁った白色。外面は腰部以下が無輪、内表面は蛇の目輪割き。	13-14c	H-21 ビット11
7		底部	—	—	3.6	輪は乳白色、素地は白色。外面は腰部以下が無輪。口口痕明瞭。	14-15c	不明
8	甌	口一底	16.8	4.3	6.8	直口皿。輪は淡暗灰色、素地は淡灰色。外面は胴下半以下が無輪、内表面は蛇の目輪割き。口口痕明瞭。豊付を斜めに削る。	13-14c	東海1-28南側3層
9		底部	—	—	5.6	輪は乳白色、素地は白色。内表面に印花文を施す。豊付を斜めに削る。	14-15c	不明
10		底部	—	—	5.7	輪は青みがかった灰白色、素地は白色。外面は腰部以下が無輪、貫入あり。	13-14c	N-19 トレンチ
11	甌	口縁部	10.4	—	—	直口皿。輪、素地とも白色。細かい貫入。	明代?	不明
12		口縁部	12.4	—	—	外反皿。輪、素地とも白色。	16c-17c初	不明
13		口縁部	—	—	—	種花皿。輪、素地とも白色。	景德鎮 16c	不明
14		口一底	9.5	2.6	3.8	直口皿。輪、素地とも白色。腰部以下は無輪。細かい貫入。	中国 14-15c	L-15 北側4層
15		口一底	9.4	2.4	3.8	狭口高台の皿。輪は淡灰白色、素地は白色。腰部以下は無輪。口口痕が残る。	中国	K-1-14 北側4層
16		口一底	9.2	2.3	4.4	狭口高台の皿。輪は濁った乳白色。腰部以下は無輪。口口痕が残る。	中国 15c-16c前	K-L-16-17 北側3層
17	香炉	口一底	7.4	1.9	3.6	直口皿。輪は濁った白色、素地は淡灰白色。内表面は無輪。	中国 明代	N-24 南側3層
18		底部	—	—	3.5	輪は濁った灰白色、素地は白色。外面は無輪、細かい貫入。	中国 明代?	不明
19		口一底	7.5	2.4	4.1	ベタ底。輪は剥落、素地は灰色。薄手。	中国 明代	M-21 瓦溝まりC
20	甌	口一底	7.0	1.7	4.0	ベタ底。輪は白色、素地は白色。底面は無輪。内表面は蛇の目輪割き。	中国	不明
21		口一底	8.4	2.1	4.2	ベタ底。輪はほとんど剥落、素地は濁った灰白色。19に比べて厚手。	—	M-L-20 石列D
22		口一底	8.6	2.1	3.6	輪は青みがかった灰白色、素地は灰色。外面は一部に輪成れ。	中国 明代	I-26 溝状遺構C
23	灯明皿	口一底	8.8	2.0	4.2	輪は淡黄白色、素地は白色。外面は無輪。口口痕が残る。底面は赤切り。	中国 明代	J-28 地山直上
24		口一底	8.6	2.0	4.4	輪は淡暗灰色、素地は灰色。外面は無輪。口口痕明瞭。	中国 明代	H-22-23 方形瓶込み遺構
25		口一底	8.6	2.3	4.6	輪は淡暗灰色、素地は淡灰色。外面は無輪。口口痕が残る。	中国 明代	I-27 南側3層
26	甌	底部	—	—	4.0	ベタ底。輪は剥落、素地は白色。二次穿孔あり。	中国 明代	J-28 南側2層
1		口一底	10.0	13.3	6.3	平口蓋、胴が張る丸みを帯びた器形。口唇部は方形。輪は濁った乳白色、素地は白色。細かい貫入がみられる。高台は斜めに削る。	—	L-M-18北側3層+G-17北側4層+K-16南側1層
2		口縁部	8.2	—	—	平安盃、胴が張る器形。口唇部は薄い。輪は灰白色、素地は白色。口唇部、胴下半以下は無輪、内外とも口口痕が明瞭。	中国 14-15c	M-L-20 石列D
3	甌	底部	—	—	7.0	厚手の底部。輪は確認できない。素地は灰白色。	14-15c	M-20 瓦溝まりC
4		底部	—	—	6.6	輪は暗灰色、素地は灰色。	14-15c	M-21 瓦溝まりC
5		底部	—	—	8.0	輪は淡青白色、素地は白色。豊付は無輪。	中国 明代?	M-20 瓦溝まりC
6	甌	胴部	—	—	—	胴が張る器形。輪、素地とも灰色、濁った乳白色。内外とも口口痕明瞭。細かい貫入。	中国 14-15c	不明
7		胴部	—	—	—	腰部からまっすぐ立ち上がる筒形。輪、素地とも灰色、乳白色。内外とも口口痕。	中国 14-15c	H-22 方形瓶込み遺構
8		胴部	—	—	—	胴が張る器形。輪、素地とも白色。内面に口口痕。粗い貫入。	中国 16c頃	M-22-23 表土・攪乱
9		口縁部	—	—	—	短頸の小瓶? 輪、素地とも灰色、濁った乳白色。細かい貫入。	—	不明
10		胴部	—	—	—	花文を散らし、輪は濁った白色、素地は白色。内面に接合帯。	景德鎮 16c	L-21 瓦溝まりC
11		胴部	—	—	—	輪は淡灰色、素地は白色。内面に接合帯。	景德鎮 16c	K-21 南側2層
12	甌	底部	—	—	5.7	逆筒状をなす。輪は白色、素地は乳白色。底部は無輪。	中国 明代?	不明
13		底部	—	—	7.4	輪は灰色、素地は白色。豊付を斜めに削る。	中国 17c	L-28 表土・攪乱
14		型物	底部	—	—	型物の底部、残りの沈文。輪は淡暗灰色、素地は白色。	17c後-18c前	不明
15	甌or鉢	底部	—	—	—	付台の碗もしくは鉢の底部。輪、素地とも白色。粗い貫入。	景德鎮 16c頃	不明
16		口縁部	—	—	—	筒縁口縁の種花皿。輪、素地とも白色。	16c	K-28 表土・攪乱
17		口一底	25.3	6.4	11.6	筒縁口縁の盤。輪は灰色、素地は白色。	中国 明代	M-21 瓦溝まりC
18	甌	口一底	5.8	3.8	3.2	高台からラッパ状に開き口縁は外反。輪は淡灰白色、素地は白色。口唇部に縮輪、高台は無輪。貫入あり。	景德鎮 16c後-17c初	表土・攪乱
19		底部	—	—	4.4	ベタ底。輪は淡灰白色、素地は白色。外表面は無輪。内表面は蛇の目輪割き。	景德鎮 16c	M-28 南側2層
20		口縁部	5.6	—	—	口縁部は外反。輪、素地は白色。	景德鎮 16c-17c初	I-28 南側3層
21	杯	口縁部	5.0	—	—	口縁は弱く外反。輪は濁った乳白色、素地は灰白色。粗い貫入。	中国 明代?	不明
22		底部	—	—	2.6	八角形。輪は青みがかった白色、素地は白色。腰部以下は無輪。豊付は斜めに削る。	中国 15c頃	J-21 畦
23		底部	—	—	3.4	八角形。素地、輪とも灰色。狭口高台。	中国 15c	K-20 ビット20

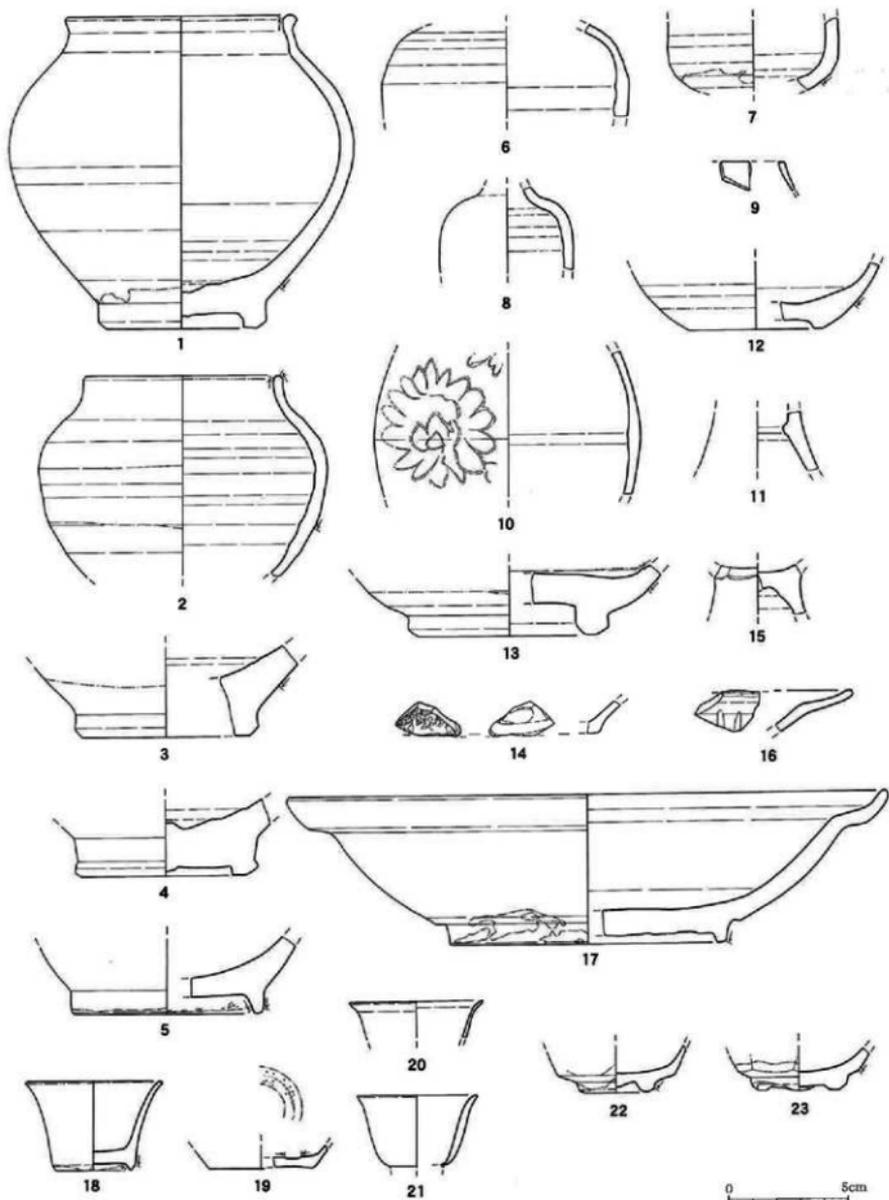
注 [?]: 接合の痕、[-]: 不明の底



第21图 白磁 (1)



第22圖 白磁 (2)



第23图 白磁 (3)

第3節 染付

染付は碗、皿、鉢、杯、瓶、火取、蓮華などが出土している。碗では比較的古い15世紀～16世紀代のものが多く、皿では16世紀以降のものが多い。景德鎮窯系が多いが、福建・広東系、漳州窯系も検出されている。

碗：碗は景德鎮窯系のもの15世紀後半～16世紀代のものであるが、福建・広東系、漳州窯系ものは16世紀～18世紀代と少し時代の下るものである。分類は主に口縁部の形態で行った。

I類—口縁部が外反するもの（第24図1・2、6～8）。

II類—腰部から口縁部に向けて直口するもの（第24図3・10・12）。

III類—内湾する胴部をもち口縁は直口するもの（第24図4・9・11）。

IV類—若干窪んだ底部から口縁部へ若干内湾しながら立ち上がるもの（第24図5）。

底部は饅頭心型を呈するものや文様等に特徴があるものを図化した。

小碗：小碗は4点を図示した。ともに口縁部は直口するものである。そのうち1点は全体が伺えるものであり（第26図6）、腰部は折れ、腰部から口縁部へは直線的に立ち上がるものである。

皿：皿は年代的には15世紀代～18世紀代のもとの幅があるが、16世紀代を中心としている。分類は口縁部を主として行い、外反と直口とに分類し、さらに細分類を行った。

I類—口縁部が外反するもの。I-a：高台をもつ底部のもの（第25図1～3、14・15）、I-b：底部が萁筒底のものがある（第25図6）。

II類—直口口縁であり、II-a：高台をもつもの（第25図4）、II-b：萁筒底の底部から口縁部にかけて僅かに内湾しながら口縁にいたるもの（第25図7～9、16・17）がある。

その他底部で特徴的なものとして、漳州窯系ものがあり、2点図示した。

鉢：鉢は口縁部のみで全体が伺えるものはないが、福建・広東系（第26図3、4）及び漳州窯系（第26図1、2）のものが検出されている。

杯：胴部中央に稜のある腰折れの杯で、腰から口縁部に向けて直線的に至る。（第26図7）。

高足杯：高足杯の脚台の部分である。髷付から脚へいったん窪んで立ち上がる（第26図12）。

小杯：口縁部が外反するものを1点図示した。それは底部からほぼ直線的に口縁部へいたるものである。

瓶：瓶は頸部1点、胴部4点、底部1点を図示した。胴部のうちの1点は把手がつくものである。

蓮華：蓮華は1点図示した。底部の釉が剥ぎ取られている部分がある（第26図21）。

その他：袋物（第26図17）と水注の把手（同図20）と考えられるものを各1点図示した。

第8表 染付観察一覧

単位：cm

図番号	器種・分類	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第24図・ 四版13	I 碗/Ⅰ	口縁部	14.8	—	—	外面口縁部に團縁・雷文帯、胴部に唐草文、内面口縁部に四方禪文を施す。素地は白色。呉須の発色は強い。	I-17 コール敷B
		底部	—	—	6.4	帯付外面を面取している。外面胴部に風景7、内面口縁部に四方禪文。見込に團縁及び折枝梅を施す。素地は白色。呉須の発色は強い。15世紀後半～16世紀初期。景德鎮窯系。	H-22 形編込み 遺構・K-22 ビット1
	II 碗/Ⅱ	口縁部	13.0	6.2	5.6	外面口縁部に波濤文様、胴部にアラベスク文、高台に2本の團縁を配する。内面は口縁部及び腹部に團縁を施し、見込に蓮花文を施す。素地は淡黄色。淡青色の釉中に細かい気泡がある。呉須の発色は強い。16世紀後半～16世紀初期。景德鎮窯系。	I-13北側4層・ I-28 ビット15
		口縁部	14.2	7.3	4.8	外面口縁部と高台に團縁、胴部に草花文、内面口縁部に團縁、見込に草文を施す。素地は白色。呉須の発色は強い。15世紀後半～16世紀初期。景德鎮窯系。	K-24南側3層・ H-26南側2層
	III 碗/Ⅲ	口縁部	14.6	5.5	5.6	外面口縁部と高台に團縁、胴部に唐草文、腹部に如成整文を施す。内面は口縁部に團縁、見込に團縁、花文を施す。素地は白色。呉須の発色はやや弱い。全体に細かい貫入がある。15世紀後半～16世紀初期。景德鎮窯系。	I-25 南側2層
		口縁部	15.0	—	—	外面口縁部に團縁、腹部に波濤文を、内面口縁部に四方禪文を施す。素地は白色。呉須の発色は強い。15世紀後半～16世紀前半。景德鎮窯系。	J-21 コール敷A
	IV 碗/Ⅳ	口縁部	13.6	—	—	外面口縁部に團縁、腹部に印花を施す。素地は淡黄色。呉須の発色は強い。17世紀末～18世紀前半。福建・広東系。	H-26 北側4層
		口縁部	13.4	6.3	6.0	内外面の口縁部に團縁、外面胴部に不明な文様、見込に草文を施す。素地は白色。呉須の発色は強いが、釉の中で滲んでいる。釉中に気泡が確認できる。15世紀後半～16世紀。景德鎮窯系。	H-26 南側2層
	V 碗/Ⅴ	口縁部	12.8	—	—	外面口縁部に團縁・雷文帯、胴部に唐草文、内面口縁部に團縁を施す。素地は白色。呉須の発色は強い。15世紀後半～16世紀初期。景德鎮窯系。	I-18北側1層・ I-19北側4層

注（）：測定、「—」：測定不可、「+」：接合の痕

第8表 染付観察一覧

単位: cm

図番号	器種分類	部位	口径	高さ	底径	観察事項	出土地		
第24図・国庫13	碗	10	Ⅱ	口縁部	15.2	—	外面部に花文、内面口縁部に團縁を施す。素地は白色。呉須の発色は弱い。17世紀末～18世紀前半。福屋・从東系。	M-24南側1層	
		11	Ⅲ	口縁部	12.8	—	外反口縁部に團縁、胴部に折枝梅及び雲文、内面口縁部に團縁を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。15世紀～16世紀前半。景徳鎮窯系。	不明	
		12	Ⅱ	口縁部	15.2	—	内外面口縁部に團縁、外面胴部に草花文?を施す。素地は灰白色。呉須の発色は弱い。16世紀末～17世紀前半。福屋系。	M-20トレンチ②	
		13	底部	—	—	5.4	高台は内側に傾斜するように形成されている。外面胴部に折枝梅文、見込に梅樹文及び暗された月が施されている。素地は白色。呉須の発色は強い。15世紀後半～16世紀前半。景徳鎮窯系。	H-25南側1層	
		14		—	—	5.2	外面胴部に草花文、見込に梅樹文を施す。素地は淡黄色。呉須の発色は良い。15世紀後半～16世紀初期。景徳鎮窯系。	不明	
		15		—	—	4.4	底部中央が隆かに盛り上がる。外面胴部に花文、高台に團縁、外底に「大明年造」を施す。見込に團縁及び人物文を施す。素地は白色。呉須の発色は弱い。16世紀後半。景徳鎮窯系。	M-20表土・攪乱	
		16		—	—	4.4	外面胴部に草花文とラマシ蓮弁文、見込に團縁及び蓮池文を施す。素地は淡黄色。呉須の発色は弱い。15世紀後半～16世紀初期。景徳鎮窯系。	J-17北側1層	
		17		—	—	5.0	底部中央が隆かに窪む蓮子線。外面胴部に團縁及び不明な文様、見込に團縁及び千字文を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。15世紀末～16世紀前半。景徳鎮窯系。	H-27北側4層	
		18		—	—	5.1	外面胴部にアラベスク文、内面胴部に團縁、見込に草花文を施す。釉色は強い青灰色。素地は淡黄色。16世紀前半～16世紀中葉。景徳鎮窯系。	J-17北側4層	
		19		—	—	4.0	外面胴部に宝相華草文?及び團縁、見込に團縁及び梅片文を施す。素地は灰白色。呉須の発色は良い。全体的に気泡跡がある。15世紀後半～16世紀前半。景徳鎮窯系。	I-16北側1層	
		20		—	—	(6.2)	蓮子線。外面胴部に三葉状の文様及び團縁、見込に團縁及び梅片文?を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。16世紀前半～16世紀中葉。景徳鎮窯系。	H-27北側4層・I-28南側3層	
		21		胴部	—	—	—	外面胴部に牡丹文を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。16世紀末～17世紀前半。景徳鎮窯系。	M-21丸溜まりC
		22			—	—	—	外面胴部に蓮文及び波濤文?、内面胴部に花鳥草文を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。16世紀。景徳鎮窯系。	北トレンチ掘戻層・L-20南側貼
第25図・国庫14	Ⅲ/I-a	口～底	1	16.6	3.1	8.4	外反口縁部。高台は内側に傾斜する。外面口縁部及び高台に團縁、胴部に六相華草文、内面口縁部に雲文等、見込に團縁及び人物文?を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。15世紀後半～16世紀初期。景徳鎮窯系。	北側2層・G-22墓壇	
			2	12.0	3.0	6.6	外反口縁部。外面口縁部と腹部に團縁、胴部に宝相華草文文を施し、内面は口縁部及び見込部に團縁、見込に五稜獅子文を施す。素地は淡黄色。呉須の発色はやや弱い。底面から胴部にかけて貫入がある。15世紀後半～16世紀前半。景徳鎮窯系。	J-20コラール敷A・I-24南側1層	
			3	14.1	3.8	6.4	費付外面を面取している。外底面に團縁、内面口縁部に團縁、胴部から見込にかけて草花文を施す。17世紀末～18世紀前期。景徳鎮窯系。	L-23・24石垣A	
	Ⅲ/II-a	口～底	4	11.2	2.3	7.2	外面口縁部及び高台に團縁、胴部に花文、内面口縁部に團縁、見込に不明な文様を施す。費付に砂が付着している。素地は白色。呉須の発色は良い。釉中に細かい気泡がみられる。16世紀後半～17世紀初期。景徳鎮窯系。	不明	
			5	10.8	—	—	外面口縁部に2本團縁、内面口縁部に西方文を施す。素地は白色。呉須は少し濃味を帯びる。釉中に細かい気泡がある。16世紀後半～17世紀初期。景徳鎮窯系。	M-21瓦溜まりC	
	Ⅲ/I-b	口～底	6	13.2	3.25	5.4	口縁部が外反する器徳器。外面口縁部から胴部にかけて渦文、費付部に團縁を施す。内面は口縁部に團縁、見込に「十字花文、その周りに團縁及び花文」を施す。素地は白色。費付無釉。呉須の発色は良い。景徳鎮窯系。	H-22方形箱込み遺構	
			7	12.0	3.2	4.2	費付無釉の器徳器。内面口縁部に團縁、見込に草花文。素地は淡黄白色。呉須の発色は弱い。16世紀。景徳鎮窯系。	J-26南側2層・K-26畦	
	Ⅲ/II-b	口～底	8	10.2	2.7	3.0	器徳器。文様は暗され、外面口縁部に波紋文、胴部に芭蕉文を施す。内面は口縁部及び見込部に團縁、見込に鳥文、芭蕉文を施す。素地は白色。呉須の発色は弱い。16世紀前半～16世紀中葉。景徳鎮窯系。	K-L16北側1層	
			9	—	—	3.0	器徳器。外面胴部及び内面見込に芭蕉文を施す。素地は淡黄色。呉須の発色は強い。16世紀前半～16世紀中葉。景徳鎮窯系。	J-16表土・攪乱	
	Ⅲ	底部	10	—	—	5.8	底部片。外面高台部に團縁、見込に玉取蓮?を施す。全体的に熱を受けている。素地は白色。16世紀後半～17世紀初期。景徳鎮窯系。	不明	
			11	—	—	8.8	底部片。費付の外側・内側ともに面取されている。文様は見込に獅子文及び高台外面に團縁が施されている。素地は白色。呉須の発色は良い。16世紀。景徳鎮窯系。	不明	
			12	—	—	7.9	底部片。高台は面取されている。外面高台部に團縁、見込に「恋在昔中」銘。呉須の発色は弱い。18世紀。福屋系。	不明	
			13	—	—	7.4	底部片。見込に白鷺文を施す。素地は灰白色。外面高台まで施釉し、外底は無釉。釉は白色。外底へつらによる切り取り跡がある。また、費付に砂が付着。16世紀末～17世紀前半。漳州窯系。	L-20表土・攪乱	

注() : 測定、[] : 測定不可、[+] : 接合の意

第8表 染付観察一覧

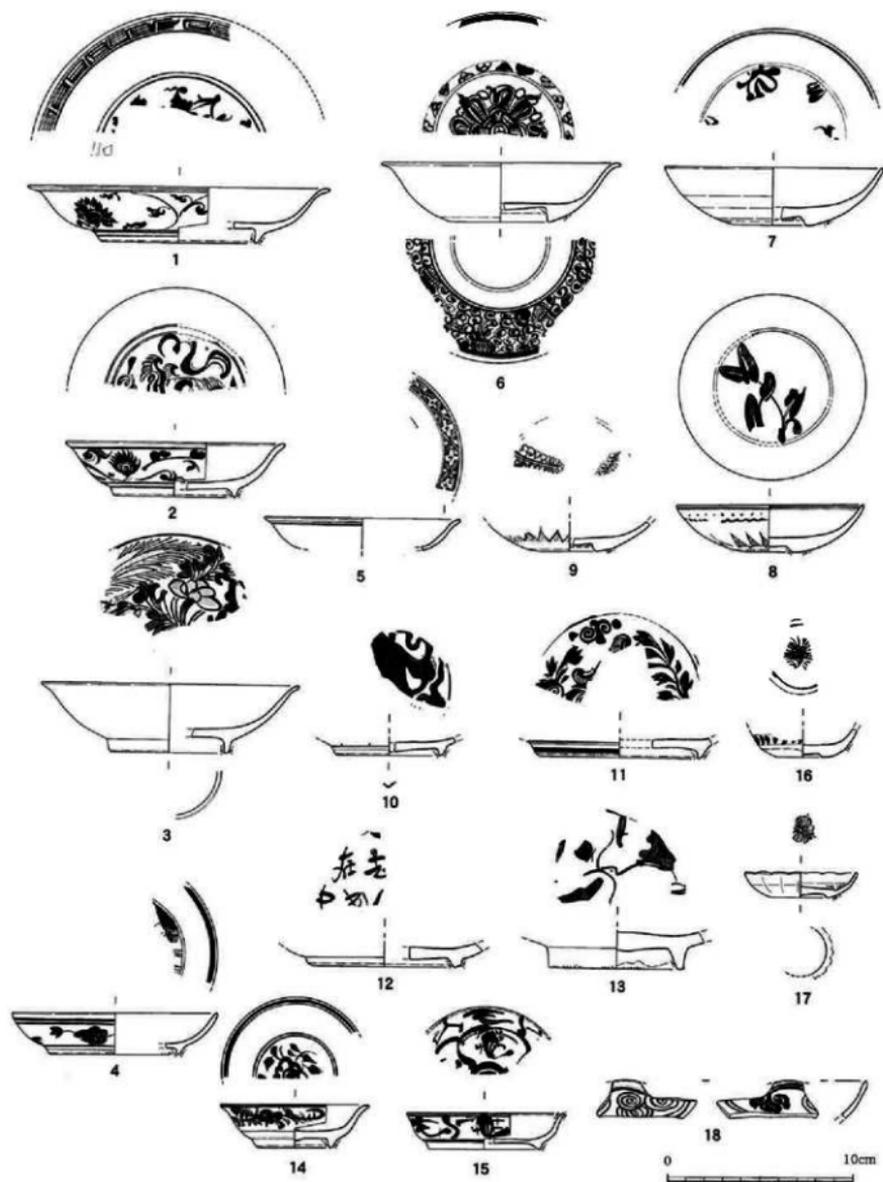
単位:cm

図番号	器種・分類	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第25回・図版14	Ⅲ/I-a	口一底	8.1	2.4	4	口縁部外面及び胴部に團縁、胴部に草文、内面口縁部に團縁、見込に團縁及び草花文を施す。器付は内側に傾斜し、内外面ともに面取されている。素地は白色。呉須の発色は良い。16世紀。景徳鎮窯系。	不明
			8.5	2.0	6.0	器形成形である。内外面ともに「仙芝祝寿」文を施す。素地は白色。口縁及び外底は無縁。18世紀。徳化窯系。	F-21素土・攪乱
	Ⅲ/II-b	口一底	—	—	2.0	器付既施。外面胴部に略された落存文、見込に團縁及び密芝文を施す。外底は無縁。素地は灰白色。呉須は思むむ。16世紀-17世紀?。景徳鎮窯系。	H-26南側2層・L-27表上・攪乱
			6.1	1.4	2.8	口縁部が輪花状を呈し、善徳底。外面は陰刻花文を施し、底部にその施文が輪として残っている。見込は輪を再刻し、中心に十字花文を配する。素地は白色。呉須の発色は良い。16世紀。景徳鎮窯系。	J-27南側3層
	18	Ⅲ	口縁部	—	—	—	ひねり変形器。内外面ともにラマ式落存文を施す。外面の落存文内は渦巻で表現し、内側の落存文内は宝珠文?を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。胎を受けている。16世紀後半-17世紀初頭。景徳鎮窯系。
第26回・図版15	鉢	底部	—	—	7.6	内外面ともに文様はあるが彫縁以外は不明。素地は白色。呉須の発色はやや強い。器付は無縁。全体的に細かい貫入がある。17世紀。漳州窯系?。	M-21瓦溜まりC
			—	—	12.8	底部片。外面胴部に團縁、見込に團縁及び渦文?を施す。素地は淡黄色。呉須の発色は強い。高台輪の輪が削げている。全体的に細かい貫入がある。16世紀末-17世紀前半。漳州窯系。	表土・攪乱
			—	—	—	見込は蛇の目に輪を削いでいる。外面胴縁及び底部に印花文を施し、内面は見込に團縁及び梵刻文を施す。素地は淡黄色。呉須の発色は強い。全体的に細かい貫入がある。17世紀後半-18世紀。福建窯。	J-19ビット3
			—	—	5.4	底部片。高台は外側へ傾斜して形成されている。外面胴部に團縁、蛇の目輪刻ぎの見込に團縁及び不明な文様を施す。素地は淡黄色。呉須の発色は強い。全体的に細かい貫入がある。17世紀。福建窯。	M-21瓦溜まりC
			—	—	15	底部片。外面胴縁及び高台に團縁、見込に工取彫文が施されている。素地は白色。呉須の発色は良い。全体に細かい貫入がある。15世紀中葉-15世紀末。景徳鎮窯系。	J-15北側4層
6	小碗	口一底	8.2	4.5	3.7	建群の小碗。外面口縁部、高台腹及び高台に團縁、胴部に草文文を施し、内面口縁部及び見込周辺に團縁、見込に蓮文を施す。呉須の発色は良い。15世紀後半-16世紀前半。景徳鎮窯系。	M-28南側2層・H-22方形鉢込み遺構
7	杯	—	8.2	—	—	胴部中央に様のある鬚髯杯。外面口縁部に團縁、様より上部に輪刻文?、下部に如意頭髯文を施す。また、如意頭髯文の空白を埋めるように赤色に施文された跡がある。15世紀後半-16世紀前半。景徳鎮窯系。	H-23溝状遺構
8	小碗	口縁部	7.8	—	—	内面口縁から外面口縁部にかけて渦輪、内外面口縁部に團縁を配する。素地は白色。呉須の発色は強い。16世紀。景徳鎮窯系。	L-M-18表上・攪乱
7.3			—	—	外面口縁部に團縁、胴上部にチベット文字、團縁、松竹梅文?を施す。素地は淡黄色。呉須はやや思むむ。15世紀後半-16世紀前半。景徳鎮窯系。	L-K-19石列D・F-20ビット17	
10	胴部	—	—	—	外面胴部に如意頭髯文及び團縁、内面胴部に團縁を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。15世紀後半-16世紀前半。景徳鎮窯系。	J-18北側1層	
11	小杯	口一底	4.8	3.2	2.2	高台は内外面ともに面取されている。見込に不明な文様が施されている。器付外面から外底は無縁。素地は白色。呉須の発色は良い。15世紀後半-16世紀前半。景徳鎮窯系。	K-27表上・攪乱
12	高足杯	脚部	—	—	3.6	外面に團縁を配している。外底の底面厚まで施輪され、内面は無縁。素地は白色。呉須の発色は強い。輪中に細かい気泡がある。16世紀。景徳鎮窯系。	J-21表土・攪乱
13	瓶	胴部	—	—	—	肩の強る瓶の胴部。肩部に草文、花手と胴部の間に團縁、世手の形状に沿うように呉須より文様が配されている。内面はガラス質が凝成の際に部付、自然熱となっている。素地は灰白色。呉須の発色は良い。16世紀。景徳鎮窯系。	J-25南側2層
—			—	—	瓶胴部。ラマ式落存文内文の施文が施されている。素地は淡黄色。呉須の発色はやや弱く、少し赤む。ベトナム。	K-L-17北側1層	
—			—	—	瓶胴部。團縁で区画を行い、それぞれ花唐草文を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。内面にも施輪され、内外面ともに細かい貫入がある。15世紀。景徳鎮窯系。	J-26南側2層	
16	瓶	胴部	—	—	—	瓶胴部。團縁で区画し、その中に人物文を配す。内面にも施輪され、内外面ともに貫入がある。素地は白色。呉須はやや薄む。15世紀-16世紀初頭。景徳鎮窯系。	G-23石列A
—			—	—	区画された中に波濤文を描く。呉須の発色は良いが胎味が強い。16世紀-17世紀初頭。景徳鎮窯系。	K-26壁	
18	瓶	底部	—	—	6.8	外面胴部を團縁で区切り、草花文を施す部分と如意頭髯文に分けている。器付は内外面ともに面取されている。内面にも施輪。素地は白色。呉須の発色は良い。16世紀。景徳鎮窯系。	J-25南側3層
—			—	—	瓶のくびれの部分。くびれの部分に團縁、その上下に唐草文を施す。素地は白色。呉須の発色は良い。内面にも施輪される。外面に気泡がある。16世紀-17世紀初頭。景徳鎮窯系。	L-20瓦溜まりC	
—			—	—	把手外面に草花文を施し、上部の輪に呉須を帯らす。素地は白色。呉須の発色は良い。輪は若干緑味を呈する。15世紀末-16世紀。景徳鎮窯系。	H-22トレンチ	
21	蘭華	底部	—	—	—	内面に唐草文?を配し、外面にも均付する。底面の様子の輪を削いでいる。素地は白色。呉須は赤む。18世紀末-19世紀中葉。景徳鎮窯系。	F-22壁

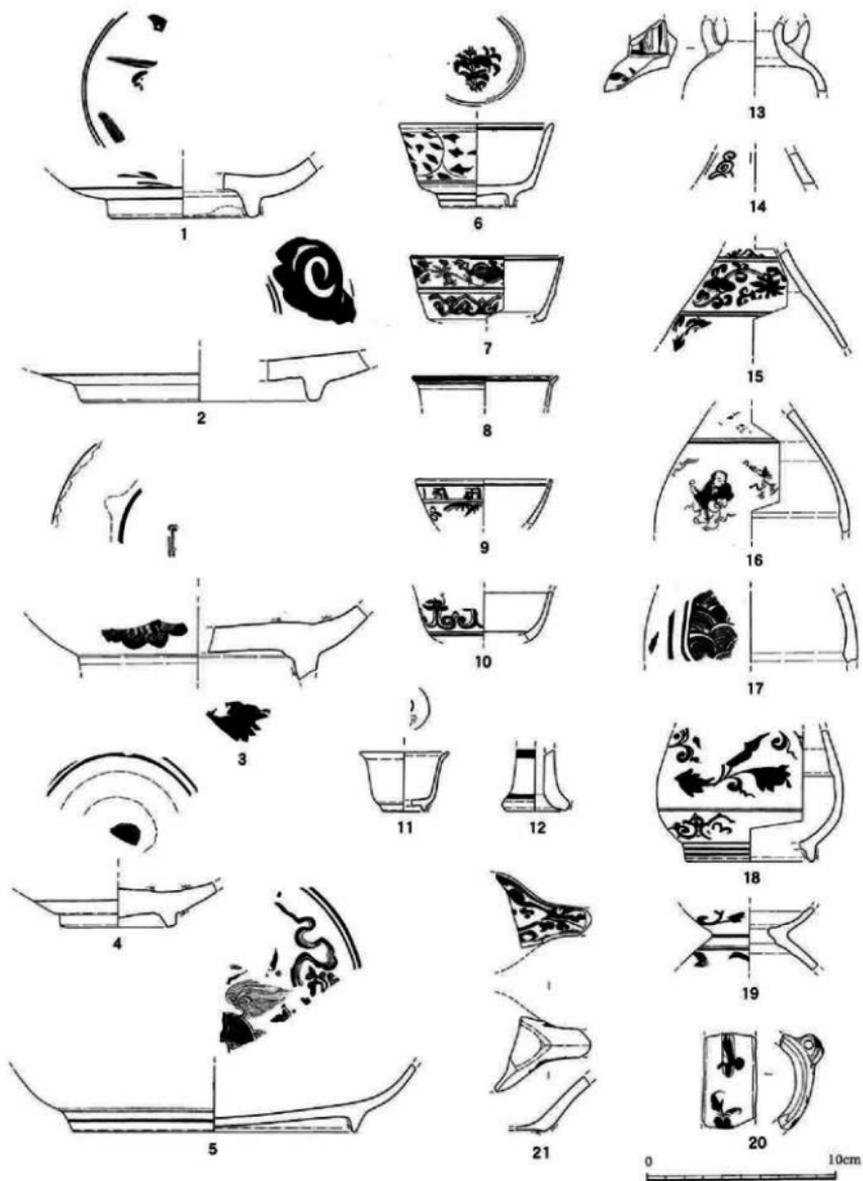
注 (): 推定、[-]: 測定不可、[*]: 接合の意。



第24图 染付(1)



第25图 染付(2)



第26圖 染付(3)

第4節 鉄釉染付

総計12点得られた。外面に鉄釉、内面に青白色の透明釉を施したものをここにまとめた。小破片の資料が多いが、残存率の高い資料を優先に図化した。ここでは2点図化した。何れも小碗で第27図1、2に示したものである。

1は口縁部から底部まで全形を窺うことができる薄手の外反碗である。釉は髹付を除いて均一に薄く施され、内底面に具須による山水文と思われる文様が見られる。外底面にも文様を窺うことができるが、残存状況が不良なため全体の構成は不明である。内面口縁下部と内面腹部に二条一組の圈線が見られる。

2は薄手の小碗底部である。1と比べて高台が高く、高台径からやや1より大振りになるものと思われる。釉は髹付から内面高台下部を除いて均一に薄く施され、内底面に具須による山水文が見られる。外底面中央には印款が見られる。

第5節 瑠璃釉・瑠璃釉染付

瑠璃釉は総計51点、瑠璃釉染付は総計3点得られた。小破片資料が多いが、残存率の高い資料を優先に図化した。ここでは瑠璃釉8点、瑠璃釉染付3点図化した。器種は瑠璃釉に関しては壺、瓶、瑠璃釉染付に関しては碗、瓶が見られた。前回の報告²⁾と比べて小杯、鉢が見られない点で若干、様相を異にする。

<註>

註1. 「天界寺跡(1)―首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―」[沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書] 第2集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2001.3

第6節 翡翠釉

総計20点得られた。小破片資料が多いが、残存率の高い資料、並びに特徴的な資料を3点、図化した。器種は皿、小皿のみで口縁部は「く」の字状に外反し、中には輪花状になるものも見られた。いずれも白化粧を施した後に外面底部近くはライトブルー、外面胴部から内底面にかけては青緑色の釉を薄く施す。

第10表 鉄釉染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉出土状況

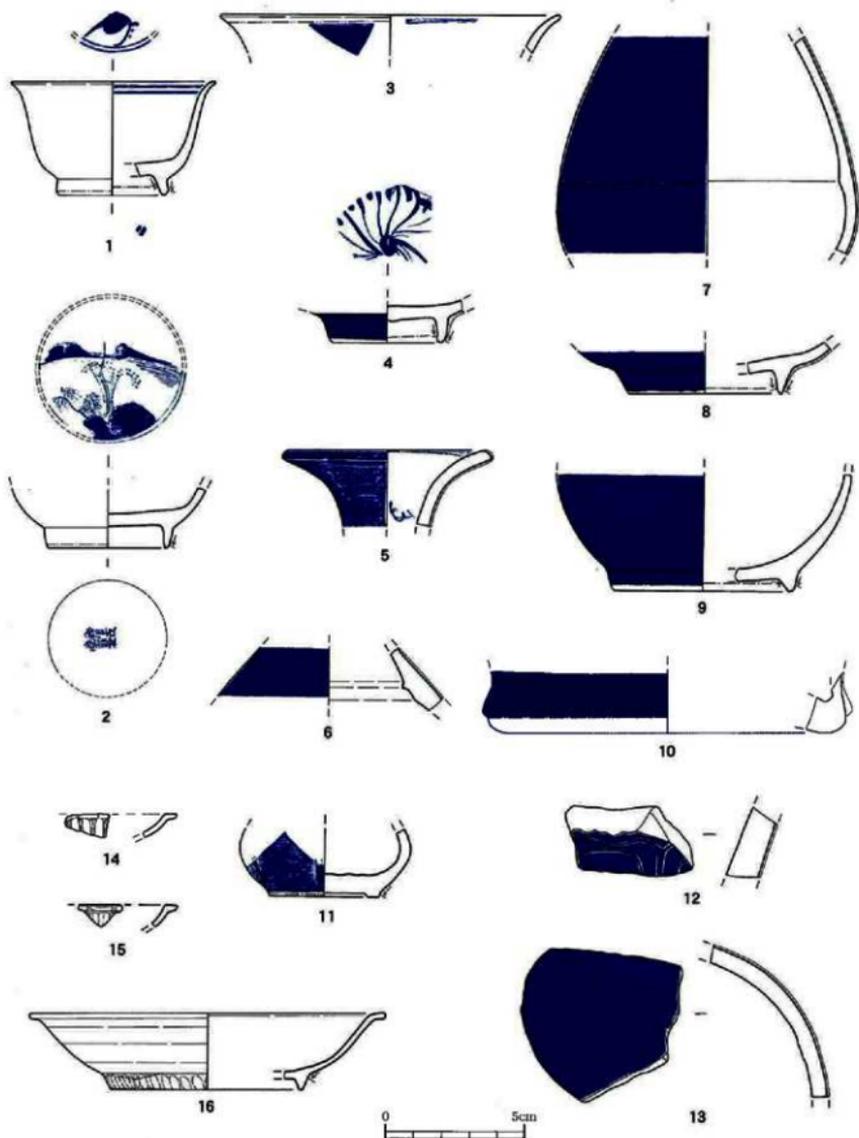
種類・器種	出土地	表土・攪乱	破	トレンチ	南園				北園		地山取上	方形掘込み遺構	コイナル敷B	石列D	真溜まりC	ピット	遺構	不明	合計	
					1層	2層	3層	4層	3層	4層										
鉄釉染付	碗	口一底	1																	1
		口縁部	2	1											1					4
		胴部	2	1																5
		底部	2		1															2
	小計	6	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	12
瑠璃釉染付	碗	口縁部	1																	1
		底部	1																	1
		口縁部	1																	1
		小計	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
瑠璃釉	碗	口縁部	2																	3
		底部	1																	1
		口一底	1																	1
	小杯	口縁部	1																	1
		底部	2			1														3
	瓶	口縁部	2																	2
		胴部	5		1	4	1	4	1	1	1			1	1	1				3
		底部	1			1	1	1												6
		壺			1									1						2
	不明	口縁部				1														1
胴部							2												2	
底部		3														1	1		7	
	小計	15	0	1	7	5	7	1	2	1	1	0	1	1	1	1	1	1	6	51
翡翠釉	皿	口一底																		1
		底部																		1
	小皿	口縁部	1			2	1		3		1									4
		底部				1		1					1							1
	小計	1	0	0	3	1	1	3	0	1	2	0	0	0	1	0	1	0	1	20

第11表 鉄釉染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉観察一覧

単位：cm

図番号	種類	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第27図・ 図版16	鉄釉 染付	碗	口～底	7.4	4.15	3.8	外反口縁碗で高台は低く、畳付は面取りされている。内面口縁部には2条の隆線、内底面には山水文か、外底面には僅かに間線が見られる。外面は黒褐色、内面は青白色の釉が畳付を除いて内外面に薄く施される。素地は白色微粒子。	L-26 表土・攪乱
			底部	—	—	4.3	高台は内側にすばみ気味につくり、畳付は丸味を有する。外底面には尖須で印款文、内底面には山水文が描かれる。外面は茶褐色、内面は青白色の釉が畳付を除いて内外面に薄く施される。素地は白色で微砂粒で黒色微粒子が僅かに混入する。	表土・攪乱
	瑠璃釉 染付	碗	口縁部	12.4	—	—	外反口縁碗で口唇部は丸味を有する。外面は瑠璃釉を施し、内面は青白色の釉で、内面口縁部に 糸の線が尖須によって描かれている。素地は白色微粒子。	H-26 南側2層
			小碗	底部	—	—	4.0	高台断面は逆三角形で畳付は平坦に仕上げている。外面は瑠璃釉で内面、外底面は青白色の釉が施される。内底面には尖須で花文を描く。素地は薄い青白色の微粒子。
		瓶	口縁部	7.6	—	—	口縁部はラッパ状に開き、口唇部は平坦に仕上げている。外面から内面口縁下部にかけて瑠璃釉、それ以外は青白色の釉が施されている。内面頸部に尖須が見られる。素地は青白色の微粒子。	I-26 南側3層
	瑠璃釉	瓶	胴部	—	—	—	ナゲ肩を呈する。外面は瑠璃釉で内面は青白色の釉が施されている。頸部と胴部の接統痕が明瞭に見られる。素地は灰白色の微粒子、気泡が僅かに見られる。	M-28 表土・攪乱
			胴部	—	—	—	外面は瑠璃釉で内面は青白色の釉が施されている。頸部と胴部の接統痕が明瞭に見られる。素地は灰白色の微粒子、黒色砂粒が僅かに混入する。気泡も見られる。	I-24 南側1層
			底部	—	—	5.6	高台断面は逆三角形で畳付は丸味を有し、胴部は緩やかに立ち上がる。外面は瑠璃釉で内面と外底面は青白色の釉が施されている。高台下部は露胎となる。素地は灰白色の微粒子、黒色砂粒が僅かに混入する。気泡も僅かに見られる。	I-27 南側3層
			底部	—	—	6.6	高台は低く、畳付は丸味を有する。胴部への立ち上がりはやや急である。釉・胎土は第27図7と同様で、気泡が多く見られる。内面に横位の成形痕が明瞭に見られる。	I-25 南側2層
			底部	—	—	13.0	ベタ底で胴部へは直に立ち上がる。釉厚で外面は瑠璃釉となり、外底面と内面は露胎となる。素地は青白色の微粒子で黒色細砂粒が混入する。	L-21 南側1層
			底部	—	—	4.0	高台断面は逆台形で低い。畳付は平坦に仕上げており、胴部への立ち上がりはやや急である。外面は瑠璃釉が施されるが薄く、内面、外底面は露胎となる。素地は灰白色の微粒子で大きい気泡が見られる。	J-15・16 北側4層
	翡翠釉	小皿	胴部	—	—	—	器壁が厚いことから大型の製品と考えられる。外面は瑠璃釉が厚く施され、内面は青白色の釉が施される。素地は青白色の微粒子で黒色砂粒が僅かに混入する。内面に横位の成形痕が明瞭に見られる。	M-21 トレンチ
			胴部	—	—	—	器壁が厚いことから大型の製品と考えられる。外面は瑠璃釉が厚く施され、内面は青白色の釉が施される。素地は青白色の微粒子。内面に横位の成形痕が明瞭に見られる。	K-17・18 コーラル盤B
			口縁部	—	—	—	器壁が薄く、口縁部が「く」の字状に折れる。胴部には剣先が尖る鎖連弁文が見られる。内外面共にムラのある翡翠釉が薄く施される。素地は黄白色でやや粒子が粗い。	不明
	翡翠釉	皿	口縁部	—	—	—	器壁が薄く、口縁部が「く」の字状に折れる。胴部には剣先が丸味を帯びた鎖連弁文が見られる。内外面共にムラのある翡翠釉が薄く施される。素地は黄白色でやや粒子が粗い。	L-26 南側4層
			口～底	12.9	2.8	7.0	器壁が薄く、口縁部が「く」の字状に折れ、高台はすばみ気味に低くつくる。内外面共に翡翠釉が薄く施され、高台部は露胎となる。素地は灰白色の微粒子で黒色の微粒子が僅かに混入する。外面に横位の成形痕が見られる。	L-25 遺構

注「—」：計測不可



第27図 鉄釉染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉

第7節 中国産色絵

中国産色絵は第28図である。確認できた器種は碗、小皿、合子、香炉などがある。詳細は観察表に示した。

第28図1～4は碗である。同図1～3は大きめのサイズ、4は小型のサイズの碗である。5は小皿、6は瓶の口縁部、8は合子の身、9は方扇形の香炉である。いずれも絵付の残りは悪く剥落している。産地は中国南部が占めており、所属年代は18世紀前後である。6、7は景德鎮窯で16世紀と古い時期に属する。

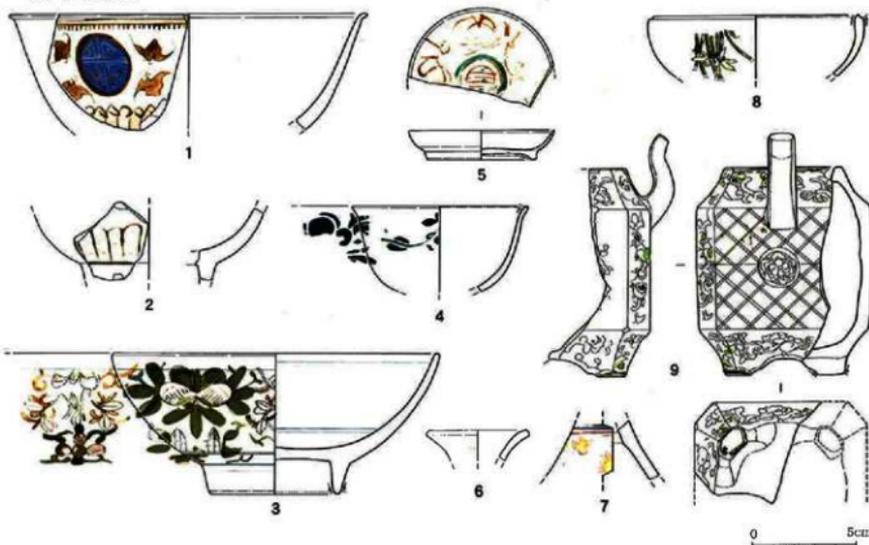
第12表 中国産色絵出土状況

器種	出土地	出土状況										不明	合計			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
碗	口縁部	2														2
	胴部	4		1	1									1		6
	底部	2				1	1									5
小碗	口縁部	6	1													7
	胴部	2	2													4
	底部	1		1												2
小皿	口縁部	1		1								1				3
	底部	1														1
小瓶	口縁部	1						1		1						3
	胴部	1		1												2
瓶	口縁部	2												1		3
	胴部	1														1
合子	口縁部	1														1
	胴部	1														1
不明	口縁部	1		1												2
	胴部	1														1
合計		30	3	2	3	1	1	3	1	1	1	1	1	2	7	56

第13表 中国産色絵観察一覧

図番号	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	産地・年代	単位:cm	
第28図 図版17	1	口縁部	17.6	—	—	口料部が若干外反する。文様は口縁部に閉鎖的波状文、胴部に幅短めと舟字文、底部に線刻差弁状の文様を描く。	福建 18c後半	F-21 表土・概況	
	2	底部	—	—	—	胎土資料。1と同じく底部に線刻差弁状の文様を描く。	福建 18c後半	表土・概況	
	3	口～底	16.0	7.0	6.2	ほぼ光面の資料。直口縁をなす碗で、高台は高い。外面に草花文、内面には口縁、見込みに関鎖を描く。	福建 18～19c前半	J-16 表土・概況	
	4	口縁部	8.6	—	—	丸みを帯びた蓋形で、口縁はわずかに外反する。外面に草花文?を描く。	福建 18c後半～19c前半	G-24 表土・概況	
	5	皿	口～底	7.1	1.5	5.3	小皿。絵付けの測器が著しく文様の展開は不明。外観面は均整。	福建 18c	F-20 表土・概況
	6	瓶	口縁部	5.0	—	—	小型瓶の口縁部。僅かに絵付けが残る。	景德鎮 16c	H-25 南側2層
	7	瓶	胴部	—	—	—	小型瓶の胴部。外面に渦線を描く。絵付は剥落が著しいが、わずかに蓮華単文が見える。	景德鎮 16c	M-23 表土・概況
	8	合子	口縁部	11.8	—	—	蓋受けの部分は剥落。外面に草花?を描く。	中国? 19c?	F-21 表土・概況
	9	香炉	口～底	5.9	10.3	8.4	把手のついた方扇形香炉。四脚をなす。絵付はほとんど剥落するが草花文と思われる。	中国? 18c	表土・概況

注[1]: は計測不可



第28図 中国産色絵

第8節 三彩

総計59点得られた。ほとんどが小破片資料で第29図1～14に特徴的なものを示した。白化粧の上に緑・黄釉が施され、一部を除き内面は露胎である。素地は細かく黒色の微粒子が混入するものも見られる。器種は蓋、把手、瓶、壺、水滴、水注、盤、陶枕が見られた。

図8～12、14は水注若しくは水滴の破片で図8、10は器表面の文様から鳥形水注である可能性があり、図9は琴高仙人形若しくは魚形、図14は人形水注である。特に人形水注では腹の部分に動物と波状文と思われる文様のある腹巻様(武具)が見られる。阿波根古島遺跡出土の人形水注もこの様な特徴を持っており、図14と類似する資料であるといえる。これ以外にも仲間村跡で人形水注の出土が報告されている。人形水注以外の出土例としては三彩が首里城跡、南山城跡、天界寺跡、阿波根古島遺跡など緑釉が阿波根古島遺跡、クニンドー遺跡、津嘉山古島遺跡などで報告され、豊見城村では伝世品として鶴形の水注がほぼ完形品に近い状態で確認されている。また今帰仁城跡では魚形の水注も見られる。これらの形態としては鶴形、鴨形といった鳥形のものが多く見られる。

瓶は図3、4で、図3には継ぎ合わせのためと思われる段を有する。この事から頸部、胴部上半、下半をそれぞれ別個で造り、完成した部品を継ぎ足して成形するといった技法が使われたと推測される。出土例として首里城跡、浦添城跡、今帰仁城跡、天界寺跡、湧田古窯跡、佐慶グスク、クニンドー遺跡が挙げられるが、この内今帰仁城跡出土の瓶は図3と同様の技法により成形されたと思われる。また緑釉瓶が御細工所跡で出土している。

盤は図1である。口縁部を銅線状に仕上げており、内面に牡丹文と思われる文様が線刻されている。首里城跡、喜友名貝塚・喜友名グスク、ヒヤジョー毛遺跡、若松遺跡、慶来慶田城遺跡で出土例が報告されているが、その内首里城跡では図1に類似した資料が出土している。

壺は図2、6、小壺は図7である。図6は器表面に雑ではあるが葉文が陽刻されており、器形から長胴丸壺形と推測される。長胴丸壺形は今帰仁城跡、阿波根古島遺跡、宮平ノロ殿内遺跡、クニンドー遺跡、仲間村跡でも出土しており、特に今帰仁城跡出土のものは図6と類似している。

その他の出土例として壺は天界寺跡、喜友名貝塚・喜友名グスク、小壺は平敷屋トウバル遺跡がそれぞれ挙げられる。

蓋は図12で、蓋甲のみ施釉され宝珠状の振みを持つ。ロクロ成形で蓋の下面は瓮などで切り離した後、指撫で成形しているのが見られる。蓋の出土例は糸数城跡、天界寺跡、クニンドー遺跡、山城古島遺跡で報告されているが、クニンドー遺跡出土の蓋は図12と似たような特徴を持つ。

把手は図11であるが、小破片であるため全体の形を推測するのは困難である。他の出土例として首里城跡、湧田古窯跡、佐慶グスクが挙げられる。

これらの他に陶枕(図13)が出土しているが、明代の三彩で陶枕の形式は非常に珍しい。

<参考文献>

- 『首里城跡―普賢用道路地区発掘調査報告書―』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第1集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 『首里城跡―御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告―』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第3集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 『首里城跡―下之御庭跡・物置跡・瑞雲門跡・深淵門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書―』『沖縄県立埋蔵文化財調査報告書』第133集 沖縄県教育委員会 1998
- 『天界寺跡(1)』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
- 『阿波根古島遺跡』『沖縄県立埋蔵文化財調査報告書』第96集 沖縄県教育委員会 1990年
- 『平敷屋トウバル遺跡』『沖縄県立埋蔵文化財調査報告書』第125集 沖縄県教育委員会 1996
- 『喜友名貝塚・喜友名グスク』『沖縄県立埋蔵文化財調査報告書』第134集 沖縄県教育委員会 1999
- 『湧田古窯跡Ⅱ』『沖縄県立埋蔵文化財調査報告書』第121集 沖縄県教育委員会 1995
- 『湧田古窯跡Ⅳ』『沖縄県立埋蔵文化財調査報告書』第136集 沖縄県教育委員会 1999
- 『慶来慶田城遺跡』『沖縄県教育委員会文化遺産調査報告書』第131集 沖縄県教育委員会 1997
- 『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』『今帰仁村文化財調査報告書』第9集 今帰仁村教育委員会 1983
- 『今帰仁城跡周辺遺跡築園地確認調査報告書』『今帰仁村文化財調査報告書』第12集 今帰仁村教育委員会 1986
- 『浦添城跡発掘調査報告書』『浦添市文化財調査報告書』第9集 浦添市教育委員会 1985
- 『御細工所跡』『那覇市文化財調査報告書』第18 那覇市教育委員会 1991
- 『天界寺跡』『那覇市文化財調査報告書』第43集 那覇市教育委員会 2000

「銘苜原遺跡」『那覇市文化財調査報告書』巻35集 那覇市教育委員会 1997

「ヒヤジャー毛遺跡」『那覇市文化財調査報告書』第26集 那覇市教育委員会 1994

「内庭グスク・山城古馬遺跡」『糸満市文化財調査報告書』第8集 糸満市教育委員会 1994

「糸敷城跡Ⅰ」『玉城村文化財調査報告書』第1集 玉城村教育委員会 1991

「クニンドー遺跡」『南風原町文化財調査報告書』第2集 南風原町教育委員会 1996

「南風原町の遺跡」『南風原町文化財調査報告書』第1集 南風原町教育委員会 1993

「豊見城村内海認の明代ニ彩器型本注」『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会 1990

「インドネシア・スラウェシ島に渡った三彩 交戦機展 本多弘氏コレクションによる」『福岡市美術館 2001

第9節 宜興窯系

4点のみ得られた。素地は茶褐色の微粒子で、白色粒子を含むのも見られる。器表面には泥釉が施され、器肌は滑らかである。いずれも小破片資料で口縁部と底部を各1点得ることができた。第29図15、16に示した。

第10節 産地不明陶器

褐釉陶器4点、泥釉陶器、無釉陶器各1点を産地不明として第29図17～22に掲げた。何れも小破片資料で薄手で文様などは見ることができない。蓋の端部1点、口縁部1点、胴部1点、底部3点を第29図に示した。

第14表 三彩・宜興窯系・産地不明陶器出土状況

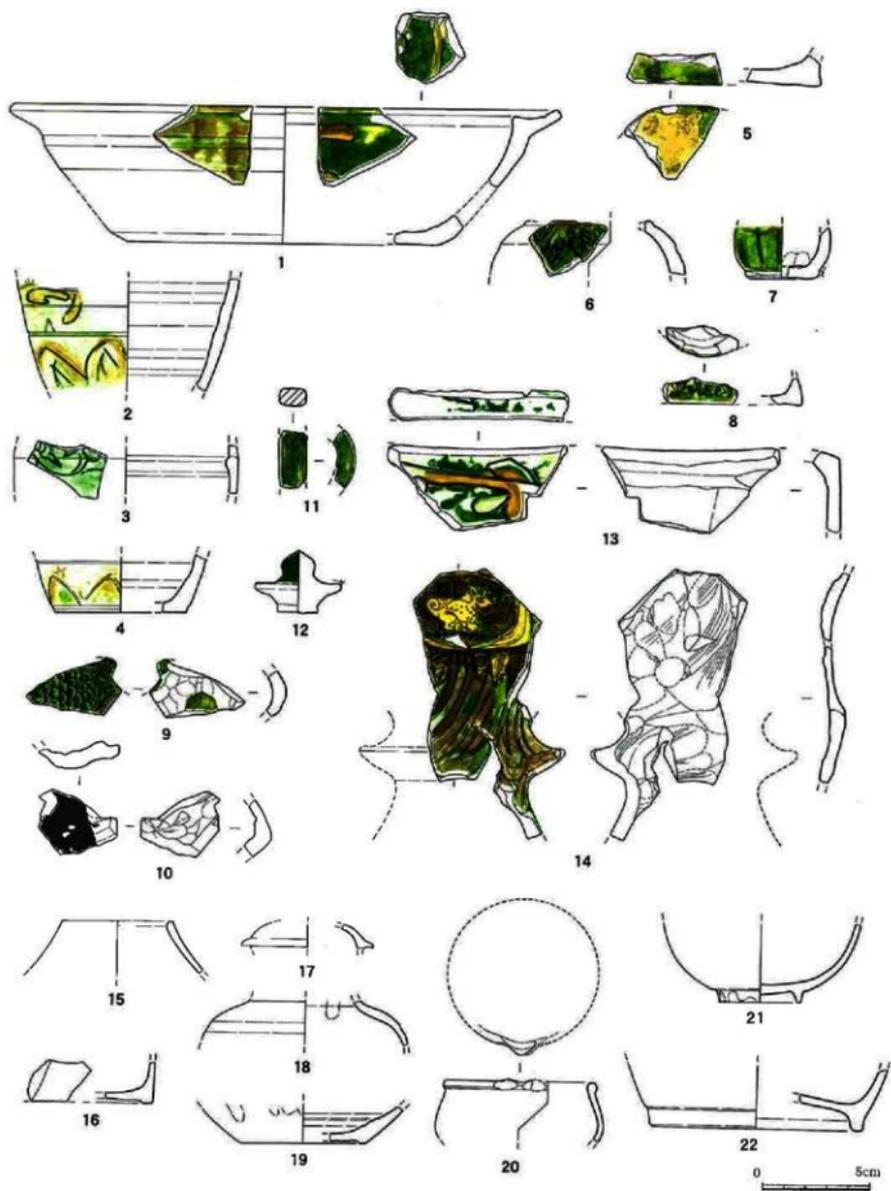
種別・器種	出土地	表土・埋没	状態	西側			北側			崖山直上	コーラル数A	方形指込み遺物	石列D	石列C	溝状遺構C	溝状石列	瓦溜まりC	ピット	不明	合計	
				1層	2層	3層	4層	1層	3層												4層
三彩	甌	口縁部	1		1	1	1			1											5
		胴部			1	1	3														5
	瓶	胴部	1				2								1						4
		底部					2														2
	壺	口縁部																	1		1
	小壺	底部				1															1
	蓋	口一底			1																1
	水注	把手		1																	1
		蓋			1		1	1													1
	人形水注	胴部	4			4	2														1
		水筒																			11
	甌	胴部								1											1
		底																			1
不明	胴部	4		1	2		1	1		1				1			1	1	5	18	
	底部				2	1														3	
小計		11	1	6	5	17	2	1	1	2	1	0	0	0	1	1	0	1	1	8	
宜興窯系	甌	口縁部	1																		1
		胴部																			1
	底												1							1	
小計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	
産地不明陶器	甌	底	1																		1
	小鉢	口縁部									1										1
	小壺	胴部								1											1
	壺or蓋	胴部									1						1				1
		底															1				1
	実物	底	1																		1
	茶器の蓋	底																		1	
	不明	口縁部							1												1
不明	胴部	1										2								4	
小計		3	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	2	0	0	0	2	0	0	7	

第15表 三彩・宜興窯系・産地不明陶器観察一覧

単位: cm

図番号	種類	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地			
第29図・ 図版18	三彩		1	壺	口~底	26.0	(6.5)	(14.6)	素地は肌色、白化粧はなし。内面に牡丹文と思われる文様が施刻され、文様部分に黄釉、無文部分に緑釉をそれぞれ施す。外面は僅かに緑釉が残る。口縁部は口折させた後、罽毬状に仕上げている。	K-17-18 表土・攪乱	
			2	壺?	胴部	-	-	-	素地は白色、ロクロ成形によって仕上げられ、外面に白化粧を施す。器表面に牡丹文と思われる文様と菊弁文が施刻され、黄釉が僅かに残る。	L-21 表土・攪乱	
			3	瓶	胴部	-	-	-	素地は白色、外面に白化粧を施す。釉は剥落している。継ぎ合わせの痕跡である段を内面に有する。器表面に唐草文様が施刻されている。	N-24 南側3層	
			4	瓶?	底部	-	-	6.1	素地は薄い白色、ロクロ成形によって仕上げられ、外面に白化粧を施す。釉は殆どが剥落しているもの、黄釉が僅かに残る。器表面に菊弁文と思われる文様が施刻されている。	L-24 南側3層	
			5	不明	底部	-	-	-	素地は薄い黄色、白化粧はなし。緑釉、黄釉が僅かに残り、底面にも僅かに緑釉が付着している。多少の凹凸が見られ、内面は指で押さえて成形したと思われる。	M-28 南側2層	
			6	壺	口縁部	(5.8)	-	-	-	長胴丸壺形と推測される。素地は肌色、外面は型抜き成形、口縁部に細な彫文を有する。白化粧をせずに黄釉、緑釉を施したと思われる。	不明
			7	小壺	底部	-	-	3.4	瓜形の小壺と思われる素地は薄い黄色、ナデ成形。底と器蓋の接合面が確認できる。外面に白化粧を施し、緑釉が施されていたと思われる。器表面に4条の線が縦に施刻されている。	L-27 南側3層	
			8	水注	底部	-	-	-	-	素地はにぶい赤色、型抜き成形と思われる。外面に白化粧を施し、その上から緑釉と黄釉を施す。器表面の文様から鳥型水注の可能性もある。	K-28 表土・攪乱
			9	水瀝	胴部	-	-	-	-	素地は薄い黄色、化粧面はなく、外面のみに緑釉を施す。型抜き成形で琴高仙入形が魚形と思われる。	不明
			10	水注	胴部	-	-	-	-	鳥型水注か、型抜き成形、素地は肌色で、白化粧はなく、外面にのみ緑釉が施されている。器表面に鳥の羽根と思われる文様が施されている。	J-25 南側2層
			把手		-	-	-	-	素地は桃褐色、白化粧はなし。上面は施釉されていた緑釉が剥色したものであると思われる。	I-20 駐南側	
			12	蓋	-	2.85	-	-	-	素地は薄い黄色、白化粧はなし。ロクロ成形で蓋の下面は際定で作り出し、指で押して成形している。蓋中にのみ緑釉が施されている。宝珠状の指を持つ。	H-28 南側1層
13	陶枕	-	-	-	-	-	素地は赤褐色、ナデ成形で内面、口唇上面に白化粧を施し、緑釉、黄釉を施す。牡丹文と思われる文様が施刻されている。白色の微粒子が混入されている。明代の三彩では陶枕は珍しい。	K-L-18トレンチ+ G-20北側4層			
14	水注	胴部	-	-	-	-	人形水注。素地は肌色、型抜き成形、白化粧なし。外面のみ施釉されている。主に人の腹部から脚の部分で、腹の部分には動物と流状文と思われる文様のある腹巻様(武具)の帯が確認できる。	K-26 時+ I-27 南側3層			
15	宜興窯系	壺	口縁部	6.4	-	-	-	茶器にかかる壺。口縁部は平皿につくり、外反する。内外面共に泥釉が薄く施される。素地は桃褐色の微粒子。清代のものと思われる。	表土・攪乱		
底部			-	-	-	-	茶器にかかる壺。高台は低く、胴部は直に立ち上がる。外面のみ泥釉が薄く施され、やや粗む。素地は型抜き色の微粒子。清代。	不明			
17	産地不明陶器	蓋	底部	-	-	6.2	-	茶器の蓋の底部と思われる。縁からは欠損し、頂部へは丸味を有しながら移行する。内外共に泥釉が薄く施される。素地は茶褐色の微粒子。清代の陶器と考えられる。	不明		
18			小壺	胴部	-	-	-	壺の胴上部、頸部近くと考えられる。頸部への移行部分が欠損している。外面には薄釉が薄く施され、素地は密で黄褐色のやや粗い粒が混入する。13~15頃か。	J-18 北側4層		
19			壺	底部	-	-	5.8	-	低い高台が見られる。高台のつくりは粗雑で胴部へは急に立ち上がる。内外面は露胎であるが、外面には薄釉の釉垂れが見られる。素地は茶褐色で微粒子、白色粒子が僅かに混入する。	K-L-17-18 溝状行列	
20			小鉢	口縁部	7.0	-	-	-	口縁部は注ぎ口が見られ、断面は長方形形状を呈す。内外面共に薄釉を薄く施す。素地は明茶褐色の微粒子で、赤色のやや粗粒粒子が混入する。	不明	
21			碗	底部	-	-	3.8	-	薄手の碗。高台は低く、底部から胴部にかけては緩やかに立ち上がる。茶褐色の釉を内外面共に薄く施すが、割器が激しく、白色に変色している。豊付のみ露胎。素地は茶褐色の微粒子。	F-20 表土・攪乱	
22			袋物?	底部	-	-	10.0	-	底部から胴部にかけての立ち上がりは急で、高台は低い。袋物と考えられる。全面露胎で、素地は茶褐色でやや粗く、白・黒の微粒子が多く混入する。明~清代か。	表土・攪乱	

注「-」:計測不可、():推定、「+」:接合の点



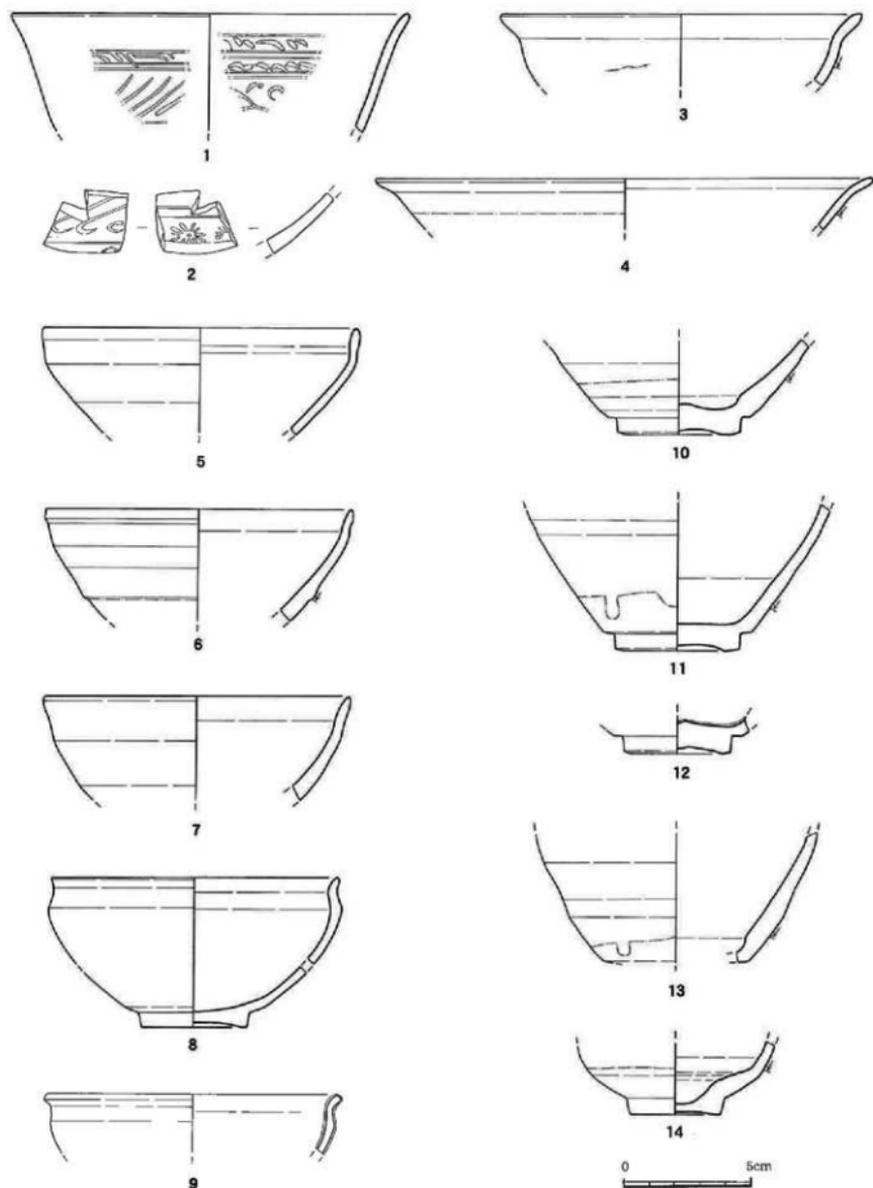
第29圖 三彩・宜興窯系・產地不明陶器

第17表 粉青沙器・泉州窯系磁器・黒釉陶器観察一覧

単位: cm

図番号	種類	器種	部位	口径	器高	感径	観察事項	出土地	
第30図・図版19	粉青沙器	碗	口縁部	15.8	—	—	口縁部は外反し、口唇部は舌状となる。向上象嵌された直線と曲線で文様は構成される。内外面共に青緑色の釉が施されるが、口唇部は一部露胎となる。素地は灰色の微粒子で気泡が弱かに見られる。	不明	
			皿? 胴部	—	—	—	器壁の厚さからやや大振りの皿か。白土象嵌された直線と曲線並びに花文で文様は構成される。内外面共に青緑色の釉が薄く施される。素地は赤灰色の微粒子で気泡が見られる。	H-20 ビット24+茶塚	
	泉州窯系 磁器	皿	口縁部	14.4	—	—	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は舌状となる。オリーブ褐色の釉を薄く施すが、内外面共に剥落が見られる。素地は灰白色の粗粒子で、白・黒・灰褐色の砂粒が混入する。気泡も弱かに見られる。	H-19 岡山直上	
			口縁部	19.8	—	—	口縁部は緩やかに外反し、舌縁状となる。外面にはクロコ直が明瞭に認められ、オリーブ褐色の釉を薄く施す。細かい黒入が内外面共に見られ、素地は灰白色の粗粒子で、白・黒・灰褐色の砂粒が混入する。	G-20 北側3層	
	黒釉陶器	碗	口縁部	—	12.6	—	—	口縁の折り返しは弱い。釉は黒褐色。素地は暗灰色を呈する。産地・時期: 中国13~15世紀	不明
				—	12.2	—	—	口縁の折り返しは弱い。釉は茶褐色。素地は灰白色を呈する。産地・時期: 中国13~15世紀?	I-13 ビット5h
				—	12.2	—	—	口縁の折り返しは弱い。釉は茶褐色。素地は灰白色を呈する。産地・時期: 中国13~15世紀?	G-17 北側1層
			口縁部	11.4	6.0	4.2	口縁の折り返しは強く、盤付まで施される。釉は暗褐色。素地は灰色を呈する。口縁部片と底部片を図上復元した。産地・時期: 中国? 明代?	不明	
			口縁部	11.8	—	—	口縁の折り返し折り返しは強い。釉は変色(暗褐色?)、素地は灰白色を呈する。産地・時期: 中国? 明代?	I-21 表土・攪乱	
			底部	—	—	4.2	高台内の傾りは浅く、高台縁を水平に削る。釉は茶褐色。素地は黄白色を呈する。産地・時期: 中国13~15世紀	L-15 ビット1	
	底部	—	—	4.9	高台内の傾りは浅く高台縁を水平に削る。釉は暗褐色。素地は灰白色(外面は淡暗褐色)を呈する。産地・時期: 中国 明代?	N-24 表土・攪乱			
	底部	—	—	3.5	高台内の傾りは浅く高台縁を水平に削る。釉は黒色。素地は暗灰色を呈する。産地・時期: 中国13~15世紀	K・L-17 上層			
	胴部	—	—	—	釉は淡暗褐色。素地は黄白色を呈する。木土産(瀬戸・美濃系)の可能性がある。産地・時期: 中国が瀬戸・美濃 明代?	J・K-20・21 コーナル器A			
	底部	—	—	3.5	内面は無釉。底面に糸切痕。器種は不明だが、壺と思われる。外面に煤付着。産地・時期: 中国13~15世紀	K-16 ビット19確認あり			

注「—」: 計測不可



第30图 粉青沙器・泉州窯系磁器・黒釉陶器

第19表 褐釉陶器観察一覧

単位: cm

図番号	器種・分類	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地	
第31回・図版20	1	壺Ⅰ型	口縁部	34.1	—	—	Ⅰ類の中でも大型の壺。胴部は7mm前後と薄い。オリブ褐色の釉を内外面に施す。顔色がかった灰褐色の器色に僅小の黒粒と1-2mmの白粒が混入。	不明
				20.3	—	—	口唇部内面に右段に成型し肩部分にはタタキ調整痕と2cm大の砂目が残る。内外面とも黄褐色の釉が掛かる。器色は淡灰色。2mm前後の白、黒粒が混入。	K-16北側1層
	3	壺	胴部	—	—	—	大型壺の胴部で口縁部へ立ち上がる。両面とも黒点を帯びた茶褐色の釉。肩に2cm大の砂目が等間隔で付着する。胎土には細小の黒粒が混ざり。	H-20北側3層・I-27北側4層
				4	—	—	—	最大胴径36.4cmの大壺型。底部にいくにしたがってすぼまる形状。両面とも茶褐色の釉で施され、5cm大の白色磁物を含む。
	5	口縁部	—	—	—	大壺型の口縁部破片で口径の幅は3.7cmと大きい。黄色味がかかった黒色釉が全面に施される。5mm大の白色磁物を含み、器色は灰色を呈する。	N-27表土	
	6	壺Ⅰ型	口縁部	17.5	—	—	Ⅰ類の小ぶりの壺。第31回42と同様口唇部は有段になる。両面ともオリブ黄褐色の釉が掛かる。灰色の素地に2cm前後の白粒を含む。	L-18表上・H-G-13北側3層・L-18溝沢石列
	7	壺	底部	—	—	17.7	Ⅰ類のような口縁部を持つ壺の底部でクロコ痕が明確。上げ底とその中心部は薄くなる。胴部全体にオリブ黄褐色の釉が掛かり、2mm大の砂目と1mm以下の黒粒を含む。蓋胎部分は灰色がかかった灰色を呈する。	M-23南側3層
	8			胴部	—	—	—	大壺型の破片。両面ともオリブ緑色の釉が掛かり、黒粒の混入物が目立つ。内面には円形のタタキ痕が一部に見られる。
	9	壺	底部	—	—	13.8	片下り上げ底になり、立ち上がり部分で約1.5mm幅で解る。淡灰色の器色で内側には灰色がかかった黒褐色の釉がうすまぶ掛かる。	M-N-21・22複乱
	10			—	—	12.0	中型壺の底部と見られる。胴部下まで茶褐色の釉が見られ、白と黒粒の混入物が比較的多く混ざり。器色は黄褐色。	不明
	11	壺	口縁部	19.6	—	—	小型壺。口唇部を折り曲げて頸部をやや歪み気味にし、肩は張るようである。器色は青みのある灰色で両面とも褐色。	G-18北側3層・M-15北側3層
	12	壺	胴部	—	—	—	第31回11と同じ資料と見られるが復元にはいたらなかった。上部には砂目が付着、器表面の割線が目立つ。外面の一部を除いて淡灰色の釉が掛かり、内面は釉だれがある。素地には1-2mmの白粒を含む。	不明
	13			底部	—	—	13.9	第31回11、12と同資料の可能性ある。底部はベタ底状になり厚みがある。白粒を多く含む。内面は割線、外面は胴部下まで淡黄色の釉が掛かる。
第32回・図版21	1	壺Ⅱ型	口縁部	12.8	—	—	白粒を多く含む。内面は割線、外面は胴部下まで淡黄色の釉が掛かる。	M-23南側3層・M-23南側2層
				2	—	—	—	リボン状の耳が付く。胴部はクロコ痕の起伏がましい。茶に近い黄褐色の釉を外面全体に施す。淡黄色の素地に、黒粒が少量混ざり。
	3	壺	胴部	—	—	—	耳を含む大型壺の胴部片。内外面とも、茶褐色の釉が丁寧に施される。1mm程度の黒粒が混入、素地は淡灰色。	I-28南側3層
	4			—	—	—	大型壺の胴部片。円形の支様を沈沈で描き、内面はクロコ痕が明確に残る。樹茶褐色の釉を外面に施す。器色は淡黄色。	不明
	5	壺Ⅱ型	口縁部	16.6	—	—	口縁部下ですぼまり、肩へと移行する。黒に近い茶褐色の釉を口唇内面から外面にかけて施す。灰色の素地に白粒を含む。	K-28南側4層・M-28表上(復乱層)
	6			—	—	—	口唇部を折り曲げて1層を平用に仕上げず。耳には3本の沈痕が入る。口唇部上端は釉はざされ、下部方向へオリブ黄褐色の釉が掛かる。器色は淡灰色。	L-25溝溝
	7	壺Ⅱ型	口縁部	17.7	—	—	平用に仕上げた口唇から胴部へ開き気味に成型。内面は釉はざされ、外面は顔色がかった黄褐色の釉を施す。器色は黄褐色で白、黒粒が混ざり。	F-18北側4層
	8			—	—	—	平用に成型した口唇部はやや傾斜し、緩やかに胴部に至る。内外面とも顔色がかった黄褐色の釉を施す。淡灰色の素地に黒粒が混ざり。	K-L-17-18溝沢石列
	9	壺Ⅱ型	口縁部	13.0	—	—	口唇部を折り曲げて丸く肥厚させる。胴部はやや膨らんで肩部へと移行する。灰色の素地に白粒が混ざり。	I-26南側3層
	10			—	—	—	Ⅱ類のなかでも、回りサイズが小さい。胎土には黒、白粒が混ざり、淡灰色を呈する。外面には淡茶褐色の釉が掛かる。	不明
	11	壺Ⅱ型	口縁部	11.2	—	—	口唇部を折り曲げ、擬似肥厚させる。頸部から肩へゆるいカーブを描く。内側に調整痕。内外面とも薄く黄褐色の釉を掛け、赤灰色の素地に、白、赤粒が混ざり。	M-21瓦溜まりC
第33回・図版22	1	壺Ⅱ型	口縁部	9.2	—	—	すぼまった頸部から口唇部へ開き投を作る。蓋受けを意図したものか。内面は調整が1層でなく、積み残りが残る。茶褐色の釉が掛かり、白、赤粒が混ざり。	M-21瓦溜まりC
				2	—	—	—	第33回1同様、有肩のL形。両面とも暗茶褐色の釉が掛かり、黒粒が混ざり生じている。素地は灰色。硬質に印象を受ける。白、黒粒の混入が見られる。
	3	壺Ⅱ型	口縁部	9.1	—	—	長筒型で口唇部を丸く肥厚させる。外面には茶褐色の釉、内側に釉だれがある。蓋胎部分は黄褐色、赤と白粒が混ざり。	L-19瓦溜まり
	4			—	—	—	口縁から胴部まで図1復元できた資料。小ぶりが器蓋は厚い。クロコ痕が内外とも明確。黄色味がかかった黒色釉が掛かり、素地は灰色を呈する。	G-21北側4層+H-23方形跡込み遺構
	5	壺Ⅱ型	底部	—	—	11.4	小振りの壺の底部。立ち上がりからやや膨らんで成型される。淡灰色の素地に黒、白粒が混ざり。	J-16ピット23
	6			—	—	10.2	胎土は混入物が多く、粗い印象を受ける。器色は黄褐色、白、赤粒が混ざり。	M-21瓦溜まりC
	7	壺Ⅱ型	底部	—	—	7.2	第33回6と同様に胎土が粗い。底部は10.8mmと特に厚い。茶褐色の釉が内側内底まで掛かる。白、赤粒が混ざり。	不明
	8			—	—	10.0	器蓋はクロコ痕が残る。胴部下まで茶褐色の釉が掛かる。白、赤、黒粒が混入。口唇部を直線状にし、底部はくびれる。肩には8水確認できる。L1唇部に茶褐色の釉を均すように塗る、その両側面は釉はざされる。素地は灰色がかかった茶褐色。白粒が混ざり。	北側3層
9	壺Ⅱ型	口縁部	24.6	12.3	9.6	第33回9と同様に胎土が粗い。一回り小さいサイズのものである。種目は8-9水確認できる。素地は明茶褐色、白と黒粒の混入が見られる。	不明	
10			—	—	—	第33回9と同様に胎土が粗い。一回り小さいサイズのものである。種目は8-9水確認できる。素地は明茶褐色、白と黒粒の混入が見られる。	J・J-13地山直上	

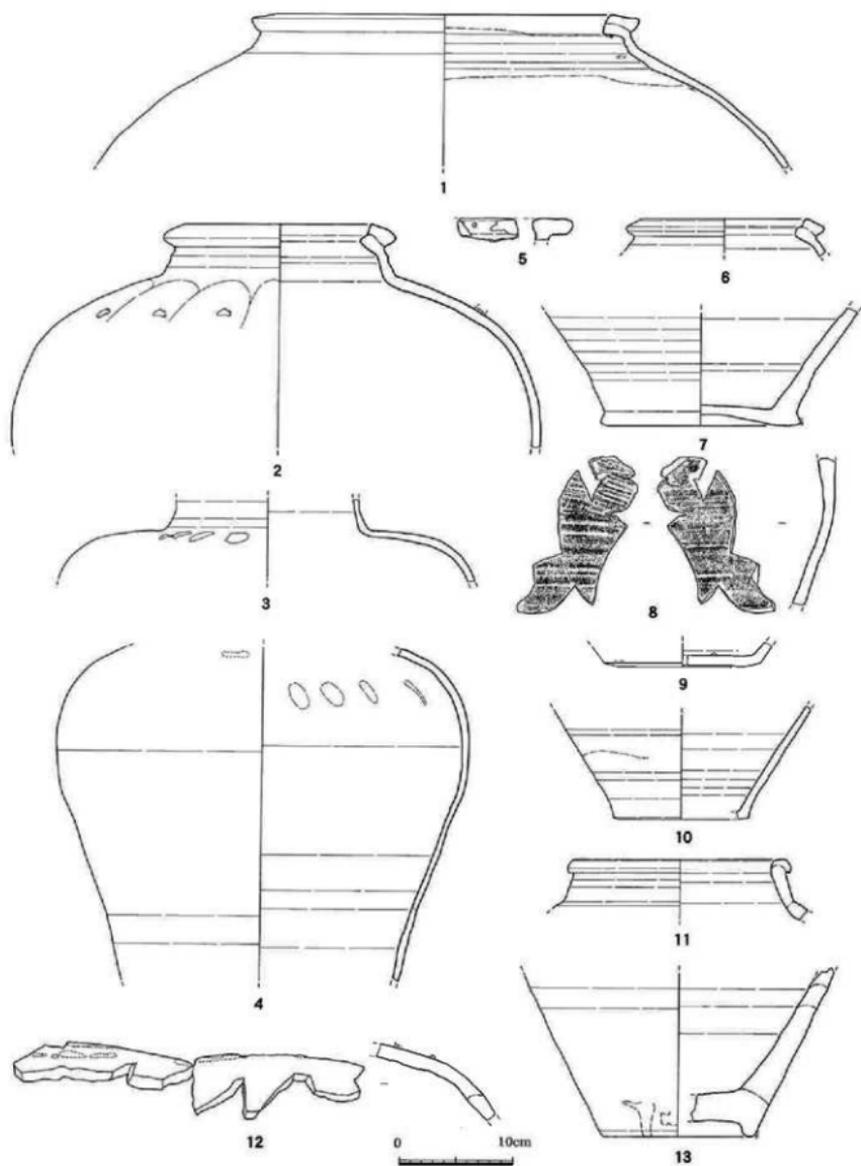
注「-」:計測不可、「+」:接合の意

第19表 褐釉陶器観察一覧

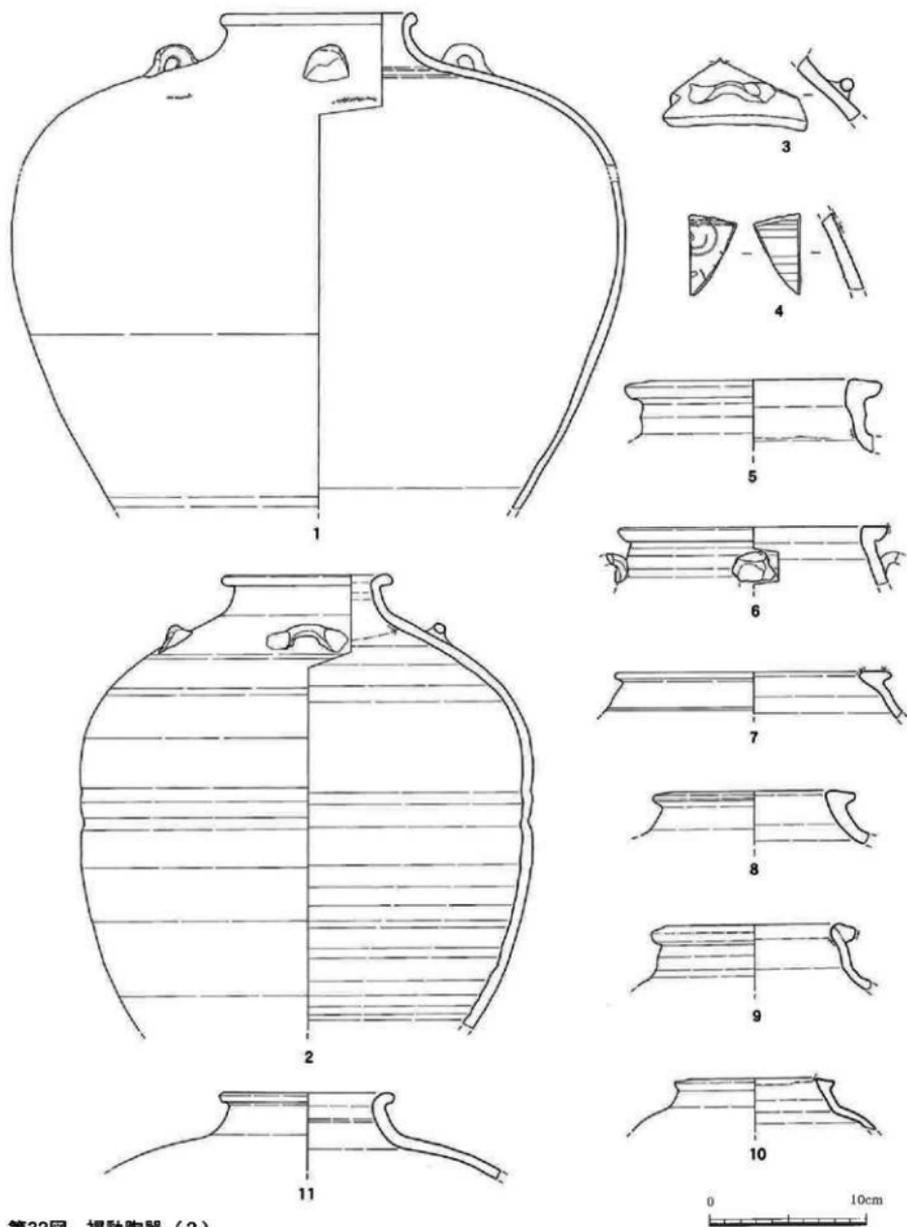
単位: cm

図番号	器種・分類	部位	L径	器高	底径	観察事項	出土地
第33回・同敷22	11	底部	—	—	10.0	胎土が粗いためか、濡り日が明確に見えない。褐色色の素地に混入物も多い。	G-18北側4層
		口縁部	—	—	—	口縁部下に、斜め方向に濡り日が入る。素地は暗茶褐色、白粒の混ざりが多い。	不明
	12	口縁部	—	—	—	前述の4点と質感が異なる。樽目が交差し内側に茶褐色の釉が掛かる。素地は暗褐色で、2mmほどの白、赤粒を含む。	J-K18横丸
		底部	—	—	14.0	口縁部を舌状に厚く成型するが、器壁は5mmと薄す。暗茶褐色の釉を両面に掛ける。口縁部には横みかか輪が一部はがれている。素地には黒、白粒が混入。	J-28南側3層
	14	鉢目類	口縁部	29.6	—	口縁部が内側へ張り出し、その上端と胴部に交差して文様を施す。素地には1-3mmの白粒が多い。内側に肉を挿すような顕微鏡。オリブ黄褐色の釉が掛かる。	K-23南側3層
	15	鉢Ⅱ類	口縁部	—	—	内側に粘土を追加して内湾気味に成形。口縁部には波状の文様を貼りつける。1mm以下の白粒が混ざる。	註
	口縁部		31.6	—	—	文様等を口縁部に貼りつけ、口唇部も波うつ。内側に意図的なものか沈線が走る。外面に茶褐色の釉が掛かり、内面には釉だれが見られる。	不明
	17	鉢Ⅰ類	口縁部	—	—	ほぼ直行きの口縁部で、口唇部は有段に異なる。胴部はつなぎりが明確。赤味がかった茶褐色の釉が内側でほだらになっている。白、黒粒が混ざる。	L21表土・攪乱
	18	鉢Ⅲ類	口縁部	—	—	小ぶりの鉢。口唇部を逆L字に成形し、口唇部には波状文。淡黄色の釉が掛かり、胴部の一部は緑色の釉が施されており、絵付けかと思われる。	J-28表土・攪乱
	口縁部		31.2	—	—	口唇部を逆L字に成形し、口唇部には波状文。淡黄色の釉が掛かり、胴部の一部は緑色の釉が施されており、絵付けかと思われる。	J-28表土・攪乱
19	浅鉢	口縁部	—	—	内外面とも磨蝕。素地は茶褐色で白粒などの混入物が見られる。ボール状の尻底が想定される。	J-25南側2層	
20	浅鉢	口縁部	20.8	—	内外面とも磨蝕。素地は茶褐色で白粒などの混入物が見られる。ボール状の尻底が想定される。	J-25南側2層	
第34回・同敷23	小壺	1	口縁部	10.4	—	口唇部を折り曲げて丸く成形。器壁より幅広い小壺。内側から胴部中央付近まで茶褐色の釉を掛ける。口唇部内側から外面全体に黒みを帯びた釉を掛ける。内面は赤味が強い。素地は灰色、1-2mmの白粒を含む。	H-25・26南側1層+ L18北側4層
		2	口縁部	10	—	折り曲げた口唇部が舌状に折る。口唇部内側から外面全体に黒みを帯びた釉を掛ける。内面は赤味が強い。素地は灰色、1-2mmの白粒を含む。	不明
		3	口縁部	7.6	—	口唇部は有段に異なる。胴部はつなぎりが明確。赤味がかった茶褐色の釉が内側でほだらになっている。白、黒粒が混ざる。	I-28南側3層
		4	口縁部	10.6	—	口唇部を逆L字に成形し、口唇部には波状文。淡黄色の釉が掛かり、胴部の一部は緑色の釉が施されており、絵付けかと思われる。	H-20ビット20
		5	口縁部	3.9	—	口唇部を平用に成形。灰色の素地で、器面調整は丁寧ではない。	不明
		6	口縁部	5.4	—	口唇部は有段に異なる。胴部はつなぎりが明確。赤味がかった茶褐色の釉が内側でほだらになっている。白、黒粒が混ざる。	J-26南側3層
		7	口縁部	3.4	—	今回得られた資料の中で、より小さい器。外面に茶褐色の釉が掛かり、白粒が少し混ざる。器壁は2mmあまりと薄い。	J-27南側2層
		8	胴部	—	—	壺の胴部片と見られるが、下部は底際ほど近い。横色がかった淡灰色に、黒、白粒が混ざる。素地は第34回16、17と似る。	G-18北側4層
	瓶	口縁部	—	—	—	口唇部をきつくり反らせる。茶褐色の釉を両面に施す。白粒が混ざる。	N-27表上
		胴部	—	—	—	膨らんだ胴部から口唇部へつなげるように成形。口縁部はわずかに欠損している。ロクロ痕が明確。素地は淡灰色。黒粒が混ざる。両面とも露胎。	不明
		口縁部	—	—	—	第34回11と素地が似る。素地は淡灰色。黒粒の混ざりが少量見られる。両面とも露胎。	H-17・19北側4層+ J-19ビット21
		底部	—	4.6	—	第34回10と素地、器面調整が類似する。素地は淡灰色。	K-18北側4層
		口縁部	6.2	—	—	小瓶りの壺か、水注のような器種も想定できる。口唇部を平用に成形し、茶褐色の釉が掛かる。黒と白粒が混入。	K-27地山直1・J-27南側2層
13b	胴部	—	—	—	第34回13aと同一個体と見られる。ロクロ痕が明確。外面は茶褐色の釉、内面は露胎。素地に黒、白粒が混ざる。	K-27地山直1・J-27南側2層	
14	急須	口縁部	7.4	—	器受けを想定させる口縁部であることから、胴状の器種と思われる。ロクロ痕の残る器壁に、黒粒の混入が目立つ。両面とも露胎のようである。素地は淡黄褐色。	不明	
15	杯	底部	—	2.2	第34回14と同様の素地。切り口で、内底に粒だれが認められる。内側のロクロ痕が丁寧な調整されていない点を見る。口唇部は平用に、胴部は薄く成形する。素地は淡灰色に、黒、白粒が混ざる。	J-26南側2層	
16a	小壺?	口縁部	—	—	口唇部のひりひり小壺の可能性が高い。口唇部は平用に、胴部は薄く成形する。素地は淡灰色に、黒、白粒が混ざる。	H-26溝状遺構C	
底部		—	10.8	—	第34回16aと同一個体と見られる器種資料。ロクロ痕が前面唇部、縁をなす。	II-22北側3層	
17	底部	—	7.2	—	比較的小さい壺と考えられる資料。内面は露胎したような器種。胎土は精選されたような質物で暗褐色を呈する。	コーラ壺入方形磁込 み遺構・北側1層	
18	碗?	胴部	—	—	器種としては碗の可能性が高い。口唇部は平用に、内面は薄く成形する。内側にはロクロによる残りが残り、内外面とも茶褐色の釉が掛かる。	N-23南側1層	
19a	小壺	口縁部	8.9	—	—	直い気味の口縁部から胴部へ少し強まる。口唇部は薄く、その後は茶褐色で塗地される。	K-18北側3層
胴部		—	—	—	第34回19aと同一個体と見られる。胴部下には肉が彫形されており、その裏から高内けきの器形を想定させる。	K-19石列D	
20	口縁部	10.8	—	—	口唇部が特徴的な急須。胴部に注目のあった部分が残る。茶褐色の釉が胴部に掛かる。黒、白粒が素地に見られる。	不明	
21	口縁部	9	—	—	筒より小瓶り。素地は茶褐色、白粒が少量みられる。	F-18横丸	
22	胴・注口	—	—	—	注口より上部に取っ手の根本が残る。素地は淡茶褐色、オリブ黄褐色の釉が内面まで掛かる。	不明	
23	急須	口縁部	7.8	—	器受けを持たない丸みを帯びた口唇部。注口は欠損するがその根本は指による押痕が見られる。暗褐色の素地に茶褐色の釉が掛かる。	N-24攪乱	
24	注口	—	—	—	流胎の注口。素地は赤みを帯びた灰褐色で白粒が混ざり、質感が悪い。	J-26南側3層	
25	口縁部	7.8	—	—	器受けを持たない丸みを帯びた口唇部。注口は欠損するがその根本は指による押痕が見られる。暗褐色の素地に茶褐色の釉が掛かる。	L21瓦葺りC	
9.6		—	—	—	口唇部の形状から急須として扱った。内面に赤みのある茶褐色の釉を掛ける。胎土は形状平鉢土のような質感で暗褐色を呈し、白と透明粒が混ざる。	J-25南側1層	

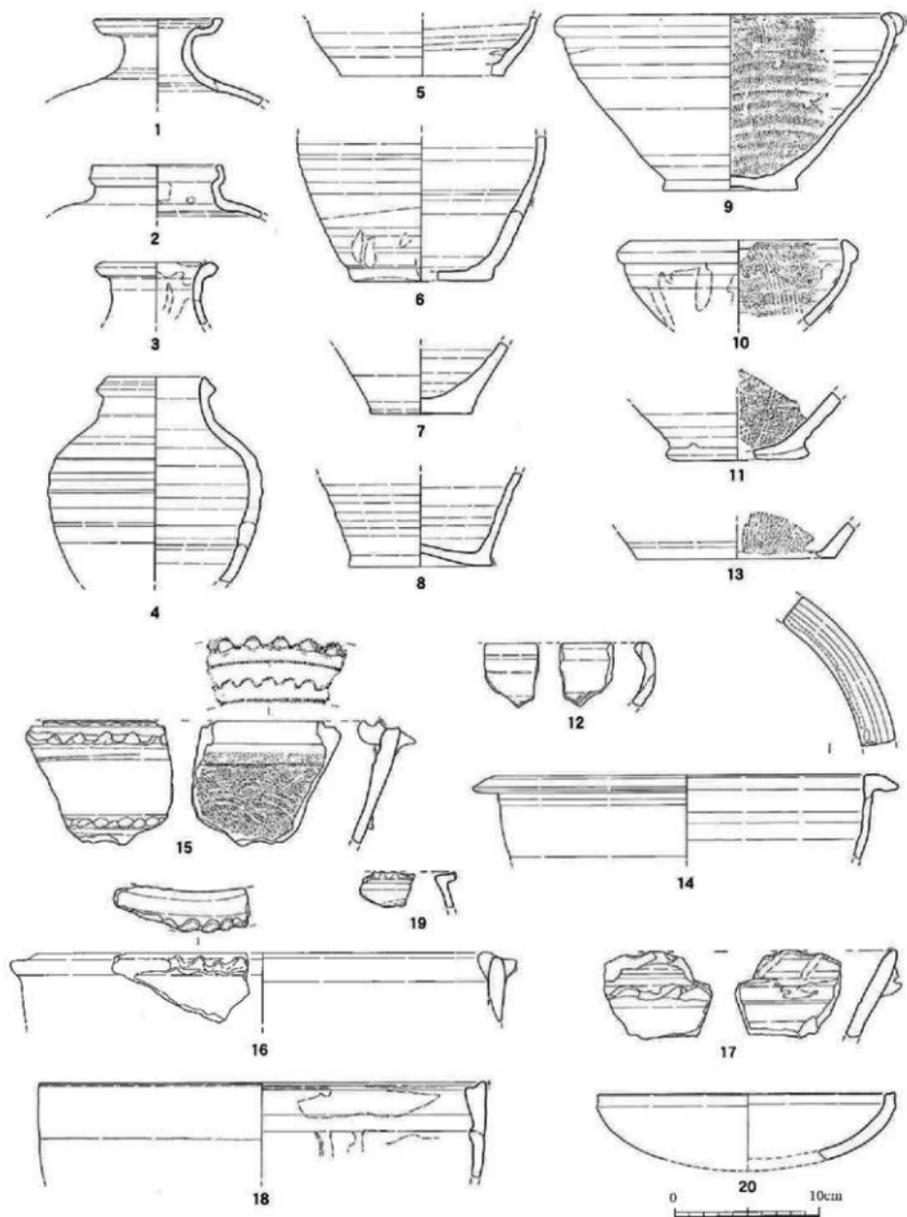
注「J」: 割測不可、「K」: 推定位置



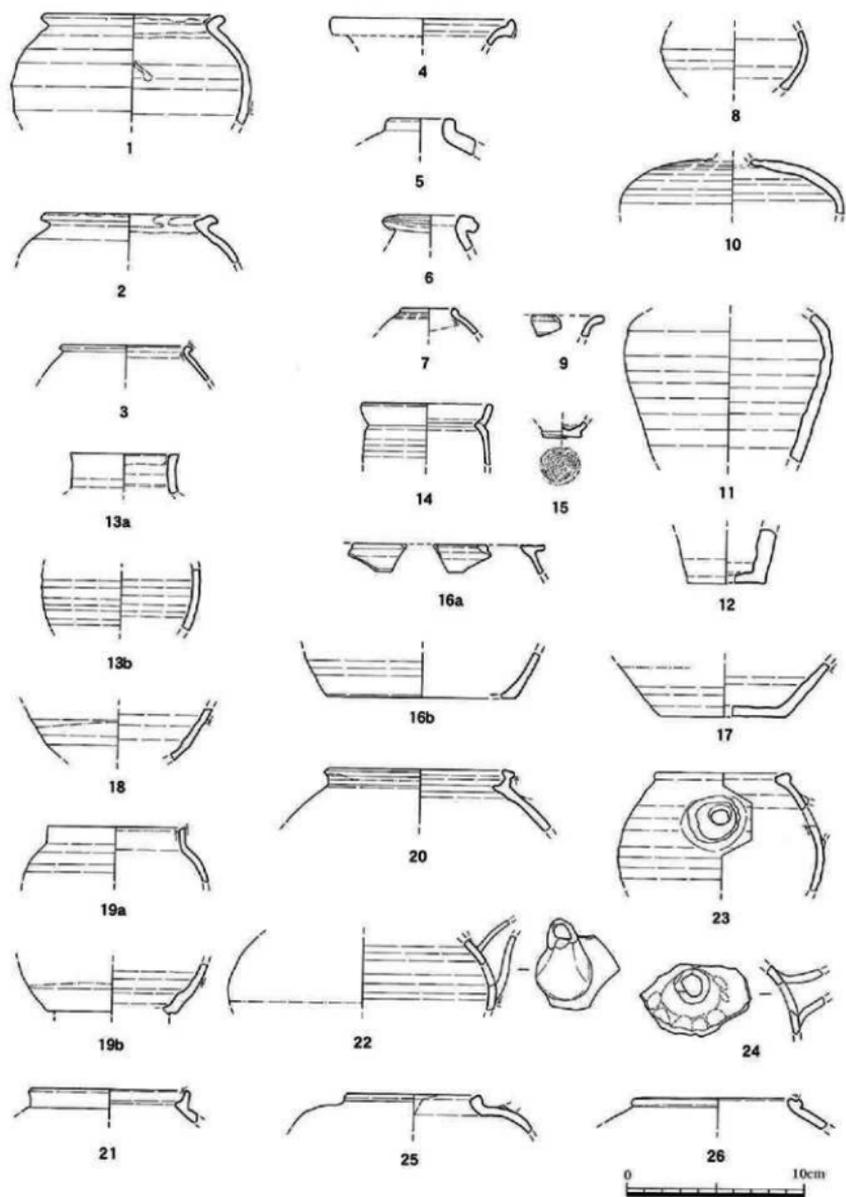
第31圖 褐釉陶器 (1)



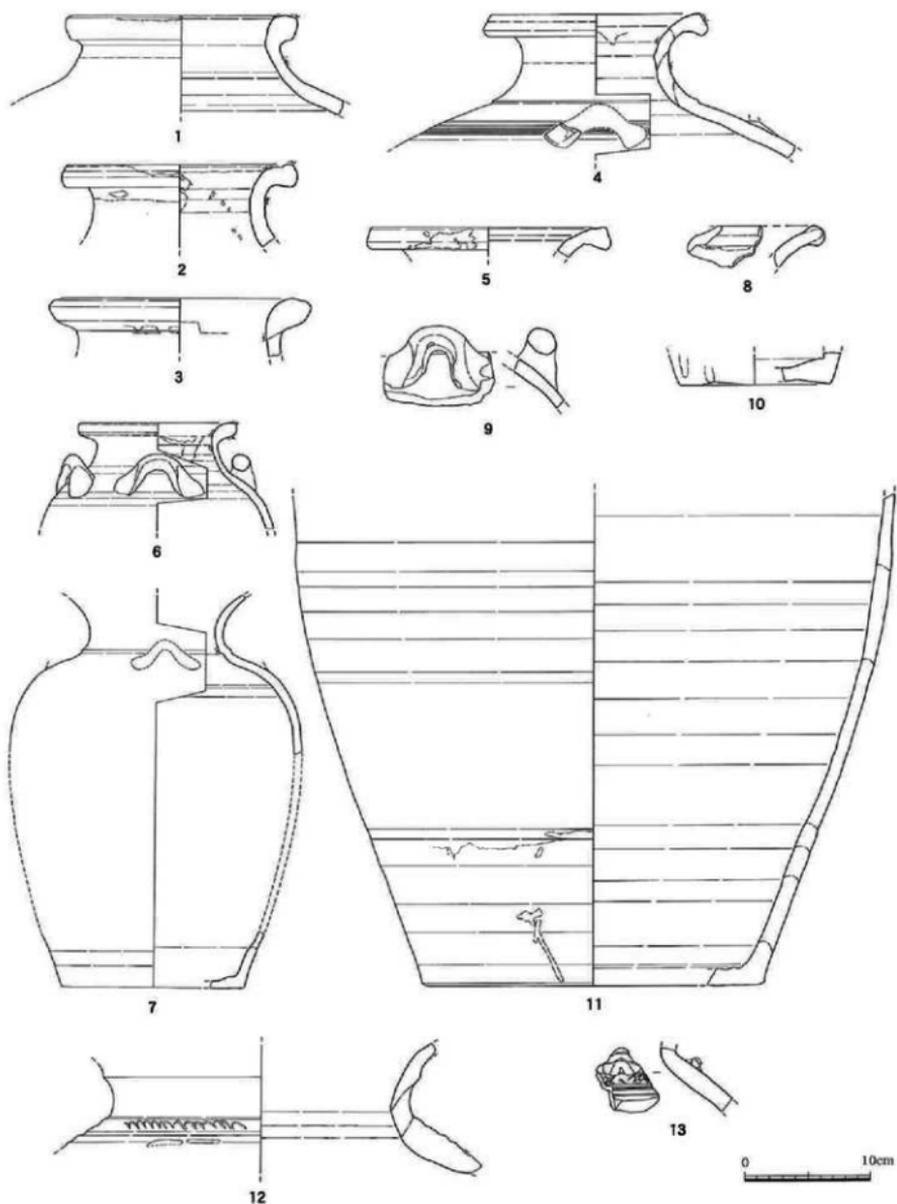
第32圖 褐釉陶器 (2)



第33圖 褐釉陶器 (3)



第34图 褐釉陶器 (4)



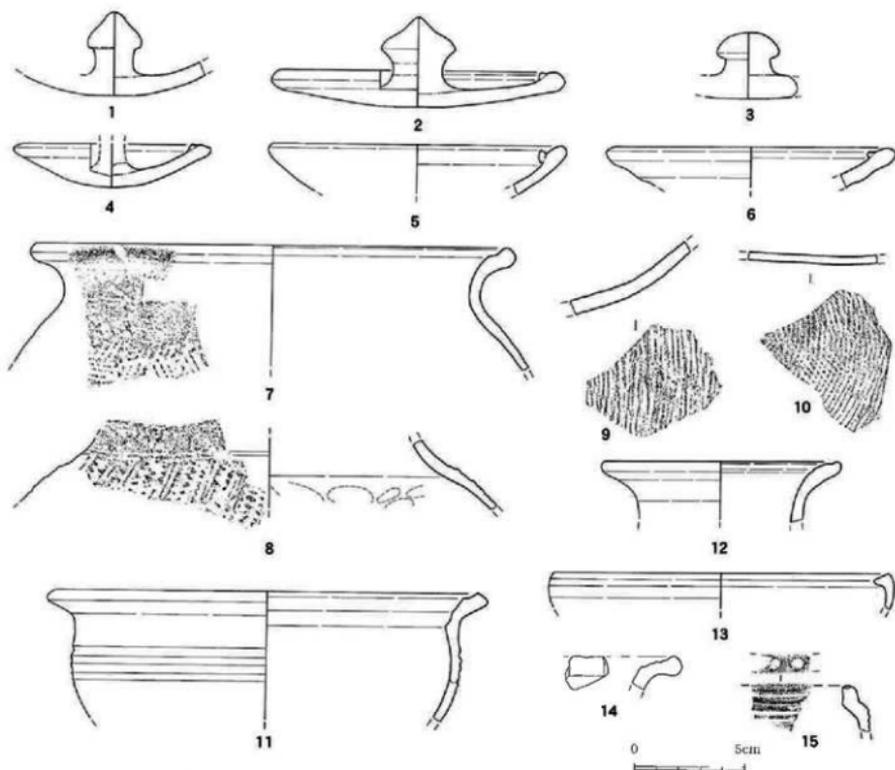
第35図 タイ産褐釉陶器

第16節 タイ産半練土器

今回の調査でタイ産半練土器の蓋と身が確認できた。しかし、身の出土は蓋に比べ僅かであった。半練土器は胎土が粗く、混入物に石英・白色粒・赤色粒・黒色粒などが見られ、焼成は良好なものである。また、橙褐色を基色とした器面に灰・黒色の素地がサンドウィッチ状になっているものが多いのも特徴である。

半練の蓋は、撮みの形態から「宝珠形」(第36図1、2)と「饅頭形」(同図3)の2種類が確認できた。また、端部上面に作る突起で特徴的なものを同図4～6に掲載した。

半練の身は、胴部に叩き目をもつ壺(同図7～10)と胴部に四条の凹圈線を施す鉢(同図11)が確認できた。同図12～15は、胎土や混入物などの特徴から移入品と考えられる資料で、今回は半練土器と共に扱った。同図12は、須恵器に類似する資料だが、胎土にガラス質の混入物がみられる事から、須恵器のように焼成温度の高い窯で焼かれたものとは考えにくい為、今回は移入系土器として扱った。同図13は胴部が膨らみ、口縁部が内反する「鉢」と考えられる資料で、口唇部が内側に肥厚しているのが特徴である。同図14は「蓋」もしくは「鉢」、同図15は「壺」か「鉢」として考えられる資料である。しかし、同図13～15の資料は細片で詳細は不明の為、今回は器種不明として扱った。以上、これら資料の個々の詳細は、第23表の観察一覧に記した。



第36図 タイ産半練土器

第22表 タイ産半練土器出土状況

出土地	出土・復乱	南側						北側						基壇	フーラル教A	方形窟込み遺構	フーラル教B	石列D	石列A	石列C	溝状遺構A	溝状遺構C	溝状石列	瓦葺まりC	円蓋状遺構③	ピット	遺構	不明	合計
		1層	2層	3層	4層	1層	2層	3層	4層																				
遺	掘み							2	1			1													1	1		6	
	口縁部	9	2	1	5	3	1	2	2	6	13		5	3	5	1	2							1	1	6	1	3	
	胴部	2			3	1		2		5	6		1					1		1					2	1	1	12	38
壺	口縁部	3			1	1						1	1	1													2	4	15
	胴部	1	2	1	1	1		1	4	3		1	4					1						1		2	5	28	
鉢	口縁部				2	1				1																			4
	合計	15	4	2	12	7	1	6	2	18	24	1	9	7	5	1	3	1	1	1	1	1	1	3	1	11	4	52	192

第23表 タイ産半練土器観察一覧

単位: cm

西	番号	器種	部位	口徑 器高 底径	特徴	潤壁	器色	混入物	出土地			
第36区・遺跡25	1	壺	胎	2.4(口徑) 3.8(高さ)	掘み: 空球形(胴部をさつ作る)。	両面: 撫で 掘み痕跡: 削り	上面: 粉褐色 上面: 灰褐色 素地: 灰色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	J-21 フーラル教A			
				3.4(口徑) 4.1(高さ) 11.9(底径)	掘み: 空球形(胴部を狭く作る)。 底部: 丸い。 突起: 断面丸二角。	両面: 撫で 掘み痕跡: 削り	上面: 暗黄褐色 下面: 暗黄褐色 素地: 黄色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	K-16 北側1層			
				2.8(口徑) 3.0(高さ)	掘み: 鐘形。 その他: 掘みに煤が付着。	掘み: 磨き 掘み痕跡: 削り 胴部: 磨き	両面: 白灰色 素地: 黒色	白色粒 赤色粒、黒色粒	H-13・14 北側4層			
				—	底部: 平ら。 突起: 断面丸。	両面: 撫で	上面: 黄褐色 下面: 暗黄褐色 素地: 黄褐色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	K-21 南側1層			
				9.0(底径)	—	—	—	—	—	—	—	—
				—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2	壺	胎	12.0(口徑)	底部: 尖形。 突起: 断面丸二角。 その他: ロクノ目を残す。	両面: 磨き	両面: 灰色 素地: 灰色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	G-21 北側4層			
				—	底部: 舌状。 突起: 断面丸二角。	両面: 撫で	両面: 黄褐色 素地: 白灰色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	復乱			
				18.2(底径)	—	—	—	—	—	—	—	
	3	壺	胎	22.1	口脣部: 丸い。 口縁内: 窓受けの凹みをつくる。 胴部: 磨き目。	外面: 撫で、叩き 内面: 撫で、指圧	両面: 灰黄色 素地: 黒色	赤色粒、黒色粒	G-22基壇トレン チ1 K-23南側3 層			
				—	文様: 窓部には二条の凹線。 胴部: 叩き目。 その他: 内外に煤が付着。	外面: 撫で、叩き 内面: 撫で、指圧	両面: 黄褐色 素地: 灰色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	H-22・23 方形坑遺構			
				—	口脣部: 平ら。 口縁部: 舌状。 その他: 内外に煤が付着。	外面: 叩き 内面: 撫で、指圧	外面: 灰褐色 内面: 黄褐色 素地: 灰色	石英 赤色粒、黒色粒	H-20・21 フーラル教A			
				—	底部: 磨き目。 その他: 外面に煤が付着。	外面: 叩き 内面: 撫で	両面: 黄褐色 素地: 黄褐色	白色粒 赤色粒、黒色粒	G-21ピット10			
	4	壺	胎	18.0	口脣部: ほぼ平ら。口縁部: 外反。 文様: 外面に四条の凹溝線。 口脣・口縁の内面に凹溝線。	両面: 撫で、磨き	外面: 灰黄褐色 内面: 灰褐色 素地: 灰褐色	貝殻、白色粒 赤色粒、黒色粒	K-23南側2層十 E-28南側3層			
				10.9	口脣部: 舌状。口縁部: 外反する。 文様: 外面に二条、内面に一条の凹線。 その他: 須恵堂に類似。	両面: 撫で	両面: 灰褐色 素地: 灰褐色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	不明			
5	壺	胎	12.4	口脣部: 平ら(内面に肥厚)。 口縁部: 外反する。 その他: 鉢の可能性あり。	外面: 磨き 内面: 撫で	外面: 黄褐色 内面: 暗黄褐色 素地: 灰黄褐色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	遺成府				
			—	口脣部: ほぼ平ら。 その他: 蓋・鉢の可能性あり。	外面: 撫で 内面: 撫で、指圧	外面: 暗黄褐色 内面: 暗黄褐色 素地: 黄色	石英 赤色粒、黒色粒	G-17 北側4層				
6	壺	胎	—	口脣部: 浅く波状になる。 胴部: 凹線を施す。 その他: 鉢・壺の可能性あり。	外面: 磨き 内面: 撫で	外面: 黄褐色 内面: 灰黄褐色 素地: 暗黄褐色	石英、白色粒 赤色粒、黒色粒	不明				

注 「—」: 計測不可、|+|: 接合の意

第17節 本土産磁器

本土産磁器には、肥前系、瀬戸・美濃系、銅板転写、型紙摺り、クロム青磁等が見られた。量的には型紙摺りや肥前系磁器が多く、年代は17～20世紀代と幅広い。器種は碗、小碗、皿、小皿、瓶、蓋物、急須、香炉、杯などがあるが、最も多いのは碗、次いで皿となっており、両者で全体の80%を占める。また出土状況としては、表土・掘乱部分からの262点が最も多く、北側3層や基壇、瓦溜まりC等からも一定量の出土が見られる。特徴的な13点を図化した。以下に割愛した資料も含めて概略を記述する。なお、図化した資料については観察表に記した。肥前系（第37図4～8、10、12）

器種ごとに見ると、碗には17世紀後半～19世紀代を範囲とするものが多く、文様は山水文や草花文等があり、そのほとんどが小振りである。皿では、型成形や糸切成形、外底が蛇ノ目凹形高台の資料も多く見られた。装飾としては丸文や山水文等の文様の他、口唇部に錆釉を施すものもある。鉢には18世紀前半から19世紀後半にかけてのものがある。器形としては蛇ノ目凹形高台のほか、八角鉢がある。その他量的には少ないが、小皿や蓋物、香炉、瓶、小杯などが得られている。

瀬戸美濃系（第37図2、9、13）

器種はバリエーションに富むが量そのものは少ない。19世紀～明治代と年代は下る。染付のほか色絵も少量得られている。

銅板転写

皿と小碗が得られた。合計54点であるが、表土・掘乱からの出土が多い。

型紙摺り

本土産磁器の中では最も多く出土している。各器種とも文様はパターンを繰り返して施文される。碗には直11、外反口縁があり、皿（大：口径15cm前後）には蛇ノ目凹形高台が多い。

クロム青磁

小碗、皿、瓶などの器種がある。碗には同資料の特徴である、トビカンナによる文様が施される。皿は10cm台と小振りで、内面に草花文をあしらっている。

その他の本土産磁器（第37図1、3、11）

上記以外の資料をこれに含めた。薩摩焼の碗、関西系と見られる土瓶のほか、産地が特定できない資料では碗、皿、鉢、急須、火入れ等が少量得られた。

第24表 本土産磁器観察一覧

単位：cm

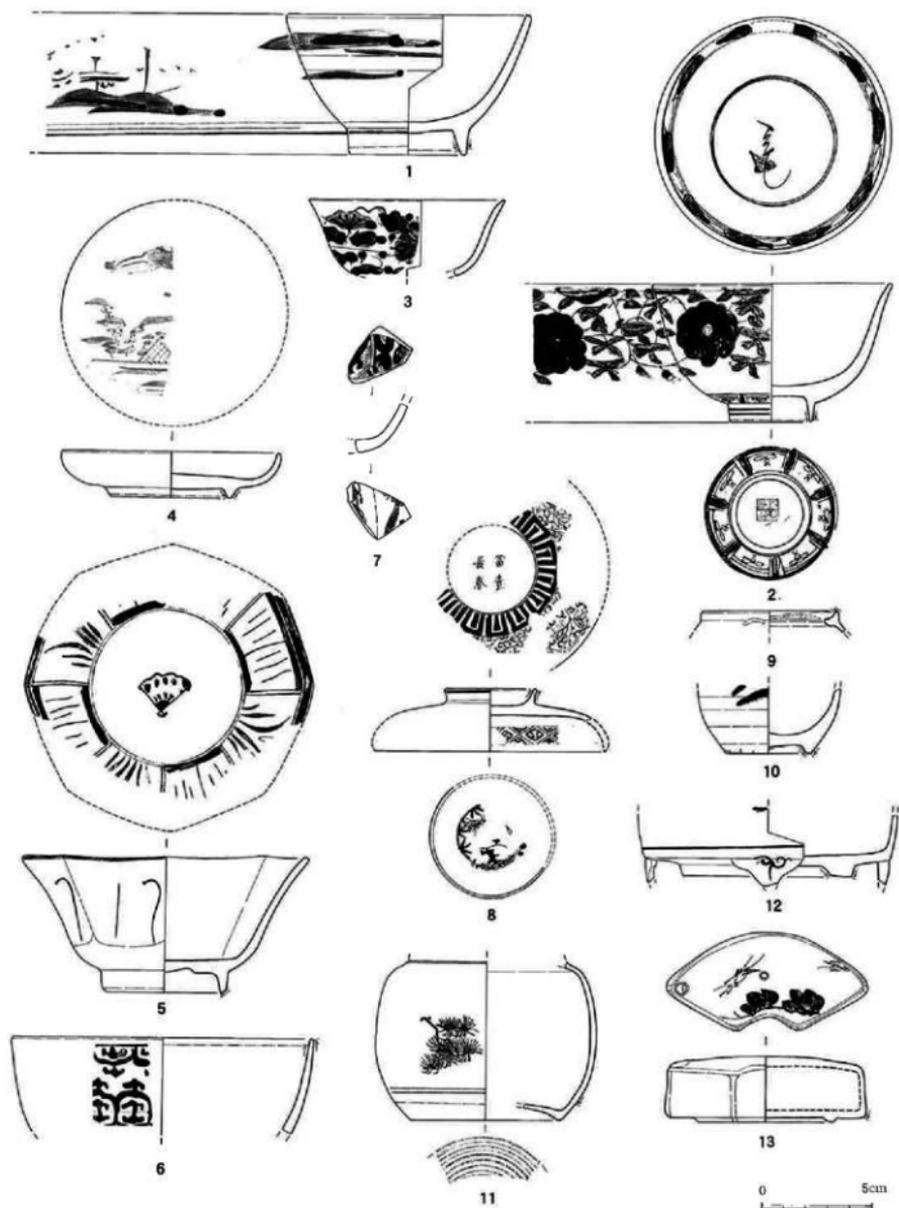
図番	器種	部位	口径	器高	口径径	観察事項	産地・年代	出土地	
第37図・ 図版26	1	碗	口一底	11.1	6.35	5.3	広東型と称される碗。直口口縁で全体的に厚手。豊付けは無釉で底部に陶線を描く。	薩摩・19c	F-20 基壇埋込
				10.9	6.25	3.6	外反口縁。豊付けは無釉。外側に草花文、見込みには陶線と、花文を描く。夙柄は濃緑。高台内に銘鉄。	瀬戸か・20c	I-118 北側4層
	2	小碗	口唇部	8.8	—	外反口縁。口唇部外面に薄い夙柄で陶線を引く。表面いっぺいに草花文が描かれる。	薩摩・1820～ 1860年代	不明	
	4	小皿	口一底	10.2	22.0	5.5	型成形で厚手。豊付けは無釉。内面に山水文を描く。	肥前・19c	F-21 基壇埋込
	5	鉢	口一底	12.9	6.1	5.6	八角鉢。蛇ノ目凹形高台で、胴部分にはハマ波が残る。外面には木賊、見込みに窓ごとに藤種を穿てて文様を描く。内底部には墨。	肥前・19c初 ～幕末	F-20 基壇埋込
				口唇部	13.6	—	—	蓋物の鉢と見られ、内側の口唇部が無釉になる。口縁部と胴部に藤文を互い違いに配する。奥面は暗い見込である。	肥前・1760～ 1790年代
	7	鉢?	胴部	—	—	—	小振りで器種は特定できないが、底部に近い胴部片。内外面とも施文され、草花をあしらったようである。	肥前・18c前 ～中	K-22 北側3層
	8	蓋	口一底	4.1	2.8	10.3	扁みの口唇部は無釉。表面に雷文と唐草、内面に四文様と陶線を配し、内底には袷で四文を描く。掘み高台内には「血脊草」の歌。	肥前・1760～ 1790年代	F-21 基壇埋込
	9	急須	口唇部	6.2	—	—	色絵。蓋受け部分から内部へは無釉。外面には白色の釉を施す。肩部に黄で鉄線されるが詳細な装飾は不明。	瀬戸・美濃系・明治代	不明
	10	瓶	—	—	—	3.8	小振りの瓶。胴部で暗赤褐色の施文がある。外面はわずかにクロウ斑が残る。内面は黒合で草に成形されている。豊付けには砂が付き。	肥前・1630～ 1640年代	L-21 瓦溜まりC
	11	土瓶	底部	—	—	6.8	胴部下から底部にかけて無釉。胴部に板文、肩とその下部には陶線。内面全体には白色釉が掛かる。	明治代	H-26 南側3層
	12	香炉	—	—	—	7.6	円筒状の香炉で三つ足と見られる。胴径は11.1cmで足は貼り付け。豊付けは無釉。その他は器内全体にも白色の釉を掛ける。胴部下に陶線を施し、足表面にも花文を配す。	肥前・17c後 L-25	溝沢遺構B
	13	水滴	完形	—	2.8	—	型成形。長物9.0cm、短物3.8cm。高台は本体の形状に沿って地形になる。上面の穴はどちらも4mm前後。乳口部の釉が掛かり、底部は無釉。輪下彩により松栢等は描かれる。	瀬戸・美濃・明治代	不明

注「—」：計測不可

第25表 本土産磁器出土状況

器種・分類	出土地	表土・掘出	埋	トレンチ	南側				北側			基礎	コイール敷A	コイール敷B	石列D	G埋C	瓦溜まりC	ビット	道積	基壇・まじりC	不明	合計	
					1層	2層	3層	4層	1層	2層	3層												
肥前系	碗	口縁部	3				1															4	
		胴部	2				1														3	6	
		底面	1				1														1	2	
	皿	口縁部	1																				1
		胴部	1																				1
		底面	2																				2
	小皿	口縁部	1																				1
		底面	1																				1
	小鉢	口縁部	1																				1
		底面	1																				1
	碗	口縁部	1																				1
		底面	1																				1
	鉢	口縁部	2																				2
		底面	1																				1
	香炉	口縁部	1																				1
底面		1																				1	
蓋物	口縁部	1																				1	
	底面	1																				1	
瀬戸・美濃系	碗	口縁部	1																			1	
		胴部	1																			1	
		底面	1																			1	
	小碗	口縁部	6	1																			7
		胴部	2																				2
		底面	2																				2
	皿	口縁部	2	1																			3
		底面	1																				1
	小皿	口縁部	2																				2
		底面	1																				1
	小鉢	口縁部	1																				1
		底面	1																				1
	蓋物	口縁部	1																				1
		底面	1																				1
	急須	口縁部	1																				1
底面		1																				1	
型模造り	碗	口縁部	3																			3	
		胴部	2	1																		3	
		底面	7	2																		9	
	小碗	口縁部	8																				8
		胴部	5																				5
		底面	2																				2
	皿	口縁部	3	1																			4
		胴部	3																				3
		底面	3																				3
	鉢	口縁部	1																				1
		胴部	4																				4
		底面	8																				8
	小鉢	口縁部	1																				1
		胴部	1																				1
		底面	11																				11
皿	口縁部	4																				4	
	胴部	8																				8	
	底面	4																				4	
急須	口縁部	2																				2	
	胴部	7																				7	
	底面	3	2																			5	
蓋物	口縁部	2																				2	
	胴部	1																				1	
	底面	4																				4	
その他	碗	口縁部	12	2																		14	
		胴部	6	1																		7	
		底面	8	2																		10	
	小碗	口縁部	11	1																			12
		胴部	5																				5
		底面	11																				11
	皿	口縁部	10																				10
		胴部	2																				2
		底面	1																				1
	鉢	口縁部	3	1																			4
		胴部	5																				5
		底面	5																				5
	蓋物	口縁部	16	2																			18
		胴部	1																				1
		底面	1																				1
急須	口縁部	1																				1	
	胴部	1																				1	
	底面	1																				1	
式人形	不明	1																				1	
	口縁部	2																				2	
合計		262	29	1	9	3	8	1	8	18	7	10	1	1	1	1	16	2	10	1	67	450	

注：[+]：接合の意



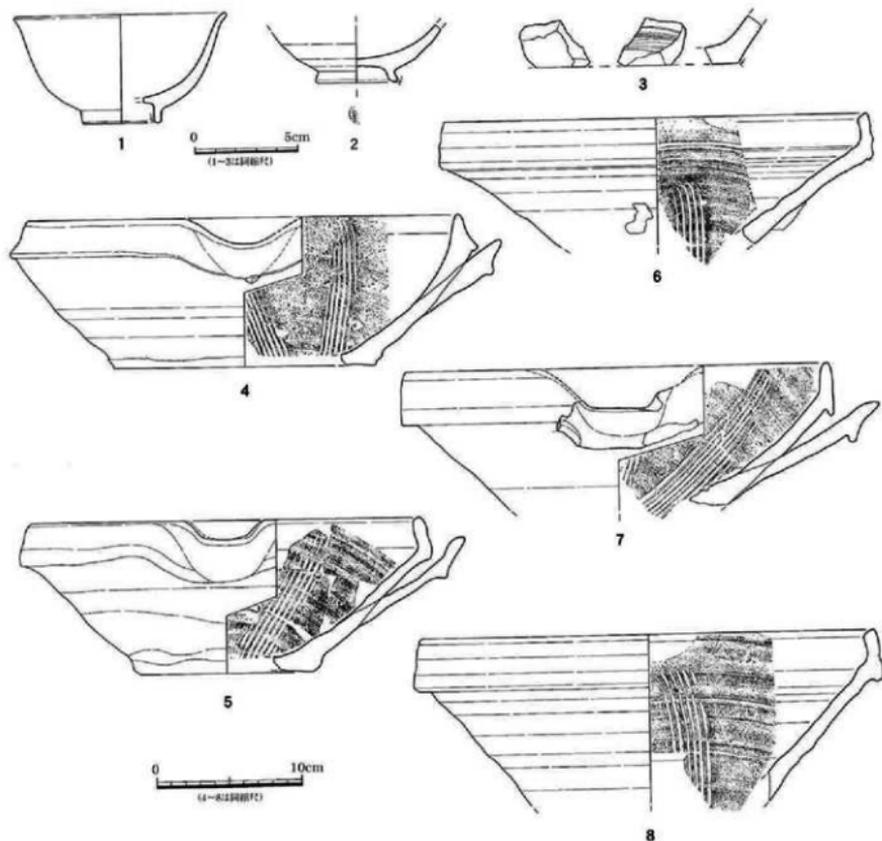
第37図 本土産磁器

第27表 本土産陶器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
1	碗	-	口一底	10.3	5.3	3.8	薩摩碗。19世紀代。外縁口縁で畳付け以外は細粒。胎土は乳白色。内外面とも細かい貫入が見られる。	土土地
2	碗	-	底部	-	-	3.9	關西系。19世紀代。外面に塗付けがあるが詳細は不明。胎土は黄褐色。畳付けから高台内は無粒。胎土内H印刻。	不明
3	蓋?	-	底部	-	-	-	薩摩碗。18世紀頃。蓋もしくは蓋と考えられる底部。胎土は鈍い灰褐色。内外面ともオリブ褐色の粒が掛かる。外底部は無粒。	不明
4	Ⅰ類 碗	I類	口一底	30.0	10.4	18.2	口唇部は平状。その表面には自然釉が掛かり、粒状に褐色している。5~10mm大の小礫が混入し、胎土は粗い。6本の横目が確認できる。両面とも鈍い黄褐色を呈する。	L-25 溝状遺構
口一底			26.0	11.2	12.6	口唇部は内陥する。混入物も少ない。7本の横目が9割確認できるが、内底部分の目の始点では8本のように見える。器色は暗赤褐色。	I-28 側溝3層	
口縁部			29.0	-	-	口唇は平状に作り、混入物はほとんど見られない。胎土も滑らかで他の4点と異なる印象を受ける。6本の横目。胎土断面は鈍い黄褐色。表面は灰褐色。	石市A	
口縁部			29.0	-	-	8と同様に口唇部が広い。5mm大の砂粒が混入し、横目は8本確認できる。器面は灰褐色。	M-24 側溝3層	
8	Ⅱ類 碗	II類	口縁部	31.0	-	-	口唇部は平状に成形される。混入物は比較的数量少ない。発成具合によるものか、橙褐色を呈しており一見片貝産無粒陶器にも似る。	I-327 溝状遺構

注 1-1:計測不可



第38図 本土産陶器

第19節 沖繩産施釉陶器

器の表面に釉薬を施すもので、方言で「上焼（ジョウヤチ）」とも称される。釉薬の種類は灰釉・鉄釉・鉛釉・黒釉・白釉（白化粧+透明釉）などがあり、その上に呉須や緑釉などで文様が施される例もある。器種は碗・小碗・小杯・皿・大皿・大鉢・鍋・壺・瓶・小壺・須須・酒器・蓋・火炉・香炉・火取・灯明具などが確認されている。ここでは各器種の分類概念を記し、詳細は第29表に譲る。

碗（第39図）

I類—高台から逆「ハ」の字形に立ち上がる直口口縁でフィガキー。灰釉単掛け（I—a）と鉄釉単掛け（I—b）に分かれ、aは無文（1）でbは内底に白釉で文様を施す（2）。II類—腰部が丸みを持ち口縁部が外反するもので、高台脇に挟りを入れる。施釉方法はフィガキー（II—a）と内底蛇の目釉剥ぎ（II—b）がある。aは黒釉単掛けで内面及び内底に黒釉で文様を施す（3、4）。bは鉄釉及び錆釉単掛けで無文のもの（5、6）、鉄釉と灰釉の掛け分けで内面及び内底に鉄釉で文様を施すもの（7、8）がある。III類—IIとほぼ同様の器形だが外反口縁がより強調される。高台脇の挟りは不明瞭。白釉単掛けで内底蛇の目釉剥ぎ。無文のもの（9、10）と呉須や鉛釉などで文様を施すもの（11~17）がある。17は灰釉と鉄釉の掛け分けで外面に呉須で文様を施す。18は直口口縁だがIII類の範疇に含まれるもので、白釉単掛けで鉄釉で文様を施す。19は鉄釉と白釉を交互に施すもので、内底露胎部に白土を塗布する。IV類—基本的な器形はIIIに似るが、外面に六角形の面取りが施される。白釉単掛けで内底蛇の目釉剥ぎ。内面に呉須で文様を施す（20）。

小碗（第40図1~18）

I類—腰部が丸みを持ち口縁部が外反するもので内底蛇の目釉剥ぎを施す。鉄釉（または錆釉）と灰釉（または白釉）の掛け分け（I—a）と白釉単掛け（I—b）がある。aは1、2とも無文。bは無文のもの（3）、鉄絵や呉須で文様を施すもの（4~7）がある。II類—基本的な器形はI類に似るが、外面に六角形と五角形の面取りを二段で巡らせるもの。白釉単掛けで畳付のみ露胎。無文（8）。III類—腰部から内湾気味に立ち上がる器形で、いわゆる丸碗と称されるもの。施釉方法は総釉後内底蛇の目釉剥ぎのもの（III—a）と畳付のみ露胎のもの（III—b）がある。aは無文のもの（9、10）、呉須や鉛釉で文様を施すもの（11、12）があり、いずれも白釉単掛けである。bは白釉単掛け（13、14）、透明釉単掛け（15、16）、錆釉と白釉の掛け分け（17）がある。14は外面に線彫り、16は外面に白土家塚でそれぞれ文様を施す。IV類—全形は不明だが腰部に稜を有するもの。透明釉単掛けで畳付のみ露胎。無文（18）。

小杯（第40図19~22）

I類—外反口縁を呈するもの。鉄釉単掛けのもの（I—a）と透明釉単掛けのもの（I—b）があり、いずれも外面腰部以下は露胎。aは外底に鉄釉で文様を施す（19）。bは無文（20）。II類—器形はI類に似るが高台を削り出さず、底部が萁筒底状を呈するもの。透明釉単掛けで外底面ののみ露胎。無文（21）。III類—口縁部が内湾するもの。鉄釉単掛けで文様の有無は不明（22）。

皿（第41図1~9）

I類—高台から逆「ハ」の字形に立ち上がる直口口縁の皿。灰釉単掛けでフィガキー。内底に灰釉を塗布する（1、2）。II類—内湾口縁を呈するもの。口唇部は平坦なもの（II—a）と稜花状のもの（II—b）がある。aは灰釉単掛けで畳付のみ露胎の無文のもの（3）と、白釉単掛けで内底蛇の目釉剥ぎ、内面に呉須で文様を施すもの（4）がある。bは白釉単掛けで内底蛇の目釉剥ぎ、内面に呉須で文様を施すもの（5、6）と、無文のもの（7、8）がある。III類—器形はII類に似るが、内面口縁部に段差を設けて蓋受部（？）を持つ小皿である。灰釉単掛けで内面口縁部から外面まで露胎。無文（9）。

大皿（第41図11~14）

I類—腰部が丸みを持ち口縁部が内湾するもので内底蛇の目釉剥ぎを施す。白釉単掛けのもの（I—a）と透明釉単掛けのもの（I—b）がある。aは内面に呉須で文様を施す（11）。bは無文（12）。II類—腰部から逆「ハ」の字形に立ち上がり、口縁部を断面三角形に肥厚するもので、施釉方法はいずれもフィガキー。鉄釉単

第29表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位: cm

図番号	器種	分類	部位	口径	高さ	底径	観察事項	出土地			
第39回・図版28	甗	I-a	口~底	13.3	5.6	6.4	畳付にアルミナが一部付着。	表土・攪乱			
			底部	—	—	6.4	内底に白土で丸文を施す。外面に石灰が付着。	表土・攪乱			
		II-a	I~底	12.4	5.9	6.1	内底に鉄軸で丸文を施す(蛇の目を意識?)。内底にアルミナ一部落着。畳付にアルミナ塗布。	L-21 耳濱りC			
				12.1	6.5	6.0	内底に鉄軸で丸文を施す(蛇の目を意識?)。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱			
		II-b	I~底	13.4	6.4	5.5	畳付にアルミナを塗布。	F-20基壇段石+26 清状遺構C			
				12.1	6.2	6.9	内底にアルミナ一部落着。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱			
				13.6	6.8	6.6	内面に鉄軸で圏線、内底に鉄軸で丸文を施す。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱+基壇			
				13.4	6.8	6.8	内面に鉄軸で圏線、内底に鉄軸で丸文を施す。内底にアルミナ一部落着。	F-20-21基壇段石			
				口~底	7.2	5.4	5.9	畳付にアルミナを塗布。外底面の白土の塗布は不徹底。	表土・攪乱		
				口縁部	14.6	—	—	外面にへう状工具による調整跡が残る。	表土・攪乱		
				III	I~底	13.9	6.5	6.0	外面に呉須で菊文を施す。内底にアルミナが落着。畳付にアルミナを塗布。	東西基壇トレンチ	
						13.6	6.4	6.1	内面に呉須で巴文を3個施す(内面の文様は不明瞭)。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱	
		12.8	6.6			5.8	外面に呉須で菊花唐草文を施す。内面に呉須で文様を施すが不明瞭。畳付にアルミナ塗布。	表土・攪乱			
		12.8	—			—	外面に呉須で区画文、花文、内面に呉須で圏線、二重圏線を施す(清朝地殻を意識)。	表土・攪乱			
		IV	底部	—	—	6.4	外面に呉須で花文、蓮方文、圏線、内底に呉須で二重圏線を施す(清朝地殻を意識)。	表土・攪乱			
				—	—	—	外面に線彫りや呉須で家紋?を施す。	H-26北側4層			
				—	—	6.6	外面に呉須で巴文を3個施す。内底にアルミナが落着。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱			
				I~底	13.1	6.6	5.4	外面に鉄軸で高文と斜格文を3個ずつ、内面に鉄軸で圏線を施す。内底にアルミナ落着。	不明		
				—	—	5.4	内底裏面部に白土を塗布。畳付にアルミナを塗布。	不明			
				—	—	6.8	外面に呉須で山水文?を施す。内面に呉須で縦位の条線文を施す。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱			
第40回・図版29	小甗			I-a	口~底	8.2	4.1	3.8	両面口縁部に釉塗れあり。畳付にアルミナを塗布。	I-20 畦(南側)	
					口縁部	9.2	4.3	3.6	畳付にアルミナを塗布。	基壇トレンチ(東西)	
		I-b	口縁部	9.0	—	—	内底にアルミナ落着。	表土・攪乱			
				8.8	4.4	3.4	外面に鉄軸で葉文を施す。内底に器物の一部落着。畳付にアルミナを塗布。	F-21 基壇			
				8.6	4.5	3.4	外面に呉須で菊花唐草文、内面及び内底に呉須で雷文等、二重圏線を施す。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱			
				口縁部	7.8	—	—	外面に呉須で唐草文?を施す。両面とも透明釉は剥離している。	表土・攪乱		
				口~底	4.4	4.4	3.3	外面に呉須で菊花唐草文、内面に呉須で雷文?を施す。内底にアルミナ落着。畳付にアルミナ塗布。	表土・攪乱		
				II	口~底	7.6	4.5	3.6	畳付にアルミナを塗布。外底面の白土の塗布は不徹底。	I-28 南側3層	
		7.8	4.3			3.9	内底にアルミナ一部落着。畳付にアルミナを塗布。	I-28 南側2層			
		8.6	—			—	内面全体に黒入がみられる。	I-28 南側3層			
		口~底	9.2			4.6	3.8	外面に釘形で鉄軸で唐草文?を施す。口縁部に鉄軸を塗布。畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱		
		III-a	口~底	8.6	4.1	4.0	外面に呉須と胎軸で印花文を施す。内底にアルミナが落着。畳付にアルミナを塗布。	I-20 畦(南側)			
				9.0	4.3	3.8	畳付にアルミナを塗布(木ノ厩陶器の可能性あり)。	I-20 列D			
				8.8	4.4	3.8	外面に釘形で「院」の銘を施す。畳付にアルミナを塗布。	基壇トレンチ(東西)			
				口~底	9.2	4.5	3.6	畳付にアルミナを塗布。	表土・攪乱		
				底部	—	—	5.2	外面に白土塗布で縦文?を施す。	基壇トレンチ(東西)		
				口~底	9.0	4.7	3.6	畳付にアルミナを塗布。部分的に石灰が付着。	F-20基壇段石+16 北側1層		
				IV	底部	—	—	4.0	畳付にアルミナを塗布。本土産陶器の可能性が高い(17c後-18c前)。	表土・攪乱	
						—	—	2.6	外底面に鉄軸で丸文を施す。内底に器物片や切跡?が落着。	J-16 東西畦	
		小鉢	III	口縁部	I-a	底部	—	—	2.0	素地は精選され成形も丁寧。	表土・攪乱
					I-b	I~底	3.4	1.7	1.8	素地は精選され成形も丁寧。	L-20 北側3層
					II	底部	—	—	1.4	素地は精選され成形も丁寧。	表土・攪乱
III	口縁部				4.8	—	—	小片のため全形は不明。灯明具(ヒョウソク)の可能性もある。	不明		

注 「」:計測不可、+:接合の意

第29表 沖繩産施釉陶器観察一覧

単位: cm

図番号	器種	分類	部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地	
第41図・図版30	Ⅲ	I	口縁部	—	—	—	口縁部の釉は剥落。外面に鉄灰?が見られる。	表土・攪乱	
			底部	—	—	6.4	内底に灰釉を円形に塗布。費付に砂粒が付着。	不明	
			口一底	12.4	4.6	4.1	全体的に釉の発色は不明瞭(白色に濁る)。	F-20基礎攪乱	
		II-a	口縁部	15.2	—	—	内面に只須で梅花文を施す。	表土・攪乱	
			II-b	底部	—	—	5.2	内面に只須で花卉文、内底に開線、丸文を施す。内底にアルミナ落着。費付にアルミナを塗布。	不明
		—		—	—	7.2	内面に只須で花卉文、内底に印花文を施す。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱	
		—		—	—	9.6	内底にアルミナ落着。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱	
		—		—	—	6.0	内底にアルミナ落着。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱	
		III	口縁部	9.2	—	—	内面に段差(蓋受部?)を持つ。蓋の可能性もある。	不明	
			口一底	11.9	2.5	4.9	内底にアルミナ落着。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱	
		大皿	I-a	口一底	19.4	5.5	9.0	内面に只須で蓮文?を3個施す。内底にアルミナ落着。費付にアルミナを塗布。	F-20・22基礎攪乱
				口一底	15.6	6.0	7.0	外面縁部に削り痕?が見られる。内底縁部部に白土を塗布。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱
			II-a	口一底	20.5	6.4	9.8	内底に鉄釉で丸文を施す。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱
				底部	—	—	10.4	外面縁部に新垂れが見られる。内底にアルミナ?が一部落着。外底に器物片?が落着。	表土・攪乱
		大鉢	I	口一底	25.2	11.4	13.1	内底にアルミナ落着。費付にアルミナを塗布。外面縁部に石灰が一部付着。	F-20基礎攪乱
口縁部	19.6			—	—	内面に鉛釉で花文(丸線文?)を施す。	表土・攪乱		
II-a	口一底		28.0	12.5	10.0	内底にアルミナ落着。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱		
	口縁部		24.4	—	—	内面に鉄釉で蓮文を2条施す。内面の釉の発色は不明瞭(白色に濁る)。	表土・攪乱		
鍋	I	口縁部	18.0	—	—	口唇部に紐状の縁耳を貼付する(1対)。外面縁部に鉄釉が一部付着。	表土・攪乱		
		口一底	13.2	—	—	内面の袖下に鉄網?がみられる。	表土・攪乱		
		底部	—	—	15.8	外面に飛鳥・蓮文を施した後、円部に白土で象嵌する。内底に砂粒?が付着。	F-20・21基礎攪乱		
	II	口一底	16.4	—	—	胴部部の施釉は不徹底。内面に石灰が一部付着。大形虫須(アンペン)の蓋の可能性もある。	表土・攪乱		
		口一底	8.1	—	—	外面胴部に縁耳を貼付(2対)。口唇部は釉剥ぎ後に白土を塗布。	不明		
		口一底	12.0	—	—	外面胴部に縁耳を貼付(2対)。口唇部は釉剥ぎ後に白土を塗布。内面I縁部に器物片が落着。	表土・攪乱		
紙	I	口一底	2.6	12.7	5.8	外底面に糸切り痕がわずかに残る。外面に石灰が部分的に付着。	表土・攪乱+基壇		
		底部	—	—	4.8	外底面に糸切り痕がわずかに残る。外面にロクロ痕がみられる。成形は7より丁寧。	基壇		
	II	胴部	—	—	—	外面に線彫りと只須で樹形文を施す。内面にロクロ痕がみられる。	表土・攪乱		
		底部	—	—	6.4	外底面の施釉は不徹底。外底面に砂粒?が付着。	表土・攪乱		
	III	底部	—	—	6.2	外底面に砂粒?が付着。	表土・攪乱		
		胴部	—	—	—	外面に只須で雲文(S字状?)の縦耳を1対貼付。外面に線彫りと只須で蓮文?を施す。	表土・攪乱		
		底部	—	—	—	外面に鉄釉を流し掛ける(鉄灰?)。	表土・攪乱		
		底部	—	—	6.1	外面に只須を流し掛ける。外底面に鉛釉を釉に施した後、費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱		
		底部	—	—	9.0	外面に鉛釉を流し掛ける。費付にアルミナを塗布。	表土・攪乱		
		胴部	—	—	—	いわゆる雲鶴。外面にロクロ痕がみられる。	不明		
		胴部	—	—	—	外面に丸彫りで線文を施す。線文の胴部?。	不明		
小瓶	I	胴部	—	—	—	外面胴部の凹曲線は釉がわずかに剥げる。	表土・攪乱		
		底部	—	—	4.2	外底面に糸切り痕が明瞭に残る。外底に砂粒?が付着。	K-19畦		
小壺	II	底部	—	—	5.2	外面に白象土嵌で区画文・花文を施す。成形は19より丁寧。	不明		
		口縁部	5.9	—	—	素地は灰白色の微粒?で堅緻。中国産陶器の可能性もある。	J-18ピット18		
		口一底	4.3	9.5	5.9	外面に線彫りで二重線文を2条施す。内面に石灰が一部付着。	F-20・22基礎攪乱		
第43図・図版32	总須	I-a	口縁部	5.8	—	—	把子の孔に石灰が付着。内面にロクロ痕がみられる。	F-21基礎攪乱	
			胴部	—	—	—	内面にロクロ痕がみられる。沖口裏に孔を縦に2個?穿つ。	K-24南側3層	
		I-b	胴部	—	—	7.4	外底面に成形時の指痕がみられる。	表土・攪乱	
			底部	—	—	7.2	外底面に石灰が付着。	表土・攪乱	

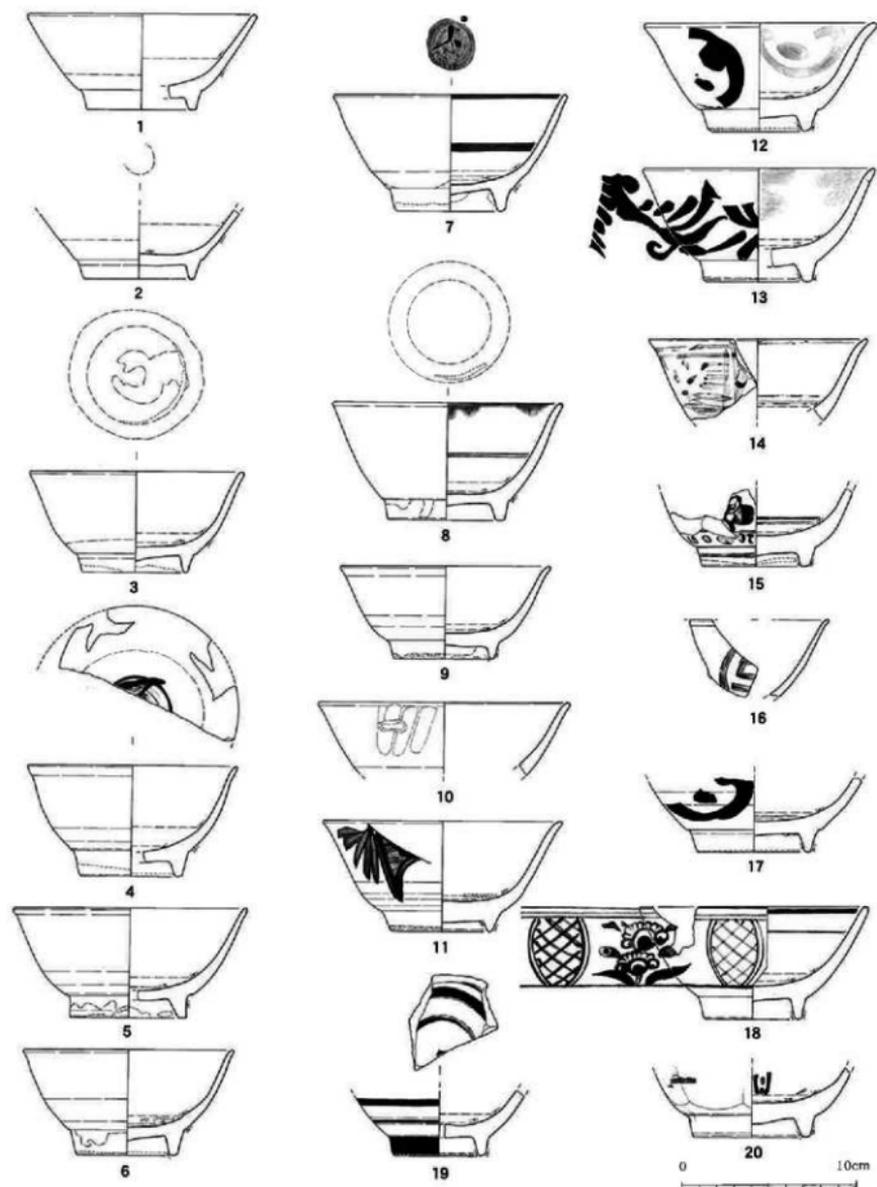
注 1: 計測不可、+: 接合の痕

第29表 沖繩産施釉陶器観察一覧

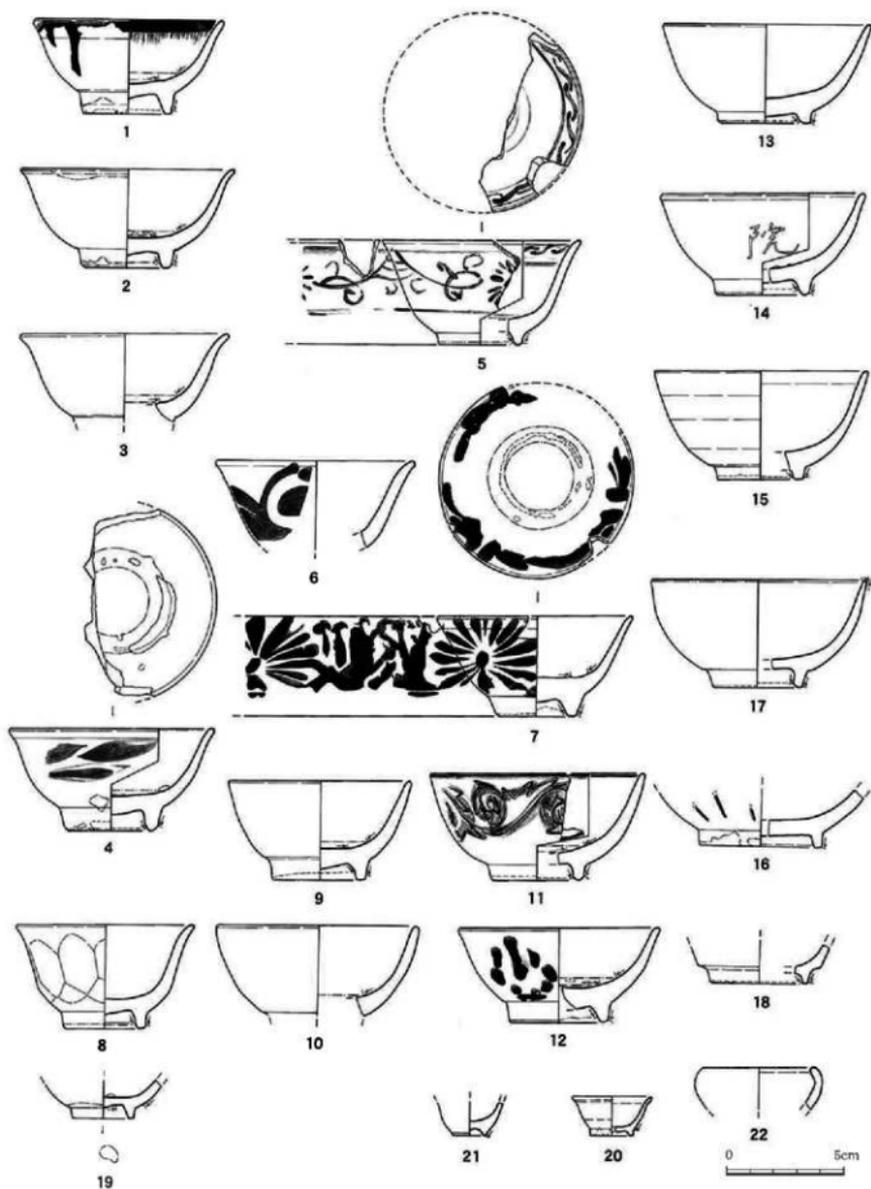
単位: cm

図番号	器種	分類	部位	口径	高さ	底径	観察事項	出土地		
6	第43図・陶器32	急須	I-b	注口	-	-	注口裏に約6mmの孔を三角状に3個穿つ。	表土・攪乱		
7			I-b	口一底	5.0	8.4	7.0	I唇部にアルミナを塗布。注口裏に孔を横に2個穿つ。	表土・攪乱(部穿穴) I-24ヒット7.8.9	
8					6.2	8.4	6.4	外面に線彫りと呉須で煉瓦文?を施す。注口裏に約6mmの孔を縦に2個穿つ。内底に扇状?が付着。	表土・攪乱	
9			I-c	口縁部	6.1	-	-	外面に線彫りと呉須で横文を施す。内面に石灰が付着。内面にロクロ痕がみられる。	F-21基壇攪乱	
10					5.0	-	-	外面に呉須で松竹梅文?を施す。内面にロクロ痕がみられる。	H-19ビッド1・F-20基壇攪乱	
11					I-底	5.0	-	6.3	外面に線彫りと呉須・胎輪で團扇・丸文・斜格子文を施す。注口と把手に練釉を流し掛ける。	F-20基壇攪乱
12			I-c	I-底	5.6	9.6	6.5	外面に線彫りと線彫りで花文・團扇・花丸文?を施す。注口裏に約6mmの孔を縦に2個穿つ。	基壇	
13					胴部	-	-	-	外面に線彫りで横文を施す。外面は白化粧を除き釉は剥離している(埋埋物?)。	表土・攪乱
14			II	把手	-	-	-	全体的に釉の発色は不明瞭(白色に濁る)。	表土・攪乱	
15					I-縁部	10.6	-	-	内面口縁部に輪割ぎ時の削り痕がみられる。	表土・攪乱
16			III	胴部	-	-	-	注口裏に約3cmの孔を1個穿つ。内面にロクロ痕がみられる。	表土・攪乱	
17					把手	-	-	-	外面の施釉はやや雑でムラがある。	表土・攪乱
18			酒器	I	胴部	-	-	-	外面に線彫りと呉須・胎輪で化弁文・團扇・斜格子文を施す。注口に練釉を流し掛けるが剥離が著しい。	表土・攪乱
19					II-a	胴部	-	-	-	外面に線彫りで「落成 クラブ」の銘を施す(他は判読不可)。
20	II-b	底部			-	-	7.2	外面に線彫りと呉須・胎輪で化弁文を施す。注口に練釉を流し掛ける。	表土・攪乱(部穿穴)	
21		底面			-	-	9.2	内面にロクロ痕がみられる。	不明	
1	第44図・陶器33	蓋	I-b	口一底	8.2	3.5	5.9	胎輪部に陰面線?を巡らす。蓋基部に約3mmの孔を1個穿つ。	表土・攪乱	
2					8.1	2.8	6.3	蓋基部に約4mmの孔を1個穿つ。	表土・攪乱	
3			I-c	口一底	5.7	3.2	3.8	蓋基部に約5mmの孔を1個穿つ。底上面に器物の溶着痕がみられる(器底の蓋の一部?)。	F-20畦	
4					底部	5.5	-	3.9	外面に線彫りと呉須で鳥鳥文?を施す。蓋基部に約5mmの孔を1個穿つ。	L-20造成層
5						5.5	-	4.4	外面に線彫りと呉須で文様(笹と梅花)を施す。蓋基部に約5mmの孔を1個穿つ。	表土・攪乱
6			I-c	口縁部	6.8	-	-	外面に線彫りと呉須・胎輪で花弁文を施す。蓋基部に約6mmの孔を1個穿つ。第43図11の蓋である。	表土・攪乱	
7					口一底	6.4	2.9	4.9	外面に線彫りと呉須で車輪文を施す。蓋基部に約4mmの孔を1個穿つ。第43図8の蓋である。	表土・攪乱
8			I-d	口一底	5.4	2.8	3.4	胎輪部に陰面線?を巡らす。蓋基部に約5mmの孔を1個穿つ。	表土・攪乱	
9					II-a	底部	5.6	-	4.2	外面に黒土裏底で團扇・鳥文?を施す。全体的に釉の発色は不明瞭(白色に濁る)。
10			II	I-縁部	12.3	-	10.1	滑り止めの曹付部に患助が一部付着。	F-22基壇攪乱	
11	III	口一底			10.5	3.5	6.3	底上面の露胎部にアルミナが溶着。滑り止めの曹付部にアルミナを塗布。	表土・攪乱	
12	火炉	-	I-縁部	15.8	-	-	内面口縁部に三角形の器物受を貼付。	表土・攪乱		
13			II	胴部	-	-	-	外面に臍面(筋?)の外耳を貼付。	表土・攪乱	
14	香炉	-	口縁部	11.6	-	-	鉄軸の下に白化粧が確認される。	表土・攪乱		
15				9.0	-	-	14に比してI唇部の縁が明確に確認される。	不明		
16	火取	I-a	I-縁部	12.0	-	-	I唇部に白土を塗布。胎輪は被焼痕を呈する。	表土・攪乱		
17				12.4	-	-	内面口縁部に三角形の器物受を貼付。口唇部にアルミナを塗布。	表土・攪乱		
18			I-b	口縁部	14.4	-	-	内面にわずかに石灰が付着。	表土・攪乱	
19					10.6	8.6	7.0	外面に丸彫りで團扇を2条巡らす。外底に墨書で「天」の銘を施す。	F-20基壇攪乱	
20			I-b	口一底	10.2	8.1	6.8	外面に丸彫りで英文(藤欵?)を施す。外底に墨書で「寺社」の銘を施す。	表土・攪乱	
21					II	底面	-	-	11.8	外面を竹筒状に成形。内面にロクロ痕がみられる。
22			I-c	口一底	10.6	8.3	6.6	壁付にアルミナを塗布。内底付近に器物片?が溶着。	表土・攪乱	
23					10.0	8.0	7.4	外面に練釉で丸文?を3個施す。	表土・攪乱	
24					底?	-	-	12.8	外面に透かし彫りを施す(線彫りと呉須・胎輪で文様を施すが全形は不明)。内底に目跡?が付着。	不明
25					II	I-縁部	11.0	-	-	外面に飛輪で文様を巡らす。
26	灯明具	II	胴部	-	-	-	外面に線彫りで斜格子文を施す。火炉の可能性もある。	I-28南側3層		
27				I	口一底	8.8	2.0	4.4	両面口唇部に患助?が付着。内面の透明釉は剥離している。	不明
28	不明	-	III	底部	-	-	7.3	器付にアルミナ及び器物片が僅かに付着。内面にロクロ痕がみられる。	表土・攪乱	
29					I-底	1.8	2.9	3.6	内面にロクロ跡がみられる。	表土・攪乱

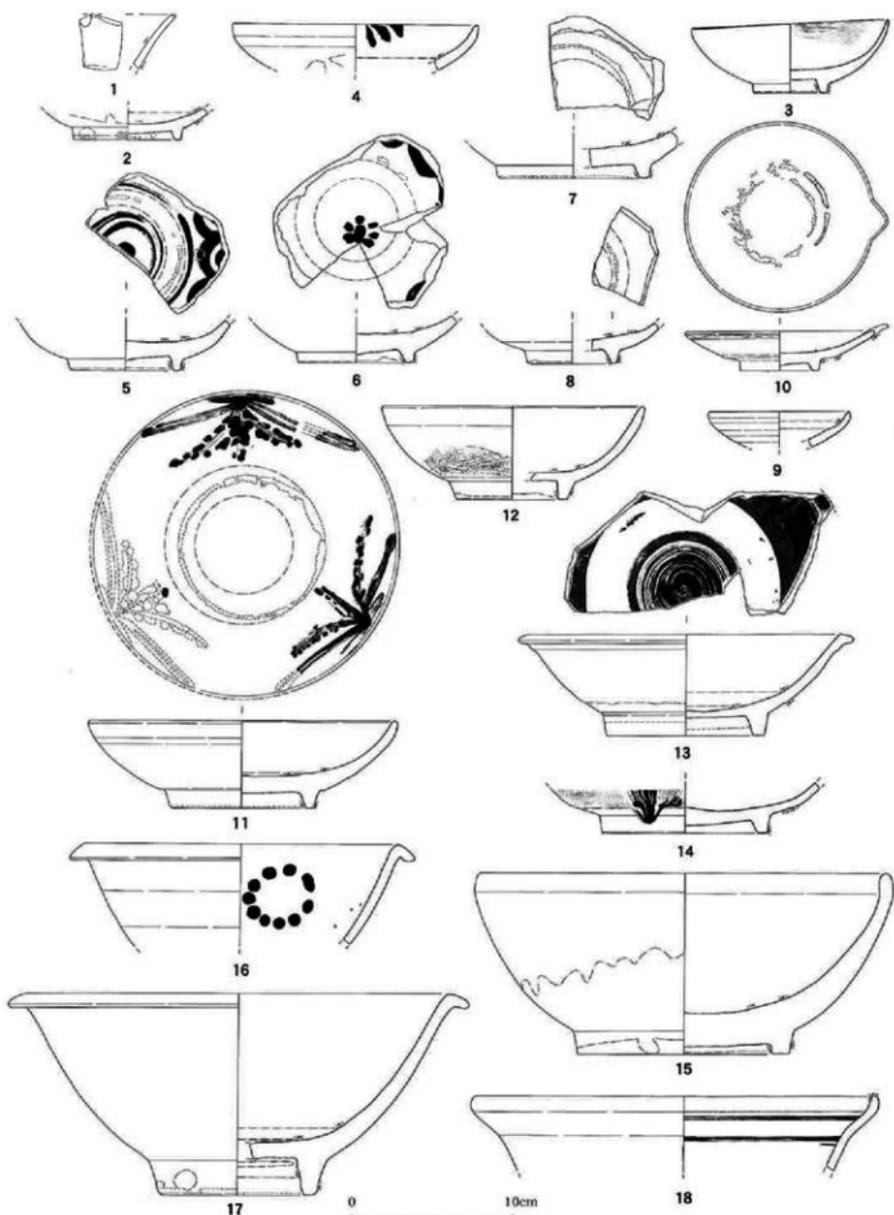
注 1: 計測不可。.: 接合の意



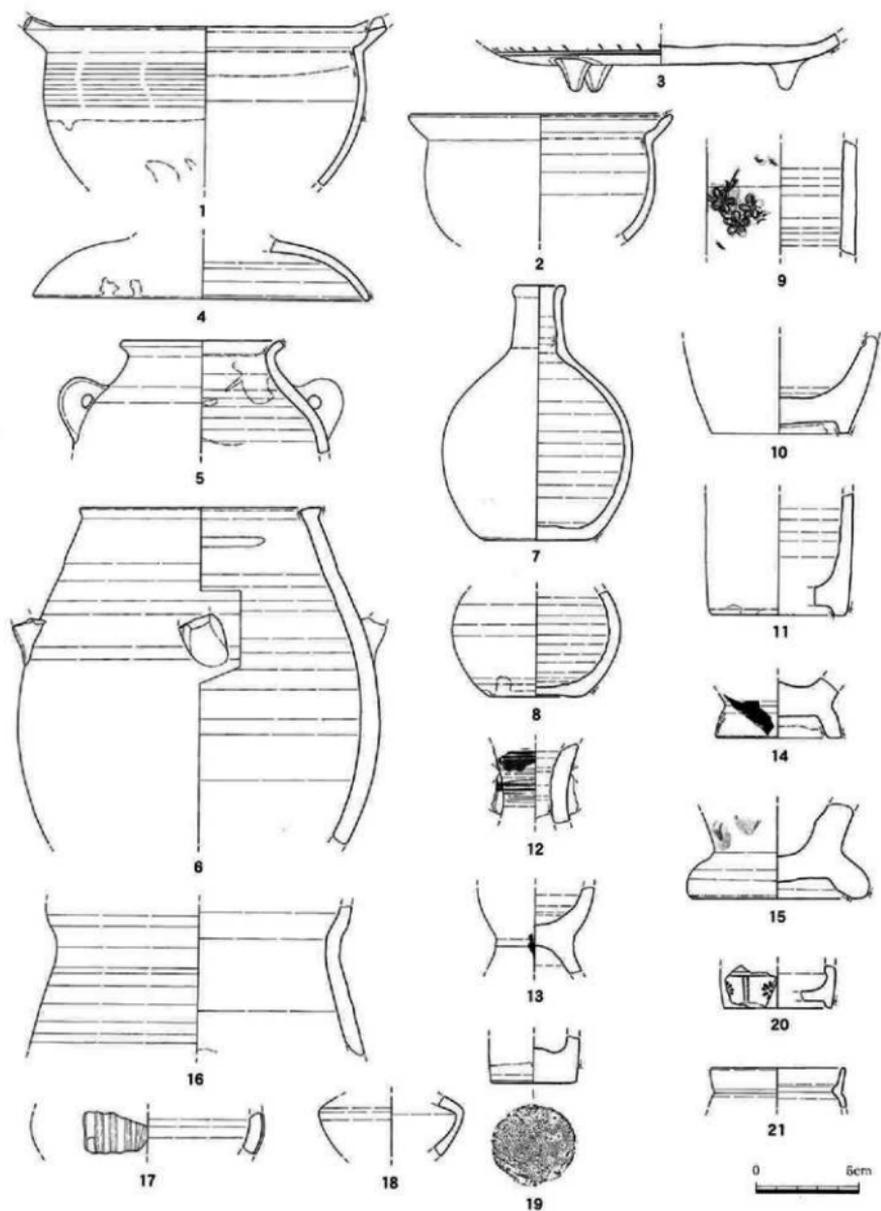
第39图 沖縄産施釉陶器 (1)



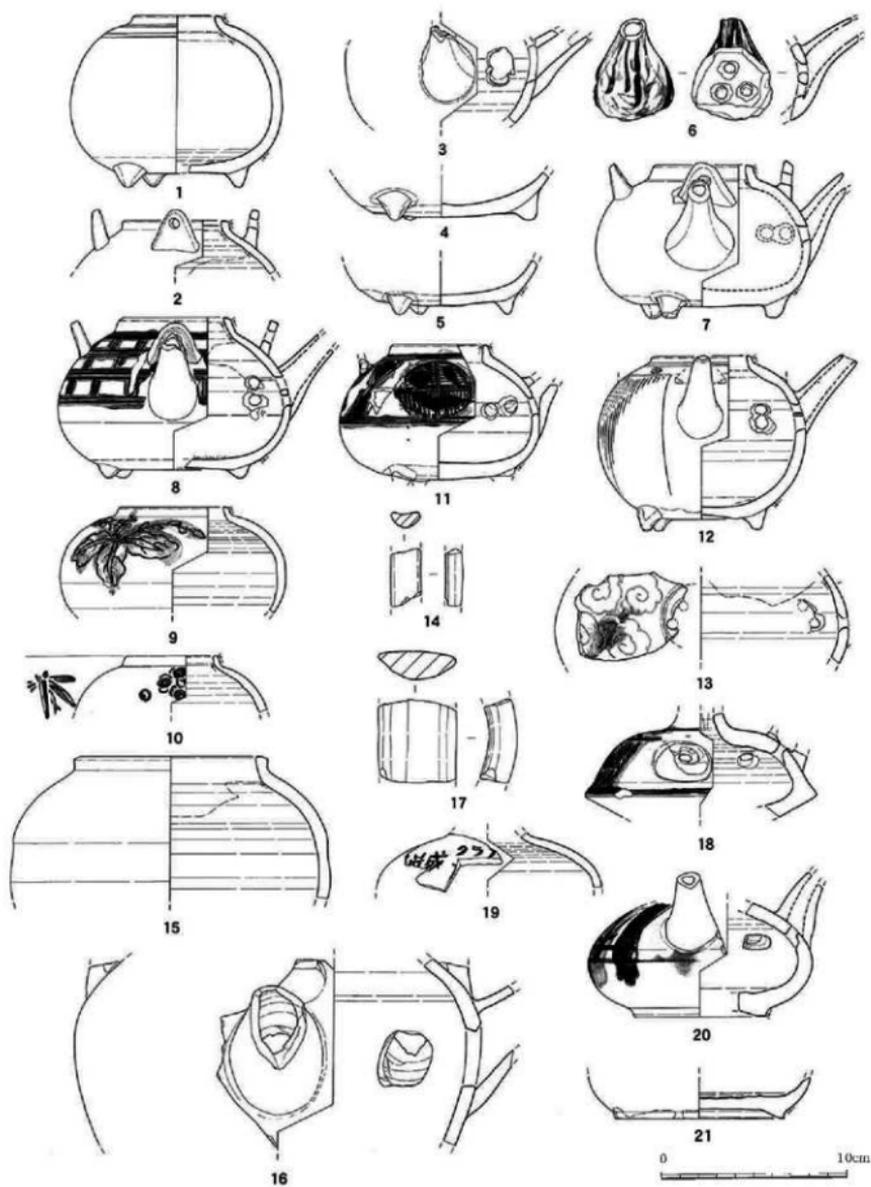
第40図 沖縄産施釉陶器(2)



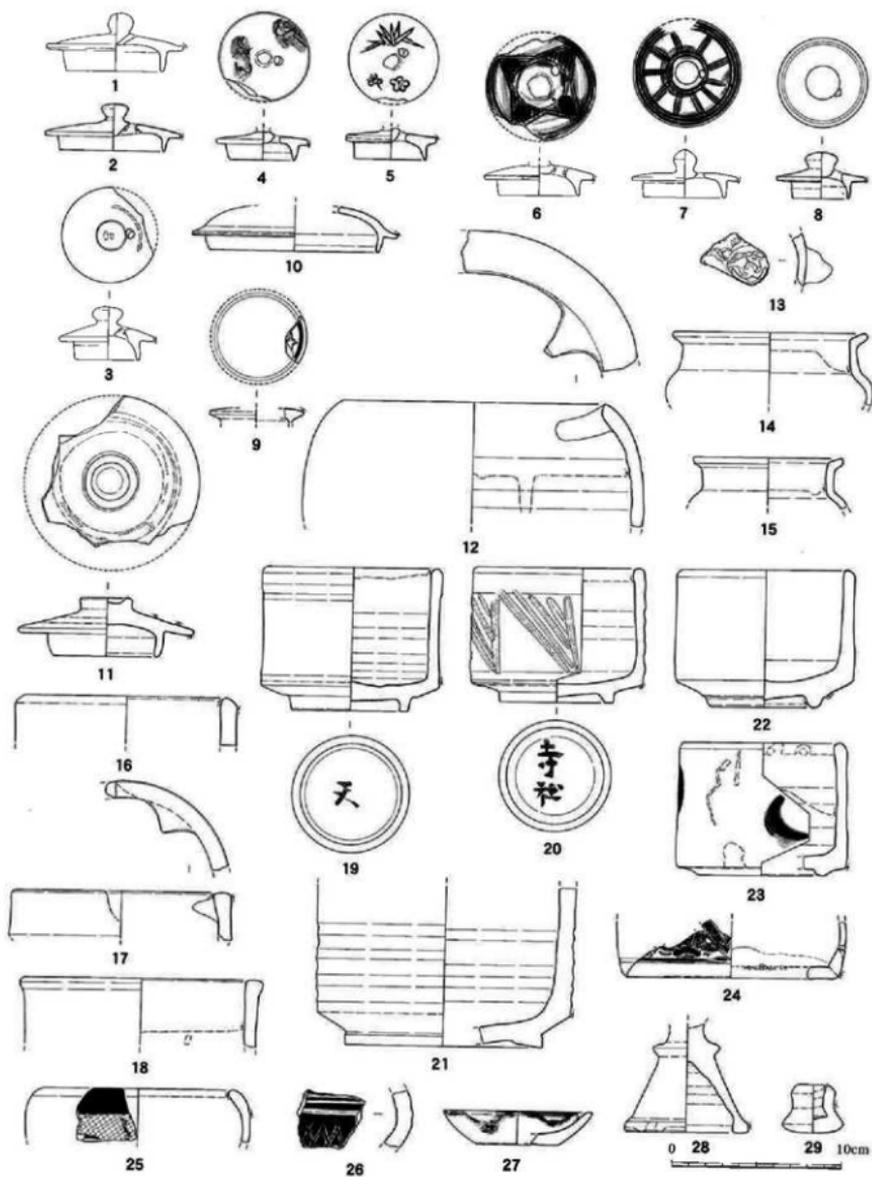
第41図 沖縄産施釉陶器 (3)



第42図 沖縄産施釉陶器 (4)



第43図 沖縄産施釉陶器 (5)



第44圖 沖縄産施釉陶器（6）

第20節 沖繩産無釉陶器

高火度で焼成された焼き締め陶器で、方言で「荒焼（アラヤチ）」とも称される。基本的には無釉であるが、マンガン釉や泥釉などの自然釉が施される例もある。器種は碗・皿・火か・火取・蓋・急須・瓶・鉢・搦鉢・壺・甕が確認されているが、壺や甕などの貯蔵器が主体を占める。以下に各器種の分類概念を記し、個々の詳細は第30表に譲る。

碗（第45図1～4）

I類一高台列りの浅い厚手の碗で、口縁部は直口するもの（1）と外反するもの（2）がある。1は外底に判？が確認される。3は高台脇に削りを入れる。無文。II類一高台列りがI類に比して丁寧なもの。口縁部の形態及び文様の有無は不明（4）。

皿（第45図5～9）

I類一底部から逆「ハ」の字状に立ち上がる直口縁部の小皿で、底部は高台を持たず平底を呈する。無文（5～8）。II類一器形はI類に似るが胴部に稜を持つもの。無文（9）。

火取（第45図10、11、27）

I類一平底の底部からほぼ垂直に立ち上がり、肩部で内側に屈曲するもの。外面肩部に方形の把手を1対、外底には円蓋状の脚を3つ貼付する。10は両面に泥釉を施軸する。11は両面に灰褐色の釉を施す。いずれも無文と思われる。II類一胴部が球形を呈するもので、底部は高台を持ち「割高台」が施される（27）。

火取（第45図12～14）

平底の底部から垂直に立ち上がる円筒状の器形で、直口口縁を呈するもの（12）、頸部で内側に屈曲するもの（13）、外底に円蓋状の脚を貼付するもの（14）がある。14は外底に判？が施される。

蓋（第45図15～19）

I類一庇内面をくぼませ撮みを形成するもの。小形のもの（15）と大形のもの（16）がある。いずれも無文。II類一皿形の器を伏せた形を呈するもの。庇端部の形態は不明（17）。III類一庇上面をドーム状に傾斜させるもので、端部を外側に張り出す。撮みの形態及び文様の有無は不明（18）。IV類一庇が「ハ」の字状に傾斜するもので、滑り止めを持たない。無文（19）。

急須（第45図20）

器形が球形を呈するもので、胴部に円錐状の注口を設ける。口縁部及び底部の形態は不明。無文。

瓶（第45図21～26）

I類一胴部が砲弾形を呈する大形の徳利で、口縁部が舌状のもの（21）と方形のもの（22）がある。II類一言で「チュウカサー」または「ヒラチビ」と称されるもの。外面に黒褐色の釉を施軸する（23）。III類一口縁をほぼ垂直に立ち上げる長頸の瓶（24、25）。26はIII類の底部で、削り出しの浅い高台を有する。

鉢（第46図1～10）

I類一口縁部が内湾する平底の鉢で、「ミジクブサー」とも称される。口縁部の形態により、頸部がすばまるもの（I-a）、口縁部が断面三角形に肥厚するもの（I-b）、口縁部が舌状のもの（I-c）に分かれる。aは両面に泥釉を施軸するもので無文（1）。bは両面に泥釉を施軸するもので、外面に櫛描きで文様を施す（2）。cは外面に櫛描きで文様を施すもの（3）と、無文のもの（4、10）がある。5はI-cの範疇に含まれるもので、口唇部をくぼませ蓋受部を設ける。無文。II類一口縁部を外側に折り曲げ鋸縁状を呈するもの。外面に赤色顔料を塗布する（6）。III類一平底の底部からほぼ垂直に立ち上がる桶形のもの。口縁部の形態は不明（7、8）。

搦鉢（第46図11～22）

I類一腰部から逆「ハ」の字状に開く器形で、口縁部直下に抉りを入れ稜を形成するもの。搦日は内面全体に施され、口縁部のみ搦日がナゲ消される（11～14）。底部は平底を主とするが、高台を持つもの（15～17）もある。II類一口縁部を外側に折り曲げ鋸縁状を呈するもの。搦日は内面全体に密に施され、口縁部のみ搦日がナゲ消される。底部は平底で高台を持たない（18～22）。

壺（第47図）

I類一卵形の胴部から頸部を垂直に立ち上げるもので、口縁部を外側に折り曲げ鋸縁状を呈する（1～4）。他に口縁部を方形に成形するもの（5）や、鋸上面をくぼませるもの（6）もあるが、いずれもI類の範疇に含まれる。II類一胴部が砲弾形を呈する玉縁口縁の壺で、肩部に紐状の横溝を貼付する。外面に泥釉を施軸するも

の(7~9)と、褐灰色の釉を施釉するもの(10)がある。Ⅲ類一肩部を強く張り頸部を垂直に立ち上げるもので、外面に圈線を巡らせる。口縁部の形態は不明(11)。

Ⅱ (第48図)

Ⅰ類一口縁部を外側に折り曲げ鈎縁状を呈するもので、肩部に最大径を持ち頸部がすぼまるもの(Ⅰ-a)と、底部からほぼ垂直に立ち上がるもの(Ⅰ-b)がある。aは外面に御描きで文様を施す(1)。bは外面に御描きで文様を施すもの(2)、外面に圈線を巡らせるもの(3、5)、無文のもの(4)がある。Ⅱ類一口縁部が断面方形形状を呈するもので、肩部に最大径を持ち頸部がすぼまるもの(Ⅱ-a)と、底部からほぼ垂直に立ち上がるもの(Ⅱ-b)がある。aは外面に圈線を巡らせる(6)。bは貼り付けて文様を施すもの(7、9)、御描きで文様を施すもの(8)がある。

＜参考文献＞

- 『沖繩のやきもの—南海からの香り—』佐賀県立九州陶磁文化館 1998
 『九州陶磁の編年—九州近代陶磁学会10周年記念—』九州近代陶磁学会 2000
 盛本勲・北沼優子・城間幸他『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第1集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001.3
 高野洋・島袋美・宮崎清乃他『天界寺跡(Ⅰ)—首里社地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001.3
 島袋洋・西銘幸・城間幸他『首里城跡—下之御庭跡・用物置跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書—』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第3集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001.3

第30表 沖繩産無釉陶器観察一覧

図番号	器種	分類	部位	口径	器高	底径	観察事項	単位:cm
								出土地
45 図 34	甌	Ⅰ類	口一底	13.0	5.8	5.2	素地は褐色粒子。外底に「一」の判。外面回転痕。	K-22北側3層・I-25ビット5
			口縁部	13.5	—	—	素地は灰褐色粒子で堅緻。両面輪痕。	H-26南側3層
		Ⅱ類	底部	—	—	8.7	素地は鈍褐色粒子。外面口口痕と回転痕。	損孔(爆弾穴)
			底部	—	—	6.8	素地は赤褐色粒子で堅緻。両面口口痕。	I-28南側3層
5	Ⅰ類	口一底	9.0	2.6	2.8	素地は灰褐色粒子で白色は鈍褐色。内面は被熱して灰褐色に変色。内面に石灰?が付着。外面回転痕。	K-19瓦・壁跡付・I-22方形状遺構	
10.0			2.9	3.9	素地は明赤褐色粒子。口唇部に黒?が付着。両面口口痕。	F-21トレンチ表上・損孔		
9.2			2.4	5.7	素地は灰褐色粒子。底部は上げ底。両面口口痕で外面腹部に回転痕。	K-22瓦層り		
—			—	4.0	素地は褐色粒子。外面に圈線。外面回転痕で外底の成形は筈。	L-28表土(埋孔層)		
8	Ⅱ類	口一底	10.0	3.0	6.0	素地は褐色粒子。外面に回転痕で外底の成形は丁寧。	不明	
10		口一底	11.2	16.1	12.2	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。器色は一様赤褐色。外面口口痕と回転痕。内面口口痕。	L-M・20瓦層りC	
11	火取	Ⅰ類	把手	—	—	—	素地は赤褐色粒子。内面口口痕。把手の孔は直径約1cmで、把手直下に約3mmの孔を穿つ。	K-L-16北側1層
12			口縁部	12.6	—	—	素地は赤褐色粒子。内面口口痕。	L-21石垣B(埋孔層)
13	火取	Ⅰ類	口一底	11.0	9.1	11.0	素地は明赤褐色粒子。外面頸部に黒を有する。内面口口痕。	損孔(爆弾穴)
14			底部	—	—	9.4	素地は褐色粒子で白色は鈍褐色。内面口口痕。外底に判?	損孔(爆弾穴)
15	蓋	Ⅰ類	縁み	—	—	—	素地は褐色粒子で石灰質混入。縁み中央に直径約5mmの孔を穿つ。	I-26南側2層
16			縁み	—	—	—	素地は赤褐色粒子。内面口口痕。外面に暗赤褐色の施を施す。	F-20味噌(埋孔層)
17	蓋	Ⅱ類	縁み	10.9	—	—	素地は赤褐色粒子で堅緻。外面に圈線。外面に目跡?が付着。	不明
18			底	14.8	—	—	素地は赤褐色粒子。外面は灰褐色に変色。両面口口痕。	M-21瓦層りC
19	Ⅱ類	底	—	—	—	10.0	素地は鈍赤褐色粒子。底端部は灰赤褐色に変色。両面口口痕。	損孔(爆弾穴)
20			注1	—	—	—	素地は鈍赤褐色粒子。注口の孔は直径約5mmを測る。内面口口痕。	I-L-24南側1層
21	甌	Ⅰ類	口縁部	6.0	—	—	素地は鈍赤褐色粒子。外面に圈線。両面口口痕。	損孔(爆弾穴)
22			口縁部	9.6	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で白色は灰褐色。外面に圈線。内面口口痕。	I-24南側1層
23		Ⅱ類	底部	—	—	12.0	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。両面に口口痕。内面に石灰?が付着。	F-21表土・埋孔
			口縁部	3.1	—	—	素地は明赤褐色粒子で白色は鈍赤褐色。口縁部は玉縁状を呈する。両面口口痕。	M-22・23表土(埋孔層)
24	Ⅱ類	底	—	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。両面口口痕。	損孔(爆弾穴)	
25			底	—	—	9.6	素地は褐色粒子。高台割りは浅い。両面口口痕。	L-24南側3層
26	火取	Ⅱ類	底	—	—	8.6	素地は明赤褐色粒子。外面に圈線。外底中央に約2cmの孔を穿つ。両面口口痕。	損孔(爆弾穴)
27			底	—	—	—	—	—

注「-」:計測不可、「?」:接合の意

第30表 沖繩産無釉陶器観察一覧

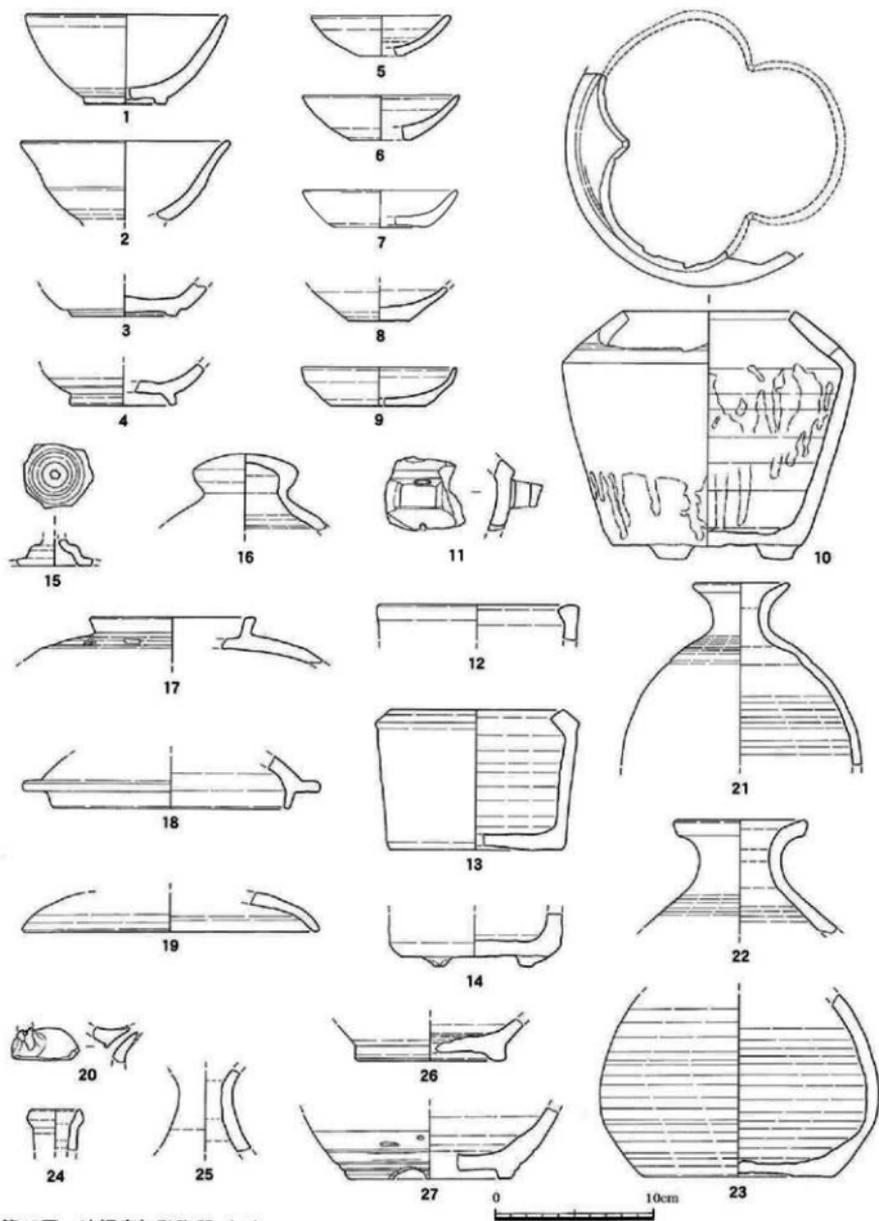
単位: cm

図番号	器種	分類	部位	L径	径高	底径	観察事項	出土地	
第46図・図版35	鉢	I-a	口縁部	15.4	—	—	素地は灰褐色粒子で堅緻。両面ロクロ痕。	L-16北側1層	
			L径部	21.1	—	—	素地は鈍赤褐色粒子。外面に6本線の波状文。内面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)	
		I-c	口縁部	25.2	—	—	素地は明赤褐色粒子。外面は灰褐色に変色。外面に隠線。帯掻きの波状文。両面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)	
			口縁部	—	—	—	素地は褐色粒子で白色粒混入。外面回転痕。内面ロクロ痕。	N-25南側3層	
		II類	口縁部	24.4	—	—	素地は褐色粒子で白色粒混入。外面回転痕。内面ロクロ痕。	N-25南側3層	
			L径部	19.9	—	—	素地は褐色粒子で器色は鈍赤褐色。両面ロクロ痕。	K-L-16北側1層	
		III類	底部	—	—	12.2	素地は褐色粒子。外面回転痕。内面ロクロ痕。	K-L-16北側1層	
			底部	—	—	23.8	素地は灰褐色粒子で器色は鈍赤褐色。外面回転痕。内面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)	
		I-c	底部	—	—	15.4	素地は褐色粒子で器色は一部赤灰色。外面ロクロ痕と回転痕。内面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)	
			口縁部	24.0	18.8	18.0	素地は淡赤褐色粒子。両面ロクロ痕。中国産の長輪陶器の可能性もある。	H-22方形張り込み遺構	
	攝鉢	I類	口縁部	L径部	33.1	—	—	素地は明赤褐色粒子。内面に10本線の罫目を右回転で施し、L径部はナゲ消す。両面ロクロ痕。	表十・複乱
				底部	—	—	9.0	素地は褐色粒子。内面に7本線の罫目を右回転で施す。外面ロクロ痕。	N-24表上
			口縁部	口縁部	23.5	—	—	素地は褐色粒子。罫上面に隠線。内面に罫目を前に施し、L径部はナゲ消す。両面ロクロ痕。	F-20基壇複乱
				口縁部	29.4	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。外面に灰白色の粒を施す。内面に10本線の罫目を施し、L径部はナゲ消す。	I-H-23溝状遺構
			底部	底部	—	—	15.4	素地は褐色粒子。内面は塗熱して一部褐色に変色。内面に罫目を施す。高台部に直徑約1cmの孔を穿つ。	J-28南側3層
				底部	—	—	12.8	素地は褐色粒子。外面は塗熱して一部褐色に変色。内面に罫目を施す。両面ロクロ痕。	M-22-23表土(原丸)
			口縁部	口縁部	—	—	10.2	素地は鈍赤褐色粒子で穀粒混入。内面に8本線の罫目を右回転で施す。	L-26南側4層
				口縁部	28.7	12.6	12.4	素地は褐色粒子。罫上面に隠線。内面に罫目を密に施し、L径部はナゲ消す。両面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)
			II類	L径部	30.4	—	—	素地は明赤褐色粒子。罫上面に隠線。内面に罫目を密に施し、L径部はナゲ消す。両面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)
				L径部	26.0	—	—	素地は褐色粒子。L径部は一部塗熱して褐色に変色。内面に罫目を右回転で密に施し、口縁部はナゲ消す。両面ロクロ痕。	F-20基壇(複乱)
	底部	底部	—	—	11.4	素地は明赤褐色粒子で器色は一部赤灰色に変色。内面に罫目を右回転で密に施し、口縁部はナゲ消す。	F-20基壇(複乱)		
		底部	—	—	9.0	素地は鈍赤褐色粒子。内面に罫目を右回転で密に施す。両面ロクロ痕。	F-22基壇(複乱)		
第47図・図版36	壺	I類	口縁部	12.0	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。外面は灰褐色を呈する。両面ロクロ痕。	不明	
				13.2	—	—	素地は鈍赤褐色粒子。内面に石灰が付着。両面ロクロ痕。	F-21基壇	
				11.8	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で器色は灰褐色。両面ロクロ痕。	不明	
				15.0	—	—	素地は鈍赤褐色粒子。外面に隠線。両面ロクロ痕。	不明	
				19.6	—	—	素地は灰褐色粒子で灰白色粒混入。両面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)	
		II類	口縁部	25.8	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。両面に灰褐色の粒を施す。罫上面に帯掻痕(把子?)。両面ロクロ痕。	不明	
			口縁部	15.3	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で器色は鈍赤褐色。外面に隠線。両面ロクロ痕。器内はアバタ状。	F-23基壇(複乱)	
		III類	口縁部	15.0	57.8	21.8	素地は鈍赤褐色粒子で外面は一部灰褐色。外面に隠線。外面ロクロ痕と回転痕。内面ロクロ痕。	J-16-17複乱	
			底部	—	—	24.5	素地は褐色粒子で外面は一部灰褐色。外面に隠線。外面回転痕。内面ロクロ痕。	H-28南側1層・I-28南側3層	
		II類	口縁部	27.0	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。白色粒混入。内面に灰褐色の粒を施す。両面ロクロ痕。	不明	
			胴部	—	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で外面は灰褐色。外面に隠線。帯掻きの波状文。内面ロクロ痕。	不明	
第48図・図版37	甕	I-a	口縁部	34.3	—	—	素地は明赤褐色粒子で外面は灰褐色。外面に隠線。帯掻きの波状文。丸文貼り付け。両面ロクロ痕。	F-20基壇(複乱)	
			口縁部	42.8	—	—	素地は明赤褐色粒子で内面は灰褐色。罫上面に隠線。外面に隠線。帯掻きの波状文。両面ロクロ痕。	F-22基壇(複乱)	
			口縁部	44.8	—	—	素地は明赤褐色粒子。罫上面に隠線。外面に隠線。内面ロクロ痕。	不明	
		I-b	口縁部	36.5	—	—	素地は褐色粒子で器色は明赤灰色。罫上面に隠線。両面ロクロ痕。	F-20基壇(複乱)	
			口縁部	—	—	—	素地は明赤褐色粒子で内面は鈍褐色。外面に隠線。両面に石灰が付着。両面ロクロ痕。	M-23表土(原丸)	
		II-a	口縁部	39.5	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で外面は一部灰褐色。外面に隠線。両面ロクロ痕。	複乱(燻炉穴)	
			L径部	35.8	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で内面は鈍赤褐色。外面に貼り付け丸文。尖唇。両面ロクロ痕。	F-21トレンチ基壇(複乱)	
		II-b	口縁部	46.4	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で外面は灰褐色。外面に隠線。帯掻きの波状文。内面ロクロ痕。	不明	
			胴部	—	—	—	素地は鈍赤褐色粒子で白色粒混入。外面に貼り付け尖唇。外面回転痕。内面ロクロ痕。	F-20基壇(複乱)	

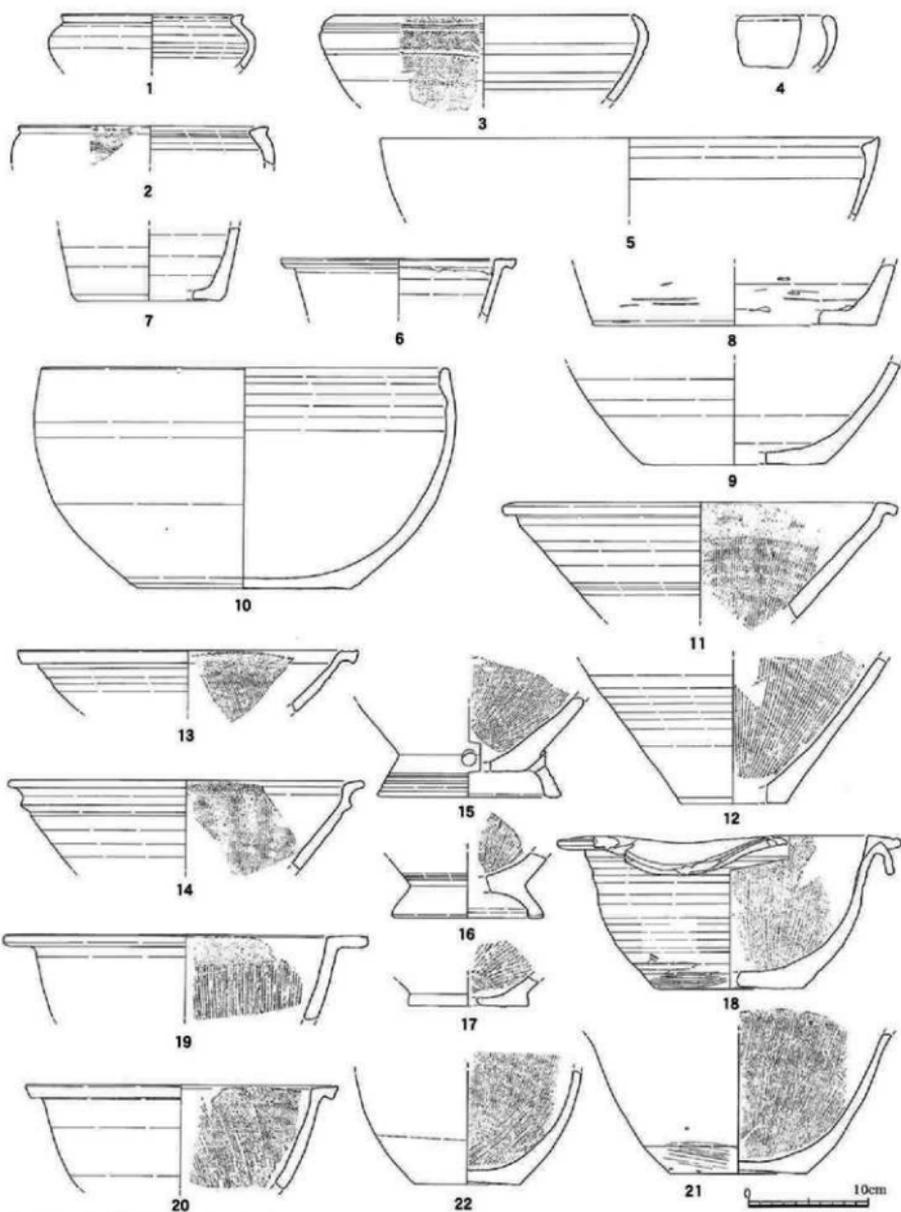
注「-」:計測不可、「=」:接合の意

第31表 沖繩産無釉陶器出土状況

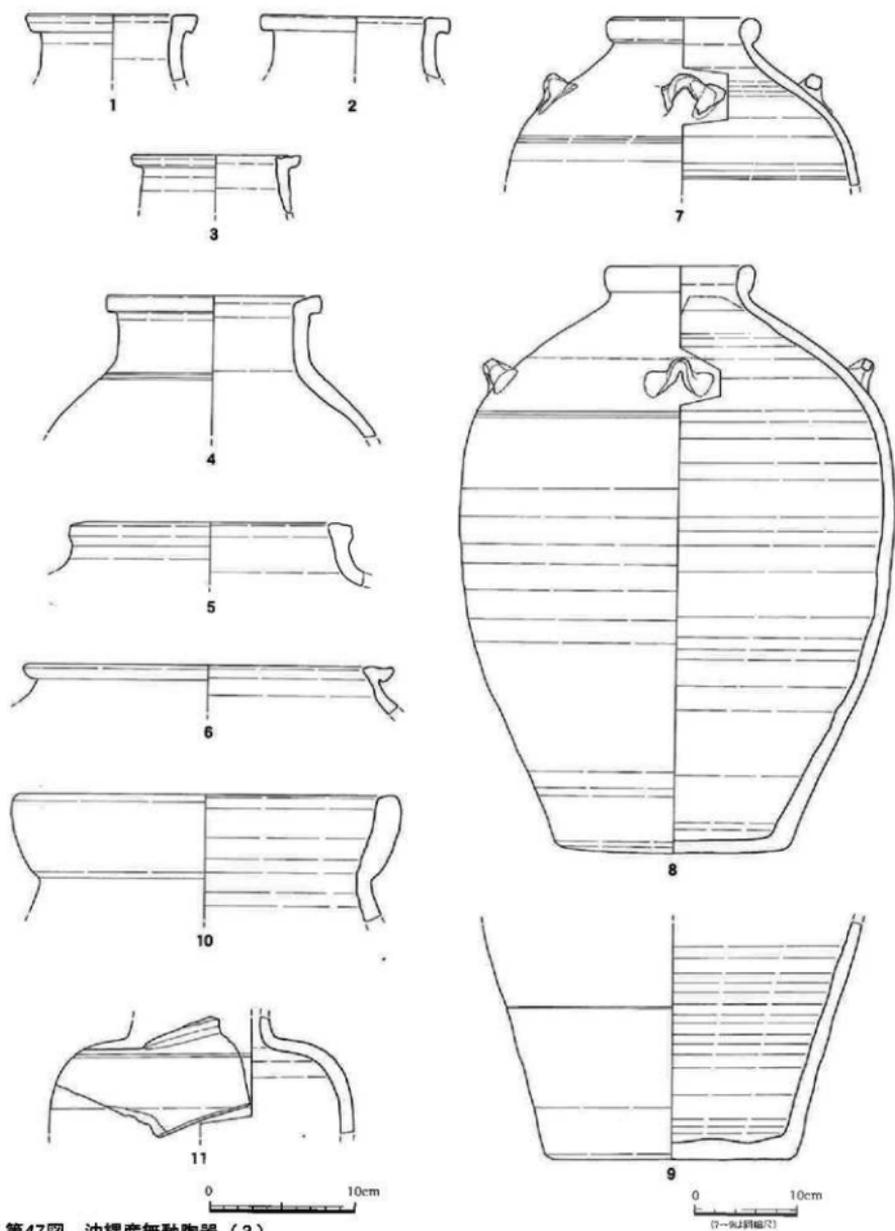
器種・分類	出土地	表土・覆土	畦	トレンチ	南側				北側		地山直上	基礎	方形掘込み遺構	コイラル敷A	コイラル敷B	右列A	右列B	右列D	右列E	石田C	溝状遺構A	溝状遺構D	溝状石列	瓦葺まりB	瓦葺まりC	ビッド	遺構	不明	合計		
					1層	2層	3層	4層	1層	2層																					
碗	口一底									1																		1			
	口縁部	4									1															4	9				
	底部	10		3	1				1	1											2			1		1	20				
皿	直口	4		2	1	5	2	1																	1	9	25				
	外反																										2				
	肥厚																										2				
	口縁部	2																									2				
	胴部	1		1		1																					4				
その他	胴部	1																									1				
	底部	1																									1				
	底部	1																									2				
小皿	口一底																										1				
	口縁部																										1				
甕	丸形	1										1															2				
	方形	9																									9				
	舌状	2																									2				
	逆三角	4																									4				
	逆L字	1				1																					2				
	その他	口一底																										1			
		口縁部	4																									5			
胴部	有文	22		3	3	1	1					1	1												1	5	38				
	無文	252	19	49	23	26	7	12	14	2	6	6	3	3						3	4	2	1	3	1	13	1	12	61	523	
底部	有文																											2			
	無文																											8			
大型	無文	口縁部	7		1																							1			
		胴部	20		2				1																			1	7	32	
	有文	口一底	44	2	6		6			2	1	1				1									4	2	1	16	86		
		口縁部	1																										2	3	
	無文	口一底	13		2			1																					2	3	
		胴部	56	1	1	8	6			2		1	3													2	1	5	25	112	
		底部	10	1	3	2	2	2	1	2	1				1											6	1	5	20	112	
		耳	1																										3	29	
	小型	把手	1	1			1																						1	3	
		口縁部	13	2			1		1	4	1	1														3		5	34		
底部	有文	1								1																		2			
	無文	4			1	1	1		2		1																	4	14		
瓶	外反	1																										1			
	内湾	1																										1			
	有文	1		1																								3	6		
	口縁部	1																										1			
	その他	6		2	1			2			1																	1	14		
底部	有文	1																										2			
	無文	192	13	25	6	23	4	8	13	8	3	2	1	4	1		1	2	5								11	10	8	75	415
急須	胴部																											1			
	注口				1																							2			
火鉢	底部	2																										2			
	口一底	1																										1	2		
	口縁部	5		2		1				1																		2	12		
火取	底部	1		1																								1	4		
	把手	1		1																								1	1		
鉢	口縁部	1																										1			
	逆L字A	11		3		2	1				1																	2	4	25	
	逆L字B	48	6	4		1	1	1	1	1		3	1															1	20	90	
	その他	口一底													1														1		
		有文																											1	2	
底部	有文	30	1	6	3	2	1																					2	4	53	
	無文	8		1																								1	13		
水鉢	口縁部	1																										1			
	胴部	2																										2	6		
花鉢	逆三角	2																										1	5	8	
	方形	5			1																							3	9		
底部	有文	8																										1	11		
	無文	1																										1	1		
罌鉢	口一底	28	1	4	2	3	1	1	3			2																1	11	70	
	胴部	97	7	13	4	6	3	2	5	2		3	1															2	2	30	186
	底部	24		2	2	2	2																					2	8	40	
	口縁部	1																											1	3	
蓋	拵み	2			1																							1	4		
	底部	1																										1	1		
不明	口縁部	2				1																						3			
	底部	1			1																							2	2		
合計		985	59	1	143	47	97</																								



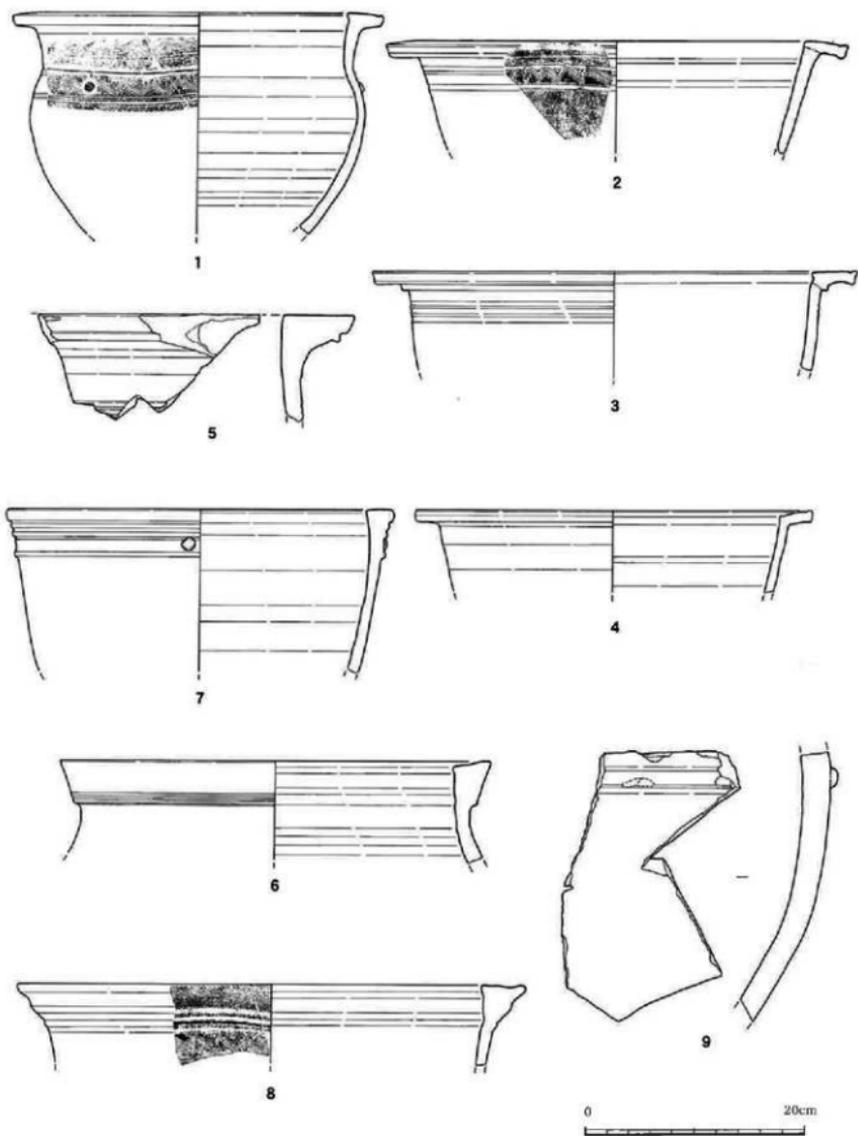
第45圖 沖繩産無釉陶器（1）



第46図 沖縄産無袖陶器 (2)



第47図 沖縄産無軸陶器 (3)



第48图 冲繩産無袖陶器(4)

第21節 陶質土器

ここで扱う陶質土器とは、壺屋で「アカムヌー」²¹と呼ばれているものである。アカムヌーは、胎上を精選し、混入物に砂粒・白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母などがあり、ロクロ引き・輪積みによって成形される。また、高い耐火性を目的とする（二次的に火を受ける）器種が多い為、低い焼成温度で焼かれており、触れると粉末が付着する。今回の調査では鍋・急須・火炉・灯明皿・水鉢・鉢・浅鉢・搦鉢・碗・瓶・壺・蓋などが確認できた。これらの器色は棕褐色や黄褐色を主体とし、鍋・火炉・急須・灯明皿のような使用時に火を受ける器種の内外には煤が付着している。各器種の概要は下記に、個々の資料の詳細は第33表の観察一覧に記した。また、細片で器種が明確に特定できないものは不明品として扱った。

鍋 「サークー」²²と呼ばれているもので、胴部は球状に膨らみ、口縁部は外反して蓋受けを作る器形で、口縁付近には紐状の把手が貼付される（第49図1・2）。天界寺跡(1)²³では、羽釜のように胴部に鋳を貼付するもの(Ⅱ類)が出土しているが、今回の調査では確認できなかった。

急須 蓋：頂部に撮みを貼付し、傘部は緩いカーブを描いて端部に至るもの（第49図3）が確認できた。天界寺跡(1)では撮みを付けないタイプ(Ⅱ類)も出土しているが、今回は確認できなかった。

身：天界寺跡(1)の分類でいうⅠ・Ⅱ類が確認できたが、口縁部を外反させて内側に蓋受けを作る器形(Ⅲ類)は、今回確認できなかった。また、参考に破損しているが注口も掲載した(同図8)。

Ⅰ類 口縁部を微弱に立ち上げて短い頸をつくるもの(同図4)で、壺屋古窯群Ⅲ²⁴で確認された「球状に膨らむ胴部」(同図5)も確認できた。

Ⅱ類 口縁部をほぼ直口に立ち上げ、長い頸をつくるもの(同図6)で、壺屋古窯跡の「算盤珠状の胴部」(同図7)も確認された。

火炉 「フィルー」²⁵と呼ばれているもので、器体に火窓を設け、物を乗せる目的のために口唇部を幅広く作ったり、口縁部を内側に折り曲げたり、口縁部内側に突起を貼付するなどの工夫を成形に反映させている。

また、胴部は有孔の把手を貼付している。火炉は天界寺跡(1)の分類を元に形態的特徴から、下記の5種類に分類する事ができた(分類は天界寺跡(1)に対応するがⅤ類は今回、追加した資料である)。

Ⅰ類 底部から口縁部へ逆「ハ」の字に外傾するもの(第49図9・10)。

Ⅱ類 底部から胴上半部まで外傾して直線的に至り、口縁部は内側に折れて内傾するもの(同図11・12)。

Ⅲ類 底部から口縁部までほぼ直線的に直口し、筒状になるもの(同図13・14・15)。

Ⅳ類 胴部は球状に膨らみ、口縁部は内傾するもの(第50図1～3)。

Ⅴ類 Ⅴ類の器形の口唇部を幅広く作り、比較的大型のもの(同図4・5)。

灯明皿 第50図6・7は、口縁部から底部へ逆「ハ」の字状に外傾する器形で、低い高台状の底面に明確な糸切り痕を残す。また、口唇部には微弱な突起を貼付しているのも特徴である。

水鉢 胴部は球状に膨らみ、口縁部は内反する器形で、胴上半部に丸彫り線と帯描波状文を組み合わせた文様を施しているのが特徴である(第50図8・9)。

浅鉢 胴部は膨らみ、口縁部は僅かに内反する器形である。用途は不明であるが口径や底径に比べて高さが低い事から、今回は浅鉢として扱った(第50図10)。

搦鉢 底部から口縁部へやや膨らみを持ちながら外傾して至る器形で、口縁部は外側へ水平に折り曲げている。器体の内面には僅かに描り目が残っている(第50図11)。

碗 第50図12は口縁部が僅かに外反する小型の器で、用途は不明だが、形態的特徴から今回は碗として扱った。

瓶 第50図13は細い径の資料で、全形が窺えないため用途は不明だが、形態的特徴から今回は瓶として扱った。

鉢・壺 第50図14・15は形態的特徴から壺もしくは鉢と考えられる資料であるが、細片の為、詳細は不明である。

蓋 第51図1は、頂部に高台状の撮みを作るもので、内面に比べて外面を丁寧に仕上げている。同図2は、頂部の安定感が無く、皿には適していない。同図1・2ともに天界寺跡(1)の類別から鍋の蓋と考えられる資料である。

第51図3は上面から下面に向けて孔を設けている為、手焙りの蓋と考えられる資料であるが、全形が窺えない資料ではない為、詳細は不明である。第51図4は下面より上面を丁寧に調整している資料で、用途は、形態的特徴から今回は被せ蓋として扱った。対応する身は不明である。第51図5は頂部に撮みを付ける蓋し蓋で、形態的特徴がタイ産半練土器の蓋と類似している事から模倣品の可能性が考えられる資料である。対応する身は不明である。

第51図6・7は上面を平坦に成形し、かかりをほぼ垂直につくるもので、壺屋古窯群Ⅲでは大型壺の蓋と考えられている資料である。

不明品 第51図8～10は器体に貼付される外耳・把手及びその胴部である。同図11は蓋及び器物の脚と考えられる資料である。同図12・13は高台を有する火炉と考えられる底部で、観察一覧では「底部Ⅰ」とした。

同図14・15はベタ底で底部から胴部までほぼ直口する火炉もしくは鉢と考えられる底部で、観察一覧では「底部Ⅱ」としている。同図16～18は底部から口縁部へ緩やかに膨らみながら外傾して至る火炉もしくは鉢と考えられる底部で、観察一覧では「底部Ⅲ」と表記。同図19・20は円柱に扁平な台を乗せたようなもので、蓋もしくは底になると考えられる。

(註)

註1：『沖縄人百科事典上・中巻』沖縄タイムズ社 1983年

註2：『大界3跡（Ⅰ）』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

註3：『壺屋古窯群Ⅲ』『那覇市文化財調査報告書』第38集 那覇市教育委員会 1997年

第32表 陶質土器出土状況

器種・分類	出土地	表土・埋乱	種	トレンチ	高脚				支脚				地山瓦上	基礎	コイラル墩A	コイラル墩B	石用C	溝状遺構A	溝状遺構D	溝状石列	瓦留まりC	遺構	ピット	不明	合計		
					1層	2層	3層	4層	1層	2層	3層	4層															
鍋	口縁		25																					7	38		
	胴部		6				2																	2	19		
	耳		3	1																						7	
	蓋		3																							2	
急須	口縁		3			1	1																			8	
	胴部		1																							1	
	注口		1	2		1																				6	
	耳		1																							1	
火炉	蓋																									1	
	内板		7																							4	
	外板		1																							1	
	蓋三角		6																							2	
	取厚		1																							1	
	深く字跡		8				1	2																		3	
	その他	口一線		1																							1
		口縁		3																							3
		耳		1																							1
		胴部		15																							4
底部		12																							1		
灯明皿	口一線		3																							3	
	口縁		11	1		2	1	2																		7	
	胴部		20																							14	
	底部		5																							3	
水鉢	口縁		1																							1	
	内板		7	1																						3	
鉢	蓋		8																							3	
	蓋文字		5																							2	
	有文		3																							2	
	胴部		3																							4	
	口一線		4	1			1																			4	
	口縁		27	6	1	1																				16	
	胴部		14	1																						6	
	底部		18	1			1																			1	
浅鉢	口縁		3																							1	
	胴部		1																							1	
	底部		1																							1	
碗	口縁		1																							1	
	胴部		4																							1	
盃	口縁		1																							1	
	底部		1																							1	
蓋	口一線		2																							1	
	口縁		2																							3	
不明	組み		1																							1	
	口縁		12	1			4																			9	
	耳		1				1																			1	
	把手		1				1																			1	
	胴部		122	9		19	8	10	11	4		13	5	1	12	4	1							1	16	8	
	脚		1				1																			2	
底部		23																								11	
不明																										1	
合計		442	24	1	40	9	20	13	9	1	23	10	2	27	4	2	1	1	2	1	1	25	14	22	173	873	

第33表 陶質土器観察一覧

単位: cm

種別	器形	口径 高さ 底径	特徴	成形	調査	器色	混入物	出土地
第39区 院前遺跡	1	口 16.4 —	1口部: 平状。 1口部: 縁く再反。蓋受け部: 肩部を築き上げる。 把手: 縁で付け。	ロウロ	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 蓋地: 灰褐色	白色粒 赤色粒 赤色粘 雲母	不明
	3	口 8.8(嘴部) 6.2(高) 3.5(底径)	幅のみ確認 上面: 丸彫りの彫痕を道の周りに施す。 下面: 隆部付近に窪みが並び付着	ロウロ	上面: 磨き 下面: 磨き、縁で	上面: 黄灰色 下面: 黄褐色 蓋地: 灰褐色	白色粒 黒色粒 赤色粘 雲母	E15 ビット 15
	5	口 —	注口: 下面に窪が付着。	外面: 磨り、磨き	外面: 赤褐色 蓋地: 灰褐色	白色粒 黒色粒 赤色粘 雲母	F20 表土・掘 瓦	
								6
	7	口 —	外面: 胴下半部に多量の煤が付着。 内面: 石灰が付着	外面: 磨り、磨り、磨き	外面: 黄褐色 内面: 灰褐色 蓋地: 暗褐色	白色粒 黒色粒 赤色粘 雲母	掘瓦	
								8
	9	口 22.3 —	1口部: 平ら。内外に彫磨する。 1口部: 外磨する。 文様: 上面縁が台形。縁で付け。	外面: 磨り、磨き 輪縁: 磨り	外面: 磨り、磨き 内面: 磨り	外面: 暗褐色 蓋地: 灰褐色	白色粒 黒色粒 赤色粘 雲母	
								10
	11	口 15 —	1口部: 平ら。 把手: 上面縁が台形。 文様: 口縁部に二条の彫痕。	外面: 磨り、磨り、磨り 内面: 磨り	外面: 黄褐色 内面: 暗褐色 蓋地: 灰褐色	白色粒 黒色粒 赤色粘 雲母	不明	
								12
	13	口 19.8 —	口唇部: 平ら。 1口部: 内外に彫磨する。粘土: 粗い。 外面: 窪かに窪が付着。	外面: 磨り	外面: 赤褐色 蓋地: 暗褐色	白色粘 黒色粒 赤色粘 雲母	不明	
								14
	15	口 14.4 —	口唇部: 丸い。 1口部: 内外に彫磨。 文様: 上面縁が内反。縁で付け。	外面: 磨り、磨り 内面: 磨り	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 蓋地: 灰褐色	白色粘 黒色粒 赤色粘 雲母	不明	
第50区 院前遺跡								1
	2	口 13.7 —	1口部: 丸い。1口部: 内反。把手: 上面縁が丸い。縁で付け。 文様: 上面縁が台形。縁で付け。外面: 白化粘土の塗層。 外面: 突起。窪が付着。	外面: 磨り 内面: ロウロ目のみ確認	外面: 黄褐色 内面: 灰褐色	白色粘 黒色粒 赤色粘 雲母	F28 南第3 層	
								3
	4	口 23.8 —	1口部: 尖る。1口部: 内外に彫磨。 文様: 上面縁が台形(欠損している)。縁で付け。 外面: 白化粘土の塗層。	外面: 磨り 内面: 磨り	外面: 暗褐色 内面: 灰褐色 蓋地: 灰褐色	白色粘 黒色粒 赤色粘 雲母	掘瓦	
								5
	6	口 8.3 2.7 4	口唇部: 平ら。 口唇部: 内外に彫磨する。 火窓: 表面に赤色の痕	外面: 磨り 内面: 磨り	外面: 黄褐色 内面: 灰褐色 蓋地: 灰色	白色粘 黒色粒 赤色粘 雲母	不明	
								7
	8	口 15.4 —	1口部: 平状。 1口部: 内反する。 文様: 輪縁の裏が明確に縁る。	外面: 磨り、磨き 内面: 磨り	外面: 暗褐色 内面: 黄褐色 蓋地: 暗褐色	白色粘 黒色粒 赤色粘 雲母	E22 表土・掘 瓦	
								9
	10	口 32.2 —	口唇部: 平ら。 口唇部: 内外に彫磨する。	外面: 磨り 内面: 磨り	外面: 黄褐色 内面: 灰褐色 蓋地: 灰色	白色粘 黒色粒 赤色粘 雲母	F20 表土・掘 瓦	

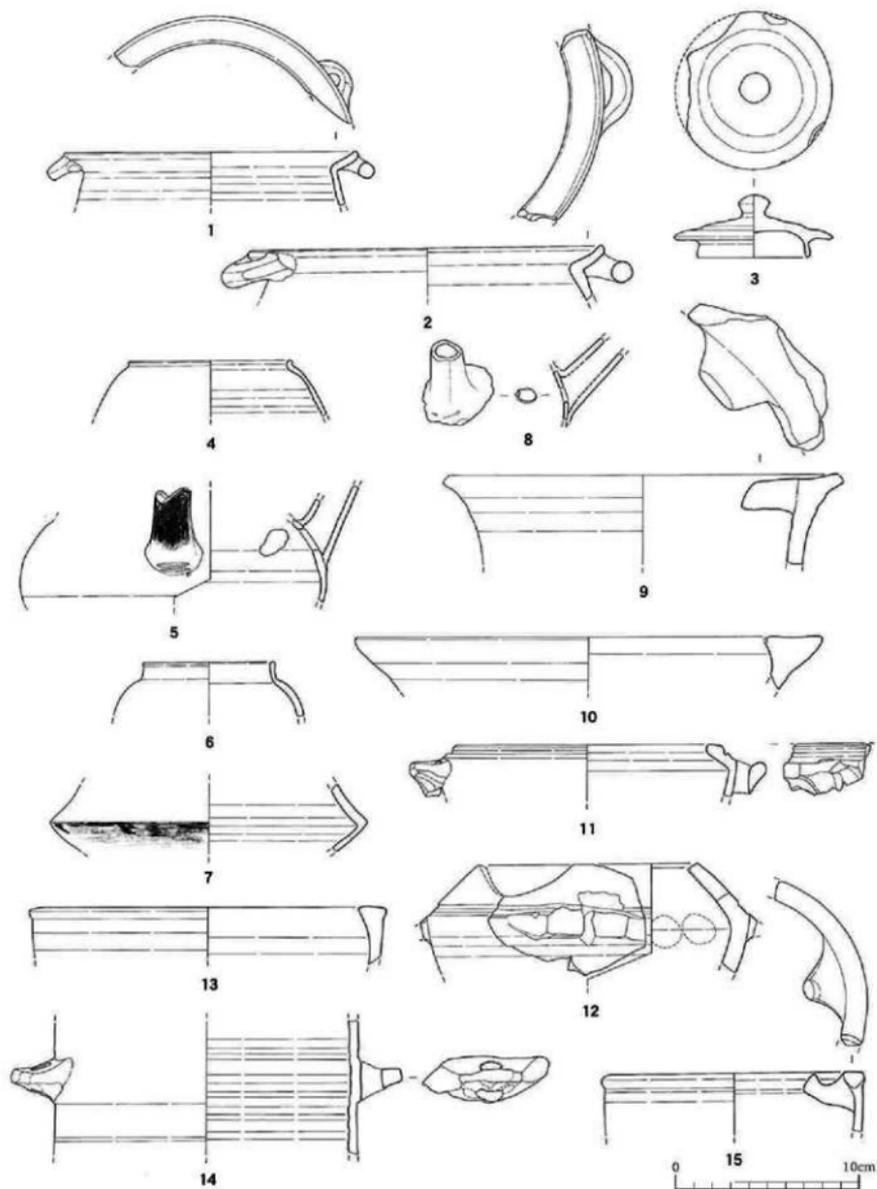
注: 一: 計測不可

第33表 陶質土器観察一覧

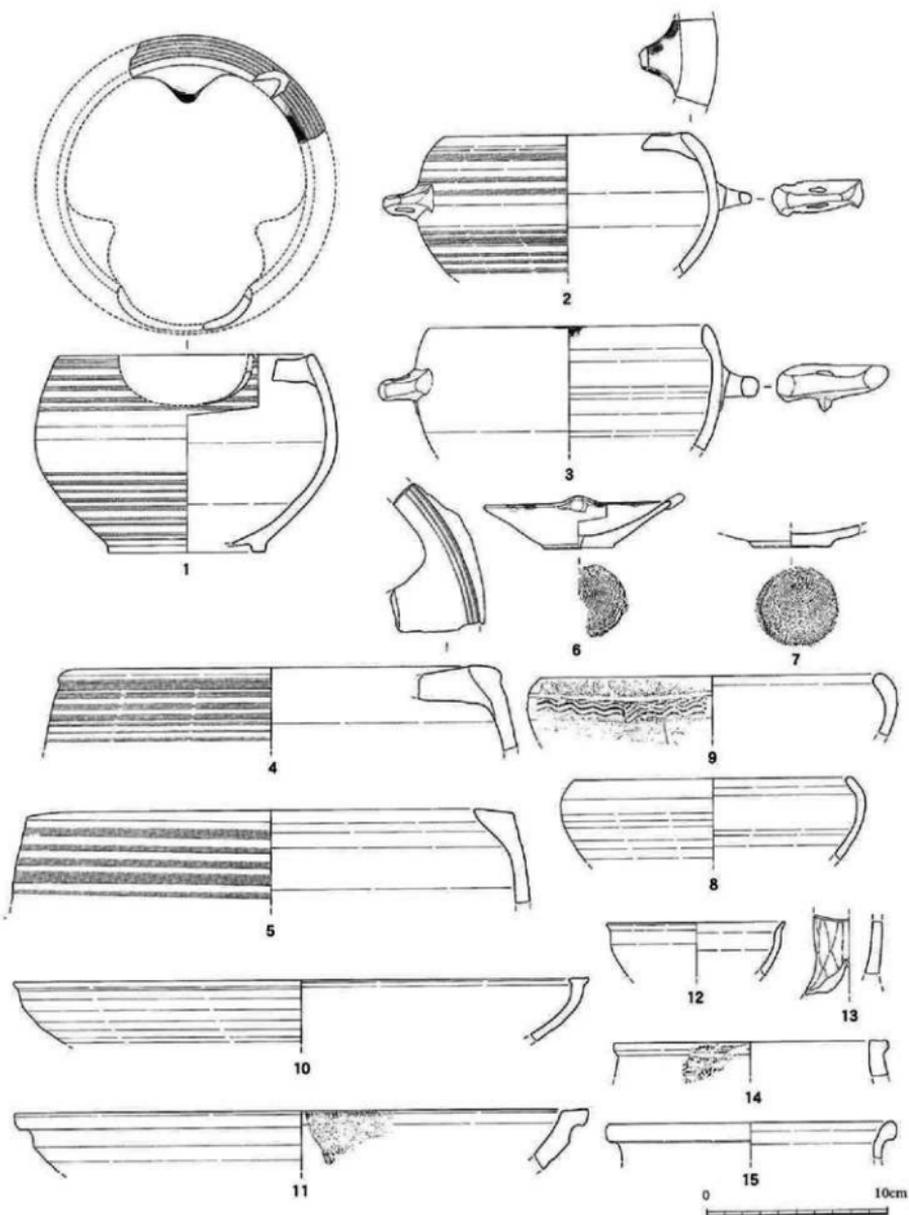
単位: cm

器種	器名	口径	高さ	特徴	成形	調整	胎色	混入物	出土地
第30回 - 四馬 39	11	口	32.1	口縁部: 下ろし。 口縁部: 外反し、それから外側へ水平に折れる。 内面: 薄かに張り目を残す。11回付近に些かな傷が付き。	ロクロ	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒	M23 表土・覆土
	12	口	10.0	口縁部: 太い。 口縁部: 外反する。	ロクロ	外面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 赤褐色 表地: 暗赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒	I24 北側3層
	13	口	—	口縁部付近: 薄かに傷が付着。	轆	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒	不明
	14	口	15.2	口縁部: 平らで、外側に膨らむ。 文様: 網罟に菊文様の印刷が僅かに残る。	轆	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 灰褐色 内面: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	L19 南側1層
	15	口	16.2	口縁部: 外側に丸く膨らむ。 口縁部: 外反する。 その他: 腹かに傷が付き。	ロクロ	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	M22・23 表土・覆土
第31回 - 四馬 40	1	口	5.0(底径)	内面: 底面・調整が鋭。 その他: 多量の毒が付き。	ロクロ	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	不明
	2	口	17.8(底径)	底面: 太い。 内面: 網罟に菊文様が残る。	轆	上面: 磨き 下面: 磨き	上面: 暗褐色 下面: 暗褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	K22 ゾット1
	3	口	—	底: 孔を一つ確認(穴潰している跡、一部分のみ)。 その他: 手取りの可能性あり。	轆	外面: 磨き	外面: 灰褐色 内面: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	J19 北側4層
	4	口	—	底面: 凹状の跡(穴潰している)。 手跡: 縁に暗褐色の染料が塗られている。 底面: 上面を平らに成形。その他: 皿の可能性も考えられる。	ロクロ	外面: 磨き	上面: 灰褐色 下面: 暗褐色 表地: 暗褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	覆土
	5	口	5.7	底面: 太い。 その他: タイ座半纏土器に類似。	轆	外面: 磨き	外面: 灰褐色 内面: 灰褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	I28 南側3層
	6	口	8.8	上面: 平らに成形。 底面: 凹状の跡(穴潰している)の跡が鋭。	ロクロ	外面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	不明
	7	口	14.0(底径)	上面: 中央部が窪みに凹む。 底面: 凹状の跡(穴潰している)の跡が鋭。	ロクロ	上面: 磨き 下面: 磨き 底面: 内面に磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	L22 南側(即ち 中部)
	8	口	—	把手: 孔を設けているようである。 その他: 蓋の可能性がある。	轆	外面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	K25 南側1層
	9	口	—	把手: 1事に成形。 底面: 良好で鋭。神楽座陶器類に類似。	轆	外面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	K27 南側1層
	10	口	—	底面: 網状のものが入付されていたようである。	ロクロ	外面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	覆土
第32回 - 四馬 41	11	口	—	底面: 太い。 底面: 良好で鋭。神楽座陶器類に類似。 その他: 蓋の可能性がある。	ロクロ	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	覆土
	12	口	9.8	底面: 底面が有する。 その他: 火打の可能性あり。	ロクロ	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 灰褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	L20 表土・覆土
	13	口	11.0	底面: 底面が有する。 その他: 火打の可能性あり。	轆	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	F22 表土・覆土
	14	口	14.0	底面: 底面が有する。 その他: 火打、鉢の可能性あり。	轆	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	覆土
	15	口	15.1	底面: 底面が有する。 その他: 火打、鉢の可能性あり。	轆	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	覆土
	16	口	5.1	底面: 底面が有する。 その他: 火打、鉢の可能性あり。	ロクロ	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	不明
	17	口	8.2	底面: 底面が有する。 その他: 火打、鉢の可能性あり。	轆	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	不明
	18	口	14.8	底面: 底面が有する。 その他: 火打、鉢の可能性あり。	轆	外面: 磨き 内面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	K24 表土・覆土
	19	口	5.2	底面: 底面が有する。 その他: 火打、鉢の可能性あり。	不明	上面: 磨き 下面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	N25 南側3層
	20	口	6.5	底面: 底面が有する。 その他: 火打、鉢の可能性あり。	不明	上面: 磨き 下面: 磨き	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色 表地: 赤褐色	白色粒 黒色粒、赤色粒 雲母	M21 北側4層

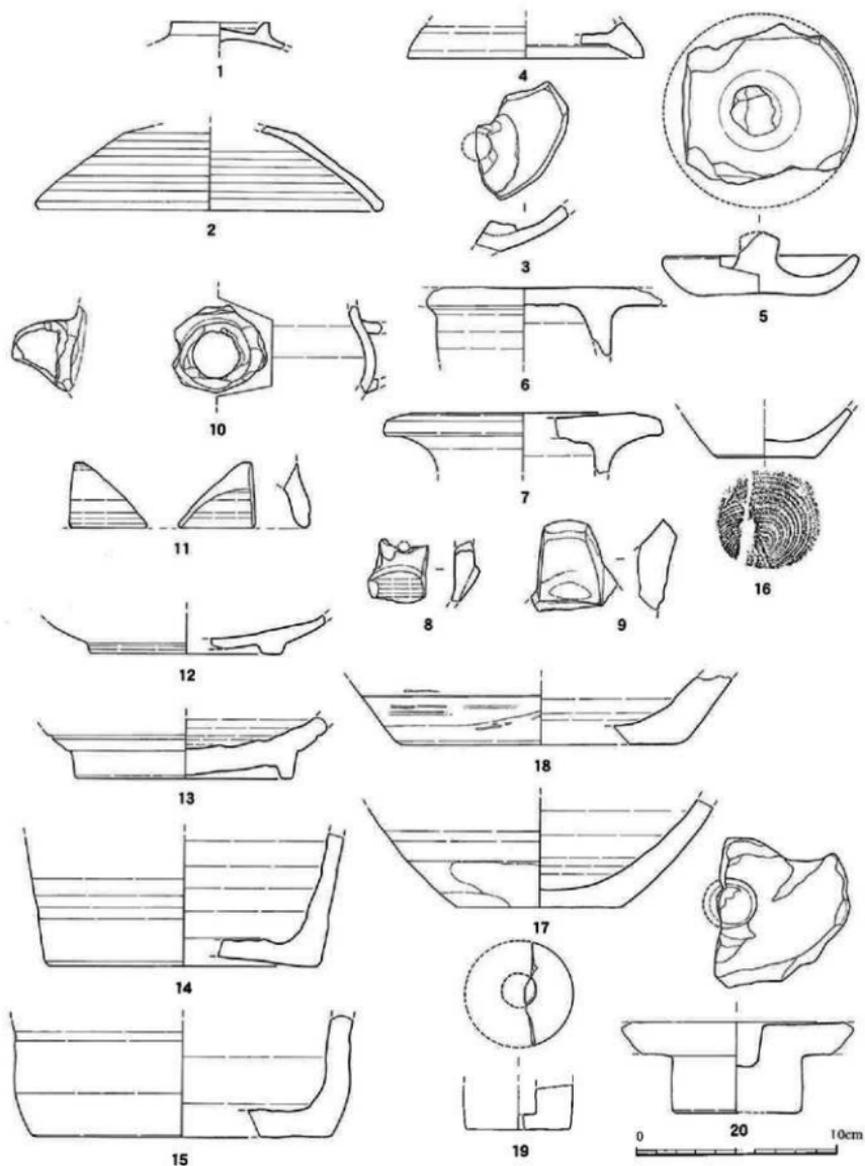
注「—」: 測定不可



第49图 陶质土器 (1)



第50図 陶質土器 (2)



第51圖 陶質土器 (3)

第22節 瓦質土器

ここで扱う瓦質土器とは、胎土は精選され、混入物に砂粒・白色粒・黒色粒・赤色粒・雲母などを含み、ロクロ引き・輪積みによって成形されたものを指す。また、焼成が悪い為、触れると粉末が付着するものが多い。上記のような特徴は陶質土器（アカムヌー）と同じである。しかし、アカムヌーは壺屋で「赤物」と称され²¹、主に橙褐色や黄褐色を主体としているが、瓦質土器は焼成後の状態が瓦と似ており、暗灰色や黄灰色を主体としている。また、陶質土器は火が¹・鉢・急須・灯明などの火を使う器種が多いが、瓦質土器は火を使わない植木鉢・播鉢などの器種が多く、大型の器物が見られるのも特徴である。今回の調査では植木鉢・播鉢・鉢・壺・瓶・飾り物・火が¹（火炉Ⅰ・Ⅱ、奈良火鉢）などの器種が確認できた。また、器種は特定できないが特徴的な破片も併せて掲載した。各器種の特徴は下記に、個々の資料の詳細は第35表の観察一覧に記している。

植木鉢 第52図1～5は底部から胴部へ膨らみをもって至り、口縁部は内反する器形で、口縁部や胴部に数条の波状凸帯を貼付し、その間に草花浮文、牡丹唐草文などが印刻される。今回は水抜き穴を設けている底部資料が確認できなかったが、類似例²²から用途は植木鉢と考えられる。

播鉢 第52図7～9は底部から直線的に外傾して口縁部へ至る器形で、器体の内面に数条の播り目を施す播鉢である。

蓋 第52図11は、頂部が扁平で、底部には高台状の脚をもつ蓋である。どの器種に対応する蓋であるかは不明である。

瓶 第52図12は狭い口縁をもつ口縁部片で、用途は不明だが、形態的特徴から今回は瓶として扱った。

鉢 第52図6は口縁部が外側へ水平に折れる器形で、口縁の外側に二条の波状凸帯を貼付している。同図10は底部から胴部へやや膨らみをもって至り、口縁部は僅かに内反する器形である。以上の二点、用途は不明だが、形態的特徴から今回は鉢として扱った。

火炉Ⅰ 第52図13は胴部が僅かに膨らみ、口縁部は内反する器形で、口縁付近には半月状の火窓を設けている。胎土の特徴は土器のようであるが、焼成が良く硬質である為本項で扱った。同図14も胴部に膨らみを持ち、口縁部が内反する器形であるが、同図13に比べて口径は大きく浅い器体である。口縁部には二条の凸帯を巡らし、その間に不明瞭ではあるが縦の凸帯が梯子状に施している。同図15は胴部が膨らみ、口縁部は直口する器形で花弁状の丁寧な作った火窓を設けているのが特徴的である。

火炉Ⅱ 第53図1～4の資料。喜友名貝塚・喜友名グスク²³では陶質土器の火炉で報告されているものである。前例を踏まえれば陶質土器として扱う資料であるが、陶質・瓦質の区別が判然としないため、今回は本項で扱った。器体は上面観が円形になる部分と、そこから突出した上面観が方形となる部分の2つで構成される。同図1は上面観が円形になる部分の口縁部で、器物を乗せる突起が貼付されている。同図2はその底部である。同図4は上面観が方形になる部分で、口縁部は外側に折れて張り出している。同図3も形態的特徴から同図4と同様の器物の底部と考えられる資料で、高台を作っているのが特徴的である。

奈良火鉢：第53図5～8は、中世後期に大和国内において生産された奈良火鉢²⁴に類似する資料である。奈良火鉢は全国範囲で流通し、それを各地で模倣した在地産の「模倣奈良火鉢」も生産され、在地圏内で流通していたようである。今回の資料が本来の奈良火鉢、あるいは模倣品なのか判断し難いが、奈良火鉢の範疇に属するものとして本項にて扱った。今回の調査で出土した資料には、奈良火鉢にみられる菊花の印刻が施されているものが確認できた。同図5・6は底部から直線的に口縁部へ至り、上面観が方形の角鉢になると考えられる資料で、同図5は口縁部付近に菊花の印刻を巡らせ、同図6は胴部に菊花の印刻を無秩序に施しているのが特徴である。同図7は細片の為、全形は窺えないが、二条の凸帯の間に菊花の印刻が施されている口縁部である。同図8は底部から直線的に口縁部へ至る器形で、胴上半と胴下半に四条ずつ凹線を巡らし、その間に菊花の印刻を施しているのが特徴である。

器種不明 第53図9は全形が窺えない為、器種は断定し難いが、形態的特徴から鉢と考えられる口縁部片である。同図10・11は器種が不明な底部片である。同図10は底径が小さく、直線的に口縁部に至る器形で、同図11は同図10とほぼ同じ器形であるが、底径が大きく、底面の稜を明確に作っている。同図12は器物の突起と考えられる資料であるが、全形が窺えない為、詳細は不明である。同図13は獅子頭を模して造形した資料だが、全形が窺えない為、詳細は不明である。

第53図14～17は印刻が施されている破片資料である。細片の為、全形は窺えないが、特徴的な資料を掲載した。同図14は口唇部が外側に肥厚し、その下に四方繁文の印刻、同図15は口縁部が内反し、口唇部付近に貼付された

凸帯の下に印刻が施されている。同図16は胴部が外傾して、口唇部付近に貼付された凸帯の下に印刻が施されたものである。同図17は部位も不明の破片だが、文字のような印刻が施されている資料である。

<註>

註1：『沖縄大百科事典 上巻』沖縄タイムス社 1983年

註2：『湯田古窯跡（Ⅱ）』『沖縄県文化財調査報告書』第121集 沖縄県教育委員会 1995年

註3：『喜友名貝塚・喜友名グスク』『沖縄県文化財調査報告書』第134集 沖縄県教育委員会 1999年

註4：『概説 中世の上器・陶磁器』中世上器研究会 1998年

第34表 瓦質土器出土状況

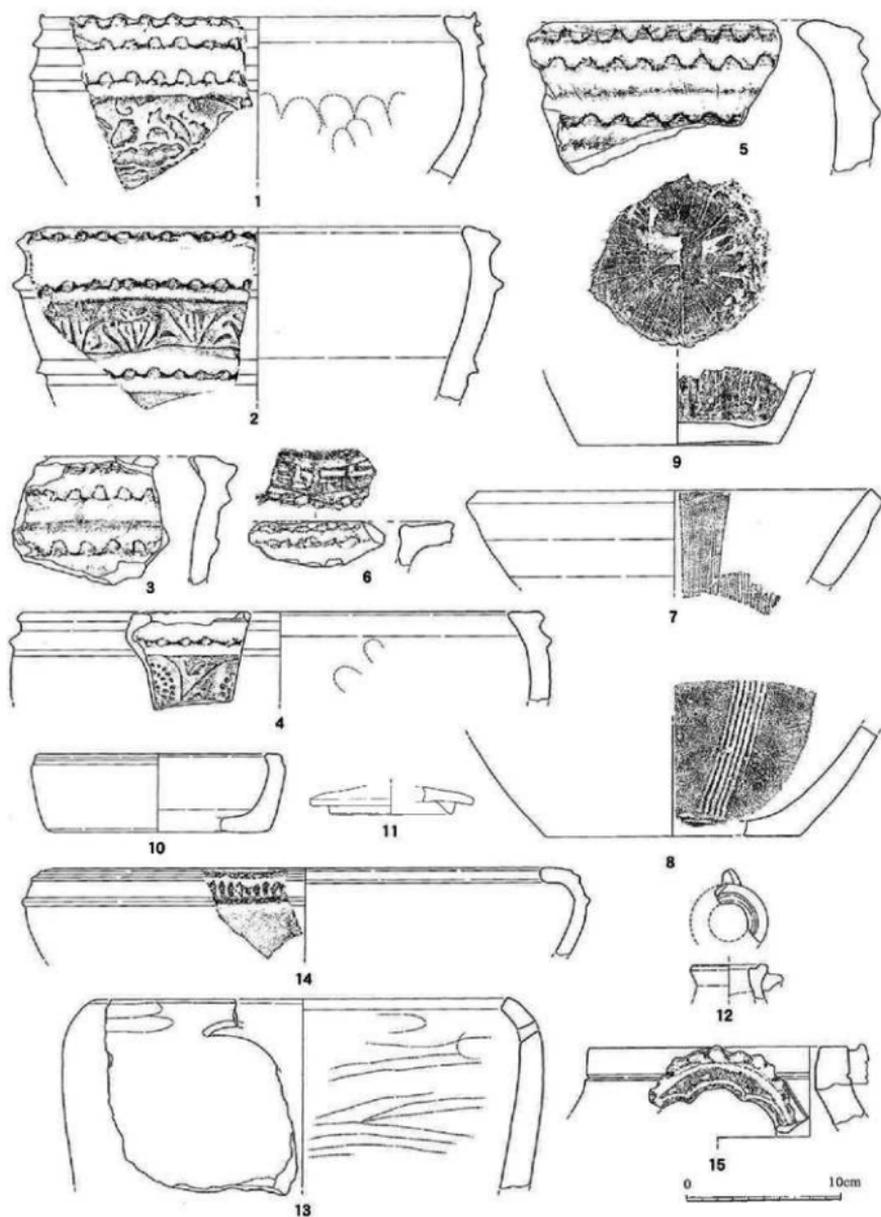
器種・分類		出土地	表土・乱瓦	滑面				北直上	地山直上	基壇	コイラル数A	方形埋込み遺構	コイラル数B	石列D	石垣A	溝状遺構A	溝状遺構B	溝状遺構C	溝状遺構D	溝状遺構E	溝状石列	瓦葺まりC	円蓋状遺構③	ピット	遺構	不明	合計		
				1層	2層	3層	4層																						
植木鉢	直口	口縁部																					1			1			
	内湾	印花	口縁部																						1		1		
		波状文	口縁部	2	2	2			1	1				1				1	1				7		1	2	21		
	逆L字	無文	口縁部			1										1											1	3	
		有文	胴部	6	1	3	3	4			1	1	2	1														6	35
			口縁部			1	1		1															5		1	1	6	
その他		口縁部																					2					5	
	底部	6			2	1				1			1		1	1	1					3				1	17		
播鉢	胴部																						1		1	1	3		
	底部			1	1	1		1				1											1			3	9		
鉢	口縁部																								1	1	1		
	口～底																								1	1	1		
蓋	口縁部																							1		1	1		
瓶	口縁部		1																								1		
火炉	大型	口縁部	1																								1		
	小型	口縁部	2		1	1																						4	
		口～底	2																				1				1	4	
	その他	口縁部	2									1														1	2	6	
		胴部							1																			1	
		底部	4	1	2						1												1	1			2	12	
足付き	底部	2																				2				1	5		
器種不明	口縁部	2			1		1	1	1																	1	8		
	胴部	9	2	1	1	1	2	5		2		1			1	1	1	1	1	1	1	8	3	1	14	3			
	底部	1			1	1	1								1											2	54		
	脚	1			1																	1					7		
	有文	不明	3	1		2		1	6	1			1	1							1	1	4			5	27		
合計		43	5	11	10	13	5	4	15	4	1	6	3	3	2	2	2	2	3	1	1	33	1	11	9	44	235		

第35表 瓦質土器観察一覧

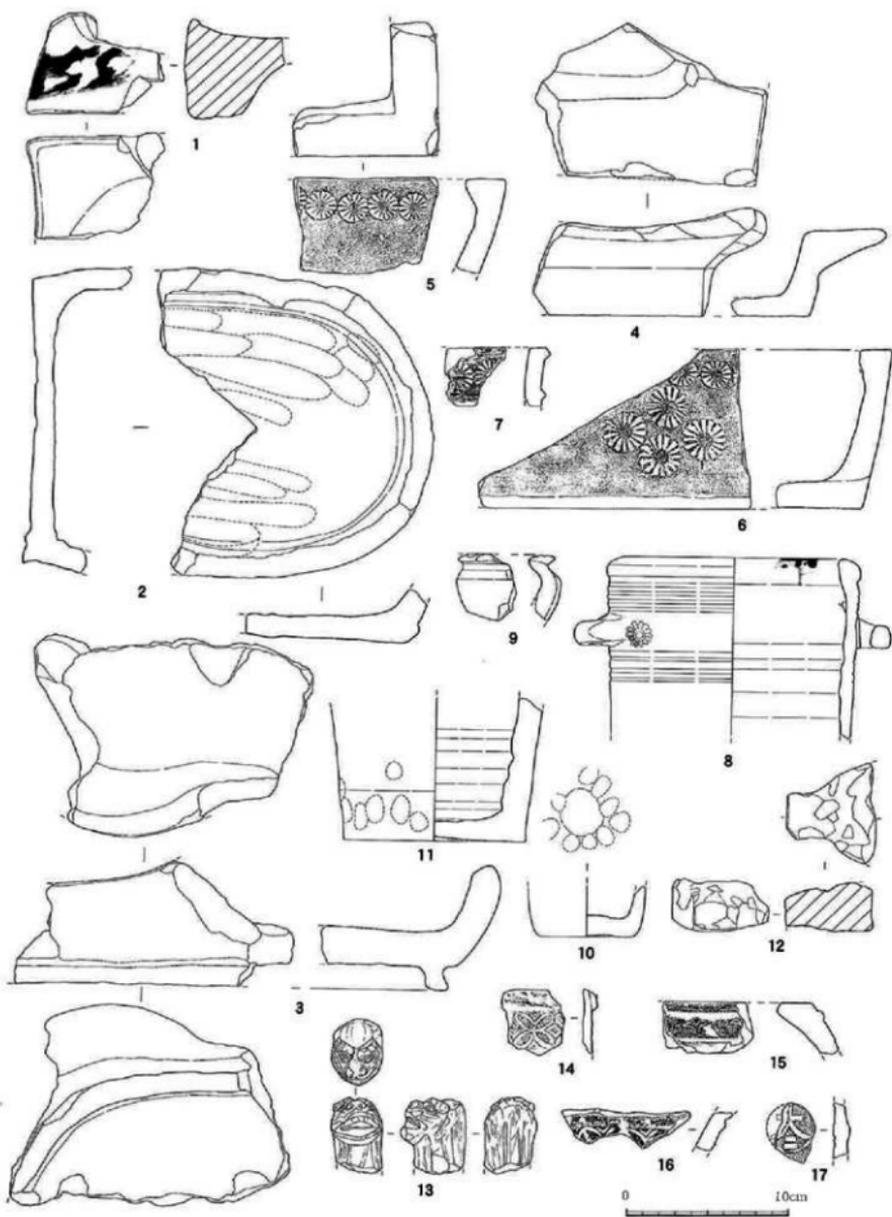
資料10

図	番号	器種	部位	下部 底径	特徴	成形	調整	彩色	流入物	出土地			
第35回 調査期41	1	甕	口	28.9	口唇部：平ら（底と同レベル）。口縁部：内側に肥厚。 文様：中央の底状内部文を巡らし、その下に牡丹状の 紋様を施す。	コゴ	外面：撫で 内面：撫で、磨可	外面：黄灰色 内面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-25遺構			
	30.6			口唇部：平ら（底と同レベル）。口縁部：内側に肥厚。 文様：口縁に二条。細。刺す形の一糸の底状凸条文を施し、 上側に磨可を施す。	コゴ	外面：撫で、磨可 内面：撫で、磨可	外面：黄褐色 内面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	H-1-27跡山前上				
	34.0			口唇部：平ら（底と同レベル）。口縁部：内側に肥厚。 文様：口縁に二条。粗の底状内部文を施らし、その下に菊 花の紋様を施す。	コゴ	外面：撫で、磨可 内面：撫で、磨可	外面：黄褐色 内面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	M-27南側4号				
	34.0			口唇部：平ら（底と同レベル）。口縁部：内側に肥厚。 文様：口縁に二条。粗の底状内部文を施らし、その下に菊 花の紋様を施す。	コゴ	外面：撫で、磨可 内面：撫で、磨可	外面：黄褐色 内面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	M-25南側3層				
	—			口唇部：平ら（底と同レベル）。口縁部：内側に肥厚。 文様：口縁に二条。粗の底状内部文と一糸の底状凸条文を 施す。	コゴ	外面：撫で	外面：黄褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	M-21北側よりC				
	6			口唇部：平ら（底と同レベル）。 口縁部：二糸の底状凸条を施す。	コゴ	外面：撫で	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	H-22遺構				
	7			口唇部：平ら。 口唇部：外側平ら。 横方向に幾何学的に無彫刻を施す。	コゴ	外面：撫で	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	J-13北側4号				
	8			底面：底面を明確につくる。 磨り目：中央部	撫で	外面：丸磨り・丸磨 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	M-21北側よりC				
	9			底面：底面を明確につくる。 磨り目：全体的に施す。	撫で	外面：撫で	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	K-1-18北側4層 +137コノ4層				
	10			口唇部：平ら。口唇部：やや外反する。 底面：底面の様は不明。 文様：口縁部外側に一糸の磨刻。	撫で	外面：撫で	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-M-21遺構				
	11			口唇部：平ら。口唇部：やや外反する。 底面：底面の様は不明。 文様：口縁部外側に一糸の磨刻。 その他、唇内面には全体に施されている。	撫で	外面：磨き 内面：磨き	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-17ビッド1第2層				
	12			口唇部：平ら（口縁に段差をつくる）。 口縁部：やや外反する。	撫で	外面：撫で	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-20跡				
	13			口唇部：平ら。口縁部：両反する。 火窓：二日月状の火窓を設ける。 その他、唇内面に磨可を施す。磨可が良好。	撫で	外面：撫で、磨り 内面：撫で、磨り	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	H-23溝状遺構A				
	14			口唇部：平ら。 口唇部：内反する。 文様：唇状の凸条を施す。	撫で	外面：撫で、磨り 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-27溝状遺構D+127埋瓦				
	15			口唇部：平ら。 口唇部：外反する。口縁部：溝口。 火窓：花弁状に作る。 文様：口縁に一糸の磨刻。その他、唇内面を施す。	撫で	外面：撫で、磨り 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	H-22-23方溝遺構				
	第35回 調査期42			1	甕	口	—	口唇部：平ら。 火窓：中央の底状内部文に内側に設ける。 その他、唇内面に中央の底状凸条を施している。	撫で	外面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	F-20表土：覆瓦
				2			底面：様は明確ではない。 その他：唇内面に施す。	撫で	外面：撫で、丸磨り 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	F-20表土：覆瓦	
3		口唇部：平ら。 口縁部：やや外反する。 底面：底面を施す。	撫で	外面：撫で、磨り 内面：撫で、磨り			外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	M-21北側よりC				
4		口唇部：平ら。 口唇部：外側に丸の出る。 底面：様は明確ではない。	撫で	外面：撫で 内面：撫で			外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	埋瓦				
第35回 調査期42	甕	口	—	口唇部：平ら。 口縁部：やや外反する。 文様：口縁外側に幾何学的に磨可を施す。	コゴ	外面：撫で 内面：磨り	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	不明				
			10.0	底面：底面を明確につくる。 文様：中央の唇状凸条を無彫刻に施す。	コゴ	外面：撫で 内面：丸磨り	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	不明				
			—	文様：二糸の三角状凸条の間に菊花の磨刻を施す。	撫で	外面：磨り	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-19南側4層				
			16.4	口唇部：溝状。口縁部：溝口は直口。 文様：横上と下側半にそれぞれ四角半ずつの四隅磨 を施す。その間に菊花の磨刻を施す。	輪削	外面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-25遺構				
			—	口唇部：丸る。 口縁部：外反する。	コゴ	外面：磨り 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	H-28南側1層				
			—	口唇部：やや外反する。 口縁部：やや外反する。 文様：口縁外側に幾何学的に磨可を施す。	コゴ	外面：撫で 内面：磨り	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	K-23南側2層				
			6.6	底面：底面を明確につくる。 その他：輪削みの磨可がはっきりと残る。	輪削	外面：撫で 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	K-6表土：覆瓦				
12	不明	—	—	—	不明	外面：磨り	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	不明				
13	不明	—	—	—	不明	外面：磨り	外面：赤褐色 底面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	L-28南側3層				
14	不明	—	—	—	不明	外面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	K-18南側				
15	不明	—	—	—	不明	外面：磨り 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	K-10跡				
16	不明	—	—	—	不明	外面：磨り 内面：撫で、磨り	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	J-19北側1層+ L-19北側4層				
17	不明	—	—	—	不明	外面：磨り 内面：撫で	外面：赤褐色 内面：赤褐色	赤色粒 黒色粒	不明				

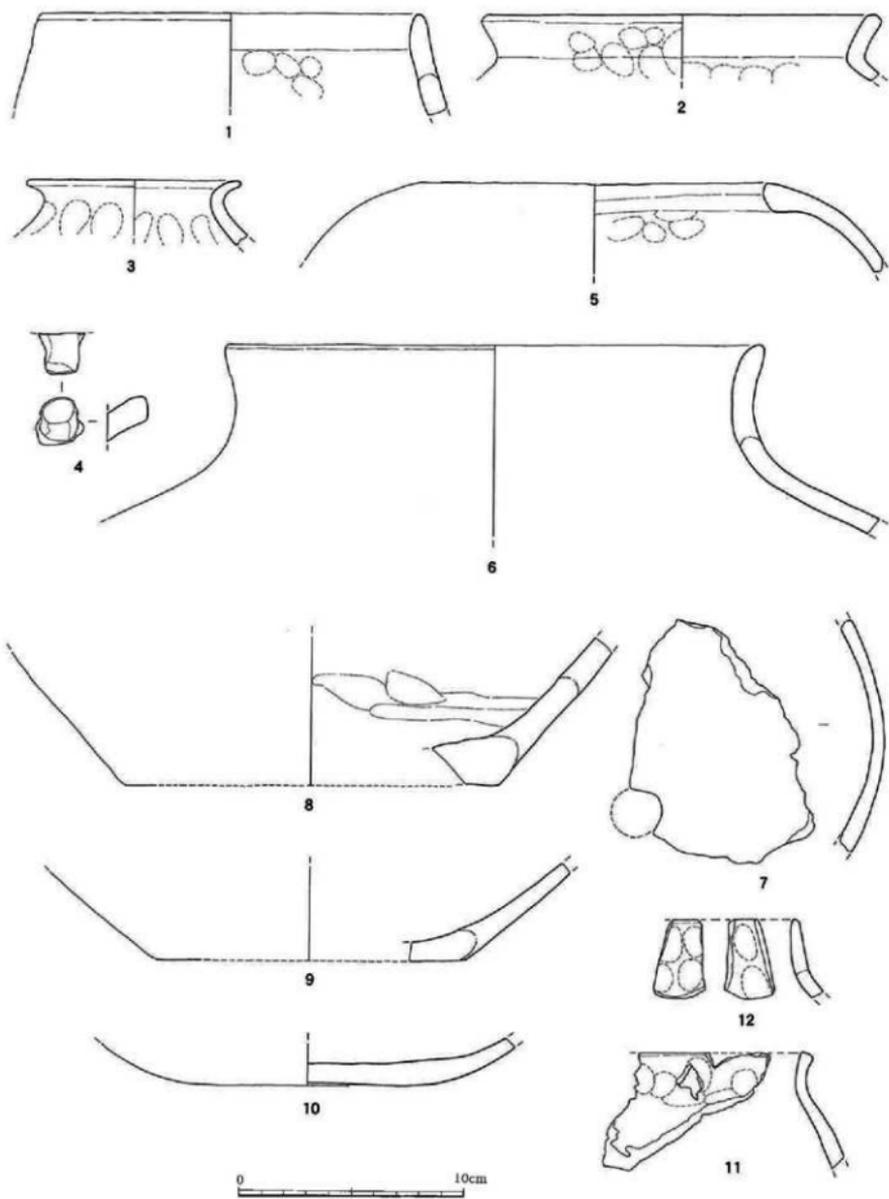
■：詳細不明



第52図 瓦質土器（1）



第53圖 瓦質土器 (2)



第54图 土器

第24節 類須恵器

類須恵器は8点得られ、第55図1～5に示した。確認できた器種は壺、碗がある。カミイ焼古窯跡採集の資料と検討した結果、類似した特徴を持つものと思われる。観察事項等は別表に示した。

同図1・2は壺である。1はナデ肩で甕形の器形に近い。口縁部は弱く外反し、丸く肥厚する。焼成は悪く、器面は粗れている。2は口縁部が大きく外反するタイプで、口縁部は丸みを帯びた三角形である。L管部には浅い凹線を廻らせる。同図3は碗である。箬手で口唇部は丸く形成する。同図4・5は器種不明の胴部で、いずれも壺であろうか。4は内外ともタキの痕が明瞭である。5は積み痕が確認できる。

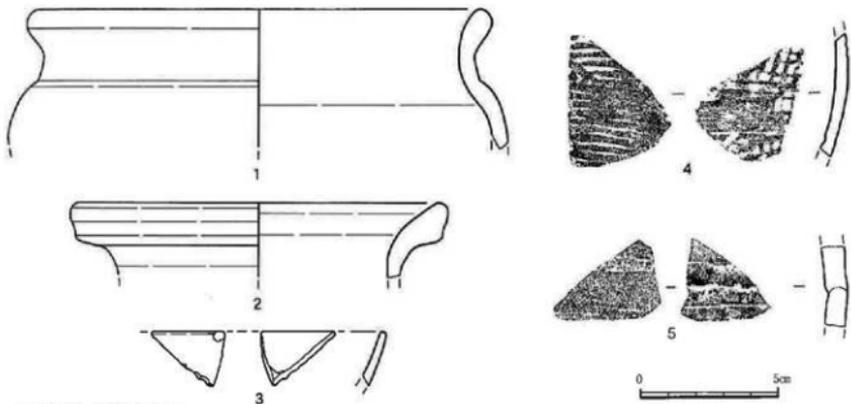
第38表 類須恵器出土状況

出土地	壺土・灰瓦	南側			北側			石列E	遺構	合計
		3層	2層	4層	3層	2層	4層			
壺	L管部						1		1	
碗	L管部	2							1	
	胴部	1	1	1	1	1			4	
合計		3	1	1	1	1	1	1	8	

第39表 類須恵器観察一覧

同番号	器種	部位	法量	観察事項	出土地
第35図	壺	口縁部	16.0	口唇部：ロクロ。泥和材：黒色。ガラス質の気泡あり。色調：内外は淡灰褐色。底面は黄褐色。	L-27南側3層
			13.6	口唇部：ロクロ。泥和材：わずかに黒色泥和材。色調：淡灰色。	
同図43	不明	胴部	12.8	L管部：ロクロ。泥和材：わずかに白色微粉。色調：内外は淡灰褐色。断面は褐色。	不明
			—	胴部：叩き。泥和材：わずかに白色微粉。色調：内外は淡褐色。断面は褐色。	
5	不明	胴部	—	胴部：ロクロ。叩き下泥和材：白色微粉。色調：内外は淡褐色。断面は暗褐色。	K-16北側4層

注【—】：計測不可

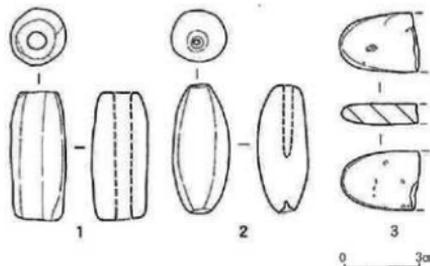


第55図 類須恵器

第25節 土製品

土製品としたものを、第56図に示した。いずれも瓦質である。第56図1と2はどちらも中央を穿孔し、1が26g、2は20gとなっている。中央の径は1が7mm、2は3.5mmと後者が細いが2は製作途中なのか貫通していない。用途は土鍾が考えられる。1はL-18北側3層、2はL-21ピット106より出土。

第56図3は破損しているが端部を丸く、断面は平坦に成形されているもので、用途不明である。L-28南側3層より出土。



第56図 土製品

第26節 円盤状製品

今回円盤状製品として扱ったのは、これまで同名で呼称されている、陶磁器等を円形に打割調整した二次利用品である。本地区では、276点が出土している。素材には青磁、白磁、中国産褐釉陶器、染付、沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、瓦質土器、土器、瓦、天目茶碗、木上産陶磁器などが使われている。大きさは、1~9cm台までと幅があるが、主体となるのは2~4cm台で、大野寺跡(Ⅰ)と同じ傾向を見せる。

また素材の中で碗や皿等の底部を利用したものには、高台を残すタイプと割り取るタイプがあるが、本地区では16点の底部利用品の内、13点が前者にあたる。(表中「厚さb」は高台を含めた計測である。)

以下に各部分の法量一覧と、出土状況をまとめた。

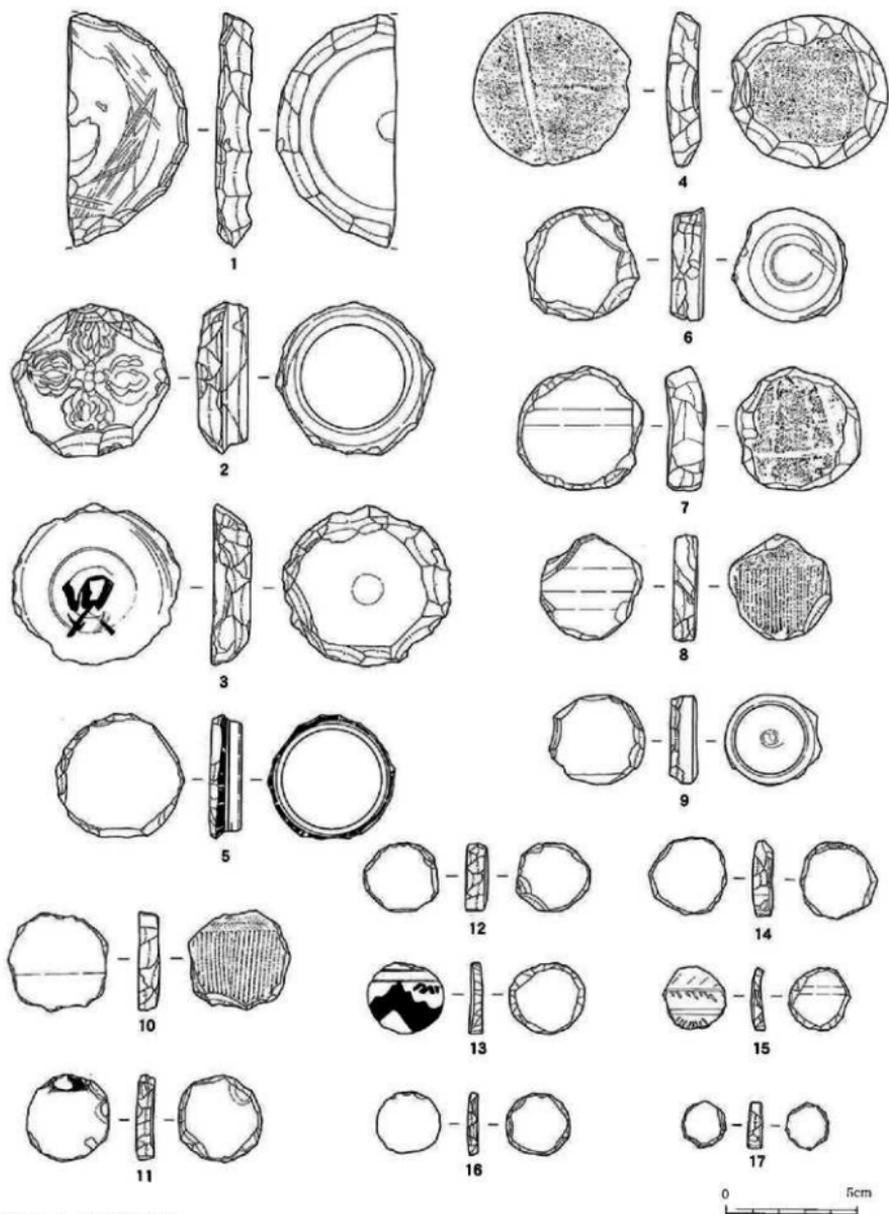
第40表 円盤状製品法量一覧

単位: mm/g

図版	番号	素材(器種)	長径 (mm)	短径 (mm)	厚さ a(mm)	厚さ b(mm)	重さ (g)	使用 部位	完・破	出土地
第 57 図 ・ 図 版 44	1	本土産か(皿)	88.7	46	12.8		53.7	底部	破	基壇
	2	青磁(碗)	60.7	58.4	12	19.2	70.2	底部	完	H-20ビット25
	3	沖縄産施釉陶器(鉢か)	64.6	61.7	14.5		69.7	底部	完	表土投乱
	4	平瓦	62.1	59	12.4		50.8	胴部	完	表土投乱
	5	染付(碗)	48.7	47.7	3	11.7	18.5	底部	完	基壇
	6	黒釉陶器(碗)	44.4	42.1	13		33.6	底部	完	南側2層
	7	平瓦	49.3	48.1	14.1		36.3	胴部	完	M-25-26ビット2
	8	沖縄産無釉陶器(鉢鉢)	40.2	39.8	8.6		14.6	胴部	完	J-12ビット5
	9	白磁(小皿)	37.4	34.1	6.5	9.6	13.2	底部	完	投乱
	10	本土産陶器(鉢鉢)	41.2	39.1	7.6		13.6	胴部	完	投乱
	11	染付	33.2	32.3	6.6		10.1	胴部	完	不明
	12	中国産褐釉陶器	28.4	25.8	7.6		8.1	胴部	完	南側2層
	13	染付	28.8	26.1	5.2		4.7	胴部	完	南側1層
	14	中国産褐釉陶器	29.6	29.1	7.2		8.7	胴部	完	溝状遺構D
	15	沖縄産か(碗)	24	23.6	5.4		3	胴部	完	南側3層
	16	陶質土器	24.4	24.4	3.9		2.4	胴部	完	投乱
	17	青磁	17.4	16.6	5		1.9	胴部	完	不明

第41表 円盤状製品出土状況

調査区画	調査層	調査点	調査区画										調査点	調査層	調査点	調査層		
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10						
調査区画	調査層	1-1-1	1															
		1-1-2	2															
		1-1-3	3															
		1-1-4	4															
		1-1-5	5															
		1-1-6	6															
		1-1-7	7															
		1-1-8	8															
		1-1-9	9															
		1-1-10	10															
		1-1-11	11															
		1-1-12	12															
		1-1-13	13															
		1-1-14	14															
		1-1-15	15															
		1-1-16	16															
		1-1-17	17															
1-1-18	18																	
1-1-19	19																	
1-1-20	20																	
1-1-21	21																	
1-1-22	22																	
1-1-23	23																	
1-1-24	24																	
1-1-25	25																	
1-1-26	26																	
1-1-27	27																	
1-1-28	28																	
1-1-29	29																	
1-1-30	30																	
1-1-31	31																	
1-1-32	32																	
1-1-33	33																	
1-1-34	34																	
1-1-35	35																	
1-1-36	36																	
1-1-37	37																	
1-1-38	38																	
1-1-39	39																	
1-1-40	40																	
1-1-41	41																	
1-1-42	42																	
1-1-43	43																	
1-1-44	44																	
1-1-45	45																	
1-1-46	46																	
1-1-47	47																	
1-1-48	48																	
1-1-49	49																	
1-1-50	50																	



第57圖 円盤状製品

第27節 煙管

本地区では総数17点が得られ、材質には陶器製、磁器製、瓦質、青銅等が見られる。形態では、火皿、羅字、吸口をつなげて使用する羅字煙管と延べ煙管の二つがあるが、延べ煙管は1点のみでその他はすべて羅字煙管となっている。また羅字煙管の火皿にはパイプ形と、釣鐘形がある。各部位の計測と共に概要を以下に記した。

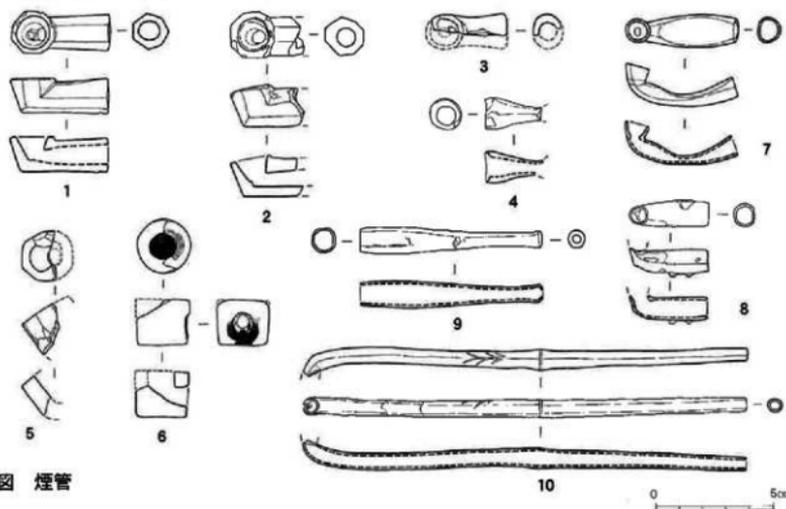
その他の煙管の出土状況は、陶製では無釉がM-23表土から1点、N-25南側3層より1点、L-24南側3層より1点、施釉では掘乱部から1点出土している。青銅製では、出土地不明が2点、L-22磔集中部より1点である。これらはすべて雁首である。

第42表 煙管観察一覧

単位：cm

番号	部位	材質	火皿	羅字接続部	吸口	高さ	長さ	観察事項	出土地
1	雁首	陶製	1.8 1.3	1.4 0.8	-	1.3	4	部欠損するが、ほぼ完形の火皿。火皿は八角、胴部は七角で成形されている。焼成時の火の受け具合で黒味を帯び、内面は暗褐色を呈する。	L-22北側3層
2	雁首	陶製	1.9 1.2	1.6 0.7	-	1.5	-	火皿、胴部とも八角で成形。外面には自然釉と思われる黒色を呈する箇所がある。内面は暗褐色。	不明
3	雁首	陶製 (1.5) (1.1)	(1.5) (0.7)	-	-	-	(3.4)	全体的に丸みを帯びた雁首。厚みも3~4mmと図2・3と比べ薄手である。	不明
4	吸口	磁器製	-	1.2 0.9	-	1.3	-	羅字接続部分は内側に一段様をつくる。外面は成形時の指ナデがされ、全体に黄緑色の釉が掛かる。	不明
5	雁首	瓦質	(2.1) (1)	-	-	-	-	破片ではあるが大きい火皿。外面は面取りされ、全体では八角になるかと思われる。内縁は熱のため灰褐色に変色している。	J-28南側1層
6	雁首	瓦質	(2.2) (1.1)	7.8 -	-	1.8	2.2	よく使用されていたのか内側や火皿の縁、羅字接続部分の周辺まで煤けている。	石列D
7	雁首	青銅製	1 0.8	1 0.8	-	1.8	4.4	胴の部分が変形しているが火皿の完形。火皿の縁は羅字接続部分より厚い。	不明
8	雁首	青銅製	-	1 0.8	-	(1)	(3.3)	火皿の付け根から欠損している。7よりは若干小ぶりだが断面の厚みがある。縦に合わせ目の様が見られる。	表土・掘乱
9	吸口	青銅製	-	0.9 0.7	0.7 0.3	1	7.7	羅字接続部分から、吸口に向かって1.5cm、合わせ目の様が見られる。断面は1mm弱と薄手。	掘乱
10	胴部-吸口	青銅製	-	-	0.6 0.4	1.3	18.7	火皿上部を欠損する延べ煙管。植物の茎を覆っているのか中央に節のような2本の線、その上部には6枚の葉が彫られている。	表土・掘乱

注 (1)：複製計測、(一)：計測不可。



第58図 煙管

第28節 貝製品

ボタン状製品、碁石の出土が確認された。ボタン状製品はヤコウガイ又はチョウセンサザエ、碁石はチョウセンサザエの蓋を利用したものと思われる。

ボタン (第59図1~3)

第59図1は、直径1.5cm、厚さ1mmを測る。中央に約2mmの孔を2個穿孔する。両面に光沢があり、表面には殻の一部と肋が確認できる。L-26 攪乱から出土。

同図2は、直径1.3cm、厚さ2mmを測る。中央に約2mmの孔を2個穿孔する。表面には光沢があり、表面には殻の一部が付着している。K-22トレンチから出土。

同図3は、直径1.5cm、厚さ2mmを測る。中央に約2mmの孔を4個穿孔する。表面には光沢があり、表面には殻の一部が付着している。K-23ピット3 (攪乱) から出土。

碁石 (第59図4)

同図4は、直径2cm、厚さ5mmを測る。ほぼ正円に整形され、横断面はレンズ状を呈している。僅かに成長線も確認できる。G-21攪乱から出土。

<参考文献>

『海郷工所誌』 『那覇市文化財調査報告書』第16集 那覇市教育委員会 1991年3月

第29節 骨製品

歯ブラシ・脊椎骨有孔製品・板状製品・骨針・棒状製品・ヘラ状製品・サイコロの出土が確認された。総数35点の骨製品が得られ、うち22点を第59図に示した。以下個々に詳細を述べる。

歯ブラシ (第59図5~8)

5は、歯ブラシの頭部。残存長2.6cm。植毛の為と思われる小孔が4列あり、両端と内側の2列が交互にくる配列である。全体に研磨が施されている。頭部の先端は丸い。M・L-20石列Dから出土。6は、歯ブラシの柄。残存長10.2cm。断面は四角形を呈する。あまり丁寧な研磨は施されておらず、全体に骨の質感が残っている。柄は湾曲しており、先端には青銅製の釘の様なものがはめ込まれ、周辺には青銅が付着している。僅かに残った頭部の状況から孔は、4列あったと思われる。L-21瓦溜まりCから出土。7は歯ブラシの柄。残存長8.8cm。断面は半円形を呈する。裏にプラスチック製の板状のものが、青銅製の金具によって止められている。それは自在に動き、実用的に使われていたと思われるが詳細は不明。J-26南側1層から出土。8は、歯ブラシの柄。残存長8cm。断面は三角形を呈する。柄の先端には、径2mmの孔がある。本品は出土資料の中で最も丁寧な仕上がりで、光沢もある。表土・攪乱から出土。

脊椎骨有孔製品 (第59図9~12)

9・10はメジロザメ科の脊椎骨を、11・12はエイの尾椎骨を利用し、その中央部を穿孔している。9は被熱した為か全体的に黒く変色している。直径2.9cm、厚さ1.3cm、孔径3mm、I-21ピット8から出土。10は直径2.1cm、厚さ8.5mm、孔径8mm、J-27南側3層から出土。11・12は2点とも縁を削られている。特に12は片面の縁が他の一面よりも一回り小さくなるほど深く削られている。11は直径1.8cm、厚さ7mm、孔径2mm、H-18北側4層から出土。12は、直径1.7cm、厚さ8mm、孔径1.5mm、出土不明。

板状製品 (第59図13~20)

牛あるいは馬の骨を研磨整形している。半月状 (13~17) との板状 (18~19) がある。前者に関しては、大きさが4cm前後とほぼ同じで、図示した中には研磨の著しい箇所があり、その部分が研ぎ出された状態になっているものも見受けられる。後者はいずれも破損している為、用途などの詳細は不明である。

13は裏面に骨の海面組織が残存するものの全面に研磨が施されている。特に表面の一端に著しく、擦痕が横位にはっている。長さ3.9cm、厚さ2mm。J-21畦から出土。14も裏面に僅かに骨の海面組織が見られるが、全面に丁寧な研磨が施されている。擦痕が側面は斜位に、また表と裏の一端に横位にはっている。長さ3.8cm、厚さ2mm。K-23石列Aから出土。15は一端を両面からの研磨によって研ぎ出し、刃部を形成している。他端は欠損。片面に薄く二条の溝がはっているのが確認できる。残存長3.3cm、厚さ2mm。L-20北側4層から出土。16は表裏面にアルファベットの「W」に似た溝が彫られている。擦痕が側面には斜位に、弧の部分には横位にはっている。長さ3.5cm、厚さ2.5mm。J-18北側3層から出土。17は形状的にはの板に近い。両面のほぼ中央に格子状

の溝が彫られている。片面のみ研磨が著しいが、一端が両面からの研磨により研ぎ出され、刃部を形成しているが、15程著しくない。加工途中だったと思われる。長さ4.2cm、厚さ3mm。K-18ピット9から出土。18はのべ板状を呈し、一端が隅丸になっている。特に目立ったキズや研磨の痕も見受けられない。他端が欠損している為、全体の詳細は不明。残存長3.2cm、厚さ1mm弱と非常に薄い。J-26南側2層から出土。19は全面に擦痕が縦横にはしっている。両端が欠損している為、全体の詳細は不明。残存長5.6cm。出土地不明。天界寺跡(T)^{註1}に類似資料が報告されている。20は牛あるいは馬の肋骨を研磨加工したもので、全面に丁寧な研磨が施されているが、裏面は海面組織が僅かに残っている。正面観は、砲弾状に先端部が尖がり基端部は水平方向に整形されている。ほぼ中央に直径約2mmの孔が2個穿たれているが、その周辺に紐ずれ痕は見受けられない。下端の尖っている部分やその側面には、細かいキズがあり、使用痕かと見られる。実際に握ると手のひらにちょうど収まるぐらいの大きさであり、実用品ではないかと想定されるが、詳細は判断としない。長さ6.5cm。H-27北側4層から出土。

骨針 (第59図21)

鳥骨の両端を斜めに削いだ形状である。一端が破損しているがほぼ完形品である。中が空洞のため非常に脆い。長さ8.6cm。I-25南側2層から出土。

棒状製品 (第59図22・23)

22は牛か馬の骨を棒状に成形し、一端が先細くなっている。断面形は丸い。長さ11.6cm。L-20北側4層から出土。23は牛あるいは馬の骨を棒状にし、先端部を鉤状に成形している。他端は欠損。断面は扁平な五角形状を呈する。現代の縫製用に使用されている編み針と形状が同じである。残存長約6cm。F-20表土・掘乱から出土。へら状製品 (第59図24)

牛あるいは馬の骨を利用しており、丁寧に研磨が施されている。本品は刃部と柄部からなる。刃部は両面から研ぎだされており、煤のようなものが付着している。柄は若干のひねりがあるが、非常に握りやすい形である。先端には径3mmの孔がある。中間部が破損しているものの、全長は約10cm前後であったと推察される。御細工所跡^{註2}喜友名貝塚・喜友名グスク^{註3}に類似資料の報告がある。出土地不明。

サイコロ (第59図25)

牛骨を一辺が約1cmの立方体に成形し、研磨を施している。全体的に黒く変色している。各面の数の目は浅く掘られており、大きさや並びは揃っている。対面する数の目を足すと「7」になる仕組みは現代のサイコロと変わらない。北側3層からの出土。サイコロの出土例は勝連城跡^{註4}などの報告があるが、最近では喜屋武グスクからの出土も報告されている。^{註5}

不明 (第59図26)

牛あるいは馬の骨を利用している。長さ3.3cm。断面形は丸い。らせん状の溝があり、わずかだが磨耗が見られる。何かにはめ込んで使用したと思われるが、実用的なものと言うよりは、装飾的な観が強い。溝以外の部分には、丁寧な研磨が施され光沢もある。下端に行くにつれ先細くなっており、先端は丸い。詳細は不明。出土地不明。

<注>

- 註1 「天界寺跡(T)」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月
 註2 「御細工所跡」『那覇市文化財調査報告書』第18集 那覇市教育委員会 1991年3月
 註3 「喜友名貝塚・喜友名グスク」『沖縄県文化財調査報告書』第134集 沖縄県教育委員会 1999年3月
 註4 「勝連城跡」『勝連町の文化財』第6集 勝連町教育委員会 1984年3月
 註5 沖縄タイムス朝刊 市町村20面カラー掲載 2002年2月5日

<参考文献>

- 『瀬田古宮跡(IV)』『沖縄県文化財調査報告書』第136集 沖縄県教育委員会 1999年3月
 『伊原遺跡』『沖縄県文化財調査報告書』第73集 沖縄県教育委員会 1986年3月
 『首里城跡』沖縄県教育委員会文化課・編 昭和63年3月

第43表 銭貨観察一覧

単位mm/g

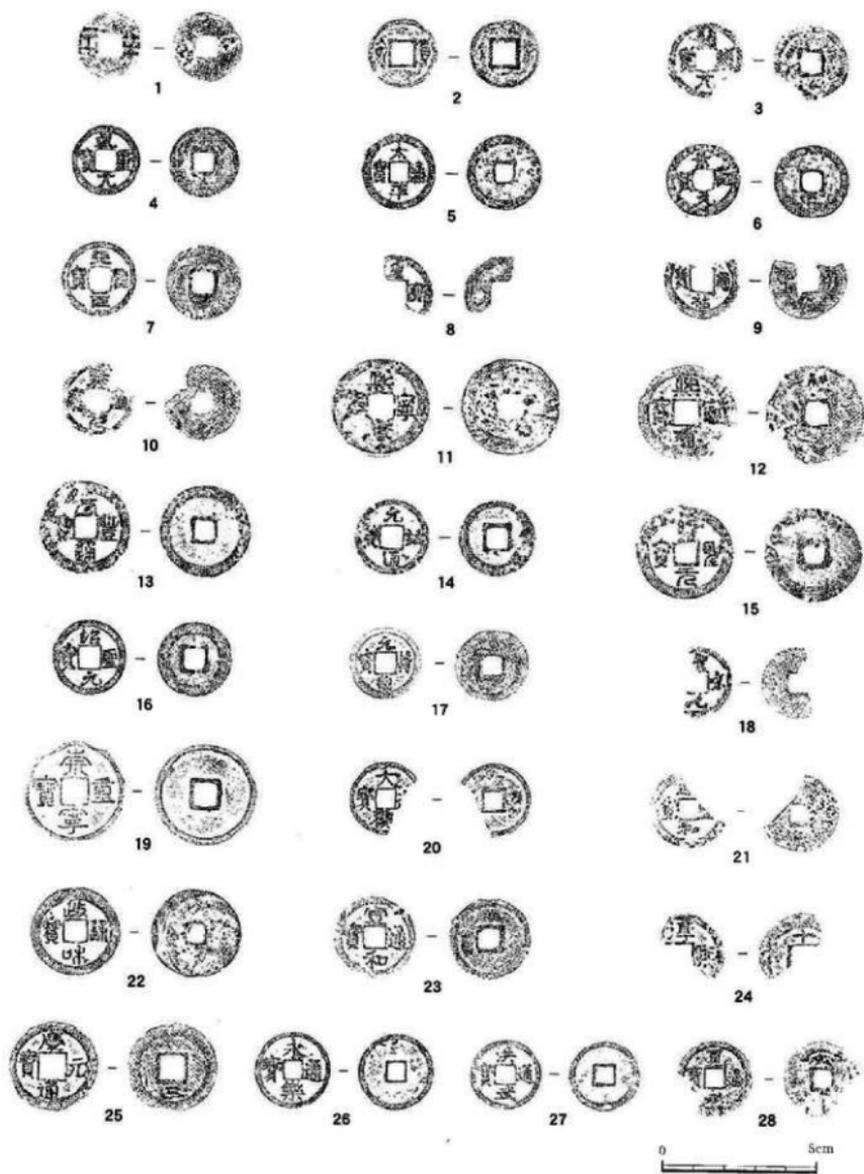
番号	銭文	銭種	書文	書体	時代 初銭年代	外縁外径 外縁内径	外縁厚 外縁内径	孔径 縦×横	重さ	完/破	観察事項	出土地
14	元祐通寶	元祐通寶	無文	行書	北宋 1085年	24 21	2.0 0.5	7.0 6.0	3.8	完	全体的に青緑色の錆で覆われる。左下にわずかな欠けがみられる。錆と厚減のため「寶」が不明瞭になっているが、判断は可能。	北側3層
15	〇聖元寶	紹聖元寶 折二銭	無文	篆書	北宋 1023年	31 23	2.0 0.5	6.0 6.0	7.5	完	左上に上文字に錆の塊が付着。「聖」「寶」は潰れて不明瞭だが判断は可能。銭文と書体から紹聖元寶折一銭であるとと思われる。	不明
16	紹聖元寶	紹聖元寶	無文	行書	北宋 1094年	24 19	1.0 0.9	7.5 6.5	3.1	完	「寶」の文字が厚減により不明瞭だが、他の二文字は明瞭に観察できる。	表1・覆瓦
17	元符通寶	元符通寶	無文	行書	北宋 1098年	24 19	1.3 1.0	6.0 6.0	3.7	完	保存状態は良好だが、「符」「通」「寶」が厚減により不明瞭である。判断は可能。	コ-54敷A
18	聖宋元〇	聖宋元寶	無文	行書	北宋 1101年	24 19	1.5 0.5	6.0 —	2	1/2	左半分が欠損。厚減のため「聖」「宋」「元」が不明瞭だが、判断は可能。聖宋元寶になるとと思われる。	ビット
19	崇寧重寶	崇寧重寶 当十銭	無文	篆書	北宋 1103年	33 29	2.0 0.5	8.0 8.0	7.1	完	保存状態が良好で、文字も明瞭。	造成層
20	大觀元〇	大觀通寶	無文	楷書	北宋 1107年	24 20	1.3 1.0	6.0 6.0	2.4	3/4	右文字が欠損しているが、「大」「観」「元」の二文字から大観通寶になると思われる。	北側1層
21	〇和政通寶	政和通寶	無文	楷書	北宋 1113年	25 20	1.5 0.5	6.0 6.0	2.4	3/4	上文字の一部と右文字が欠損。上文字は残存部分から「政」の可能性が高い。政和通寶になると思われる。	北側3層
22	政和通寶	政和通寶	無文	篆書	北宋 1113年	29 22	2.0 1.0	6.0 6.0	8	完	「通」「寶」がやや潰れているが、判断は可能。他の二文字は明瞭である。	表1・覆瓦
23	宣和通寶	宣和通寶	無文	楷書	北宋 1119年	27 22	2.0 0.5	6.0 6.0	5.5	完	右下から左下にかけて、縁がところどころ欠けている。右と右下の縁には筋が付着。「宣」「通」「寶」の文字がやや潰れているが、判断は可能。	北側4層
24	淳熙元〇	淳熙元寶	十	行書	南宋 1174年	—	2.0 0.5	—	2.4	1/2	上文字と左文字が欠損。全体的に青緑色の錆で覆われる。「淳」がやや潰れているが判断は可能。行文と銭文から淳熙元寶になると思われる。	ビット
25	熈元通寶	熈元通寶	三	楷書	南宋 1195年	29 23	2.0 0.5	9.0 9.0	6.5	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。銭文は明瞭。背文は不明瞭だが判断は可能。	ビット
26	永樂通寶	永樂通寶	無文	楷書	明 1408年	25 21	1.5 0.5	6.0 5.0	2.6	完	「寶」がやや潰れているが、他の銭文は明瞭。	北側1層
27	洪武通寶	洪武通寶	無文	楷書	明 1368年	22 19	1.8 1.0	5.0 5.5	3.5	完	「寶」がやや潰れているが、他の銭文は明瞭。	表1・覆瓦
28	寛永通寶	寛永通寶	文	楷書	江戸 1688年	25 20	1.5 0.5	8.0 5.0	2.8	3/4	全体的に淡褐色の錆で覆われる。左下が一部欠けている。銭文・背文ともに不明瞭だが、判断は可能。	表1・覆瓦

□—欠損 ○—判断不能

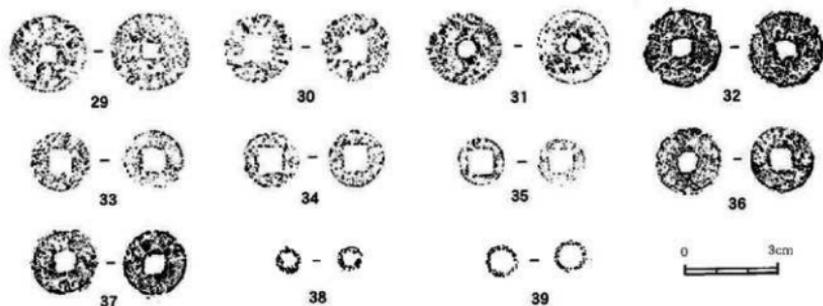
第43表 銭貨観察一覧

単位mm/g

番号	銭種	分類	最大径	厚さ	孔径 縦×横	重さ	完/破	観察事項	出土地
29	無文銭	A-I-1	24	1.8	5.0 5.0	2.8	完	全体的に褐色の錆で覆われる。	北側2層
30		A-I-1	22	1.8	8.0 8.0	2.1	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。	地山直上
31		A-II-1	23	1.9	5.0 5.0	3.6	完	全体的に青緑色の錆で覆われる。表面には淡褐色の錆が付着。	ビット
32		A-III-1	23	1.4	6.0 5.0	1.8	完	外形に近いが、縁が一部欠けている。全体的に青緑色の錆で覆われる。	遺構
33		B-I-1	19	1.1	7.0 7.0	0.9	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。	不明
34		B-I-1	18	1	7.5 7.5	0.5	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。縁に欠けが数カ所みられる。	北側1層
35		B-I-2	15	0.7	8.0 7.5	0.4	完	全体が淡緑色の錆に覆われる。空内の角のひとつがやや丸みを帯びている。	南側1層
36		B-II-1	20	0.8	6.5 6.0	1	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。穿は凹に近いがやや角張っている。	コ-ラール敷A
37		B-III-1	20	0.9	7.0 6.0	1.4	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。	南側4層
38		C-II-2	8	1.3	8.0 6.0	0.1	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。縁が一部欠けている。	南側4層
39	C-III-3	10	1.1	4.0 3.0	0.1	完	全体的に淡褐色の錆で覆われる。	不明	



第60圖 錢貨 (有文)



第61図 錢貨(無文)

第31節 青銅製品

本地区からの青銅製品には簪を中心に、武器類や香炉、家具等の裝飾金具と考えられるもの、棒状製品などが見られた。以下に各製品について概観する。

簪 簪は、総数8点が得られ、そのうち形状的特徴的な5点を第62図に示した。主にⅠ類：竿の断面が四角で頭部に花を持つもの、Ⅱ類：耳掻き状あるいは匙状の頭部(カブ)を呈し、首や竿部分が六角になるもの一に大別できる。

Ⅰ類には第62図1(花)と第62図2(竿部分)がある。この類の竿部分は通常一首、ムディ、竿と区分できるが、図2は残存のもので見るかぎりすべて竿のような形状を示している。簪以外の製品も想定されたが、先端にいくにしたがいが細くなり、上部が接合痕を印象づけるような状態である事から、簪として扱った。一方Ⅱ類では、匙状の簪は得られず、耳掻き状のものだけとなっている。法量、観察事項を以下の一覧に記す。

第45表 簪観察一覧

単位: mm/g

図番	番号	分類	完・破	残存長さ	残存重量	カブ 長軸 短軸	首 軸大軸 短軸 長さ	ムディ 幅 長さ	竿 最大幅 最小幅 長さ	観察事項	出土地
第62図・ 図版49	1	Ⅰ	破	21	2.4	—	—	—	—	表面は6つの花弁と花芯、さらに芯は7つの丸で表現されている。表面は竿部分と接合するための板状のものが接していたと思われる。花の断面の厚みは2mm程度で模様等も含め丁寧なつくりの印象を受ける。	南鏡3層
	2	Ⅰ	破	205	13.9	—	—	—	4 2.2 205	花の部分が欠落したもので、残存が20mmあまりと短い。上部は断面がほぼ四角、中間付近から先端へは断面が丸丸と細くなる。首、ムディを区別する様はなく、竿で全体が形づくられ、特徴的である。	石列D
	3	Ⅱ	完	180	7.94	28.5 5.5	2.6 3.2	2.5 2	2.7 1.9 117.5	カブは断面の厚さが2.1mm、内側もくぼまず平円気体なので厚い印象を受ける。首から竿にかけて緩やかな様をなし、ムディで互いの種が交差する。竿はあまり細身ではなく先端部分だけが若干すぼまる。	南鏡3層
	4	Ⅱ	完	120.8	4.3	11 4	2.9 2.4 3.6	3 2	3.2 1.3 72.8	首、竿とも6つの稜をなし、ムディの部分で交差している。竿は先端にいくにしたがいが細くなる。	茨土・堀見
	5	Ⅱ	完	92	2.1	7 3.8	2.2 1.7 18.5	2.4 0.7	2.5 0.9 69.4	カブは、耳掻き状で曲がり具合が強い。首にいくつかの稜があり、ムディ部分で交差しながら、竿では六角の稜となっている。全体的に緩やかな印象である。	油断(1-22 造成層内)

その他の青銅製品 その他の青銅製品には多様なものが見られた。その中で残存状態が比較的良く、用途が推定できるものを第62図7~13、16に示した。

第62図6は5.3cm×1.85cm、厚さ1mm、重さ5.8gの金具。中央に孔が3つ、さらに全体に花や葉等を配する。Ⅰ-21ピット5の出土。

同図7は刀の鐙で短軸(横)5.7cm、長軸(縦)6.6cm、厚さ4.5cmを計測した。茎孔(なかごあな)と呼ぶ中心の孔は縦が3.8cm、幅0.7cm、その周辺は切羽台で窪んでいる。片方のみ3つの種で縁取られている。全体的に錆が付着。H-20ビット24より出土。

同図8は楕円で玉状の製品。長さ1.1cm、幅0.7cm、重さ2.7gで一部錆により変色している。J-27ビット39上部より出土。

同図9と10は側面が半円を描くもので中は空洞になっている。前者は正面に溝が走っており錆が想定される。重さ1.4g、方形状堀込み造構より出土。後者は9より若干大きく、厚さは1mm程度と薄い。重さ2.7g、H-23南側2層より出土。

同図11は釘のような形状で頭部は角が面取りされ、孔があいている。下部は断面が四角で、装飾物の留め具と考えられる。残存長1.7cm、重さ2.1g、I-14北側4層より出土。

同図12は青銅製香炉の足で、獅子を模している。上部は香炉本体と接合するための突起があり、裏面は空洞で型により成形された事が窺える。K-17北側1層より出土。

同図13は分銅で重さ10.9g。材質は表面の色や錆の具合から真鍮とも考えられる。文字の様な沈線が刻まれている。I-28南側3層より出土。

第62図16は残存長5.3cmの細身の角釘で頭部はすばんだような形状になっている。暗青色で断面は方形。J-27溝状造構より出土。

第46表 青銅製品・鉄製品出土状況

種類	出土層	遺失・復元	清備				末期				地山直上	煮煉	コリヤル数A	コリヤル数B	石列D	石列E	石列A	石列C	溝状遺構D	溝状石列	瓦面まのC	ビット	遺構	不明	合計		
			1層	2層	3層	4層	1層	2層	3層	4層																	
青銅製品	釘	1				1									1											4	
	角釘	1	1			1																	1			3	
	鐙	1																								1	
	鍔	1																								1	
	全身型	4		1	3	1		1		4	4	1		3		1						1	1	2	2	35	
	武器小物	1	1																							2	
	板状製品	8	1		3	3	1		1		2	6	3	1	3		1						3	2	4	43	
	棒状製品	4	1		1	3	1		1		2	6											1	3	2	4	32
	さび状製品	2																									2
	筒状製品	1				1					1	1												1	2	2	10
	輪状製品	6	2	1	2	1		1		7	1	1	1	2	1	2		1					2	2	4	36	
杖状不明	1	1			1				1	1			1													8	
合計	27	7	1	8	11	4	1	5	16	19	6	2	12	1	1	2	1	2	1	2	2	13	6	26	176		
鉄製品	角釘	1	4			1	1	3	5	2	6	4		3	1							1	4	1	1	44	
	丸釘	1														1	1	3	1							2	
	笠釘	1																								1	
	鋼鉄	1	2																							2	
	金具									1																1	
	紐										1															1	
	小札	1																					1			1	
	刀子	1																								1	
麻手	1																								1		
合計	7	4	0	0	1	1	3	6	2	7	5	0	0	3	1	0	0	1	1	3	1	0	1	5	1	54	

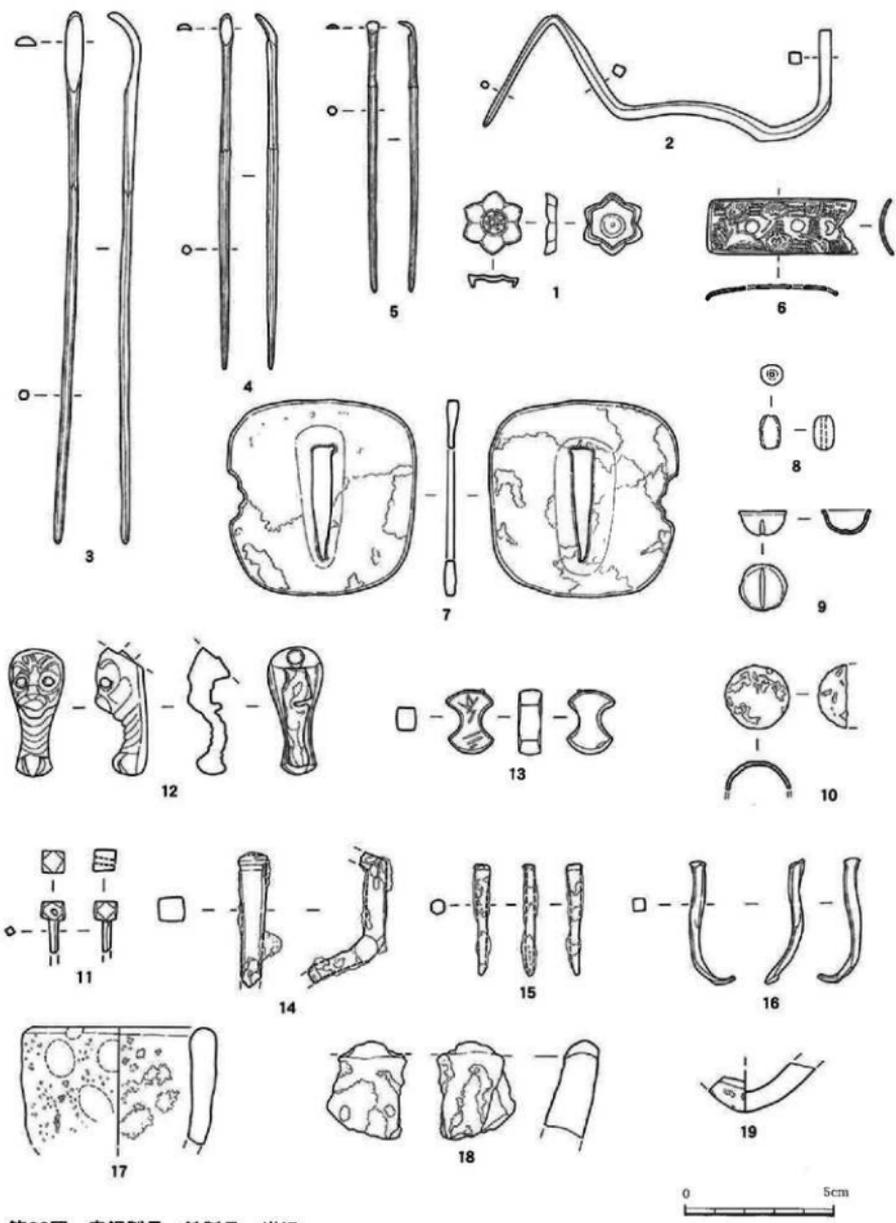
第32節 鉄製品

総数54点の鉄製の製品があるが、形状の不明なものが多い。その内比較的原形をとどめている釘数点を掲載した。その他種類や出土状況については一覧表を参照していただきたい。

第62図14は残存長約5.6cm、最大幅1cm、重さ9.5gの角釘で、下部が欠損している。頭部は逆I字形になる。K-18北側4層より出土。同図15も断面が方形の角釘で残存長3.8cm、重さ1.9g、出土地J-24北側3層。

第33節 埴埴

第62図17は、推定口径6.4cmの埴埴で口唇断面は丸くなる。外面が黒色、内面は暗茶褐色で両面とも大小の気泡が生じている。出土地G-17北側4層より出土。同図18は17より器壁が厚い。内容物が付着したため、特に内面に凹凸がある。出土地不明。同図19は埴埴の底部で両面とも黒色を呈する。I-21瓦溜まりCより出土。



第62圖 青銅製品・鉄製品・埴埴

第34節 玉類

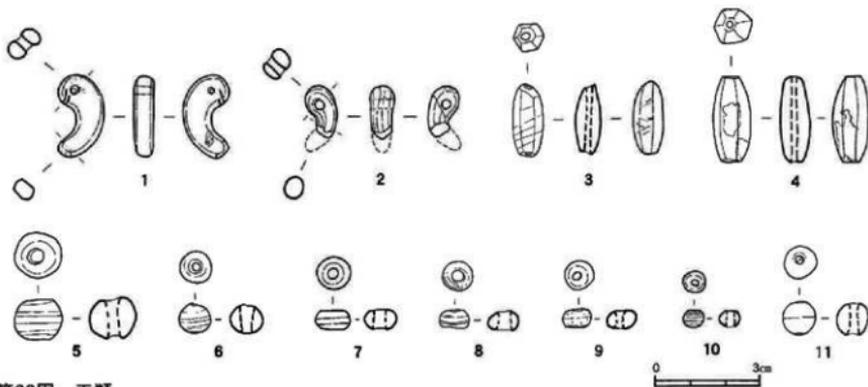
玉類は総数22点が出土した。そのうち11点を第63図に示した。形態から分類すると勾玉2点、切子玉2点、丸玉18点となる。そのうち丸玉には白形・卵形の2種の形状がみられ、白形16点、卵形1点、不明1点となっている。材質¹⁾から分類すると勾玉のうちヒスイ製1点、貝製と思われるものが1点、丸玉のうち流紋岩質と思われるものが1点で、他はすべてガラス製である。出土層別にみると、勾玉が表土・擾乱、ピットから各1点、切子玉が北側3層、瓦溜まりCから各1点、丸玉が表土・擾乱、ピットから各2点、南側2層、北側3層、コーラル敷B、石列A、瓦溜まりCから各1点、出土地不明のものが9点となっている。

(註)

註1. 材質の同定は神谷厚昭氏の御指示による。

第47表 玉類観察一覧

第63図 図版48	高さ	直径	孔径	残存 位置	形態	形状	材質	色調	観察事項	出土地
1	23 (長さ)	6 (幅)	2	2.3	勾玉	一	ヒスイ	緑色	両面が丁寧に磨かれ、滑らかで光沢がある。両部の下部から孔に向けて溝が2本入っている。色調は緑を基調とするが、表面があせて茶色とまどらになっている。	表土・擾乱
2	29 (長さ)	7 (幅)	3	1.1	勾玉	一	貝製?	茶色	尾部を欠損する。表面は大部分が剥落し、白色の裏地が露出している。また、数条の筋が観察できる。	ピット
3	21	8	2	1.8	切子玉	六角錐	ガラス	淡褐色	側面が丁寧に面取りされ、上面は六角形を呈す。側面は傾斜がゆるやかに膨らみ、上下端がすぼまる形状を呈す。上面の一部欠けており、緑色の茶地が観察できる。	北側3層
4	35	12	2	2.0	切子玉	六角錐	ガラス	淡褐色	側面が面取りされ、上面は六角形を呈す。側面は傾斜がゆるやかに膨らみ、上下端がすぼまる形状を呈す。風化により表面が粉っぽくなり、ザラザラしている。	瓦溜まりC
5	13	11	3	2.3	丸玉	白形	ガラス	赤色	上・下面が平用に仕上げられている。下面が僅かに欠けている。表面はなめらかで、螺旋状の筋が確認できるため、巻きつけ技法により作られたと思われる。	北側3層
6	7	9	3	0.7	丸玉	白形	ガラス	深緑色	下面が平用に仕上げられている。表面がアバタを呈し、ザラザラする。螺旋状の筋が明確に観察できるため、巻きつけ技法により作られたと思われる。	表土・擾乱
7	5	9	3	0.7	丸玉	白形	ガラス	透明	上・下面が平用に仕上げられている。内部に細かな気泡が見られる。保存状態が良好でなめらかな表面。螺旋状の筋が確認できるため、巻きつけ技法により作られたと思われる。	コーラルB
8	5	9	4	0.5	丸玉	白形	ガラス	青緑色	下面が平用に仕上げられている。表面にアバタが若干観察できる。螺旋状の筋が明確に観察できるため、巻きつけ技法により作られたと思われる。	不明
9	5	9	3	0.7	丸玉	白形	ガラス	緑色	上・下面が平用に仕上げられているが、左右で高さが異なる。表面はアバタを呈し、ザラザラしている。螺旋状の筋がみられるため、巻きつけ技法により作られたと思われる。	不明
10	6	5	2	0.3	丸玉	白形	ガラス	赤色	表面に黒い輪がまどらに観察できる。またアバタが若干観察できる。	不明
11	6	9	2	2	丸玉	卵形	流紋岩質?	黒・灰色のまどら	上・下面が平用に仕上げられている。上面はややいびつな円形を呈す。表面はなめらかで光沢があり、茶色の筋が若干観察できる。	石列A



第63図 玉類

第35節 石器・石製品

今回の調査で確認できた器種は、石斧・敲石・磨石・砥石・硯・印鑑・台座・石臼・鉢・石球・基石の11器種で、破損品や製作途中にあるもの、石材まで含めると総数は142点である（第48表）。最も多く出土した石球は99点で、全体の約70%を占めている。一方で他の器種は数点の出土しかなく、石球の出土量の多さは特筆すべき事項であろう。出土地は表土・攪乱のものが多く、遺構から出土したものは僅かであった。以下、器種別に概略を記述していき、個々の特徴については第49表の観察一覧に記載する。なお、敲石と磨石、基石は集計のみ行ない、本文及び図化は割愛した。

石斧(第64図1・2)

2点とも磨製石斧と思われる資料であるが、刃部を欠くため刃の研ぎ出し方等の詳細は不明である。いずれも緑色片岩を利用した製品である。

砥石(第64図3～7)

石鏡状に形を整えたものから不定形で小型のものまで、様々な形状がみられた。研ぎ面には、いずれも溝状の使用痕が残る。石質は安山岩が上であるが、石斧等に利用される緑色片岩を用いたものもあった（第64図7）。

なお、石質同定の結果、人工物を素材としたものがあつたが、砥石という性格上、本項目で扱った（第64図4）。

硯(第65図1・2)

凝灰岩を利用した平均的なサイズの硯と、大理石（結晶質石灰岩）を利用して作られた小型の硯が出上している。

印鑑(第65図3)

篆刻で「純郎」と彫られた印鑑である^{註1}。表採資料で、朱肉が付着している点から、比較的新しい時期のものと思われる。

台座(第65図4)

器物等を置く台座のようなものが得られている。小破片ではあるが、図上復元を試みた結果、四足になるものと思われる。

石臼(第65図5・6)

石臼は、上下一組になっていることから、上臼をミームン（雌）、下臼をウームン（雄）と言う^{註2}。今回の調査では第65図5は上臼であるが、同図6は小破片のため、上臼か下臼かは不明である。これらは石質が異なるため、同一の石臼ではないと思われる。比較的新しい臼は落とし口を横へずらしているが、古いタイプの臼は中央に落とし口を設けてある^{註3}、同図5は中央に穴があいていることから、古いタイプの石臼と言えよう。

鉢(第65図7)

鉢の底部と思われる資料だが、他の器物になる可能性もあり、詳細は不明である。

石球(第66図1～7)

石弾と称される場合もあるが、今回の資料は小型で軽量なため、石球として紹介したい。大きさは直径1.4cm程度の小さなものから、直径5.5cm大のものまであり、直径の最大値により3種類に分類を行った。

大……直径が3.5cm以上のもので14点得られた。重量の最大値は143g、最小値は41g、平均値は64gである。

中……直径が3.5cm未満から2.5cmまでのもので35点得られた。重量の最大値は40g、最小値は9g、平均値は23gである。

小……直径が2.5cm未満のもので29点得られた。重量の最大値は18g、最小値は3g、平均値は9gである。

石質は、ほとんどのものが石灰質の砂岩を利用したもので、なかには石球が2個もしくは3個くっついたような興味深い資料も見られた。これらは別に分類を行い、その結果2個タイプが19点、3個タイプが2点であった。しかし、石灰質砂岩は性質上、このような形状には自然状態でもなりうるようであり^{註4}、実際に今回の調査でも球状の瘤が沢山付いた石灰質砂岩が得られている。これらは何れも明瞭な加工痕は見られないため、自然状態と思われるが、このような形状は石球の材料として都合が良く、それぞれを打ち欠いて少し手を加えるだけで一度に沢山の石球を得ることも可能である。したがって今回は、このような資料を石材として積極的に解釈し、その内の1点を図化した（第66図5）。

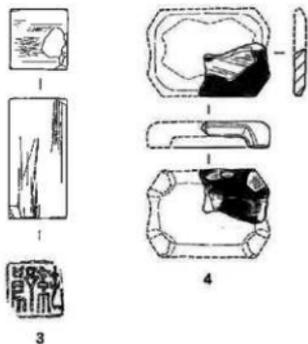
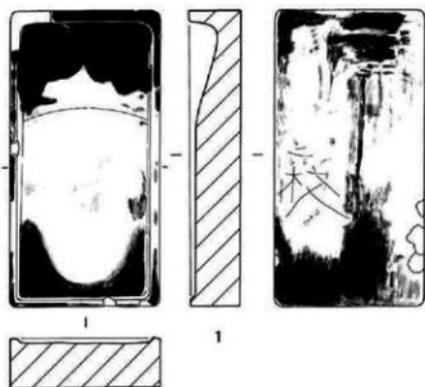
<註>

註1. 篆刻文字の解説は、沖縄県立博物館の宮城 勉氏によるものである。記して感謝を申し上げます。

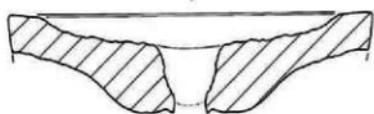
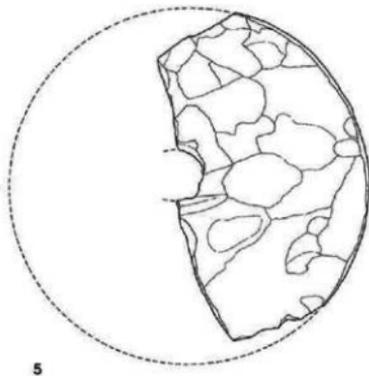
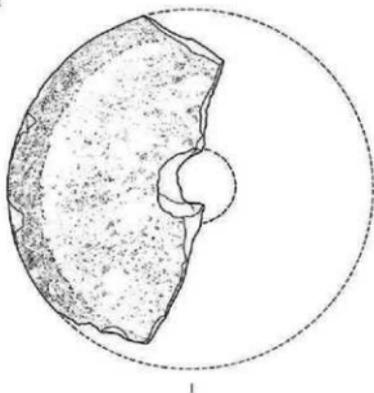
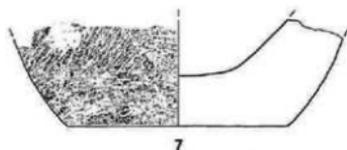
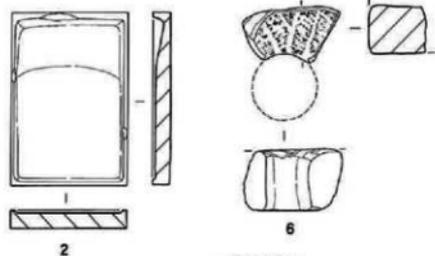
註2. 大城精徳 「想い出の中の民具—トーフウシを中心として—」 『ヤチムン会誌』 1971年



第64図 石器・石製品 (1)



0 5cm
 (1-4-62346/2)



0 10cm
 (5-714用縮尺)

第65圖 石器・石製品(2)

第36節 滑石製品

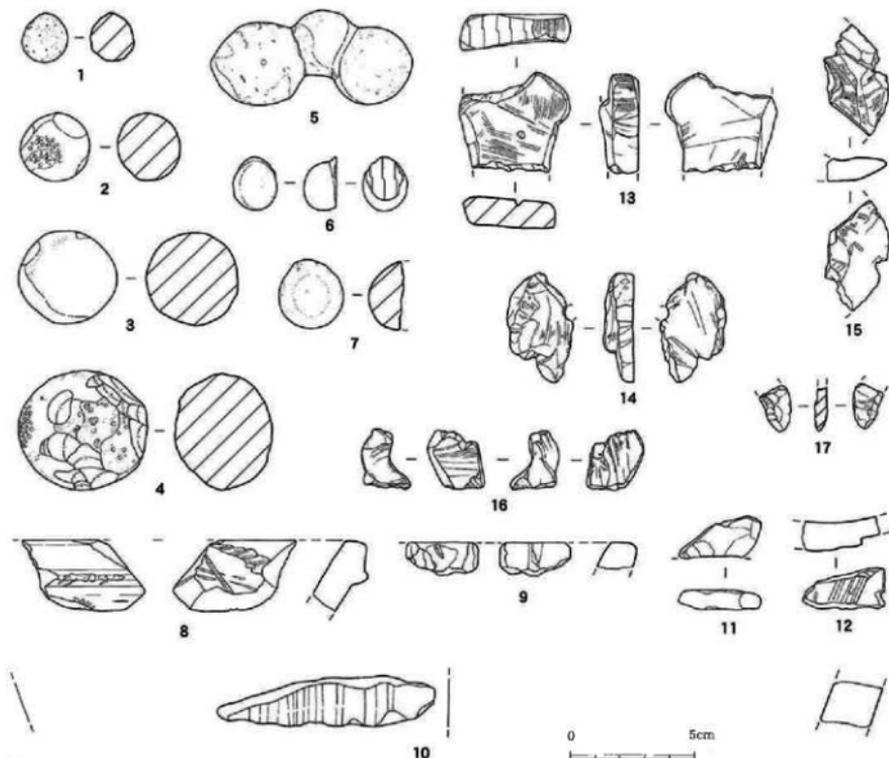
滑石製石鍋と破片の2次利用品をまとめてあつかった。総数11点が得られ、うち10点を第66図に示した。

石鍋は同図8～12で、いずれも小破片であり全形をうかがうことはできない。口縁部は鋳状をなすタイプ（同図8）と、直口と思われるタイプ（同図9）がある。2次利用品は同図13～17で、いずれも破片を研磨しているが用途は不明である。同図13は杓状、同図15は鋳状に形成しているため、何らかの用途が考えられるが、他は不明。

第50表 滑石製品観察一覧

図	種類	部位	計測値	観察事項	出土地	
第66 図 52	石鍋	8	—	蹄状の口縁部。鋳の形成は鋭い。口唇部は平坦に形成する。	J-19北側1層	
		9	—	直口のタイプ。口唇部を平坦にする。	H-20ピット20	
		10	胴部	—	胴部片。研磨痕が残る。	I・J-16北側4層
		11	—	胴部片。研磨痕が残る。	I・J-16北側4層	
		12	底部	—	外底面に段を形成する。系線がみられる。	I-20造成層 (20-30)
		13	2次利用品	重さ: 34.1g	表面、側面に研磨を施し、上辺などに系線。焼熱のためか全体的に黒ずむ。	不明
		重さ: 14.9g		表面とも研磨し、側面は手なれたためか角がとれる。孔の一端が壊れる。2次加工か不明。凹凸形を呈する。	J-21味	
	重さ: 11.8g	鋳状の製品。本来は凹形であったと思われる。研磨および系線が明確。		G-20ピット14		
	重さ: 8.4g	不定形。研磨がみられる。		不明		
	17	重さ: 1.1g	三角形。剥離調整か。	I-17ピット1		

注 一J: 計測不可



第66図 石器・石製品 (3) ・滑石製品

第37節 石像

調査地の東端に位置するL・M-22・23グリッドの表土から、表土除去中に石像の破片が検出されている。発見された地点は、平面が直径数メートルの円形で、丸底状にくぼんでいることから、第二次大戦時の砲弾穴の可能性が考えられる。これらの石像はこの穴の攪乱層からまとまって検出されていることから、これが砲弾穴だとすれば、終戦後に平場造成を行う際、そこに何らかの理由で破壊された石像を、まとめて埋設した可能性もある。

石像に関して『球陽』には、高貞王28(1696)年に「仁王石像を護国寺の門に請安す」とあり、さらに同年「円覚寺の山門に改めて観音及び羅漢を奉ず」と記されている。この『球陽』中には、天界寺の石像についての記載はみられないが、これと同時に安置した可能性も考えられる。しかし、表土からの出土ということもあり、時期的なものとは判然としない。なお、『球陽』によると、この翌年にあたる高貞王29(1697)年には、現在那覇市の指定史跡となっている旧天界寺の井戸が掘られたことが記されている。

石像はすべて頭部及び腕をはじめとした四肢は欠損しており、さらに胴体部も一部破損しているため、像の種類及び部位等に関して不明な点が多いが、この中で確認できるのは類似資料が2体分出土していることから、対で安置していたと考えられる金剛力士(仁王)像と思われる立像及び、蓮華の台座に倚坐した坐像及び立像に大きく二分することができる。石材はすべて安山岩で、石質同定により鹿児島県産の可能性が高いとする所見を得ている。

1. 金剛力士(仁王)像(第67図石像(1))

第67図1及び2は丸彫りの石像の上半身部で、第67図1は高さ66cm、最大幅47cm、最大厚39cmを測り、第67図2は高さ61cm、最大幅53cm、最大厚39cmである。筋骨隆々とした胴の両脇から首のうしろにかけ、裸体に天衣をまとめていることから、金剛力士(仁王)像と考えられる。2体分出土している内のひとつで、頭部・腕部は欠損している。本資料の底部は2体とも上げ底状に丸くくぼんでおり、くぼみの内部には壔痕(のみあと)も見られることから意図的に彫り込まれたものとみられ、さらにくぼみの中に白色の塗痕が付着していることから、下半身部は凸状に加工した上で、塗痕を接着剤として上半身部に接合していたことが推測できる。しかし、下半身部は今回の調査では得られていないため、明確な接合方法は不明である。

第67図3は唯一得られた腕部の破片である。筋肉の形状から上腕二頭筋の部分であり、その筋肉の付き方等から左上腕の破片と思われる。長さ33cm、最大径21cmを測る。衣服が彫刻されていないことから、金剛力士(仁王)像のものと思われるため、その胴体部である第67図1及び2の資料の肩部に接合を試みたが、接合部が欠けているため不可能であった。

2. 立像及び坐像(第68図石像(2))

石像の台座である蓮華座の部分が2点及び、これに関連すると思われる衣服の彫刻が施された石像の破片が1点得られている。

第68図4及び5は、丸彫り石像の台座と考えられる資料で、蓮華を模していることから蓮華座と呼ばれる。その上部には下半身の一部分が彫刻されているが、破損しているため像の種類等については不明である。第68図4の台座は、高さ58cm、最大幅48cm、最大厚53cmを測る。部分的に衣服の彫刻が覆うが、像の下部に幅広の蓮弁が彫られており、前面及び上部には衣服が表現されている。座した脚部らしきものが見られないことから、立像の可能性が高い。底面は第67図1及び2と同様に上げ底状に彫り込まれており、端部に径1cmほどの溝を伴ったくぼみがみられ、そこに鉄錆が付着した状態が確認できることから、何らかの技法で接合する際に、鉄筋状の金属を用いていたことが想定できる。

第68図5も蓮弁が彫刻された台座であるが、第68図4の資料に比して蓮弁が精緻で、表現も優れている。前面両側には縦位に2本の脚部らしき彫刻が見られるが、右脚部は破損しているため、どろしているのか、あるいはあぐら状に曲げているのかは判然としない。なお、台座に座って両足をどろしている状態を菩薩倚坐(ぜんかいざ)、左脚を下ろし、右脚を横位に曲げている場合は半跏倚坐(はんかいざ)と称しており、本資料はこのいずれかであったと思われる。

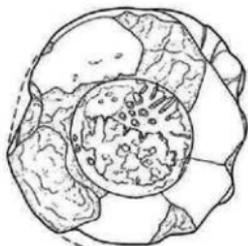
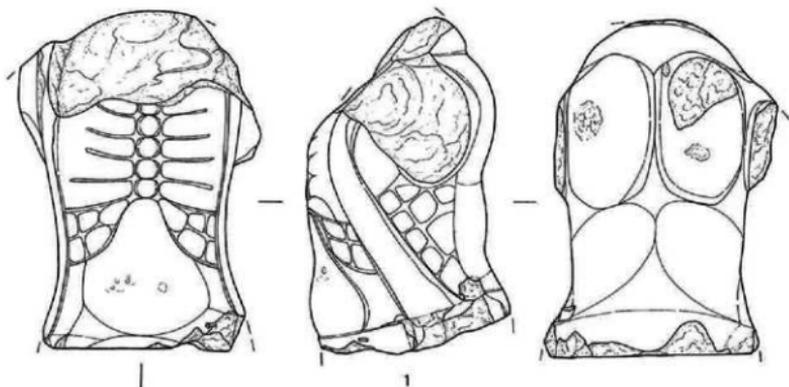
また、今回得られた蓮華座の資料は、正面観が逆台形状をした請花の部分のみであるが、蓮華座は通常、その下部に請花と同様に蓮弁を施した台形状の反花(かえりばな)があり、最下部には比較的装飾の少ない框座(かまちざ)の3つで基本的に構成されていることから、元来はそれぞれに配してあったことが、第68図4底面の接合

部に彫り込まれたくぼみからも考えられるが、今回の調査では反化及び柵座は確認されていない。

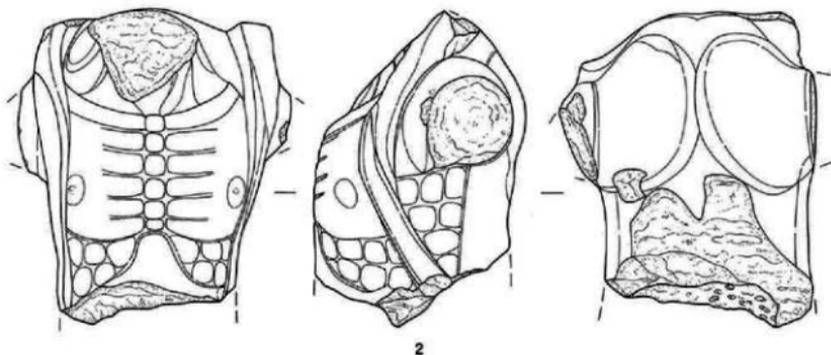
第68図6は、高さ43cm、最大幅46cm、最大厚39cmを測る。上下が著しく破損しているため、石像のどの部位に該当するか判然としない資料だが、衣装がたなびく状況が彫刻されている資料である。本資料が、第67図1・2及び第68図4・5のいずれかの衣服の可能性を考えたが、残存部が希少であることから接合も不可能で、確認するに至らなかった。

参考文献

- 琉球研究会編 『沖縄文化史料集成5 琉球 説みどし編』 株式会社角川書店 1974.3
久野 健 『仏像の歴史—飛鳥時代から江戸時代まで—』 株式会社山川出版社 1987.9
庚申懇話会編 『日本石仏事典 第二版』 雄山閣出版株式会社 1995.2
佐和隆研編 『仏像図典』 株式会社吉川弘文館 1973.6



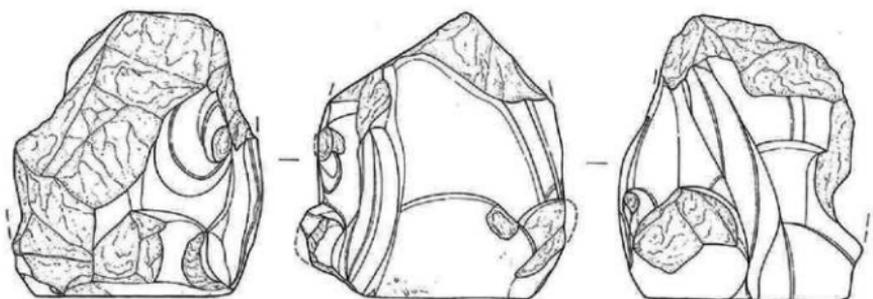
3



2

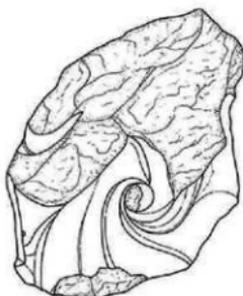
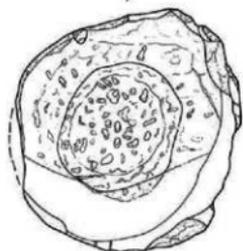


第67图 石像 (1)

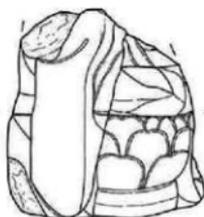
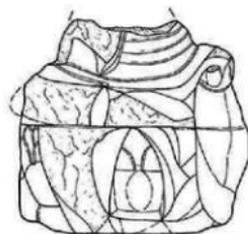
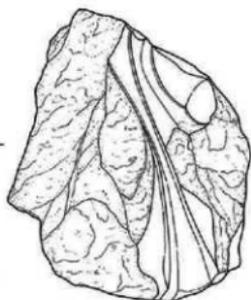


1

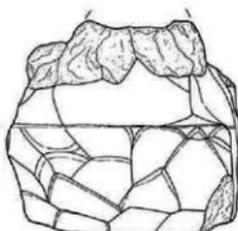
4



6



5



第68圖 石像(2)

軒丸瓦である。文様の巴文には糸きり痕が明瞭に残り、また、瓦当面全体に細かい白砂が多数付着している。外区には3+1+3+1……の順で珠文が配されている。色調は灰色を帯びる。K-22遺構出土。

b. 軒平瓦

第69図2の瓦当文様は線で表現された唐草文の軒平瓦である。破損資料であるが、中心飾りに5枚の葉を有する花文をおき、その両側に唐草文を配している。左側の唐草文は4巻みられ、右側は3巻を僅かに遺存している。左右の唐草文は非対称的である。瓦当表面には離れ砂の細かい白砂が付着している。額の成形は貼り付け額で、接合面は縦方向のナデ整形がみられる。L-15北側4層出土。

c. 丸瓦

同図4～6の3点である。5と6が玉縁側の破片で、打捺文様の羽状文と縄目文の二種類を代表する。5は羽状文を施文するもので、凹面には刺し網状の紐圧痕を残す。紐痕の幅は約0.3cmである。筒部の厚さは1.4cmを計測した。4は側面に二面の面取りがみられる資料で、打捺文に縄目文を施す。5と同様の紐圧痕がみられるが、紐圧痕は幅約0.4cmと太い。筒部の厚さは2.0cmである。色調は前者が褐色で、後者が灰色を帯びる。6は凸面に羽状文を有する玉縁から側面部まで及ぶ破片で、厚さが約2.9cmと厚手である。大型の丸瓦を想定できる資料である。4はG-21基壇出土。5はH-22方形掘込み遺構。6はM-21北側3層出土である。

第52表 大和系瓦出土状況表

瓦上地・遺構 出土層	瓦上・ 細片	種類			瓦割	地山 直上	基壇	コ イ ル 敷 A	方 形 掘 込 み 遺 構	コ イ ル 敷 B	七 河 A	右 列 D	支 那 ま り C	本 明	合 計	
		1 層	2 層	3 層												
軒丸瓦		1													1	
丸瓦	玉縁左片	1	2		1						1		1	1	0	
	玉縁右片														0	
	側面左片	1	4		1			1	1					2	9	
	側面右片			1											5	
軒平瓦									1						1	
平瓦	玉縁左片				1									1	0	
	玉縁右片													1	1	
	側面左片		1		1	1								1	3	
	側面右片				1			2				1	1	1	6	
細片丸瓦						2									2	
合計		1	5	1	1	1	2	1	3	2	3	1	1	1	2	13
																38

d. 平瓦

本類に分類できる平瓦はいずれも細片で総数15点である。瓦の表面は白砂が付着し無文である。また、側面は面取りが行われ平面を有する。

e. 雁振瓦

雁振瓦に属する破片は2点得られた。丸瓦部分が小形で、凸面に羽状打捺文があり、凹面には縦位のナデ整形痕を特徴する瓦である。細片のため上記の平瓦と同じく図を割愛した。

II. 近世の屋瓦

A. 明朝系瓦

明朝系瓦は本調査地区出土の主体瓦で、総数19,130点余りの破片からなる。瓦の種類は軒丸瓦(227点)、軒平瓦(202点)、丸瓦(5,764点)、平瓦(12,937点)の4種類である。これら瓦群は焼成技術や文様構成、素地などから、還元炎焼成の灰色瓦系と酸化炎焼成の赤色瓦系の2種類に大別できる。出土量は灰色瓦系が総数14,159点、赤色瓦系が4,784点である。(他187点は細片のため分類せず)。以下、2系統に分けて報告する。

1. 灰色系瓦

本瓦の種類は軒丸瓦(64点)、軒平瓦(61点)、丸瓦(4,342点)、平瓦(9,692点)の4種類である。

b. 軒平瓦

本瓦の瓦当は鳥瓦に一般的な逆三角形を呈する。瓦当文様はⅠ類(28点)、Ⅱ類(14点)、Ⅲ類(9点)、Ⅳ類(9点)の4種類に分類できる。

Ⅰ類 第71図1は瓦当が風化のため摩滅しているが、中央の花文がやや具象的に表現された花文である。やや斜めから俯瞰した構図の花文で、花芯の周辺に丸い花卉が6枚描かれている。そして花文の下部には茎、小葉がみられる。瓦当面に向かい右側と下部が欠落しているため、大きさは明らかではない。平瓦の凹面には桶巻きの紐圧痕が残り、とくに整形は行われていない。接合角度は115度で瓦当裏面の粘上の量が多く厚くなっている。瓦当裏は横ナデが行われている。J-16瓦溜まりA出土。

Ⅱ類 同図2は中央の花文のみを残してほとんど欠落した資料である。花芯は格子模様で、周辺に三枚に分かれた花卉を配している。また、花文の下部は船状か横位の葉を描いている。さらに茎やゼンマイ状の髭もみられる。平瓦部分は欠落しているが、接合面に向かい瓦当は厚みを増している。I-26南側2層出土。

Ⅲ類 同図3は比較的小型の瓦当資料で、瓦当面に向かい左側の外区を欠落している。文様の残りは比較的良好で、比較的簡略化した花文が描かれ、花芯は丸く無文で、両側に先端が裂け三枚状にみせる花卉が特徴的である。葉の両側は裂ける表現が行われている。平瓦との接合角度は107度である。M-20石列D出土。

Ⅳ類 同図4は類の三角部分を欠落した資料である。瓦当は風化が進行し、中央の花文も摩滅しているが、これまでの類例を参考にみると、湧田古窯跡Ⅰ⁴¹、天界寺跡(Ⅰ)⁴²などに類似する。花文は六枚の花卉で構成される。両側には先尖り葉文が描かれている。平瓦との接合角度は107度で、凹面には桶巻き紐圧痕が残る。接合の粘土も厚い。M-21瓦溜まりC出土。

c. 丸瓦

丸瓦は総破片数4,342点である。本瓦は前記したとおり還元炎焼成による造瓦であるが、仔細に色調をみると、若干酸化し褐色を帯びるものも含まれている。そのことから灰色系と褐色系に大別すると、前者が2,243点、後者が2,099点である。個体数を割り出すため、完形品における四隅部分が4点そろって1個体と判断すると、灰色系の場合は四隅部分の総破片数が553点であることから、4点で割り算すると138枚余りの枚数になる。同じく褐色系が142枚である。

第70図8の資料は玉縁の段部から約7cmの箇所、孔径約2.5cmの釘孔が、凸面側から穿たれている。端部は欠落して存在しないが、これまでの有孔資料から勘案すると軒丸瓦の破片資料と考えられる。凸面の整形はナデがなされ、無紋である。凹面は明瞭な布日痕が覆っている。筒部の厚さは2.2cmである。出土地点不明である。

d. 平瓦

平瓦は総数9,692点の破片からなる。本瓦の灰色系と褐色系の出土量は5,910点对3,782点で、丸瓦同様に灰色系が多い。個体数は灰色系が302点、褐色系が172点である。

第71図6、7は凹面に桶巻き板に巻かれていた紐圧痕を明瞭にみせる資料である。前者にはさらに桶板の大きさもわかる圧痕がみられる稀有な資料である。桶板圧痕の幅約2.5cmである。後者にも紐圧痕がみられる。紐圧痕の間隔は約2.5cmである。6はM・N-21・22、表土攪乱出土。7は出土地点不明である。

2. 赤色系瓦

赤色系瓦の種類は軒丸瓦(80点)、軒平瓦(37点)、丸瓦(1,422点)、平瓦(3,245点)の4種類である。使用方法とも関わるが、赤色系瓦には灰色系瓦には観られなかった漆喰の付着がある。

a. 軒丸瓦

瓦当文様はⅠ類(59点)、Ⅱ類(21点)の2種類に分類される。花文の構図は側視型と正視型の2種類が認められる。

Ⅰ類 第70図6は瓦当面のほぼ全体を残した製品である。瓦当文様の花文は側視型で、瓦当面全体に花卉が覆

う。珠文の径約0.5cm、数が12個である。瓦当裏面は粗面を呈し、指痕が多数残されている。丸瓦との接合には粘土は少ない。丸瓦との接合角度は約97度で、瓦当径約14.5cmである。出土地点不明である。

Ⅱ類 第70図7は外区の一部を欠く製品である。中央の花文は正視形で、粘土の厚さにより表現する手法がとられている。珠文は9個と少ない。大きさは径約0.6cmである。瓦当径は約15cmで、丸瓦との接合角度は100度。表土攪乱出土である。

b. 軒平瓦

本類は逆三角形をした瓦当面を特徴とし、髷瓦とも称する。瓦当文様の種類は1例のみで、出土数が37点である。

第71図5は向かって左の外区が破損している。焼成は良好で文様は鮮明であるが、花文はかなり抽象化され、中央の上部に格子文を施す花芯があり、その両側と下部に柿の実状の縦線の入った花卉が配されている。莖はなく英語のスペルにあるV状の凸線を描いている。花文の両側にある葉はとくに葉脈が強調され、葉そのものからも飛び出し、見るとソテツ葉にも類似する。外区には漆喰が付着する。垂れ長さは11.0cmである。K-19表土・攪乱出土である。

c. 丸瓦

丸瓦は総数1,422点出土した。いずれも破片で、紙幅の都合で図は割愛した。個体数を割り出すため、完形品における四隅部分の4点がそろって1個体分と判断し、四隅部分の総破片数386点を、4点で割り算すると96枚余りになる。

d. 平瓦

平瓦は総数3,245点得られた。丸瓦同様に図は割愛した。個体数は四隅部分が4点そろって1個体と判断し、四隅部分の総破片数581点を4点で、割りだすと145枚余りになる。

小結

以上、当調査地区の出土屋瓦は中世と近世の二期に分類できた。中世のグスク時代に属する高麗・大和両系瓦と近世以降の明朝系瓦の出土比率は、高麗系瓦：大和系瓦：明朝系瓦が1.1%：0.2%：98.7%となり、グスク時代の瓦が極めて僅少で、近世瓦を主体とした地区であることが判明した。後者の明朝系瓦は造瓦技法や焼成技法から灰色系瓦と赤色系瓦の前後二期に細分した^{註1}。分類の結果、灰色系瓦：赤色系瓦は75%：25%と、先行型式の灰色瓦が多く認められた。次に瓦葺建物にかかわる遺構をみると、高麗・大和両系瓦が葺かれた具体的な建物遺構は明らかではなく、同時期の掘立柱建物との関係について今後明らかにする必要がある^{註2}。次期の明朝系瓦は先行型式の灰色系瓦葺き建物が広く、または複数存在していたことを窺わせ、また赤色系瓦の段階になると瓦葺き建物の規模そのものは小さくなっていったことが推測できる。

参考文献

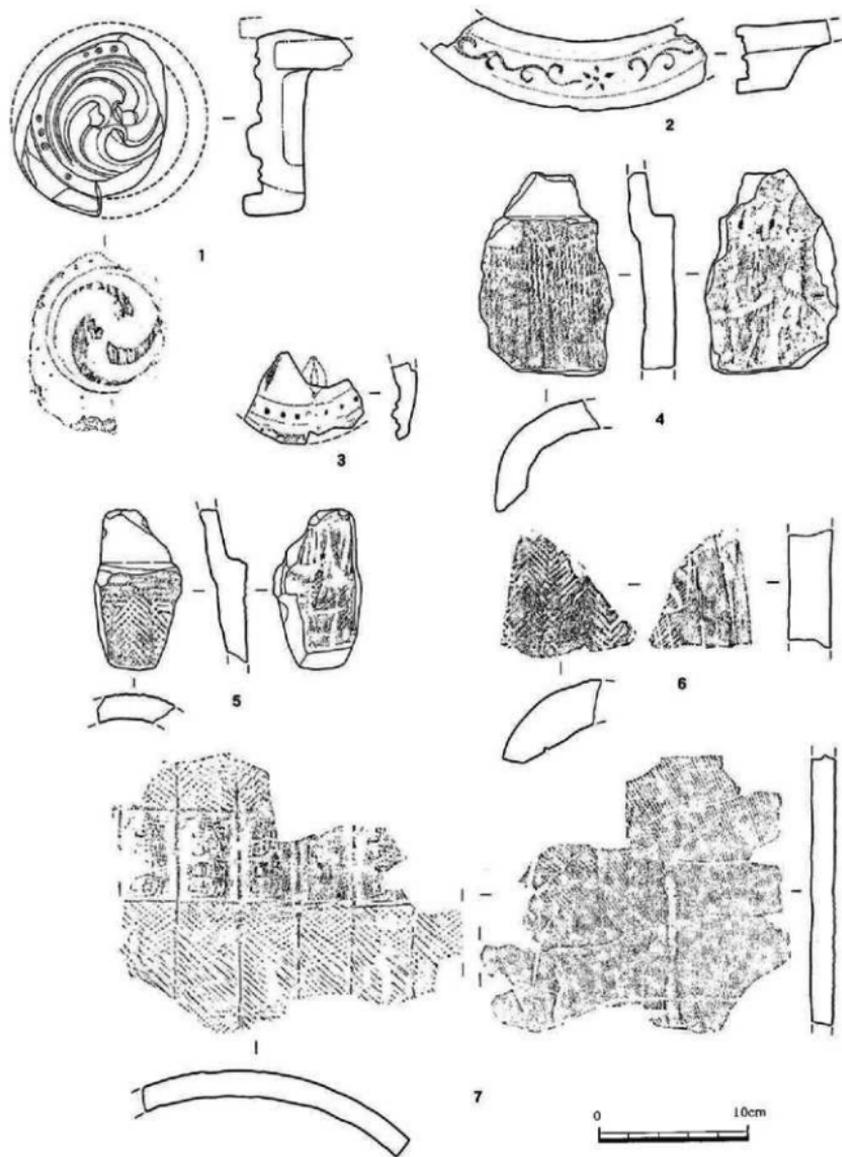
- 註1 沖縄県教育委員会『湧田古窯跡Ⅰ』1993年
註2 沖縄県立型蔵文化財センター『天界寺跡（Ⅰ）』2001年
註3 上原幹「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号 1994年
註4 a. 那覇市教育委員会『天界寺跡Ⅰ - 首里城線路事業に伴う緊急発掘調査報告 1999年
b. 那覇市教育委員会『天界寺跡Ⅱ - 首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告 2000年

第39節 塙

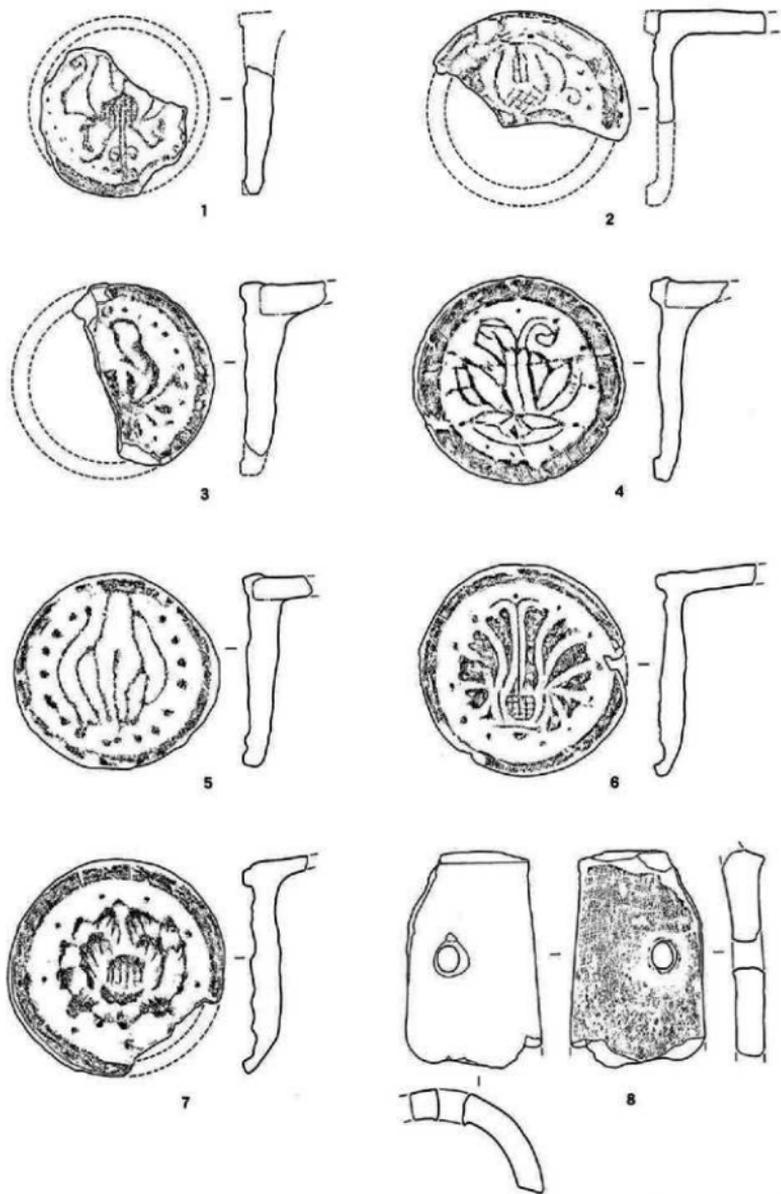
屋瓦と同様に多く得られた。平面形が、方形、三角等を呈するものが一般的で、今回は特異なものを図示した（第71図8）。湧田古窯跡（Ⅰ）^註の例（第100図2、3）に類似するものと見られ、下部に取っ手が付く。残存部位の厚みは3.5cm、（最も厚い部分は7.8cm）、縁は破損している。出土地不明。

（註）

大城慧、島袋洋他『湧田古窯跡（Ⅰ）』沖縄県教育委員会 1993年

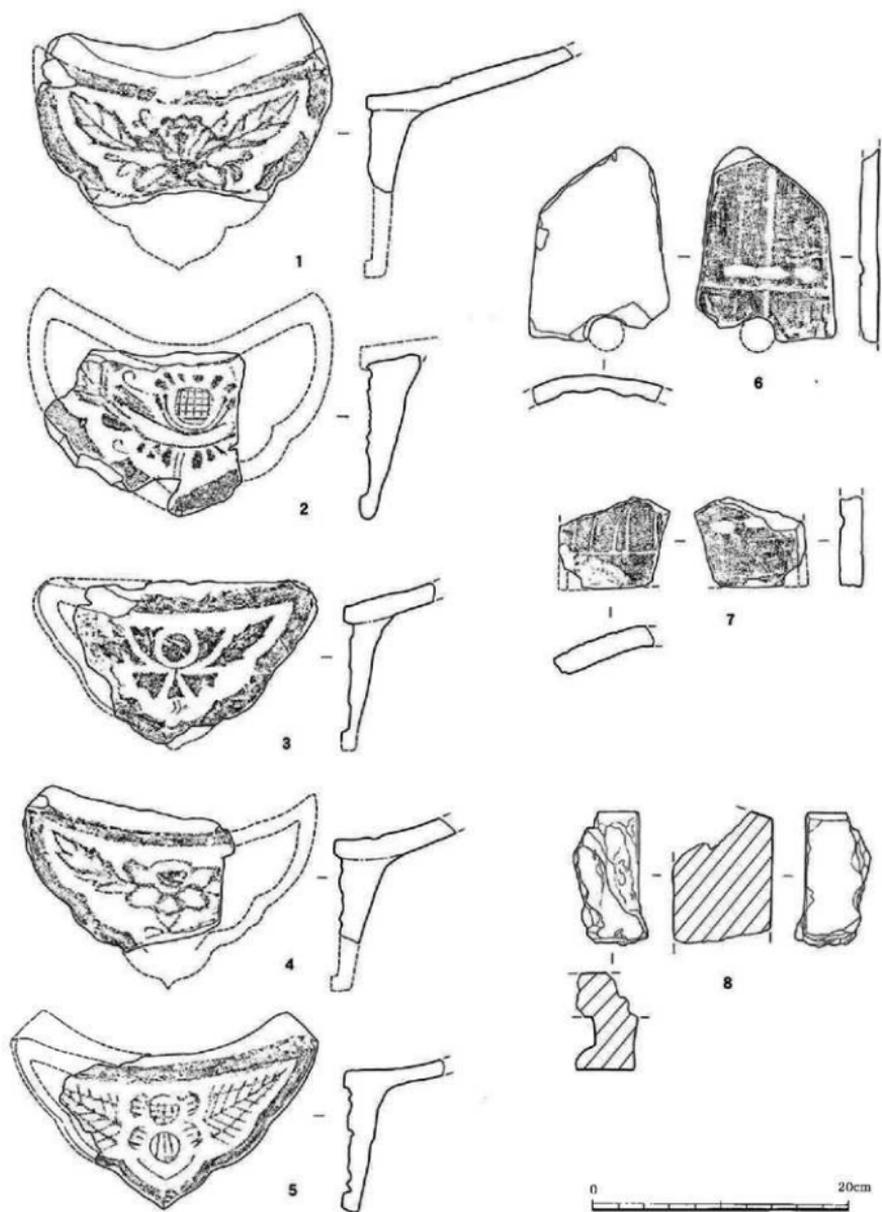


第69圖 高麗系瓦（軒丸瓦3、平瓦7）大和系瓦（軒丸瓦1、軒平瓦2、丸瓦4~6）



第70圖 明朝系瓦 (軒丸瓦1~7、丸瓦8)

0 10cm



第71图 明朝系瓦 (軒平瓦1~5、平瓦6、7) 塌 (8)

第40節 自然遺物

1. 貝類

本遺跡から出土した貝は巻貝30科93種、二枚貝19科50種である。総数5283点を数え、天界寺跡(1)^{※1}で報告された結果をはるかに上回るものである。出土状況で見ると、アラスジケマンガイが圧倒的に多く1946点である。次いでカンギク711点、マガキガイ383点、ウミニナカニモリ223点となっている。陸産では6科7種検出されているが、その個体数は、僅少である。

貝は、ほぼ調査区全域から出土しているが、主に調査区の北側に集中しており、その中の北側4層からの出土は全体の約16%を占めている。

先に調査、報告された天界寺跡(T)^{※1}と比べると検出された貝種に差異はなく、僅かに今回が多種である。ただ、個体数には若干の違いがみられる。例えば、前回最も多く検出されたオキナワヤマタニシは、今回では前回の約8分の1と少ない。また、アラスジケマンガイやカンギクなどは前回とは比にならない程の出土量である。注意したい点は、これらの貝は、比較的容易に採取でき、現在も食卓を飾ることがしばしばある。表上・攪乱や不明からの出土が多く、大半は近・現代の食滓ではないかという疑念が残る。

前回の調査で検出されたヤコウガイ蓋集中部で見られるような特徴的な遺構が今回は確認できず、遺物の方も注意すべき点が特に見られなかったため、今回は自然遺物として集計した。その結果、蓋が279点、殻の方はほとんどが破片で検出され、個体数を数えられるのは93点と少ない事が分かった。

今回はじめて化石種と思われる貝種(イタヤガイ、キンチャクガイ)が確認された。同定を依頼した名和氏^{※2}によると、すでに絶滅した種であるという見解を得られた。

*個体数の算出方法

- ・巻貝は完形、殻頂、破片に分けて集計し、前二者の合計を個体数とした。
- ・二枚貝は右殻と左殻に分け、それぞれを完形、殻頂、破片に分け前二者を合計しさらに右殻、左殻のどちらか多い方を個体数とした。

<引用文献>

「伊佐前原第一遺跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第4集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月

<註>

註1 「天界寺跡(T)」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 2001年3月 沖縄県立埋蔵文化財センター

註2 名和 純氏(海の生態史研究会会員)に今回の貝類の同定を依頼した。記して感謝を申し上げます。

<参考文献>

「平敷屋トウバル遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第125集 沖縄県教育委員会 1996年3月

「濱田古窯跡(IV)」『沖縄県文化財調査報告書』第136集 沖縄県教育委員会 1999年3月

「沖縄県那覇市首里川天界寺跡」『日本考古学年報49』日本考古学協会 1998年7月

2. 動物遺体

金子浩昌

(1) はじめに

本報告は先年刊行された「天界寺跡 (I)」遺跡の西部地域に当たる地点の調査の際に出上した動物遺体についての記述である。前回の報告内容と比べて種類のには大きく変わるところはなかったが、ウマ、イヌなどの一括出上例は検出されなかった。しかし、動物遺骸の主要種であるニワトリ、ウマ、ブタ、ウシなどの遺骸は前回より多く出土し、いっそう生活の感覚の高まった遺物の在り方を示していたようである。

今回の調査と報告に当たって種々お世話になった沖縄県立埋蔵文化財センターの島袋洋氏、西銘幸氏にお礼申し上げる。また資料整理に当たっていただいた瑞慶覧尚美氏、玉城照美氏、玉城恵美利氏、新城ゆかり氏の皆様にも御礼申し上げます。

(2) 検出された脊椎動物遺体種名表

節足動物門 Phylum ARTHROPODA

軟甲亜綱 Subclass Malacostraca

十脚目 Order Decapoda

ワタリガニ科 Family Portunidae

ノコギリガサミ *Scylla serrata*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

メジロザメ目 Order Carcharhiniformes

メジロザメ科 Family Carcharhinidae

イタチザメ *Gaieocerdo cuvier*

科目不明 Fam.et.gen.indet.

エイ目 Order Rajiformes

科目不明 Fam.et.gen.indet.

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

ダツ目 Order Beloniformes

ダツ科 Family Belonidae

属・種不明 Gen.et.sp.indet

キンメダイ目 Order Beruciformes

イットウダイ科 Family Holocentridae

属・種不明 Gen.et.sp.indet

カサゴ目 Order Scorpaeniformes

コチ科 Family Platycephalidae

コチ属 *Platycephalus* Sp.

スズキ目 Order Perciformes

ハタ科 Family Serranidae

属・種不明 Gen.et.sp.indet

フエダイ科 Family Lutjanidae

ヒメフエダイ *Lutjanus gibbus*

キマダラフエダイ *Pristipomoides sieboldii*

属・種不明 Gen.et.sp.indet

タイ科 Family Sparidae

クロダイ属 *Acanthopagrus* sp.

タイワンダイ *Argyropus bieckeri*

フエキダイ科 Family Lethrinidae

ヨコシマクロダイ *Monotaxis grandoculis*

イソフエキ *Lethrinus atkinsoni*

ハマフエキ *Lethrinus nebulosus*

フエキダイ属 *Lethrinus* Sp.

ペラ科 Family Labridae

コブダイ (カブダイ) *Semicossyphus reticulatus*

タキペラ *Bodianus oxycephalus*

ブダイ科 Family Scaridae

イロブダイ *Bolbometopon bicolor*

ナンヨウブダイ *Scarus gibbus*

ナガブダイ *Scarus rubroviolaceus*

属・種不明 Gen.et.sp.indet

ニザダイ科 Family Acanthuridae

属・種不明 Gen.et.sp.indet

フグ目 Order Tetraodontiformes

モンガラカワハギ科 Family Balistidae

属・種不明 Gen.et.sp.indet

爬虫綱 Class Reptilia

カメ目 Order Chelonia

鳥綱 Class Aves

ペリカン目 Order Pelecaniformes

ウ科 Family Phalacrocoracidae

ウミウ *Phalacrocorax filamentosus*

ガンカモ目 Order Anseriformes

ガンカモ科 Family Anatidae

カモ類 *Anatidae* Gen. et sp. indet

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family Phasianidae

ニワトリ *Gallus gallus* var. *domesticus*

哺乳綱 Class Mammalia

齧歯目 Order Rodentia

クマネズミ属の一種 *Rattus* sp.

クジラ目 Order Cetacea
イルカ科 Family Delphinidae
イルカ類 *Delphinidae Gen et sp.indet*
食肉目 Order Carnivora
イヌ科 Family Canidae
イヌ *Canis familiaris*
ネコ科 Family Felidae
ネコ *Felis catus*
海牛目 Order Sirennia
ジュゴン科 Family Dugongidae
ジュゴン *Dugong dugong*

寄蹄目 Order Perissodactyla
ウマ科 Family Equidae
ウマ *Equus caballus*
偶蹄目 Order Artiodactyla
イノシシ科 Family Suidae
ブタ *Sus scrofa var. domesticus*
シカ科 Family Cervidae
シカ属の一種 *Cervus sp.*
ウシ科 Family Bovidae
ウシ *Bos taurus*
ヤギ *Capra hircus*

(3) 検出された動物遺体について

1. 節足動物

ノコギリガザミ：出土地点不明でハサミ脚1点があったのみである。

2. 軟骨魚類

イタチザメ：歯1点があったのみである。

メジロザメ科椎骨：椎体径小さく、椎体長の長いタイプ(A)と椎体長が短く、椎体径の大きいタイプ(B)があり、Bタイプの方が大型になる。大型のイタチザメはBタイプの椎体になる。

エイ類：鈎状の鱗が検出されているが、わずかに1点である。

3. 硬骨魚類

イトウダイ科の一種：前鰓蓋骨があった。この科の魚種の前鰓蓋骨は細かい刻みのある外縁と、遠位骨端寄りに鋭い1棘を付けるのが特徴である。

コチ属：歯1点があるが、近心部を欠損する。骨体のほぼ中央位置での骨体高9.0あり、大型である。

ハタ類複数種：ハタ類に比定される骨格の出土はやや多い。形態的特徴を理解し易い前上顎骨、歯骨でみると、前上顎骨咬面の盛り上がるような高まりをもつ形態と歯骨の近心部のくびれの弱い形態が一種になる。これとは別に歯骨にはさらに二つの形態があり、近心部のくびれのほとんどみられない点の特徴である。さらに近心部くびれがつよく、しかも咬面と外縁の両面からくびれをみる。

キマダラフエダイ：フエダイ科前上顎骨にみる近心突起の角度の直立するような形をみる。前鰓蓋骨の後縁の大きな1棘の形態が特徴的である。

ヒメフエダイ：フエダイ類にしばしばみられる特徴的な前鰓蓋骨の後縁にみられる切痕が、この種ではもっとも深く、前縁にまで達する。この標本は1点があったのみである。

フエダイ科の複数種：上記のフエダイ各種とは別種と考えられる前上顎骨、歯骨がある。標本も多くさらに数種はあるのではないかと思われる。

クロダイ属：前上顎骨、主上顎骨、歯骨があり、やや多い出土である。

タイワンダイ：マダイ *Pagrus major* とはかなり異なった前上顎骨、歯骨の形態である。前上顎骨の背縁は丸みのある弧をもち、臼歯は二列に並ぶ。歯骨は高い骨体の特徴的である。タイワンダイ属と思われる。

ヨコシマクロダイ：検出標本は少ないが、本種の特徴である大型の臼歯をみる。

イソフエキ：前上顎骨1点がある。長い近心端の突起をもつ。遠心端を破損するが、もともと骨体部分の短いのが本種の前上顎骨の特徴である。咬面の近心寄りには細歯が幅広くみられる。

ハマフエキ：本種主上顎骨の出土がもっとも多い。近似種を含めると圧倒的に多い出土になる。比較的サイズのそろっていることが特徴である。

フエキダイ属の一種：キツネフエキに似るが、前上顎骨骨体部の長いのが特徴である。ハマフエキに比べて少ないが、ハマフエキに混在してよくみることがある。

コブダイ：コブダイの検出は多くないが、前上顎骨、歯骨、咽頭骨には比較的大型サイズの標本をみる事ができる。

タキベラ：小型の咽頭骨1点があったのみである。

イロブダイ：ブダイ類中では少なく、下咽頭骨1点を得たのみである。
ナンヨウブダイ：特に日立った出土ではなかった。上咽頭骨2点があったのみである。
ナガブダイ：下咽頭骨7点があり、やや多い出土であった。
ニザダイ類：尾柄部に付く桶状の鱗があるが、1点のみの出土である。
モンガラカワハギ科の一種：歯骨1点。

4. 爬虫類

ウミガメ類：四肢骨の断片が3点あったのみである。

5. 鳥類

ウミウ：上腕骨と大腿骨が各1点出土した。いずれも破片であるが、ウ類の特徴をよくみることができる。

カモ類：上腕骨1点と尺骨2点がある。上腕骨と尺骨遠位骨端を残す標本は同サイズのカモ類であるが、近位骨端を残す尺骨の1点は、骨体が細く他の2点とは別種である。

ニワトリ：頭骨を除く四肢骨を多く出土している。脛骨、中足骨の出土が多く、それに次いで上腕骨、中手骨の出土が多い。完存する標本は上腕骨、中手骨、大腿骨などに各1点をみるのみであった。特に大型になる骨をみることはなく、中型サイズのニワトリであったようである。中足骨にやや大きいサイズの標本をみた。

不明の鳥骨片：鳥骨には形態を異にする尺骨片、頸骨片がある。おそらく海鳥類であろうと思われるが、種を確認するまでには至らなかった。

6. 哺乳類

クマネズミ属の一種：おそらく混入標本であろう。脛骨1点があったのみである。

イヌ：少数の破損した骨片が出土している。下顎骨は近心部分、尺骨、脛骨は近、遠位骨端を欠損していたが、破損に特に人為的な痕跡はみなかった。

ネコ：少数の四肢骨片があったのみである。表土、攪乱層の出土標本などもあり、遺構中出土の標本は少ないが、グスク期のネコもあったと思われる。

イルカ類：椎骨1点があったのみであるが、この時期のイルカ類としては類例が少ない。天界寺跡としては今回のはじめての出土である。

ジュゴン：出土層位の明らかでない標本もあったが、前頭骨一部、椎骨と肋骨、上腕骨が検出されている。時代が新しくなる程ジュゴンの一遺跡からの出土例は少なくなる。前回は肋骨片1点があったのみであるから、今回の出土は多かったといえる。

ウマ：ウシには及ばないが多く、骨格を出土している。環椎1点、頸椎1点、不完全な下顎骨1点があるが出土地点不詳である。遊離歯があるが、地点不明の標本も多く、まとまる標本はほとんどない。

四肢骨標本中、近、遠位骨端の最大幅は日本在来馬中もっとも小型のトカラ馬のサイズであった。先に大界寺跡（I）出土の埋葬馬を報告したが、この地点のウマはさらに小さいサイズのウマであったようである。

四肢骨は多く検出しているが、破損標本が多く、それらは解体時、あるいは骨髄の抽出のために割られたものと思われる。骨端は骨化しており成獣個体が多い。上腕骨、桡骨、胛骨、大腿骨はいずれも近位部あるいは中間部で割られ、その打撃後、割れた痕をみる事ができた。基節骨、中節骨は完存するが、末節骨には切痕があった。

ブタ：多くの歯牙、骨格を出土している。解体後に壊された頭骨、下顎骨ではやや形の残る標本もあった。前頭骨、頭頂骨は幅広く、骨質厚く、ブタの特徴がよくみられた。下顎骨は左右の結合が可能な標本が一点あったが、左右顎骨の開く角度が広く、短頭化したブタの顔つきを彷彿とさせた。骨体は現生リュウキュウイノシシと比べて明らかに大きく、厚みのある骨体をもっていた。顎骨と歯牙の形状は模式的な標本を写真に示したが、乳白歯と永白歯M1（M2）、永白歯M1、M2（M3）、（P）：未萌出歯、とる標本が多く、歯牙数としてはM1、M2がもっとも多く、M3の数はM1あるいはM2の三分の一である。

四肢骨では骨端を残す標本が肩甲骨、上腕骨、桡骨にみることができたが、全体のなかでは少なかった。また若い個体がほとんどであったために四肢骨の計測値を検討することは有効ではなかったが、近、遠位骨端の計測値はリュウキュウイノシシと同じくらいのサイズで、さらに大きくなるような個体はなかった。上腕骨遠位部滑車上孔は閉鎖標本と開孔標本の両方があり、閉鎖標本の方が大きかった。また上腕骨の遠位骨端の骨化例は3点あるが、2点は近位骨端の骨端は未骨化である。桡骨の遠位骨端の骨化例が1点あり、3.5歳令で高年齢になる。

上記した歯の萌出状況、骨端の骨化状況からみて、本遺跡のブタは2～3歳未満の個体が多く、3歳以上になるのはごく少なかったと推定される。

ニホンジカ：角、大腿骨、脛骨がある。角は落角で、肩枝の開き方はニホンジカCervusnipponと同じである。枝部、幹部ともに切断されていて、枝部のほうがやや長い。切断面は平らである。何らか用途があって、持ち込まれたものである。他の四肢骨も骨体をうち割られており、食用にされている。

ウシ：ブタに次ぐ多くの骨格を出土しているが、破損した標本が多い。ビット、造成層、黒褐色土層、基壇、コーラル敷部分での出土が多い。完存する四肢骨標本はなかったが、近、遠位骨端幅は日本の在来牛中、中小型の見島あるいは口之島牛に近い数値であった。

角突起、下顎骨でかたちの残されたのは各一点があったのみである。上腕骨、桡骨、中手骨、人腿骨、脛骨、中足骨は、うち割られ、その際についた傷、割れ面がみられる。骨体の上部から中間部で割られることが多かった。中手骨、中足骨が比較的上部で割られているのは、骨製品素材を取る目的があったことも考えられる。

ヤギ：歯と下顎骨、四肢骨が出土している。他の獣骨に比べて検出数ははるかに少ない。30標本中の21標本が不明あるいは攪乱層中の出土であることは問題ではないかと思われる。

(4) 総括

天界寺跡の調査として2001年度刊行報告に次ぐものであるが、当然のことながら資料は前回のものと一括されるものであって、内容的にもそうした様相を示していた。前回報告資料を含めて、以下にその特徴となる点を述べておきたい。

魚類：少数の、しかし人形のサメ類椎骨があり、ハマフエフキ類がもっとも多かったことは前回と変わらない。本遺跡のハマフエフキのサイズは前上顎骨、歯骨の全長計測値をグラフに示したが、特に集中するサイズは、採集標本ではみられず、前上顎骨全長14.0mmという小形から、47.5mmという人形があったが、22.0mm台で出土量のピークがあり、30.0mm前後でピークがある。やや小形のサイズから中形までの、この種の魚の棲息状況を反映しているであろう。また比較的単純な網漁法によったのではないかと推測される。

ブダイ類が減って、コブダイなどのバラ類、フエダイ類、ハタ類の割合が多くなっていることも特徴である。いずれも比較的小さいサイズから大形個体までが採られていた。このような点は、近世はじめ頃の特徴ではないかと思われる。その他の魚種の目立たなかったことは、他の遺跡同様である。

鳥類：ウ、オオハムその他の未詳の海鳥とカモ類が少数検出されるのは、この地域の特徴である。南島では、石器時代には、今少し種類も多いが、減少する一方である。

主体を占めるのはニワトリであって、四肢骨を主とした出土が多い。ニワトリはグスク期以後に現れ、急速に増える。本土での中世以降の在り方と共通するが、より食用性が高かったと思われる。本土ではカモ類の渡来が多いので、食用としてはカモ類が上になっている。こうしたことも南島地域の特徴であろう。

獣類：本遺跡では、海棲獣類としてイルカ類、ジュゴンを検出したが、やはり僅かなものであった。石器時代以降激減し、グスク期と比べてさらに減少する。グスクでこのようなジュゴンの骨格の利用は一般にはなくなり、肉用のみとなっていた。ただし、それには種々の制約があり、直接捕獲する機会は限られたのであろう。

肉の供給の主体はブタであった。当時のブタの形質、利用の方法を知る好資料が出土している。ブタは大陸からの渡来種を基本としたもので、屠殺の時期、方法もそれに基づいていたものであつたらう。

ウマ・ウシは現在知られる在来種で、ウマは小型のトカラ馬系、ウシはやや大きく中もしくは中小型であった。共に食用にされているが、ウシの方が多い。こうした状況はグスク期以来認められるところである。前回の調査でみたウマの埋葬例は本地区では知られなかった。南島文化としては異質な様相であったが、やはり一般的ではなかったようである。

前回は知られなかったシカの遺骸が若干であるが、出土している。シカはこれまでも時々折見られる機会がある。沖縄には棲息しない特殊な動物として注目されたのであろう。角は加工されており、道具あるいは器具の一部であったのであろうか。四肢骨のあることは、食用に当てられるためであったのかもしれない。

<参考文献>

- 西中川跡「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」『科学研究費補助金、一般研究(B)、研究成果報告書』1991年
金子浩昌「瀬川古宮跡(Ⅰ)」『沖縄県文化財調査報告書』第111集 沖縄県教育委員会 1993年3月
金子浩昌「喜友名貝塚・喜友名グスク」『沖縄県文化財調査報告書』第134集 沖縄県教育委員会 1999年3月
金子浩昌「瀬川古宮跡(Ⅳ)」『沖縄県文化財調査報告書』第136集 沖縄県教育委員会 1999年3月
金子浩昌「天界寺跡(Ⅰ)」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県埋蔵文化財センター 2001年3月

第59表 ノコギリガサミ出土一覽

部位	出土地	個数
ハサミ	不明	1

第60表 サメ類出土一覽

種別	部位	δ	♂	出土地	
メジロザメ A		9.0	5.7	ビット	
		11.9	10.3		
		13.7	16.0		
		14.0	18.1		
		9.3	7.7		
		9.8	8.1	不明	
		9.8	8.8		
		10.8	9.5		
		10.8	9.8		
		13.6	16.2		
メジロザメ B		19.3	7.6	表土・攪乱	
		—	—		
	脊椎		16.3	8.1	ビット
			—	—	
			8.4	3.6	北側1層
			18.6	10.4	北側3層
			19.2	7.6	北側4層
			—	—	
			44.4	27.8	南側3層
			18.4	9.5	南側4層
		24.7	10.0	コーラル敷A	
		17.7	9.7	溝状G列	
イタチザメ		28.4	13.3	不明	
		20.5	9.6		
		20.2	9.5		
		18.8	7.8		
		—	—		

注「」:計測不可 単位:mm

第61表 ウミガメ出土一覽

部位	出土地	個数
不明	石列D	1
不明	北側4層	1
不明	不明	1

第62表 ウミウ出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
上腕骨	骨体	左	北側4層 1
	遠位端	右	1
大腿骨	遠位端	右	不明 1

第63表 カモ類出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
上腕骨	近位部~遠位部	右	不明 1
			表土・攪乱 1
			北側4層 1
尺骨	近位部~遠位部	左	不明 1
	骨体	不明	北側4層 1
	遠位端	右	表土・攪乱 1

第66表 ネズミ出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
脛骨	完存	右	基礎 1

第67表 イルカ類出土一覽

部位	出土地	個数
脊椎	溝状石列	1

第64表 トリ類出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
椎骨	不明	不明	1
上腕骨	骨体	不明	表土・攪乱 1
橈骨	骨体	不明	表土・攪乱 1
尺骨	近位部~遠位部	左	ビット 1
	骨体	左	南側4層 1
大腿骨	骨体	不明	不明 1
		右	ビット 1
寛骨	臼部	不明	南側2層 1
		不明	南側2層 1
脛骨	遠位部	右	北側3層 1
		左	ビット 1
	骨体	左	不明 2
		不明	表土・攪乱 1
		北側4層 1	

第68表 イヌ出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
卜部骨	P2	右	北側3層 1
	天蓋	左	石列D 1
肋骨	破片	不明	北側1層 1
尺骨	近位部~遠位部	左	ビット ①
中手骨	近位部	不明	南側1層 1
脛骨	近位部~遠位部	右	表土・攪乱 ①
	遠位部	不明	不明 ②
基節骨	右	北側4層 1	

注 ①:キズあり

第69表 ネコ出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
胸椎		北側4層	1
寛骨	腸骨部~坐骨	左	方形鑑込み遺構 1
大腿骨	完存	左	方形鑑込み遺構 1
		右	表土・攪乱 1
脛骨	遠位端	右	表土・攪乱 1
中足骨Ⅱ	近位端	右	不明 1

第65表 キジ類出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
大腿骨	近位部~遠位部	左	基礎 1

第70表 ジュゴン出土一覽

部位	右/左	出土地	個数
胸椎	腸骨突起	左	不明 1
椎		不明	1
胸椎		北側2層	1
腰椎		表土・攪乱	1
頸椎		地山直上	1
腰突起		北側4層	1
肋骨		表土・攪乱	1
肋骨		ビット	1
上腕骨	近位部~遠位部	右	北側1層 1
破片		ビット	1

第72表 ウシロウマ出土一覧

部 位	右/左	出土地	個数	
頭蓋骨	破片	不明	1	
	切痕部	不明	<1>	
歯	破片	方形鋳込み遺構	1	
		表土・覆瓦	1	
		南側1層	1	
		南側2層	(1)	
		北側1層	2	
		北側2層	2	
		南側3層	1	
		北側3層	1	
		北側4層	(1)	
		ピット	(1)	
		不明	1	
		新道	北側4層	1
		覆瓦	南側1層	1
		棘突起	地山直上	1
			基礎	1
尾椎	ピット	(2)		
	不明	1		
肋軟骨	不明	1		
	北側3層	11		
	北側3層	1		
肋骨	不明	(1)		
	表土・覆瓦	(1)		
	南側2層	(10)		
	南側3層	(2)		
	北側1層	(1)		
	北側2層	(1)		
	北側3層	(3)		
	北側4層	(7)		
	コウラル敷A	(3)		
	溝状石列	(1)		
ピット	(4)			
肩甲骨	遺骸層	不明	1	
	骨注	北側4層	1	
大腕骨	骨注のみ	ピット	(1)	
脛骨	破片	不明	1	
脛骨	骨体	不明	2	

注 ○:キヌアリ, ():遺内, <>:平尺, []:溝

第75表 ウシ歯出土一覧

部 位	右/左	出土地	個数	
上顎骨	右	M2	北側3層	1
		P2	表土・覆瓦	1
		P4	南側2層	1
			南側4層	1
		不明	1	
		dm4	不明	1
		P4,M2.3	不明	1
		M1	コウラル敷A	1
		P5	不明	1
		P4	北側3層	1
不明	1			
下顎骨	左	M1	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
歯	右	P3	北側3層	1
		P4	不明	1
		M2	不明	1
		P2	不明	1
		P3	不明	1
		P4	不明	1
		M1	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
歯	左	M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
		M2	不明	1
切歯	右	P3	北側3層	1
		P4	不明	1
		M2	不明	1
		P2	不明	1
		P3	不明	1
		P4	不明	1
		M1	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
歯	左	M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
		M2	不明	1
		M3	不明	1
		M1.2.3	不明	1
		M2	不明	1

注 []:キヌアリ, <>:平尺

第73表 ウマ歯出土一覧

部 位	右/左	出土地	個数	
上顎骨	右	P1	北側1層	1
		P2	不明	1
		P3	不明	1
		P4	不明	1
		P1	不明	1
		M1	不明	1
		M2	不明	1
		M2	不明	1
		破片	不明	1
		大歯	不明	1
		P2	不明	1
		P3	不明	1
		P2or4	不明	1
		P3or4	不明	1
		M1	不明	1
下顎骨	左	P1	不明	1
		P2	不明	1
		P3	不明	1
		P2or4	不明	1
		P3or4	不明	1
		M1	不明	1
		破片	不明	1
		M1.2.3	不明	1
		dm4	不明	1
		P2	不明	1
		P3	不明	1
		P4	不明	1
		P4,M1	不明	1
		破片	不明	1

第74表 シカ出土一覧

部 位	右/左	出土地	個数
角	不明	不明	(1)
	不明	不明	1
大腕骨	遺骸層	不明	1
	遺骸層	溝状遺構 D	(1)
脛骨	遺骸層	不明	1

注 ○:キヌアリ

第77表 種不明出土一覧

部 位	右/左	出土地	個数
頭蓋骨破片	不明	溝状遺構 A	1
破片	不明	南側4層	1
下顎骨	不明	不明	(1)
脛骨	不明	北側3層	1
指骨	不明	南側1層	1
肋骨	不明	北側1層	1
肋骨	不明	北側1層	(1)
肋骨	不明	北側3層	1

注 ○:キヌアリ

第76表 ヤギ歯出土一覧

部 位	右/左	出土地	個数			
上顎骨	右	M2	表土・覆瓦	1		
		M3	北側4層	1		
		P4	不明	1		
		M1	南側2層	1		
		M1.2.3	不明	1		
		M3	不明	1		
		破片	不明	1		
		下顎骨	左	M2	不明	1
				M3	不明	1
				破片	不明	1
頤骨	不明			1		
肋骨	不明			1		
上顎骨	不明			1		
下顎骨	不明			1		
肋骨	不明			1		
肋骨	不明			1		
肋骨	不明			1		
歯	右	頤骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
肋骨	左	肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		
		肋骨	不明	1		

注 []:溝, <>:平尺, ○:キヌアリ

第79表 プタ outcomes

品名	昭和27										昭和28										合計
	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
1号																					
2号																					
3号																					
4号																					
5号																					
6号																					
7号																					
8号																					
9号																					
10号																					
11号																					
12号																					
13号																					
14号																					
15号																					
16号																					
17号																					
18号																					
19号																					
20号																					
21号																					
22号																					
23号																					
24号																					
25号																					
26号																					
27号																					
28号																					
29号																					
30号																					
31号																					
32号																					
33号																					
34号																					
35号																					
36号																					
37号																					
38号																					
39号																					
40号																					
41号																					
42号																					
43号																					
44号																					
45号																					
46号																					
47号																					
48号																					
49号																					
50号																					
51号																					
52号																					
53号																					
54号																					
55号																					
56号																					
57号																					
58号																					
59号																					
60号																					
61号																					
62号																					
63号																					
64号																					
65号																					
66号																					
67号																					
68号																					
69号																					
70号																					
71号																					
72号																					
73号																					
74号																					
75号																					
76号																					
77号																					
78号																					
79号																					
80号																					
81号																					
82号																					
83号																					
84号																					
85号																					
86号																					
87号																					
88号																					
89号																					
90号																					
91号																					
92号																					
93号																					
94号																					
95号																					
96号																					
97号																					
98号																					
99号																					
100号																					

注: (1) 本表は、昭和27年11月1日現在のデータに基づくものである。(2) 本表は、昭和28年11月1日現在のデータに基づくものである。

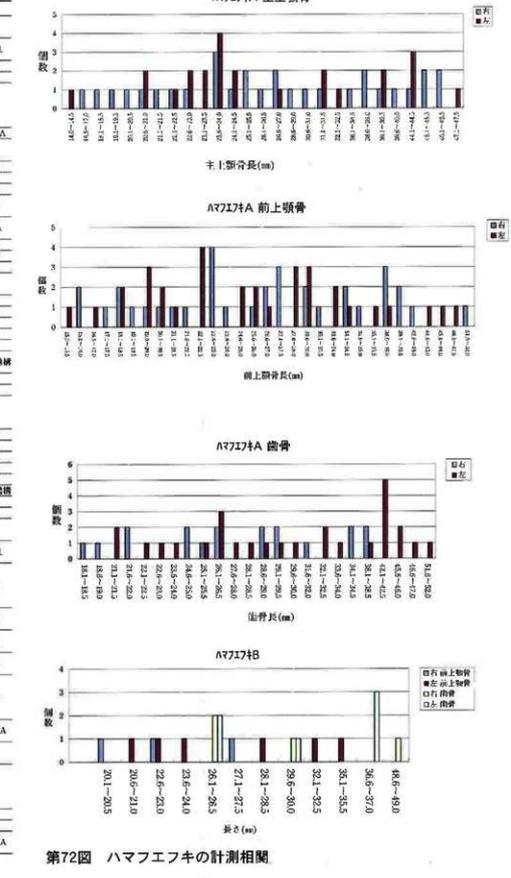
第58表 サカナ計測一覧

科・種	右/左	計測部位	計測値	出土地
ハマツナフキA	右	計測値	26.5	不明
		表土・泥炭	23.6	
		30.0	31.7	
		37.5	31.9	
		37.0	34.5	
		37.0	38.3	
		24.9	38.5	
		30.5	45.7	
		23.5	29.7	
		23.6	47.0	
	30.5	22.7		
	26.5	42.1		
	29.5	26.5		
	15.8	22.1		
	16.0	25.6		
	17.3	45.7		
	18.2	21.2		
	16.2	21.2		
	19.3	29.2		
	20.0	14.6		
20.5	32.3			
21.2	25.1			
22.0	28.4			
22.6	26.5			
22.8	22.4			
23.0	20.0			
23.8	29.2			
27.3	26.8			
25.0	22.1			
27.1	33.6			
29.8	42.4			
34.8	42.4			
43.0	42.5			
47.0	51.6			
28.1	45.5			
31.5	44.5			
38.0	30.0			
46.0	45.5			
25.0	45.5			
34.0	26.8			
59.7	21.4			
15.5	22.9			
16.8	24.9			
19.8	27.0			
21.2	21.2			
27.7	36.4			
18.2	16.9			
21.2	16.9			
18.8	19.2			
19.8	20.4			
20.2	20.6			
20.4	22.9			
21.3	22.7			
22.1	22.7			
22.5	22.5			
22.3	22.5			
22.3	25.5			
22.6	25.5			
24.7	26.8			
25.9	30.7			
27.7	38.7			
28.7	29.3			
29.8	39.8			
30.3	46.5			
34.0	44.1			
35.3	44.1			
45.0	44.1			
24.7	11.5			
28.7	23.9			
29.2	21.4			
29.2	34.4			
34.4	38.2			
18.9	44.1			
21.9	20.7			
22.0	19.8			
26.2	22.5			
26.1	22.6			

科・種	右/左	計測部位	計測値	出土地
ハマツナフキA	右	計測値	22.4	不明
		22.6		
		23.2		
		23.6		
		23.9		
		24.9		
		24.4		
		28.8		
		31.1		
		31.1		
ハマツナフキB	右	計測値	43.0	不明
		29.5		
		29.4		
		29.6		
		29.8		
		31.0		
		32.3		
		35.1		
		48.0		
		26.5		
ハマツナフキC	右	計測値	20.0	不明
		20.0		
		20.0		
		20.0		
		20.0		
		20.0		
		20.0		
		20.0		
		20.0		
		20.0		

科・種	右/左	計測部位	計測値	出土地
Aa	右	計測値	47.5	不明
		7.6		
		6.0		
		10.7		
		68.0		
		—		
		—		
		85.0		
		13.0		
		45.0		
Aa	左	計測値	48.0	不明
		48.0		
		43.0		
		7.3		
		47.7		
		64.1		
		8.4		
		—		
		—		
		47.5		
Aa	右	計測値	60.0	不明
		8.1		
		60.0		
		10.1		
		53.0		
		9.0		
		68.0		
		16.7		
		68.0		
		16.1		
Aa	左	計測値	65.0	不明
		15.6		
		68.0		
		15.3		
		18.7		
		10.9		
		15.7		
		19.7		
		24.5		
		25.0		
Aa	右	計測値	20.0	不明
		8.5		
		26.8		
		7.0		
		67.0		
		21.2		
		18.5		
		8.8		
		8.8		
		20.7		
Aa	左	計測値	26.7	不明
		7.9		
		31.8		
		8.9		
		44.3		
		13.5		
		17.9		
		25.0		
		31.1		
		22.2		
Aa	右	計測値	38.1	不明
		12.0		
		24.6		
		31.6		
		34.5		
		12.5		
		14.9		
		24.2		
		31.8		
		25.0		
Aa	左	計測値	31.1	不明
		13.5		
		17.9		
		25.0		
		19.0		
		8.4		
		27.2		
		14.4		
		16.7		
		21.6		
Aa	右	計測値	23.8	不明
		19.9		
		23.4		
		25.8		
		23.2		
		22.2		
		27.5		
		29.5		
		32.3		
		32.4		

科・種	右/左	計測部位	計測値	出土地
Aa	右	計測値	26.2	不明
		26.2		
		22.9		
		26.5		
		30.5		
		22.7		
		26.3		
		28.3		
		28.3		
		28.3		
Aa	左	計測値	19.1	不明
		18.8		
		25.2		
		19.1		
		30.6		
		35.0		
		37.2		
		26.0		
		34.3		
		39.8		
Aa	右	計測値	29.2	不明
		26.6		
		25.2		
		27.1		
		24.3		
		48.7		
		38.9		
		38.1		
		45.9		
		34.4		
Aa	左	計測値	41.9	不明
		25.5		
		28.0		
		40.0		
		45.3		
		52.5		
		37.0		
		36.4		
		60.0		
		29.3		
Aa	右	計測値	41.9	不明
		31.5		
		41.9		
		26.6		
		16.1		
		39.3		
		37.9		
		35.8		
		42.6		
		31.1		
Aa	左	計測値	35.8	不明
		35.8		
		35.8		
		35.8		
		35.8		
		35.8		
		35.8		
		35.8		
		35.8		
		35.8		



第72図 ハマツナフキの計測相関

第82表 ニフトリ計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地
上脚骨	左	GL	19.6	不明
		BP	70.6	
		Bd	15.4	
		SD	8.7	
尺骨	右	BP	24.1	表土・埋没
	左	GL	74.4	表土・埋没
掌骨	右	GL	77.0	ビッド
	左	GL	48.9	不明
大脚骨	左	BP	18.1	誤れ遺構D
		Bd	17.3	
		SD	2.4	
		SD	8.8	
	右	BP	22.4	ビッド
		Bd	21	土層1層
	右	GL	86.3	不明
		BP	17.4	
		Bd	17.4	
		SD	7.5	
右	BP	15.5	不明	
	BP	26.3	不明	
左	BP	22.8	遺構	
	SD	8.8	遺構	
左	BP	18.7	遺構2層	
	SD	5.6		
右	Bd	11.4	ビッド	
	SD	4.6		
左	Bd	18.8	ビッド	
	SD	5.9		
尺骨	右	Bd	12.2	北側3層
		SD	6.6	
		SD	12.4	
		SD	6.3	
	右	Bd	13.4	右側3層
		Bd	14.5(欠)	
	右	Bd	10.8	ビッド
		SD	5.5	
	右	Bd	10.5	南側2層
		SD	6.2	
右	Bd	12.2	ビッド	
	Bd	7.5		石層B
右	Bd	13.7	不明	
	Bd	12.3		不明
右	Bd	14.8	遺構	
	SD	9		北側4層

第83表 イヌ計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地
下脚骨(尺骨)			10.31×6.83	石層D
尺骨	右	Bd	19.51	不明

第84表 ネコ計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地
尺骨	右	GL	101.14	表土・埋没
尺骨	左	GL	102.89	方形堀土道遺構

第85表 ジュゴン計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地
動物骨	右	BP	32.37×23.87	表土・埋没

第88表 シカ計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地
角	左	角座径	35.93×40.96	不明

第86表 ウマ計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地	
上脚骨	右	BP	39.75	不明	
		BP	15.1		表土・埋没
		BP	21.87		表土・埋没
		BP	39.29		表土・埋没
	右	Md	35.9	不明	
		Md	64.68		南側3層
	右	BP	23.58	コウラ4層	
		Md	35.53		表土・埋没
	右	BP	32.72	不明	
		BP	28.55		不明
右	BP	33.26	北側1層		
	BP	32.39		不明	
右	Md	31.54	不明		
	BP	32.55		ビッド	
左	BP	31.27	不明		
	BP	25.13		南側2層	
尺骨	右	遺構端→大端	80.8	遺構	
		骨端→遺構端	89.69		
	左	BP	80.64		ビッド
		Bd	66.4		不明
左	Bd	71.83	不明		
	Bd	67.4		北側4層	
左	BP	71.63	北側3層		
	BP	38.10		北側4層	
尺骨	右	骨端→骨端	37.73	石層D	
		骨端→骨端	36.36		
	左	骨端→骨端	27.53		不明
		骨端→骨端	27.53		
右	BP	87.88	南側3層		
	Bd	64.28		ビッド	
右	BP	55.53	不明		
	BP	55.53		ビッド	
左	Bd	65.88	不明		
	Bd	51.42		表土・埋没	
右	Bd	43.34	表土・埋没		
	BP	47.78		ビッド	
左	BP	40.33	不明		
	Bd	38.74		南側3層	
右	BP	46.12	不明		
	BP	45.98		不明	
左	Bd	43.48	北側3層		
	BP	48.01		不明	
右	BP	41.99	不明		
	Bd	39.98		北側4層	
右	BP	44.61	不明		
	Bd	69.07		25.04	南側2層
右	BP	42.55	不明		
	BP	75.61		不明	
左	Bd	42.12	北側1層		
	BP	49.43		不明	

第89表 ウシ計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地
軸骨	左	BP	77.7	コウラ表1層
		DPA	61.4	
尺骨	左	BP	82.5	不明
		Bd	65.9	
尺骨	右	BP	90.2	北側2層
		Bd	63.3	
尺骨	右	Bd	63.3	ビッド
		SD	39.8	

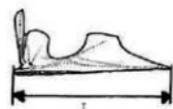
第90表 ヤギ計測一覧

部位	計測部位	計測値	出土地
尺骨	BP	24.06	表土・埋没
尺骨	BP	24.66	表土・埋没

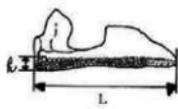
第87表 ブタ計測一覧

部位	右/左	計測部位	計測値	出土地	
尺骨	右	BP	19.7	南側2層	
		BP	15.0		遺構1層
		BP	14.9		遺構
		Bd	18.1		山土層
尺骨	右	Bd	20.1	不明	
		SD	22.2		南側1層
尺骨	右	BP	15.8	南側1層	
		BP	22.1		北側1層
尺骨	右	BP	18.0	不明	
		BP	16.9		遺構2層
尺骨	左	BP	16.9	遺構2層	
		BP	16.0		遺構1層
尺骨	左	BP	17.4	ビッド	
		BP	14.3		コウラ表1層
尺骨	右	SD	14.3	不明	
		Bd	13.8		
		Bd	12.8		遺構2層
		SD	11.5		南側1層
尺骨	右	BP	13.5	不明	
		BP	13.5		北側2層
尺骨	右	GL	15.1	不明	
		BP	37.0		
		SD	19.5		
		Bd	39.5		
尺骨	右	BP	13.7	コウラ表1層	
		Bd	32.7		
尺骨	右	BP	21.1	遺構1層	
		BP	24.8		
尺骨	左	BP	28.2	不明	
		Bd	25.3		不明
尺骨	左	BP	19.3	不明	
		BP	22.2		遺構2層
尺骨	右	DPA	22.2	不明	
		SD	14.8		
尺骨	右	DPA	26.0	不明	
		SD	18.7		
尺骨	右	DPA	28.3	表土・埋没	
		SD	18.2		
尺骨	右	DPA	27.4	不明	
		SD	18.0		
尺骨	右	DPA	21.8	表土・埋没	
		SD	21.8		
尺骨	右	DPA	29.0	不明	
		SD	18.7		
尺骨	右	SD	15.1	不明	
		DPA	35.7		遺構4層
尺骨	右	DPA	23.7	不明	
		SD	23.7		
尺骨	右	DPA	28.4	不明	
		SD	19.9		
尺骨	右	DPA	18.3	不明	
		SD	18.3		
尺骨	右	DPA	29.1	不明	
		SD	19.8		
尺骨	右	DPA	42.2	不明	
		SD	18.2		
尺骨	右	DPA	23.3	不明	
		SD	17.0		
尺骨	右	BP	12.4	不明	
		Bd	12.8		
尺骨	右	BP	18.5	不明	
		BP	58.2		遺構
尺骨	右	Bd	16.5	不明	
		BP	17.2		遺構1層
尺骨	左	BP	16.0	不明	
		BP	15.2		表土・埋没
尺骨	左	BP	18.2	不明	
		BP	15.0		表土・埋没
尺骨	右	SD	12.1	遺構3層	
		BP	13.1		遺構遺構B
尺骨	右	BP	21.1	表土・埋没	
		BP	13.6		不明
尺骨	右	SD	13.2	遺構3層	
		BP	13.0		表土・埋没
尺骨	右	GL	57.3	不明	
		GL	70.6		ビッド
尺骨	右	GL	58.2	遺構1層	
		BP	48.6		不明
尺骨	右	Bd	13.1	不明	
		Bd	31.3		不明

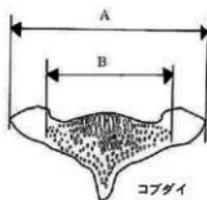
注・インシンの可能性



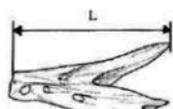
スズキ目 前上顎骨 (左)



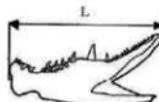
ハタ科 前上顎骨 (右)



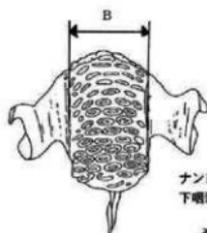
コブダイ
下顎頭骨



スズキ目 歯骨 (左)



ハタ科 歯骨 (右)



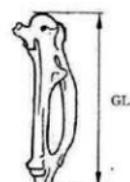
ナンヨウブダイ
下顎頭骨



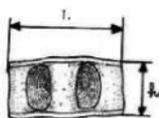
スズキ目 主上顎骨 (左)



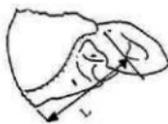
ナンヨウブダイ 前上顎骨 (右)



ニワトリ
中手骨 (左)



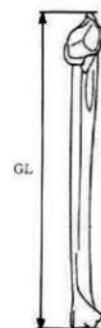
サメ類 脊椎骨



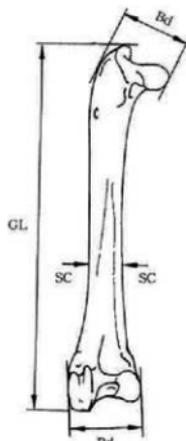
ナンヨウブダイ 歯骨 (左)



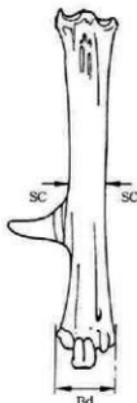
ニワトリ
上腕骨 (左)



ニワトリ
尺骨 (右)

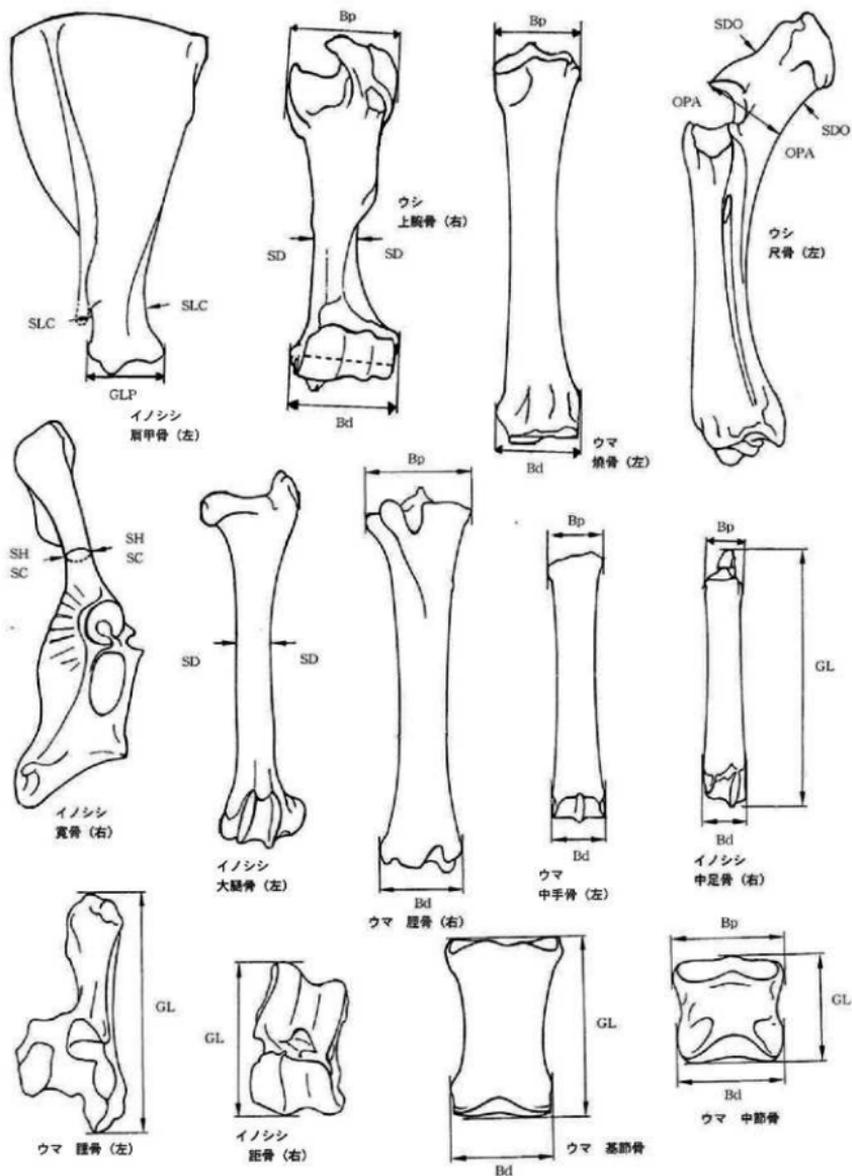


ニワトリ
大腿骨 (左)

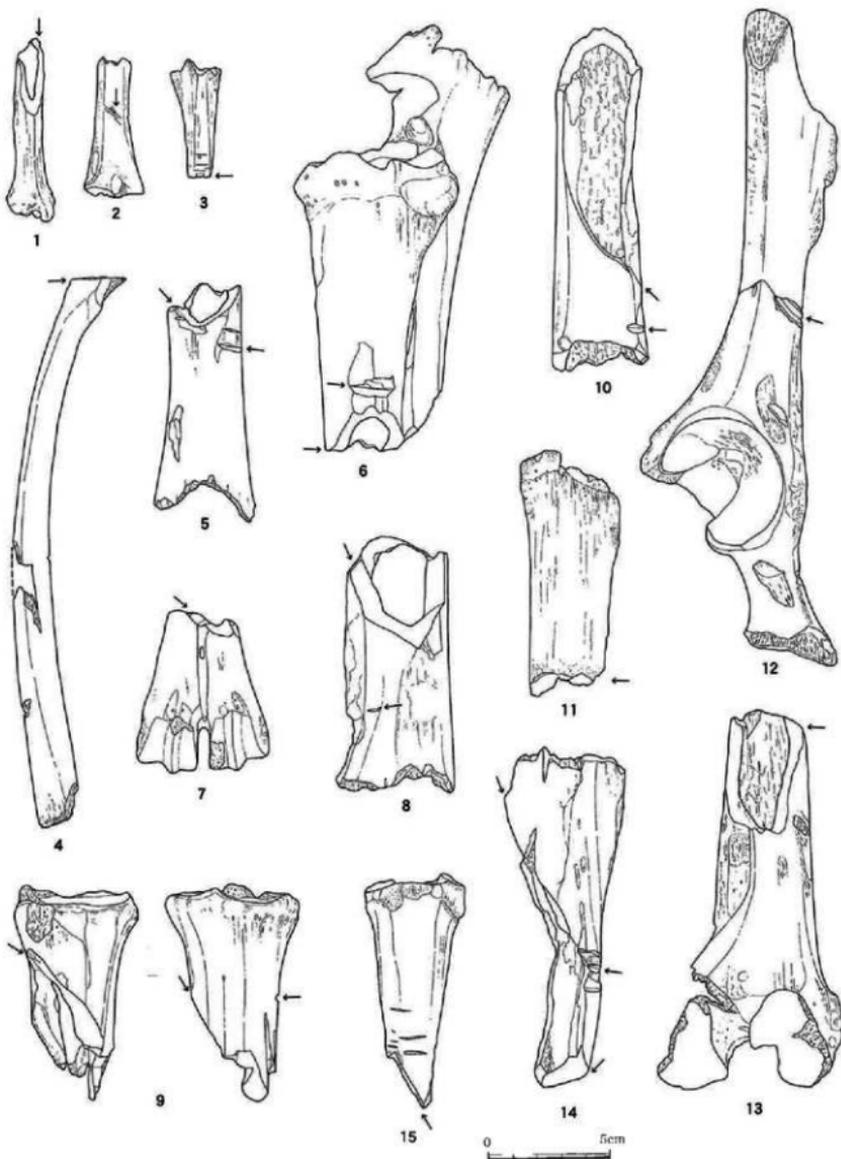


ニワトリ
中足骨 (右)

第73図 魚骨、ニワトリの計測位置



第74図 獣骨の計測位置



第75図 切痕

イヌ (1.右脛骨)、ヤギ (2.左寛骨、3.左脛骨)、ウシ (4.右肋骨、5.左橈骨、6.左橈骨・尺骨、7.右中手骨、8.左大腿骨、9.右中足骨) ウマ (10.右橈骨、11.右中手骨、12.左寛骨、13.左大腿骨、14.左脛骨、15.右中足骨)

第41節 人骨

天界寺西区の発掘調査により成人男性4体、性別不明成人2体、乳児1体の人骨が出土した。人骨は全体的に破損して残存部位が少ないため、詳細な観察は行えなかった。以下に人骨所見の概要を記す。なお計測はKNUSSMANN(1988)に、観察等はWHITE(2000)に従った。主要計測値を第2表に示す。また、比較群としてナーチュ-毛古藪群、銘古古藪群、ヤッチのガマを参照した。

K・L-18、19 成人男性1体

残存部位は左寛骨(図版74a-1)、左大腿骨(a-2)、左脛骨近位端(a-3)、腓骨骨幹近位部(a-4)が確認された。骨幹部の大きさや筋付着部の発達程度から同一個体のもと思われる。寛骨は下前腸骨稜が発達し寛骨臼が大きく、恥骨下角が狭いことから、男性の特徴を示していた。また恥骨結合面より年齢は30~40代と推定される。大腿骨も、小転子や粗線などの筋付着部が比較的発達している。中央欠状径は26mm、横径は25mmと、近世に属するナーチュ-毛(M6:27.6, M7:25.1)や銘古南A・C・D地区(M6:28.0, M7:29.0)、ヤッチのガマ(M6:27.1, M7:25.9)集団の平均値よりやや小さい。脛骨は、脛骨粗面が発達しているが、残存部位が少なく詳細は不明である。

24ライン 成人男性1体

左尺骨片(図版74b)が確認された。骨幹部は厚く頑丈で、尺骨粗面や回外筋種などの筋付着部が発達していて、男性と推定される。骨体矢状径は14mm、横径は17mmと、ヤッチのガマ(M11:12.4, M12:15.2)より大きく、ナーチュ-毛(M11:133, M12:15.8)や銘古南A・C・D地区(M11:13.5, M12:17.5)と近い値をとる。

N-25 成人男性1体

左大腿骨近位端(図版74c)が確認された。骨頭や骨頸は大きく頑丈で、殿筋粗面上部や大転子が発達していることから男性と推定される。頸垂直径は34mm、頸矢状径は27mmとなり、ヤッチのガマ(M15:1.9, M16:27.2)より垂直径が大きい値をとる。

I-27 成人男性1体

右腕骨(図版74d)が確認された。腕骨粗面などの筋付着部の発達は弱いが、骨幹部の長径は比較的大きい。骨体最小周は38mmと、ヤッチのガマの男性(39.6)に近いことから、木腕骨の性別はおそらく男性と思われる。

J-27 性別不明成人1体

手の基節骨のみである。詳細は不明。

L-19 乳児1体

右大腿骨片(図版74f)のみが確認された。骨体中央幅は6.8mm、最大長は74~76mmの範囲内と推定される。AKIYOSHI(1976)の胎児骨を用いた研究を参照すると、妊娠10ヶ月(中央幅:5.91±0.20、最大長:71.85±1.58)よりやや大きい。このことから、出生して1年以内の乳児と推定される。

出土地不明 性別不明成人1体

左尺骨遠位部(図版74e)のみである。詳細は不明。

引用文献

- AKIYOSHI T 1976: Studies on fetal bone extremities and the derivation of an equation for estimating fetal body length. *Acta med. Nagasaki*, 20: pp.15-18.
 上野直美・久松忠彦 1999: 那覇市銘古古藪群南(A・C・D)地区出土の人骨、銘古古藪群(II) 那覇市文化財調査報告第67号第40巻、那覇市教育委員会: pp.175-188.
 湯久雄太郎、土肥直美、山崎 2000: 那覇市ナーチュ-毛古藪群出土の人骨、ナーチュ-毛古藪群 那覇市文化財調査報告第44巻、那覇市教育委員会: pp.182-204.
 湯久雄彦 他 2001: ヤッチのガマ・カンジン原古藪群出土の人骨、沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告第6巻、沖縄県立埋蔵文化センター: pp.345-385.
 KNISSMANN, R., 1988: MAL'IN/KNISSMANN - Anthropologie, *Handbuch der Vergleichenden Biologie des Menschen*, Bd. I. Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
 White T.D. 2000: *Human Osteology Second Edition*. ACADEMIC PRESS, San Diego.

第91表 ヒト出土一覽

残存部位	性別	右/左	出土地
脛骨	骨幹部	成人男性	右 図版3編
尺骨	近位7骨体部	成人男性	左 図編
	遠位部	性別不明成人	右 不明
脛骨	脛骨7坐骨部	成人男性	左 表土・擾乱
	骨幹部	乳児	右 北麓3f
大腿骨	近位端	成人男性	左 不明
	骨幹部	成人男性	左 表土・擾乱
腓骨	近位部	成人男性	左 表土・擾乱
脛骨	近位部	性別不明成人	不明 表土・擾乱
基節骨(手)		性別不明成人	不明 表土・擾乱D



第92表 ヒト計測一覧

計測項目	K・L48・19		24ライン		127		0(mm)
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
尺骨							
11	骨体矢状径	1		14			
12	骨体横径	1		17			
11/12	骨体横面示数	1		82.1			
桡骨							
3	骨体最小周	r				38	
4	骨体横径	r				114	
5	骨体矢状径	r				112	
5 (2)	骨体横径	r				114	
5/4	骨体横面示数	r				85.7	
大腸骨							
6	骨体中央矢状径	1	36				
7	骨体中央横径	1	25				
8	骨体中央周	1	80				
9	骨体上縁径	1	120				
10	骨体上矢状径	1	122				
15	加周矢状径	1					
16	加周横径	1					
17	加周周	1					
8/7	骨体中央矢状面示数	1	104.0				36
10/9	骨体上縁面示数	1	75.9				37

図版74 人骨

第VI章 総括

今回の調査成果について、前章までに概説した。ここでは今一度整理するとともに、若干の課題点について触れ、まとめたい。

今回の調査により、玉陵以東の範囲の調査が終了したことになる。文献資料にみられる天界寺の寺域¹⁾のほぼ東側半分を調査したことになる。既に、那覇市教育委員会が実施した調査成果の報告²⁾、沖縄県教育委員会による調査成果の報告³⁾がなされている。これまでの調査成果からすると、景泰年間(1450～56)に尚泰久王によって建立された天界寺は万暦年間(1576年)の火災による消失、順治年間(1644～61)の復旧から琉球王国の処分(1879年)で廃寺になるまで約230年間存続していたようであるが、時代の流れとともに、その主体部を寺域の東側へと移動しているようにみえる。

今回の調査範囲の堆積層の状況を見ると、後世の擾乱を受け、本来的な堆積層が残っていない部分も多くみられる。判然としにくい部分もあるが、調査区の南西側(天界寺の井戸の内側)地域とそれ以北の地域で違いが認められた。

南西側(25ライン以南)では表土下に黒褐色泥礫土層、黒色土層があり、地山の赤土になる。いずれも水平方向の堆積である。黒褐色泥礫土層は約30cm、黒色土層は約10cmの厚みである。地山の赤土面には溝状遺構やピット群が検出され、黒色土層面では小礫集中部が確認されている。出土している遺物からすると、17世紀頃のものを中心に、それ以降の時期のものが上層的であり、当該時期の頃から一帯が利用されたものと想定される。

一方、中央～北側(25ライン以北)では表土下の黒褐色泥礫土層(南西側と同様な層相)の下に赤土を主体とした造成層が確認されている。表面はほぼ平坦で、層厚は北西側で厚い。その上面には幅約2mの小礫敷きの遺構が本堂跡から西側へ直線的に延びる。また、南側の井戸との境界をなすような石列が東西方向に検出されており、本堂跡とされている基壇を有する遺構とある時期の空間を形成している。首里古地図(1700年)に描かれている天界寺の状況とよく似ている。出土遺物は比較的幅がみられ、16～18世紀頃のものが主体をなしている。

この赤土を主体とした造成層の下には黒褐色土層が確認され、北側ではジャリが薄く敷かれた感じである。その両面に立ち上がる石垣やコーラル敷き、瓦溜まりの部分が見られるほか、本層の下部に大きな礫を敷き、その周囲に野面石積みを立ち上げる溝状石列などの遺構が検出されている。出土遺物は15・16世紀頃のものが主体で、特に、高麗系瓦の多くは本層から出土している。

この黒褐色土層の下は赤土の地山で、上面には蜂の巣状にピット群が検出されたほか、石列、円弧状遺構など天界寺の創建時の遺構かとみられるものが確認されている。

次に検出された遺構についてみる。大きくみれば造成層上面及び南西側で検出された遺構がひとつの時間をつくり、造成層下の黒褐色土面、地山面に検出された遺構に分けられる。

造成層上面に形成された遺構は、那覇市教育委員会が実施した調査で確認された本堂跡とされる基壇を有する遺構を中心に、そこから西側へ延びる参道(コーラル状の小礫敷)、井戸との境目をなすように東西方向に延びる石列Aなどが検出されている。参道部はほぼ重なるように数枚の小礫敷きの面が確認され、本堂が機能している時期に参道の改修があったことを窺わせている。その際には参道のラインは同じ場所に設けたようである。

この石列Aの南側に後述の石垣Aが井戸との境目をつくるように東西に延びている。石垣A、本堂跡、参道が首里古地図(1700年頃)に描かれている状況を示すものかと考えられる。北側では遺構の検出はなく、広場になっていたかとみられ、また、寺域の北側を東西に延びる綾門大道と境内の境目をなす石垣やその石垣に設置された門などは確認できなかった。

南側で検出された遺構は首里古地図には描かれていないものの、時期的には相前後する頃が想定される。石列Bは溝状を呈し、底面の状況からすると西側に流れていたかと推察される。石列Cは南西側遺構と中央部を区切るものとみられる。南西側の地山面のピット群は建物跡が想定でき、それを挟むように南北で東西方向に走る溝が検出され、また、中央部付近を南北に走る溝が本地区を二分しており、東西に建物があったかと想定される。

造成層下の遺構は調査区の北西側を中心に展開する。地山面の状況を見ると、ピット群は中央から北側に、円弧状遺構は中央部のやや南側寄りで集中的に検出されている(第14図)。円弧状遺構は6基確認されたが、詳細はつかめなかった。円形を呈す浅い溝状のものと、その内外にみられるピットで構成されている。円の直径に大小がみられる。また、浅い溝状のものが二重に配されるものなど、若干のパリエーションがみられる。ピットは

北側のものより浅めのものが多い(第1表)。寺という本遺跡に特徴的なものなのか興味深い。那覇市教育委員会の調査では、縦門人道に近い場所で検出されている。

中央から北側で集中的に検出されたピット群は、深さが50cmを越すものが目立った(第1表)。比較的プランが明確なものは第14図に示した2棟だけであるが、納掛けしたものは可能性の想定できるピットである。本堂跡の位置している周辺の地山面には、深さが70cmを越すようなピットが割と見受けられた。創建時の頃から大きな建物が配置された場所かと推察される。

中央西側では明式瓦を中心とした瓦溜まりの上部を覆ってコーラル敷きの道が東西方向に延びて検出された。西側は平陵の方へ延びており、東側は調査区西壁から約5mのところまで途切れる。北接する石列Dや石垣Bなどはコーラル敷きの道と関連する可能性も考えられる。このコーラル敷きの道はライン的には、造成層上面の参道とほぼ同様である。

北側第4層面で検出された溝状石列、石垣C、石列E、コーラルBなども建物に関連する遺構かとみられる。特に、溝状石列は底面部が西側へ傾斜しており、水は西側に流れたものと考えられる。本遺構は玉陵側へ延びている。遺構の検出状況からすると、建物の配置場所は創建時からほとんど変わらなかったものと想定される。

本堂跡の西側で検出された方形掘り込み遺構は建物とは重ならない位置にあり、本堂が機能した頃には埋められていたようである。小礫が広がる部分があったり、何らかの目的でつくられたものと考えられるが、詳細は不明。

最後に遺物についてみよう。これまでの調査と同様、今回の調査においても多種多様な遺物が得られている(第3表)。種類的にはこれまでの調査で出土しているものと大差ない。量的には青磁、褐釉陶器、沖繩産施釉・無釉陶器、染付、タイ産褐釉陶器、白磁の順(第3表)である。出土状況を見ると南側第2～第4層、北側第3・4層、瓦溜まりなどから多く出土している。

青磁は碗が圧倒的で、酒会壺や大瓶などの大型のものが目立つ。第19図12の花台盆、同図2の内面施文の蓋は首里城京の内跡²⁴に類例が報告されており、第20図14のものは那覇市教育委員会の調査報告に類例がみられる。後者はあまり類例報告のないもので注目される。また、第20図9の六面体の資料や同図6・7の鏝鉢なども注目されよう。

白磁はこれまでの2度の調査で報告されているものとほぼ同様であるが、第21図1の玉縁口縁碗のような古手のものが若干みられる。また、第23図1・2の壺や第22図21～25の灯明皿などはこれまでの調査でも出土しており、本遺跡には多くもたらされていたものと考えられる。染付は16世紀頃の景徳鎮窯系のものが主流で、碗や皿などが中心。第26図19の瓢箪型の資料は注意される。

鉄釉染付、瑠璃釉、翡翠釉、色絵などが得られている。前三者は17世紀頃、後者は18世紀頃を中心としているようである。碗、皿、瓶が上体である。三彩は量的には多くないものの、第29図1の盤、13の陶枕、14の人形などが注意される。盤は首里城²⁵に、人形は阿波根古島遺跡²⁶に類例の報告がみられる。近年、煎茶の道具として注目されている宜興窯系の資料も数点確認できる。15世紀頃の泉州窯系磁器(第30図3・4)や黒釉陶器(第30図5～14)も若干得られている。後者は瀬戸・美濃系の可能性のある資料(第30図13)も見受けられる。また、第30図1・2に示す韓国産の粉青沙器(高麗青磁を母体)は注意されよう。

褐釉陶器は青磁に次いで多く、器種もバラエティーに富んでいる。壺が上体をなす。第31図2、第31図4の壺や第33図9～13の鏝鉢、15・16の鉢、20の浅鉢などが注意される資料である。タイ産の褐釉陶器は壺形のみが得られている。大小のものがあり、第35図8はミャンマー産のものともみられ、首里城²⁷などから報告されている。タイ産半練土器はやや北側3・4層に集中傾向があり、蓋が多い。蓋の中央に付される摘みは宝珠形と饅頭形がある。首里城京の内跡から比較的まとまって報告されている。

本土産陶磁器をみると、陶器には施釉がみられる薩摩系、肥前系、関西系のものがみられ、無釉には備前焼の鏝鉢が多い。磁器には肥前系、瀬戸・美濃系が主流で、17世紀後半～19世紀代の比較的新しい時期のものが中心である。沖繩産の施釉・無釉は量的にも器種的にも豊富で、前者は碗、後者は壺類が主体をなすという他遺跡の出土状況と同様である。陶質土器は南側で多く出土しており、器種的には12種確認されている。灯明皿の量的な出土は本遺跡の特徴かとみられる。瓦質土器は大型のものが主流で、奈良火鉢とみられる第53図5～8は注意されよう。また、第52図1～5の鉢や第53図17のスタンプ文のある資料は湧川古窯跡²⁸に類例の報告がみられる。

上器は南側で多く出土しており、宮占の土器、バナリ焼きが上体。器種的には壺形が圧倒的である。須須器や土製品が若干得られている。円盤状製品は2～4cm台のものが多く、底部を利用するものは高台を残すものが

多い。小型の資料は古く、大型の資料は新しい傾向がみられる。煙管は陶器製、磁器製、瓦質土器製、青銅製のものが見受けられる。貝製品はボタン、碁石はヤコウガイ、チョウセンサザエの蓋などが利用されているが、近年のもの可能性もある。骨製品では宮古からの出土も報告²⁾される板状製品や、第59図20の先端部が尖る資料などが注目される。

銭貨は28種、492点出土している。有文314点のうち40点は洪武通宝で、全体の68%は北宋銭。有文のものは北側3・4層から多く、無文のものは南側に多い。また、無文銭は1.5～2.2cmの直径のものが多く、中央の孔は四角で、径の1/3程度のもので主体である。青銅製品では第62図7の刀の銚が注意され、同図17の増堀も注意される。玉類は22点出土しており、勾玉、切子玉、丸玉が得られている。丸玉が中心である。ほとんどがガラス製であるが、第63図1は翡翠製、2は貝製、11は琉球岩製のものである。

石器では第66図1～7に示すような石球が全体の70%の出土量であるが、詳細不明な部分が多く、注意しておきたい。また、第65図5の石臼は古いタイプに属するようである。滑石製品も10点余得られている。第66図13・15は加工面が多くみられるもので、15は伊良波東遺跡³⁾などから報告されているバレン状製品かとみられる。一對の石像の出土は注目される。ただ、擾乱部からの出土であり、時期的には明確にできなかったのは残念である。金剛力十尊とみられ、天界寺の門の両側に配置されていたと考えられる。

瓦は19,300点余り得られており、高麗系、大和系の古手のものと同近世の明朝系瓦がある。19,100点余が明朝系瓦で、高麗系瓦が200点余、大和系瓦が40点足らずの出土である。高麗系瓦は北側第4層、ビット群から多く得られている。また、明朝系瓦は瓦溜まりに集中し、湧田古窯跡⁴⁾から報告されているような還元炭焼成による灰色・褐色瓦が主流で、酸化炭焼成の赤瓦はそれほど多くない。天界寺の初期の頃の建物は灰色瓦が主体的に葺かれていたようで、赤瓦の頃は建物の規模縮小が想定される。埴は方形、三角形のものがある。第71図8は下部に取っ手がつくもので、湧田古窯跡などから報告されている。

貝類はこれまでの調査で出しているものほとんど変化はみられない。ヤコウガイは蓋が279点、身が93点と圧倒的に蓋が多く得られている。ヤコウガイ、カンギク、マガキガイは各層から出土しており、ウミナカニモリ、クワノミカニモリやアキガイ科、イモガイ科は北側第3・4層に多い。骨類の状況を見ると、ブダイ科、フエキダイ科は北側第3・4層及びビット群に多い。ウシ、ブタは各層から出土しており、ウマは北側第3・4層から多く得られている。また、シカの角は擾乱部からの出土であり、最近のものかもしれない。ネコは方形掘り込み遺構から得られており、17世紀頃には本遺跡にもたらされたかと考えられる。

人骨は成人男性が4体、性別不明成人が2体、乳児が1体確認できている。いずれも造成層以後の人骨の可能性が高い。全体的に大きく破損しており、詳細は不明。

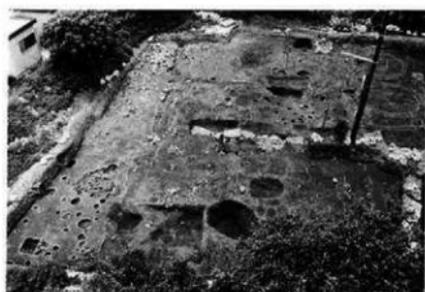
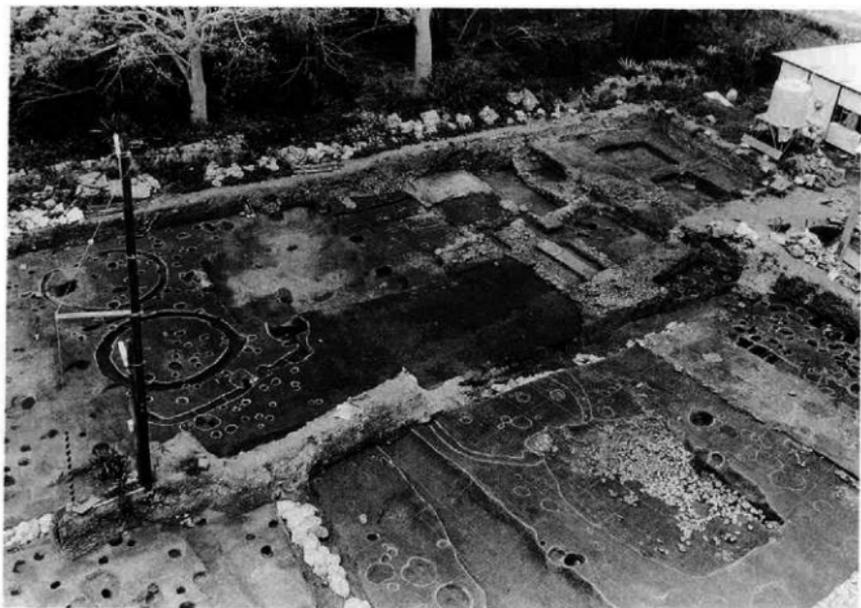
以上、今回の調査成果について、層序、遺構、出土遺物を概観した。これまでの調査成果も含め、今後の課題点について若干ふれてみたい。第4図はこれまでの調査範囲と今回の調査範囲を繋げたもので、中区の中央付近を南北に走る丹垣を境に、一段低くなった西側と高くなっている東側に分けられる。西区の造成層下の黒褐色土層下部及び地山面に構築された遺構が、玉陵側の方へ延びており、創建時の天界寺は西区から玉陵一帯に展開していたかと推察される。

東側は一段高くなった地山面がさらに東側では琉球石灰岩の岩盤になり、もともと丘陵部のような場所であったかとみられる。1644～1661年の復旧の際に開かれた場所かと想定されるが、1576年の焼失の痕跡は確認できなかった。1492年の円覚寺の創建、8年後の玉陵の創建、それに伴う天界寺の位置付けの変化など、文献資料からのアプローチも今後必要とせらう。伽藍配置の検討や円覚寺との関連、さらに、天界寺の時代変遷の検討など課題は多いものの、これらを明らかにすることで、天界寺の全体像が浮き彫りになってくるものと思われる。

(註)

- 註1 「『感福』 1743年
- 註2 「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第43集 那覇市教育委員会 2000年3月
- 註3 「天界寺跡(1)」『沖縄県立歴史文化財センター調査報告書』第2集 沖縄県立歴史文化財センター 2001年3月
- 註4 「首里城跡一帯の内郭跡編調査報告書(1)」『沖縄県文化財調査報告書』第132集 沖縄県教育委員会 1998年3月
- 註5 「首里城跡一帯の内郭跡・用物中跡・泉原門跡・漏厨門跡・板門跡・木東門跡発掘調査報告書一」『沖縄県立歴史文化財センター調査報告書』第3集 沖縄県立歴史文化財センター 2001年3月
- 註6 「阿波根古島遺跡」『沖縄県文化財調査報告書』第96集 沖縄県教育委員会 1990年3月
- 註7 「湧田古窯跡(1)」『沖縄県文化財調査報告書』第111集 沖縄県教育委員会 1993年3月
- 註8 砂辺 和正 「金銅製鏡を伴う骨製品」『南島考古だより』58号 沖縄考古学会 1997年
- 註9 「伊良波東遺跡」『豊見城村文化財調査報告書』第2集 豊見城村教育委員会 1987年

图 版



図版1 調査区遠景



Jライン北側：堆積状況



Jライン中央：堆積状況



南側：溝状遺構D



南側：石垣A



南側：石列C



南側：溝状遺構A



中央：墓壇



中央：墓壇堆積状況

図版2 堆積状況及び遺構検出状況(1)



中央：方形密込み遺構



中央：コーラル敷A（東より）



中央：コーラル敷A（西より）



中央：コーラル敷（西より）堆積状況



中央：瓦溜まりC



中央：石列D



北面：溝状石列



北面：コーラル敷B

図版3 遺構検出状況（2）



北側：石垣C



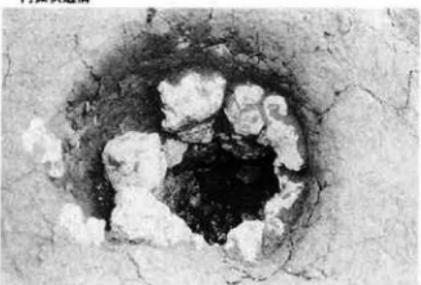
北側：石垣C



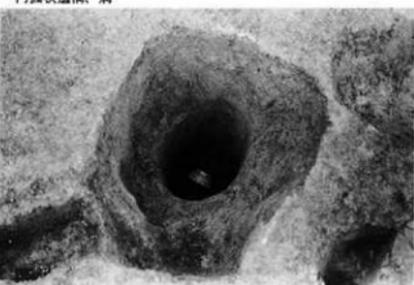
円筒状遺構



円筒状遺構、溝



ビット検出



ビット検出

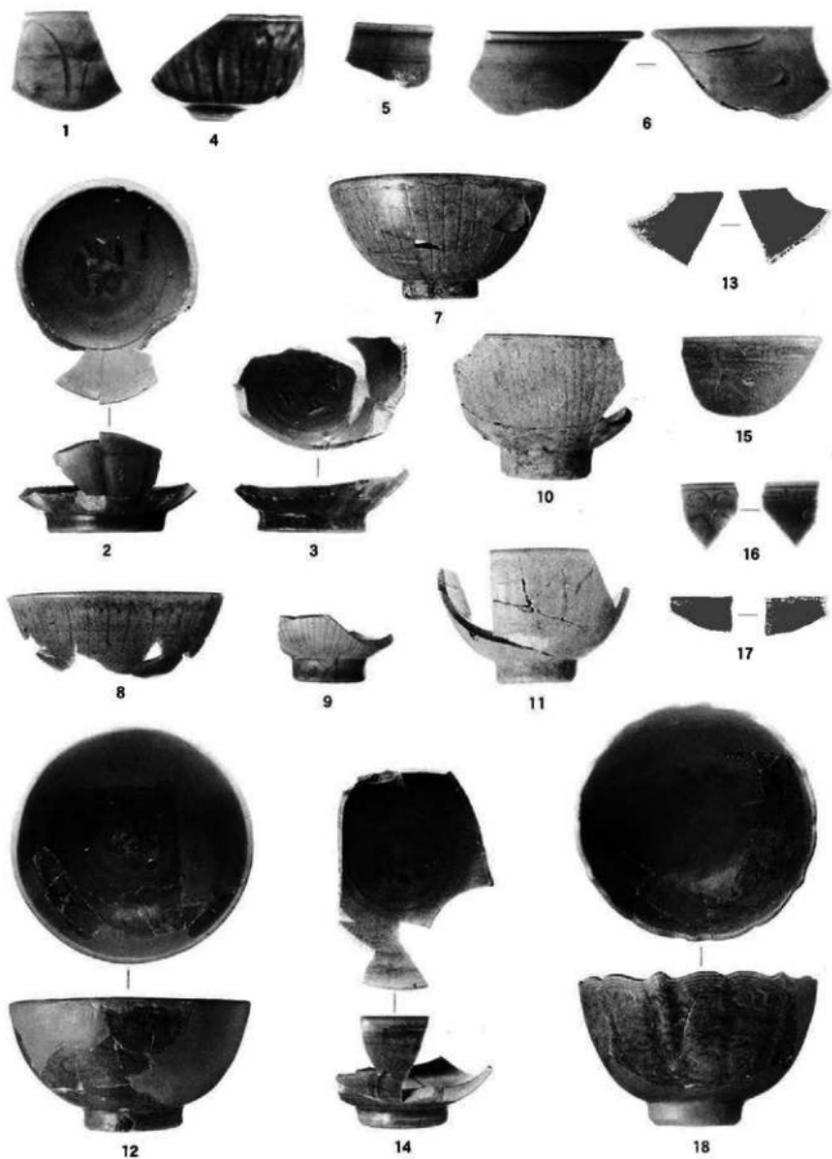


石像検出

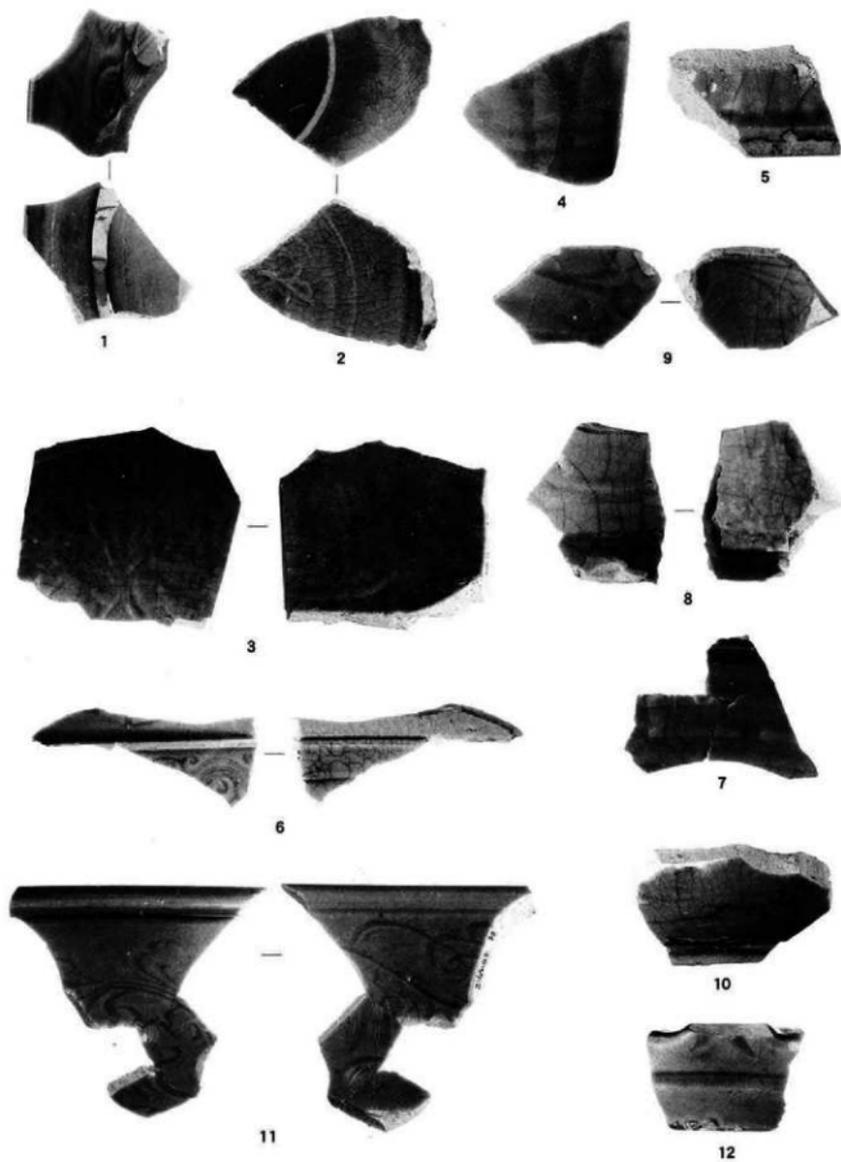


調査風景

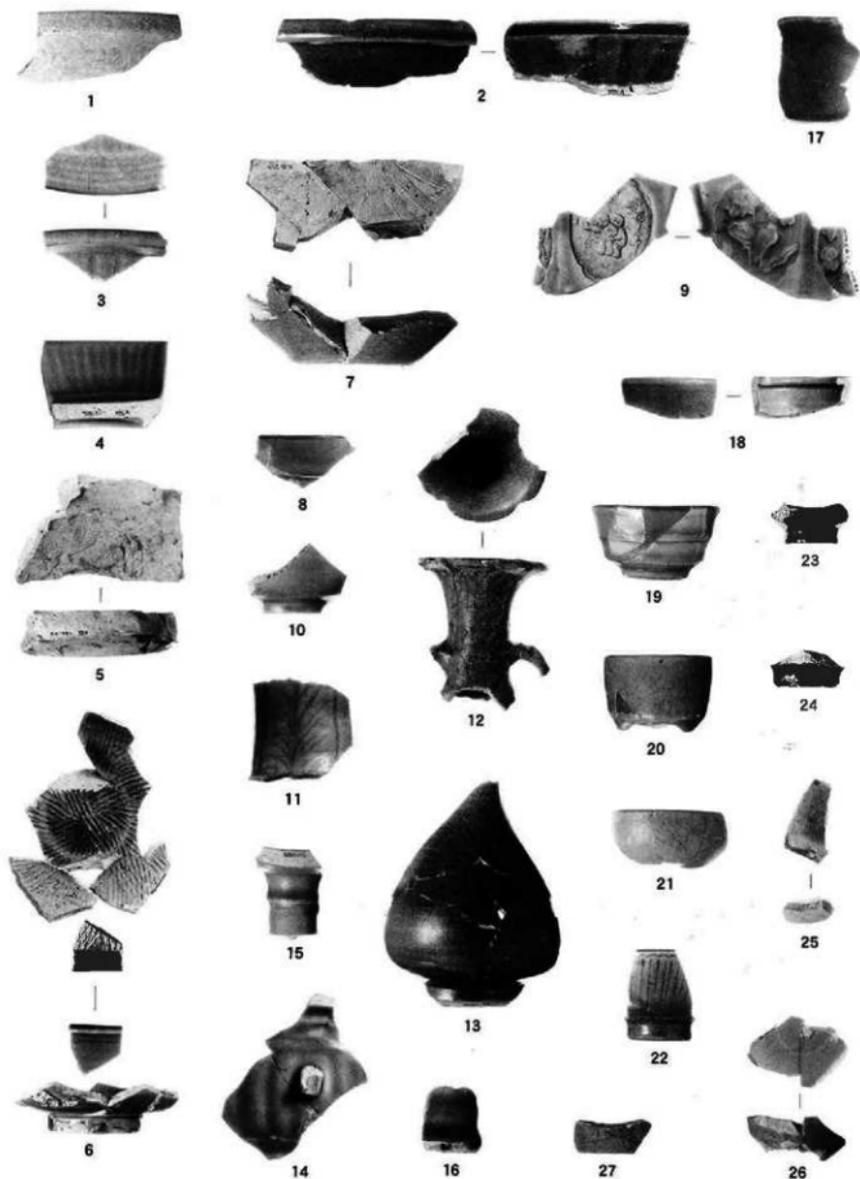
図版4 遺構検出状況(3)



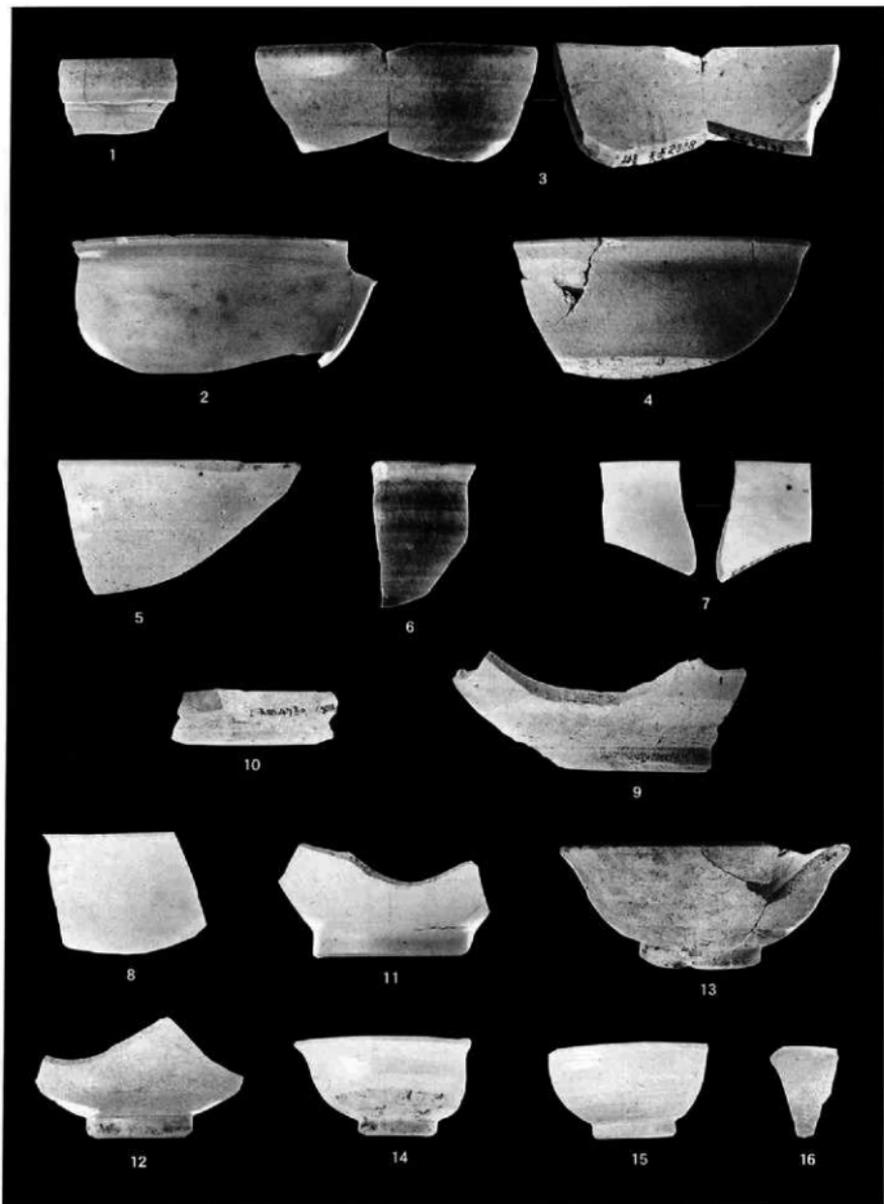
图版5 青磁(1)



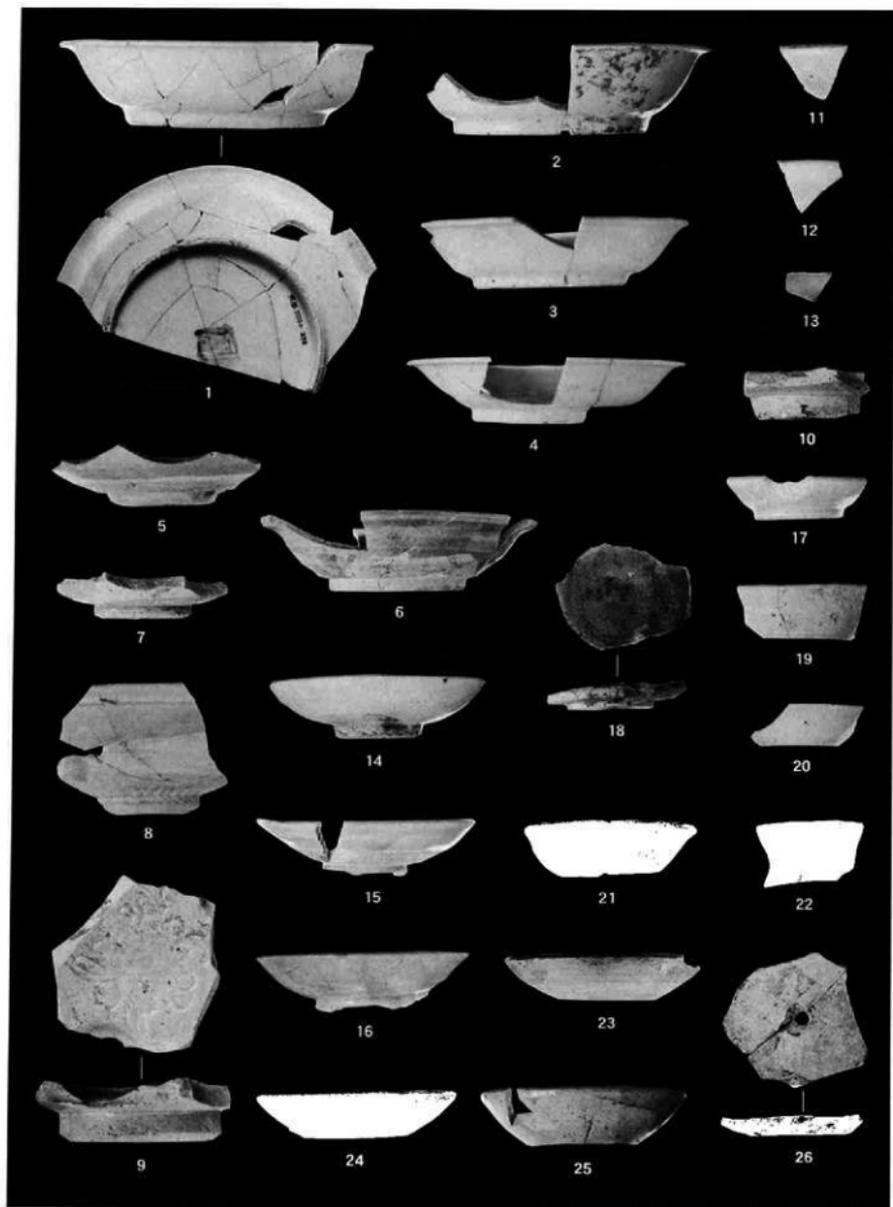
圖版8 青磁(4)



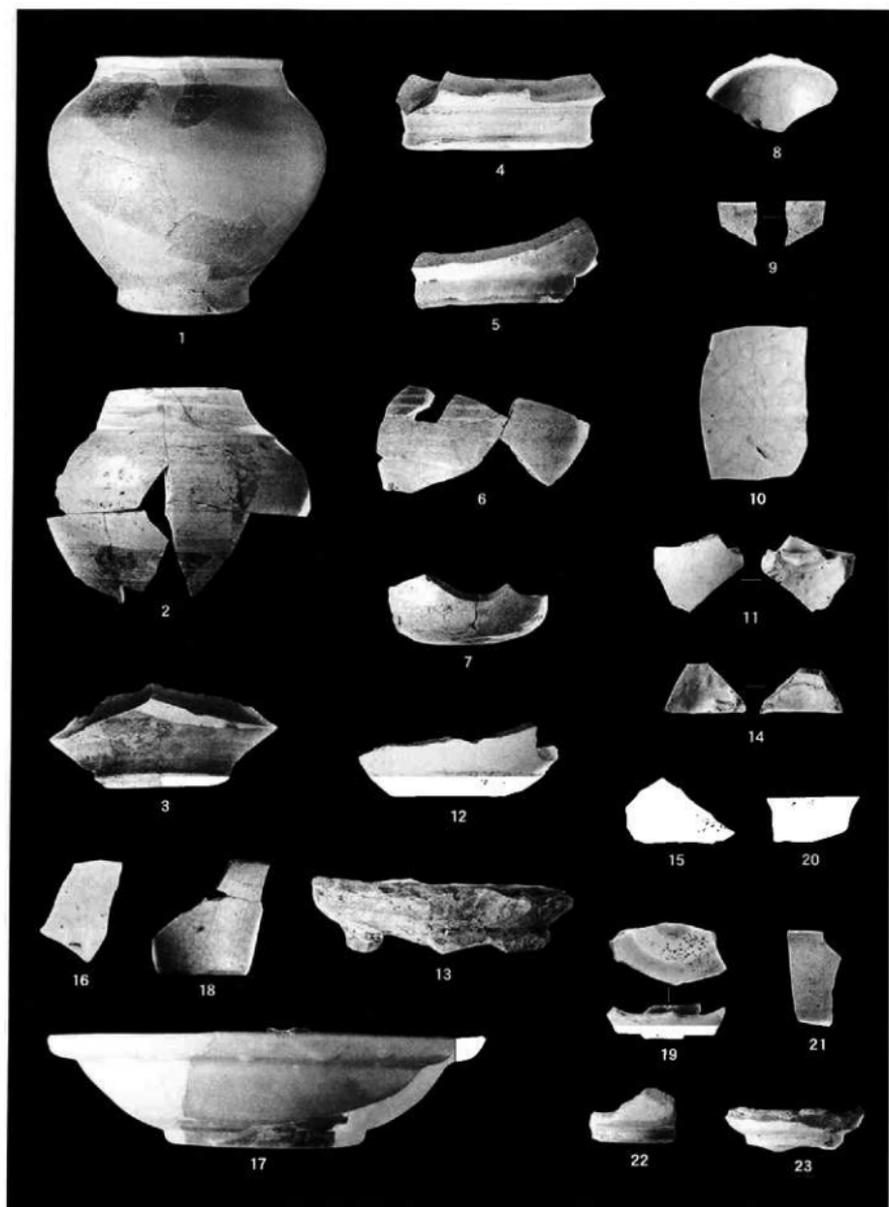
图版9 青磁 (5)



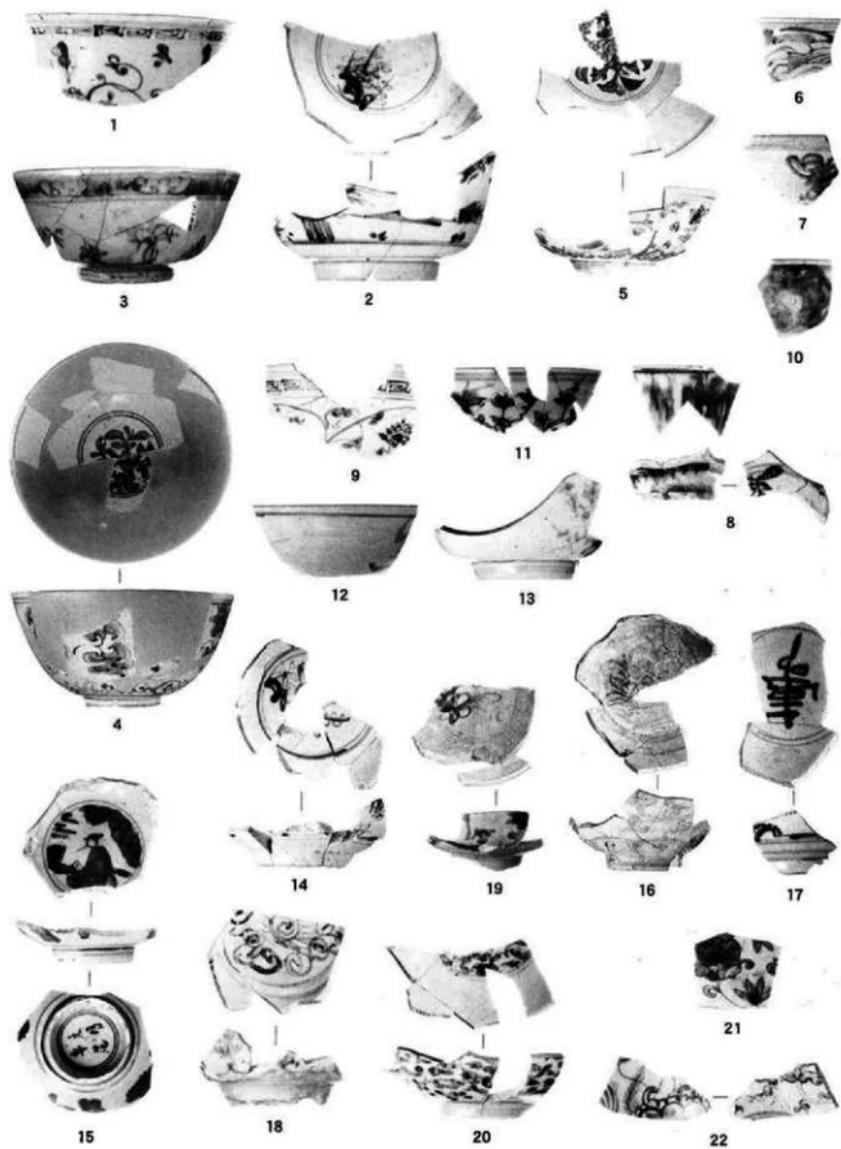
图版10 白磁(1)



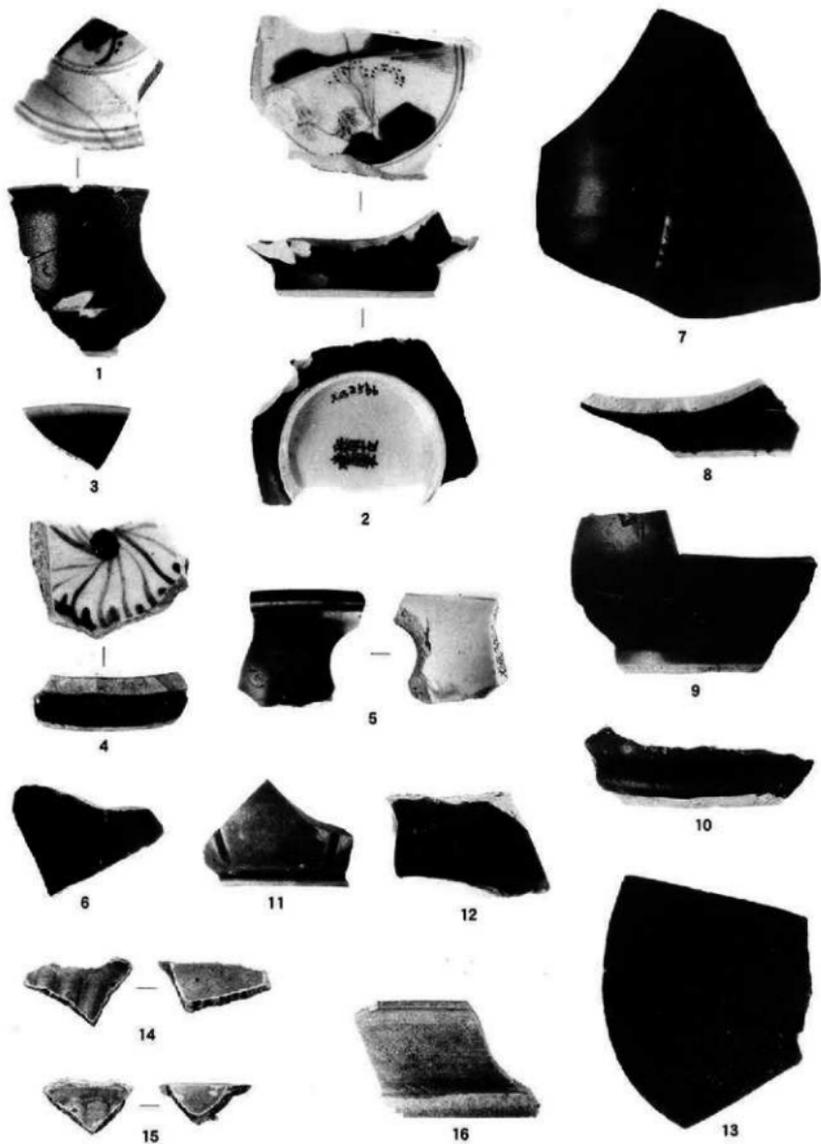
图版11 白磁(2)



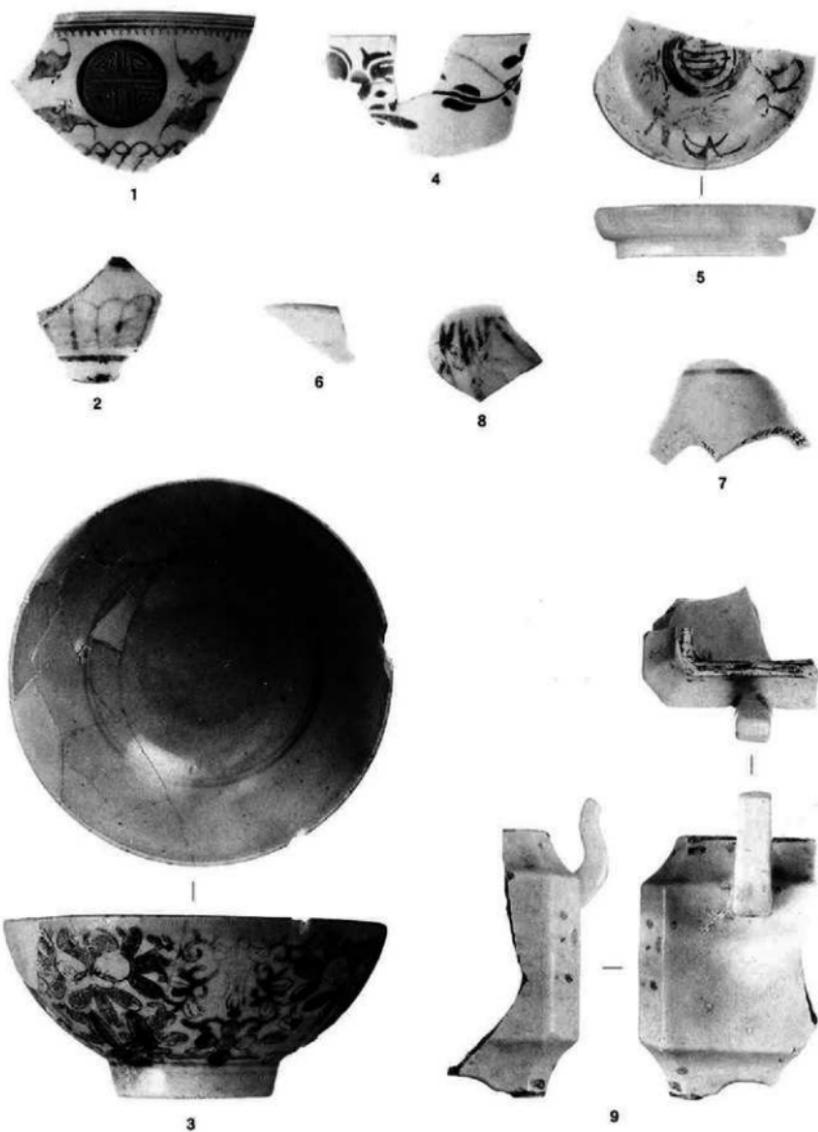
圖版12 白磁 (3)



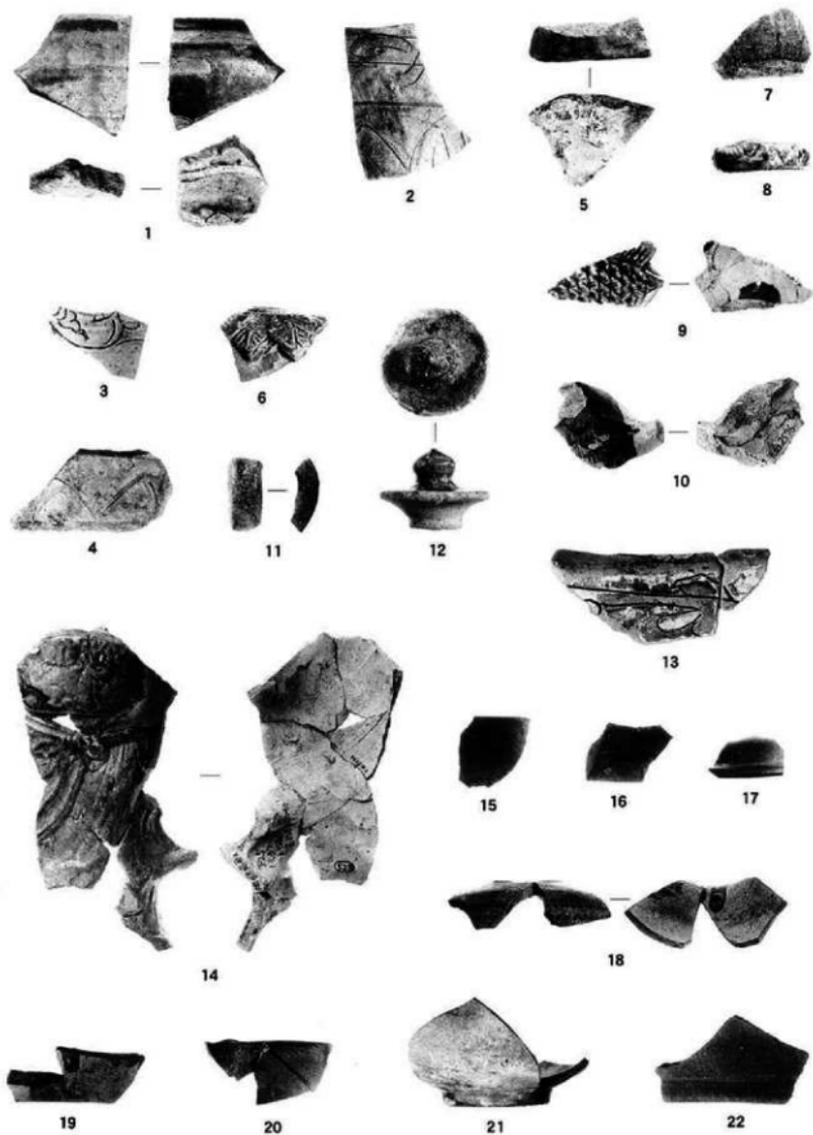
圖版13 染付(1)



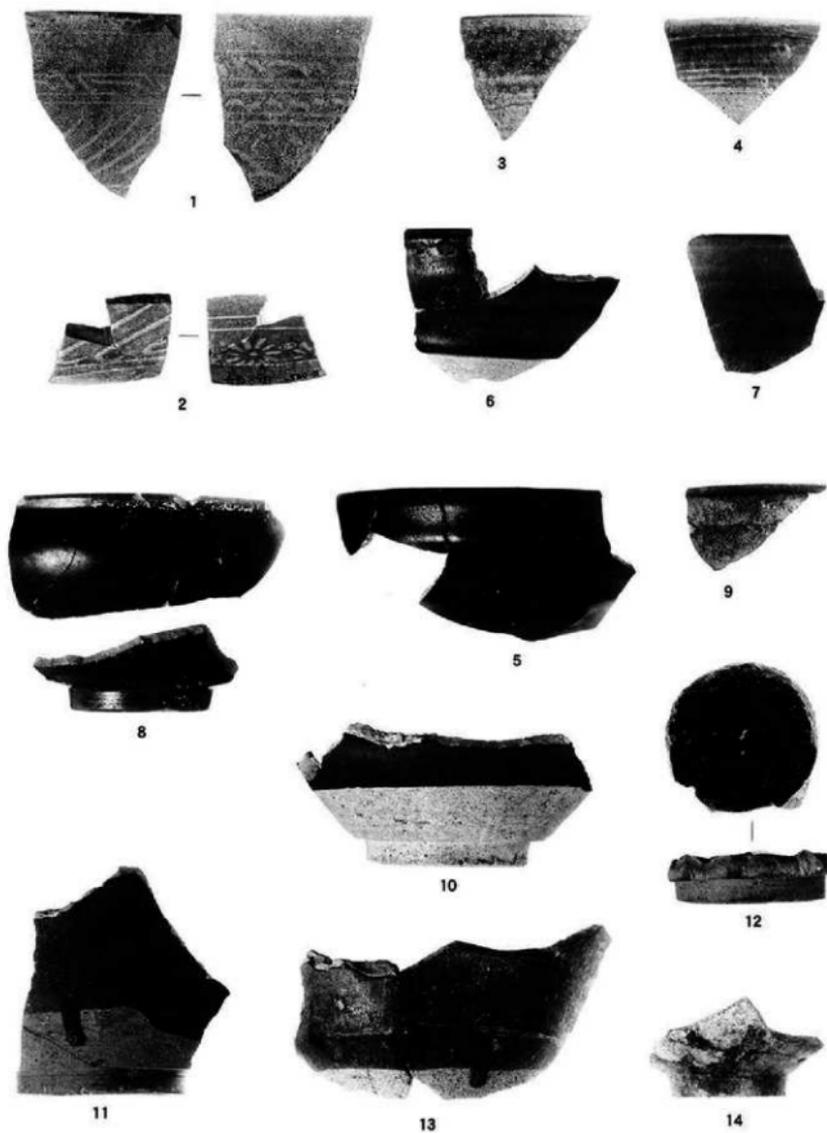
圖版16 鉄釉染付・瑠璃釉・瑠璃釉染付・翡翠釉



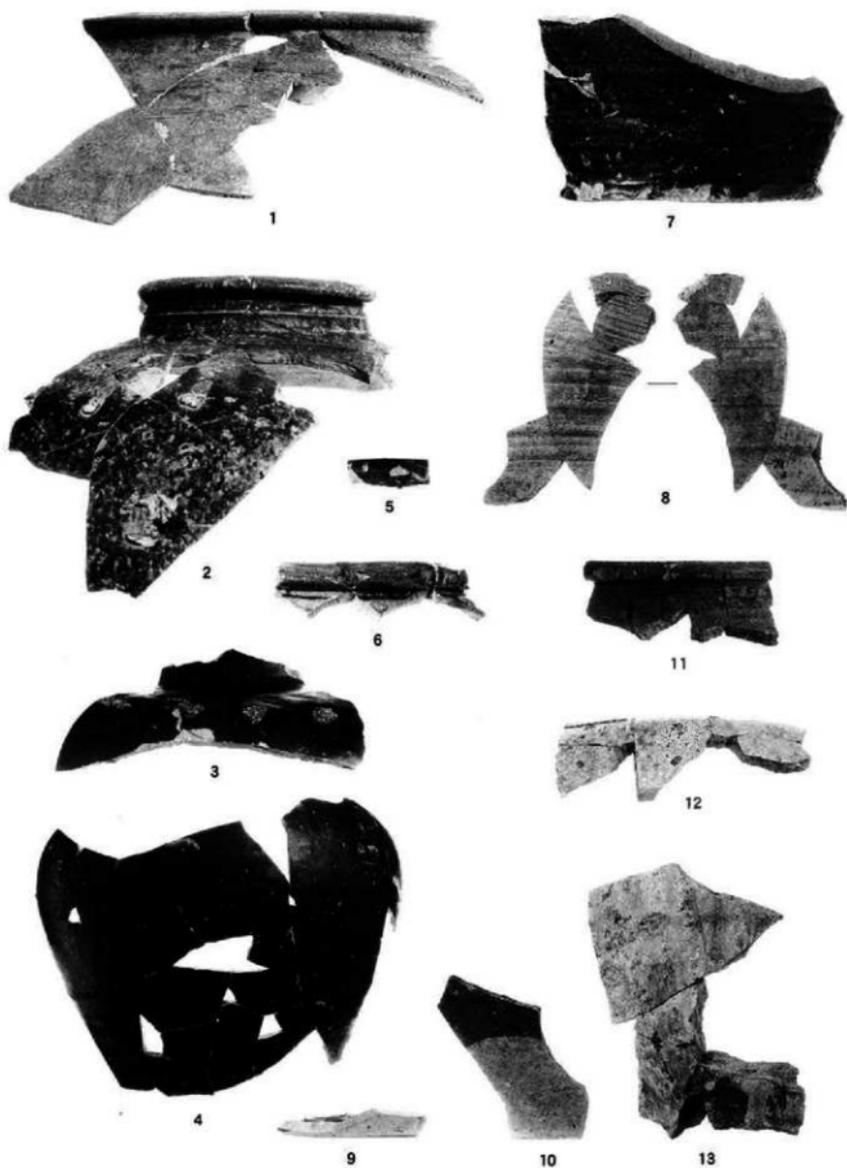
圖版17 中國產色繪



圖版18 三彩·宜興窯系·產地不明陶器



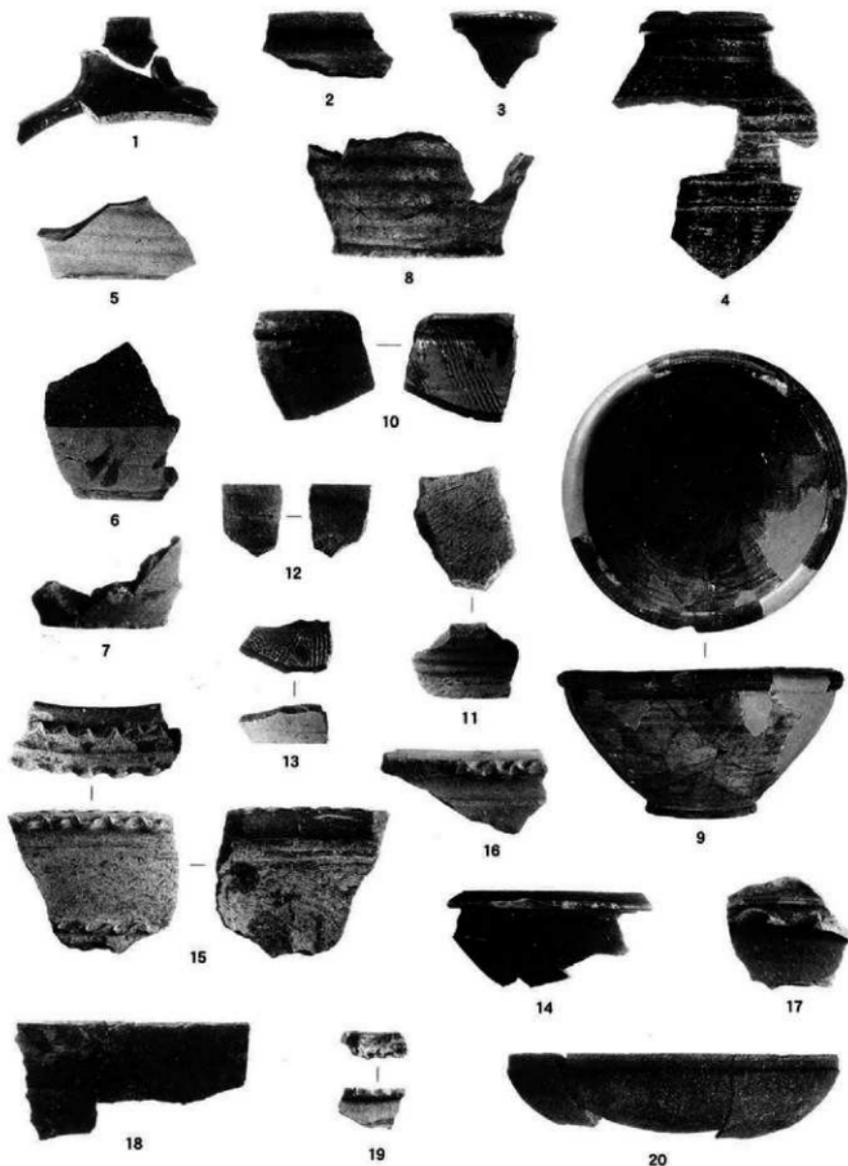
圖版19 粉青沙器・泉州窯系磁器・黑釉陶器



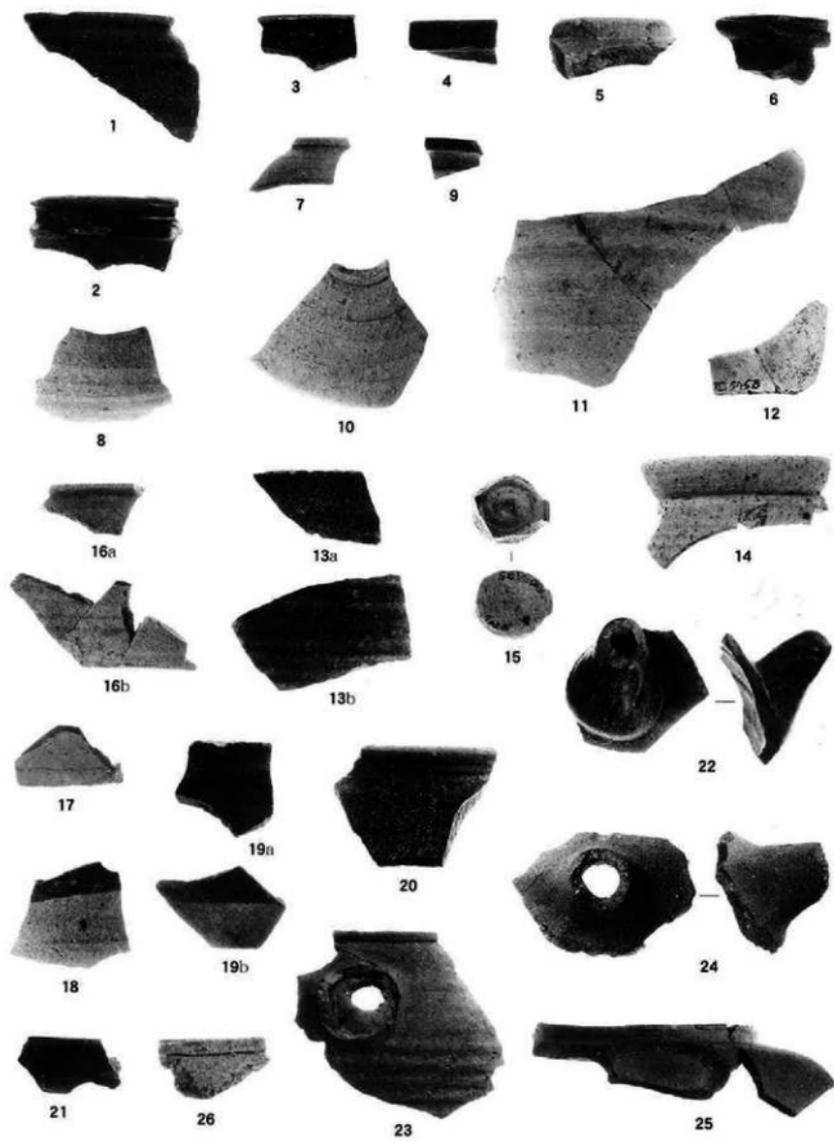
圖版20 褐釉陶器 (1)



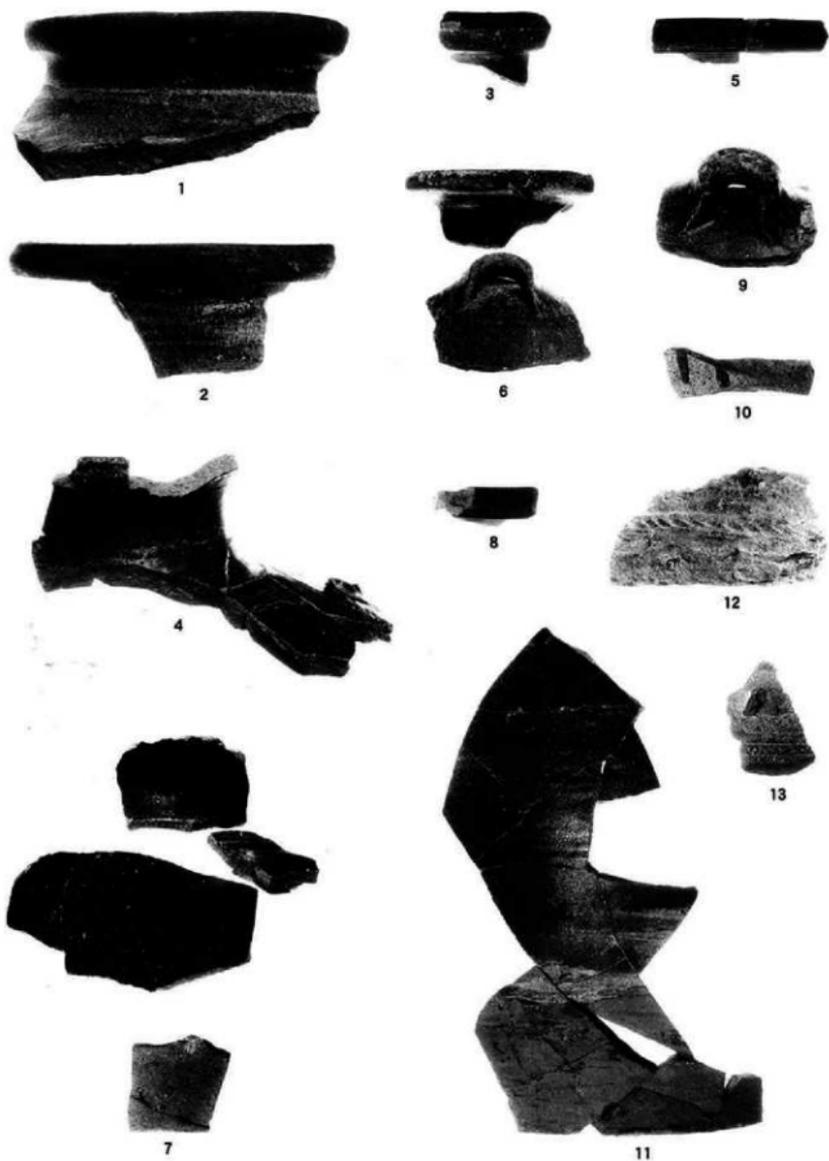
圖版21 褐釉陶器(2)



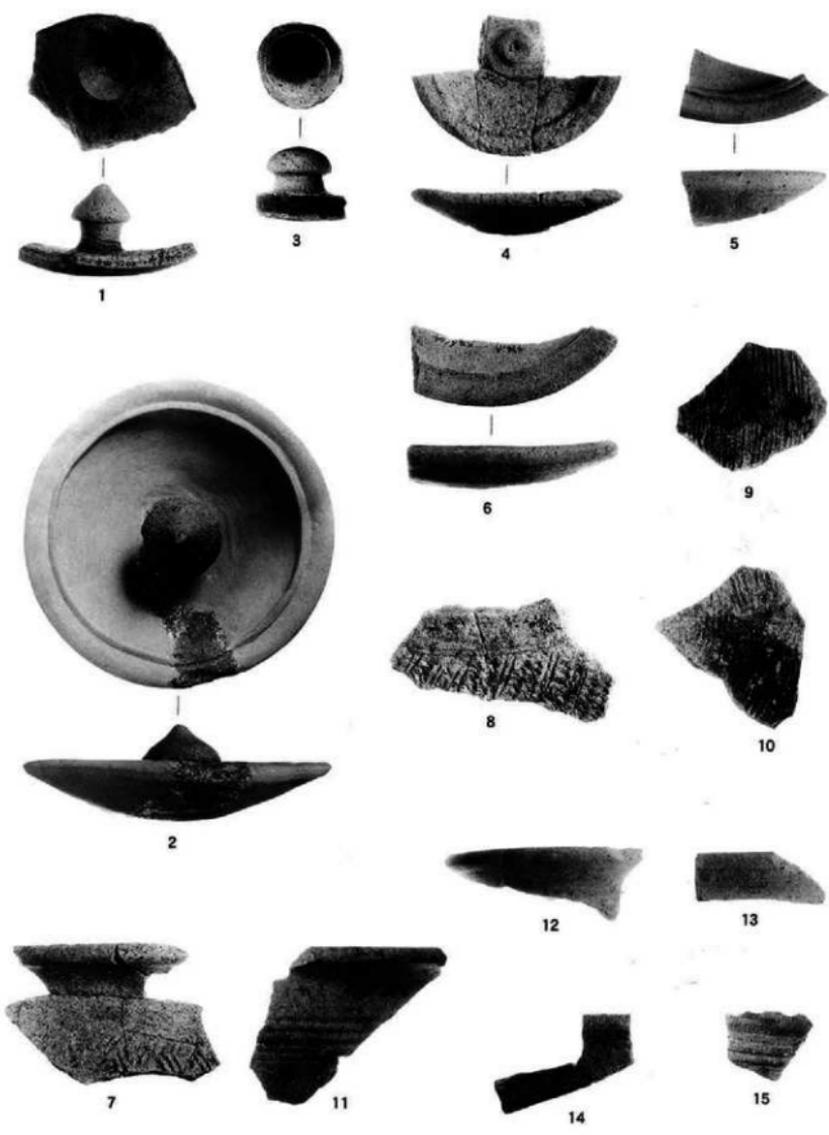
图版22 褐釉陶器 (3)



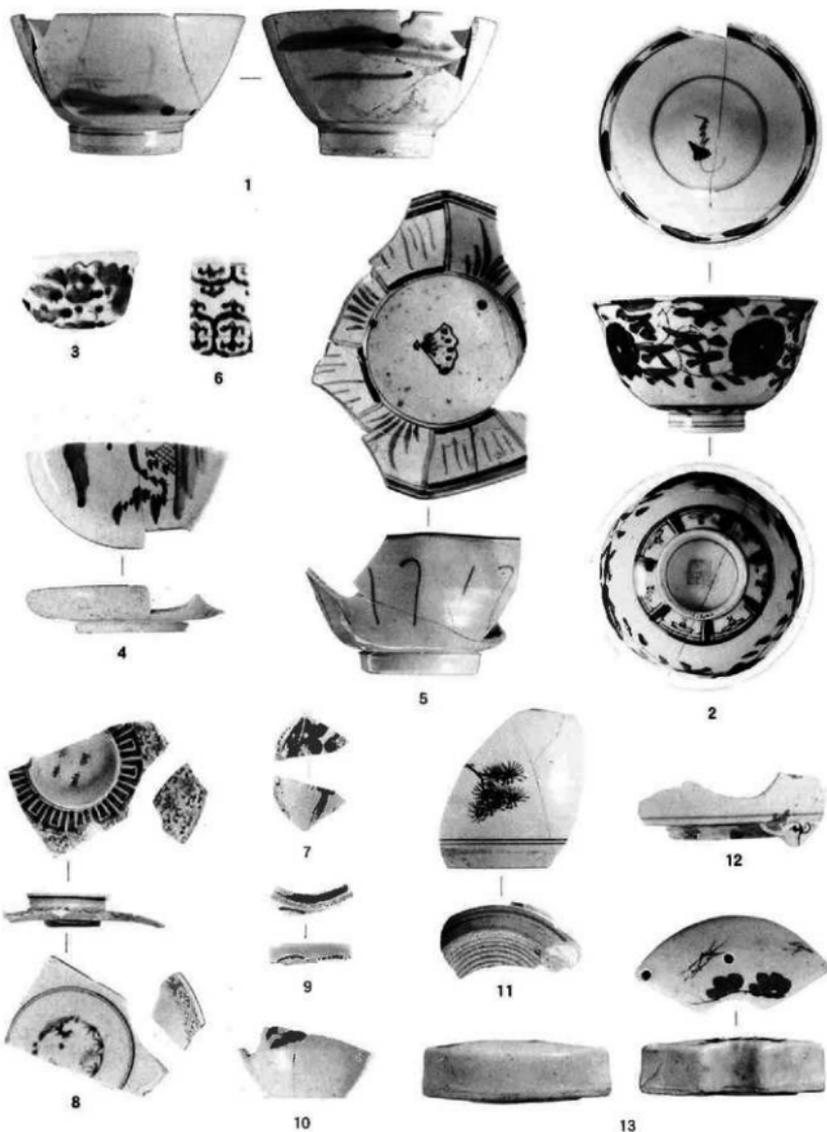
图版23 褐釉陶器 (4)



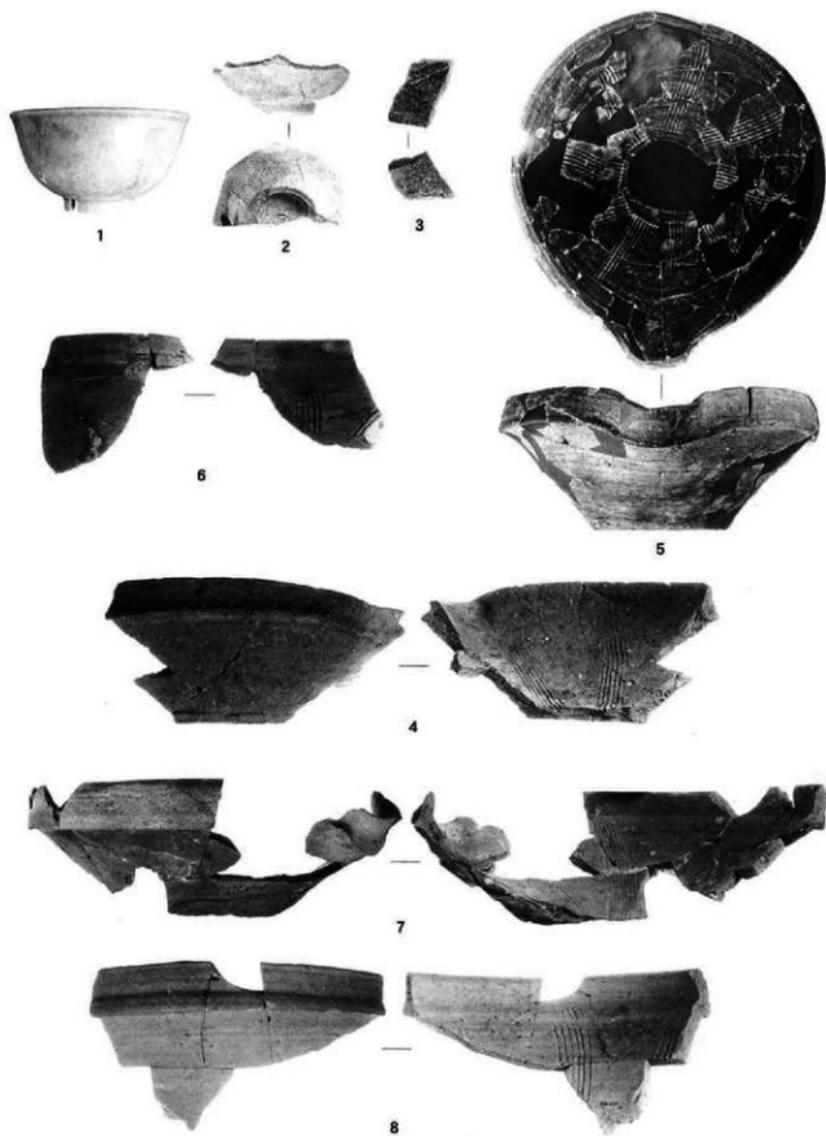
図版24 タイ産褐釉陶器



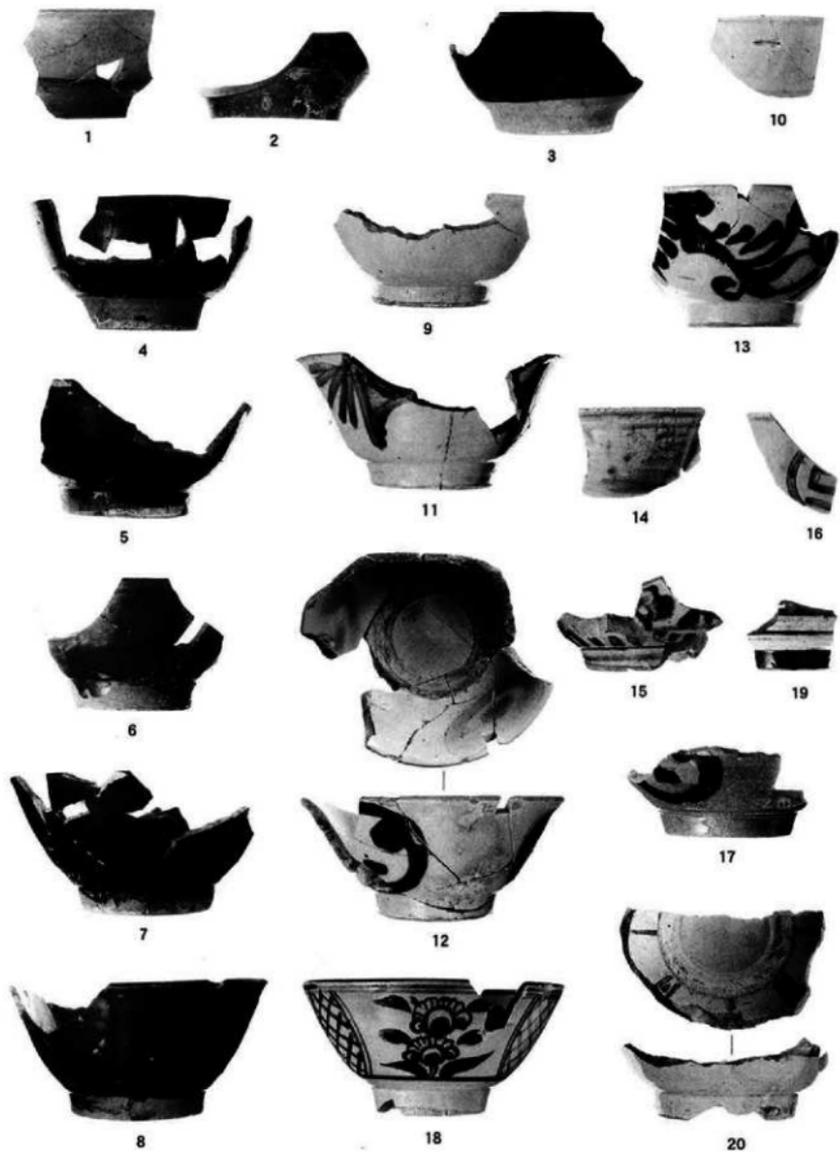
図版25 タイ産半練土器



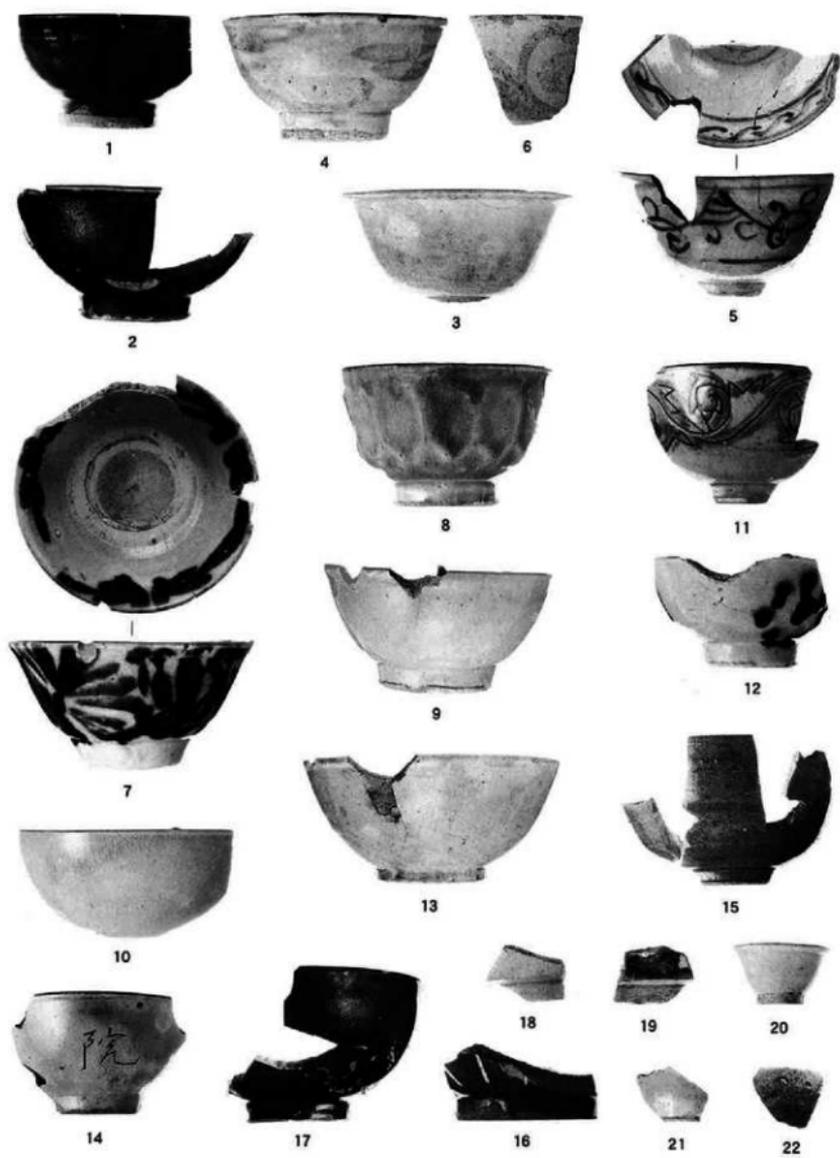
图版26 本土產磁器



図版27 本土産陶器



圖版28 沖繩產施釉陶器 (1)



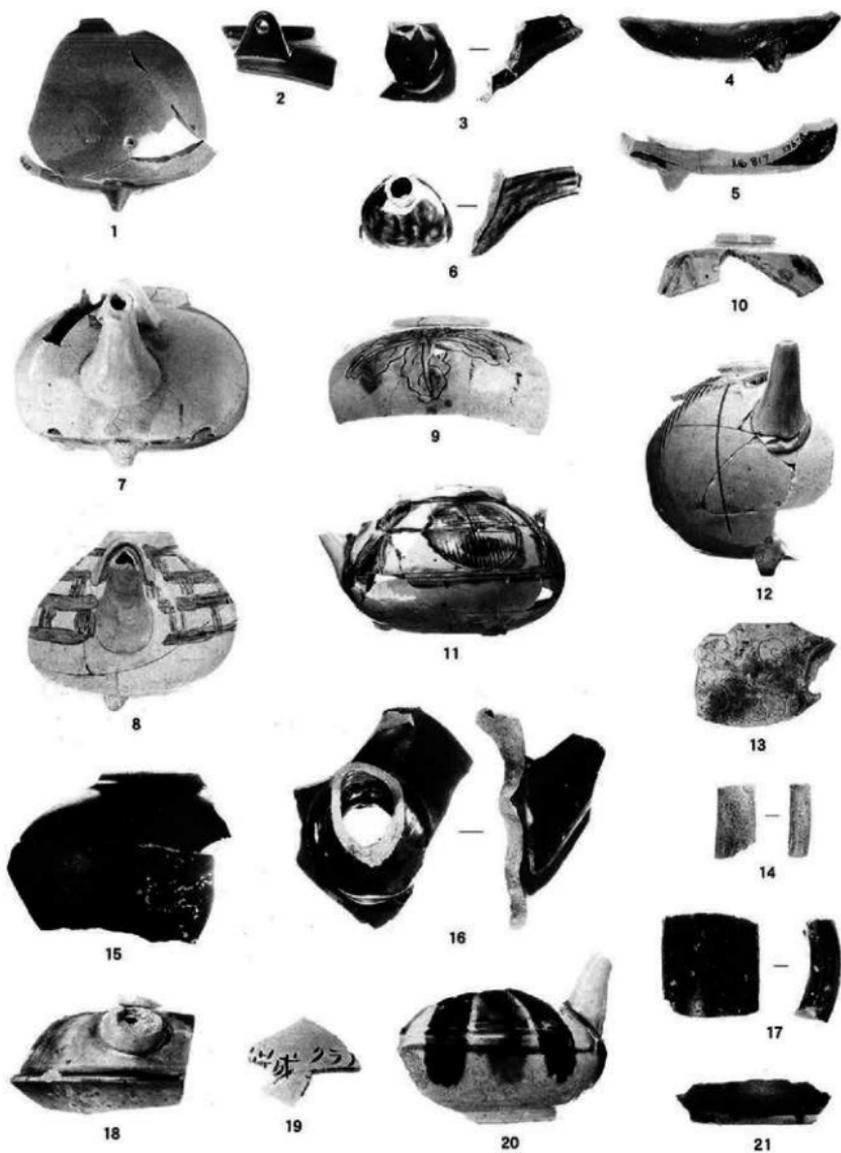
図版29 沖縄産施釉陶器 (2)



図版30 沖縄産施釉陶器（3）



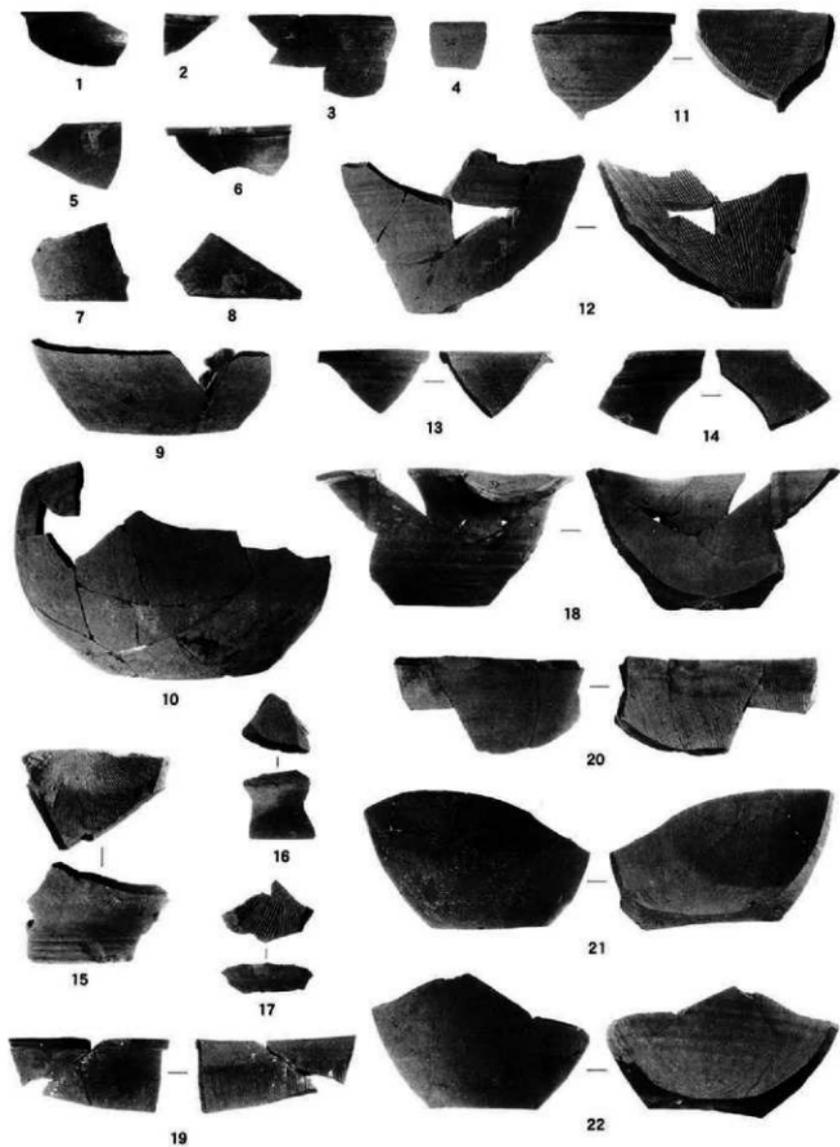
図版31 沖繩産施釉陶器（4）



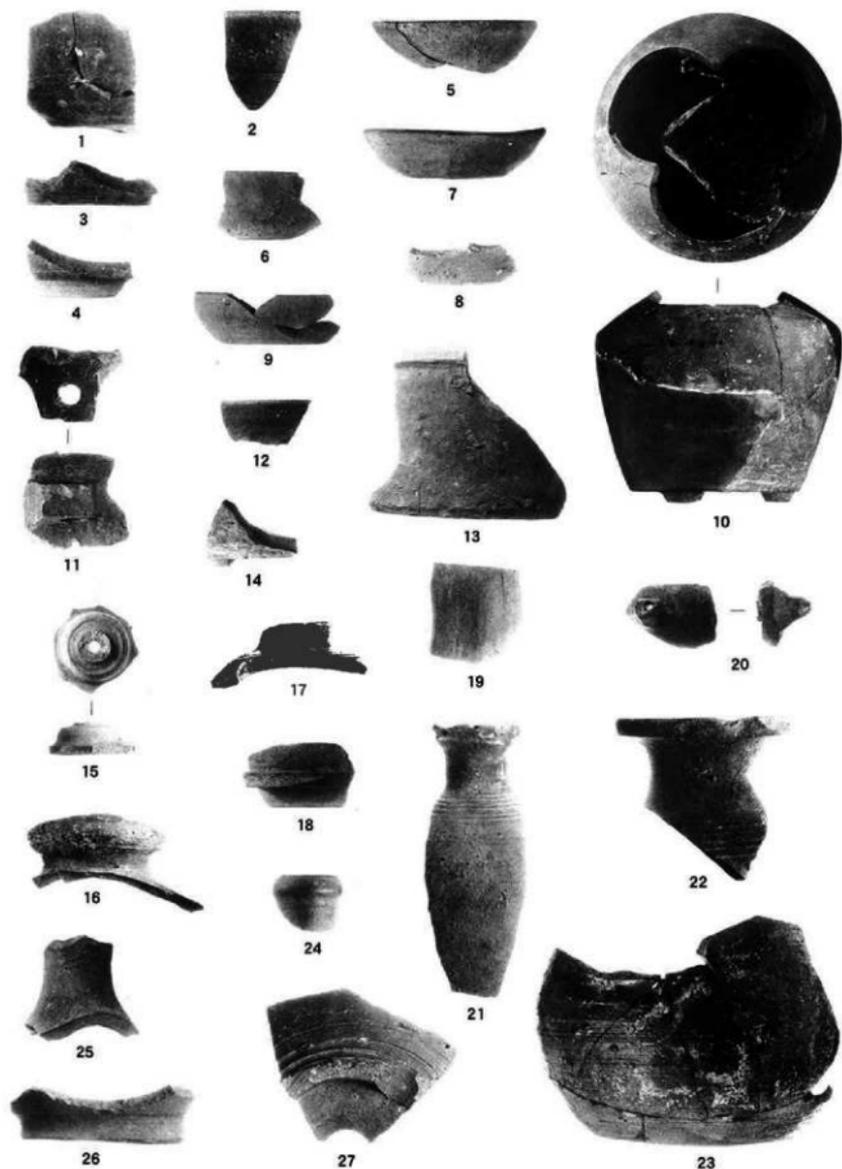
図版32 沖縄産施釉陶器 (5)



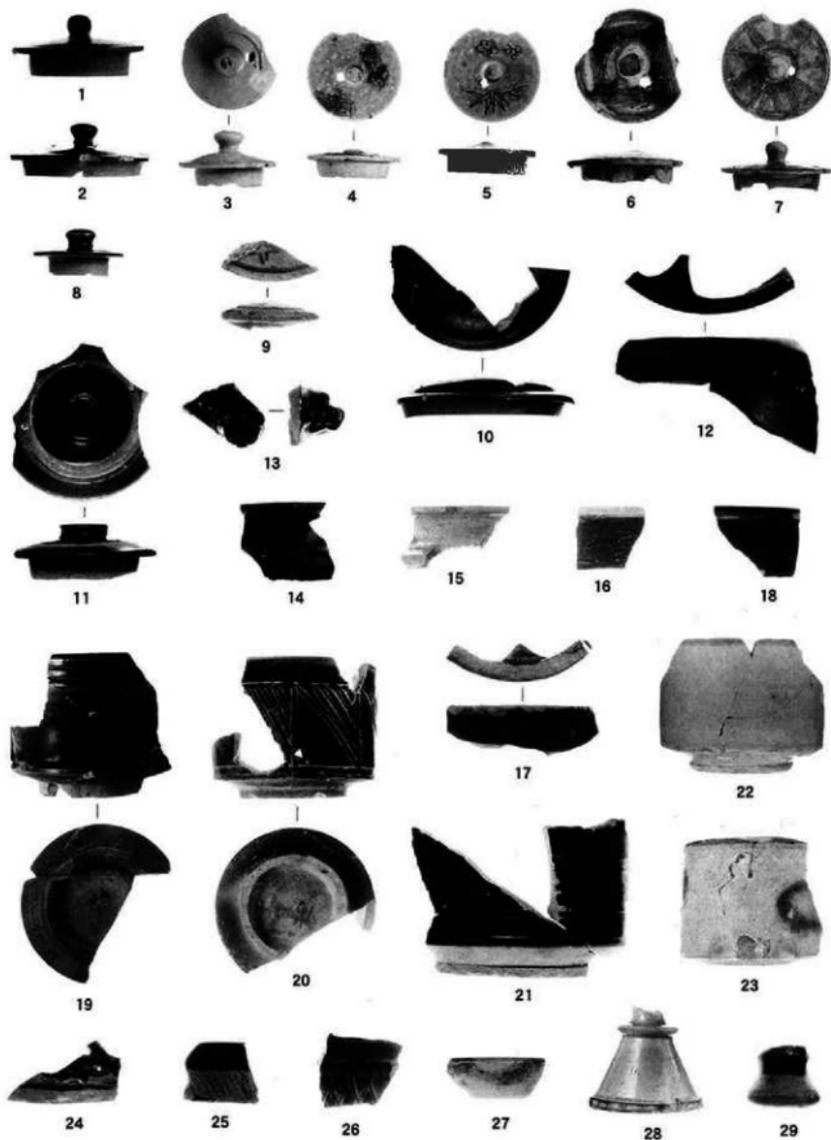
圖版36 沖繩產無軸陶器 (3)



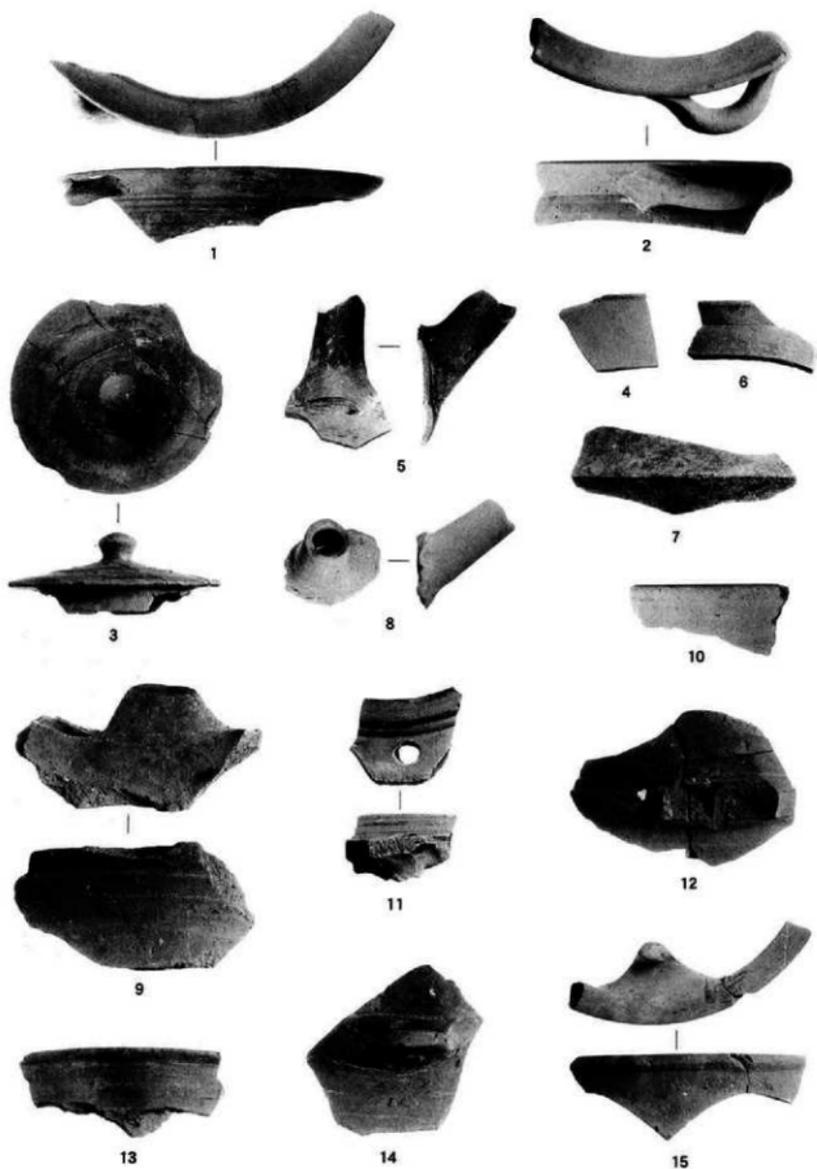
圖版35 沖繩產無軸陶器 (2)



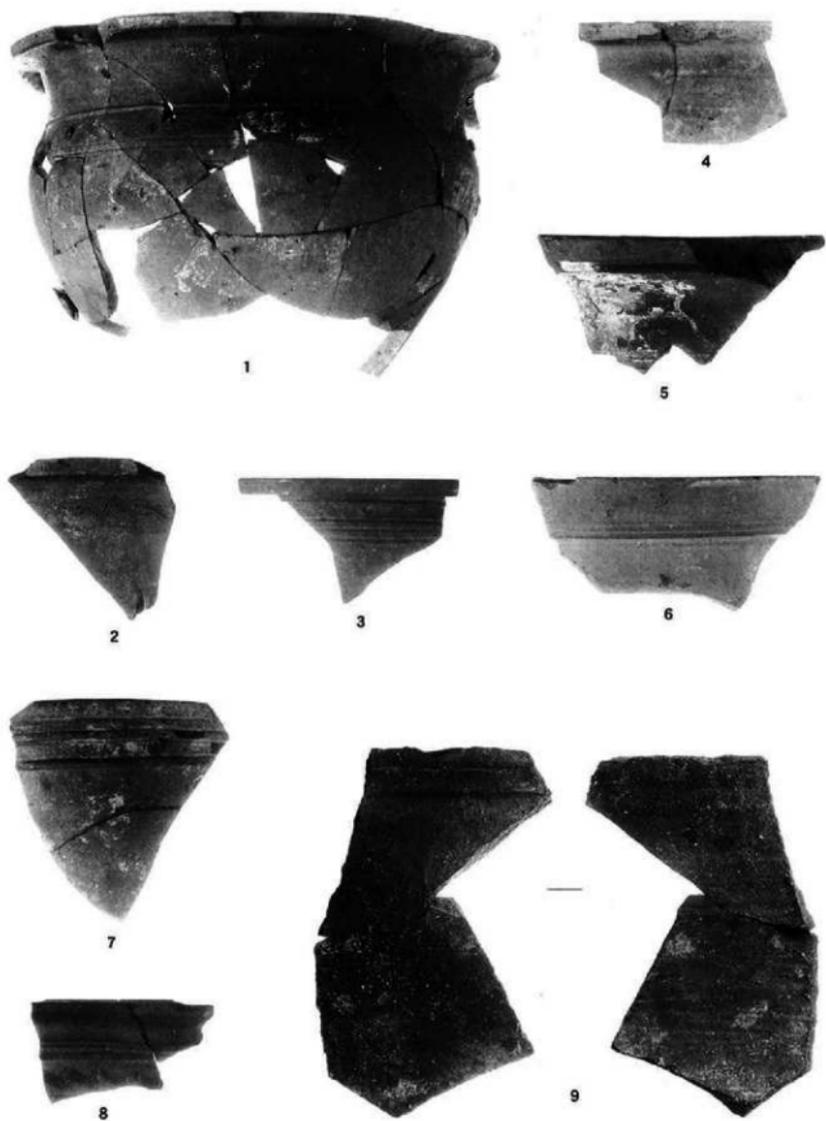
图版34 冲縄産無釉陶器 (1)



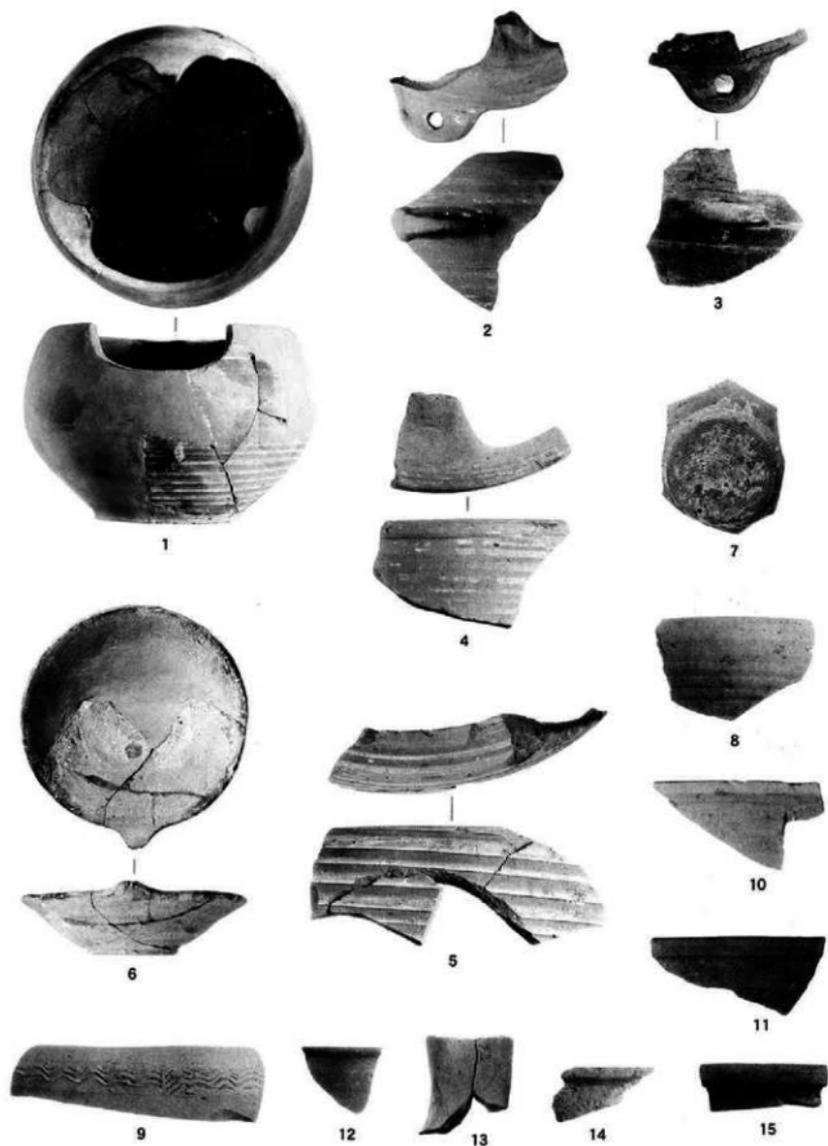
図版33 沖繩産施釉陶器（6）



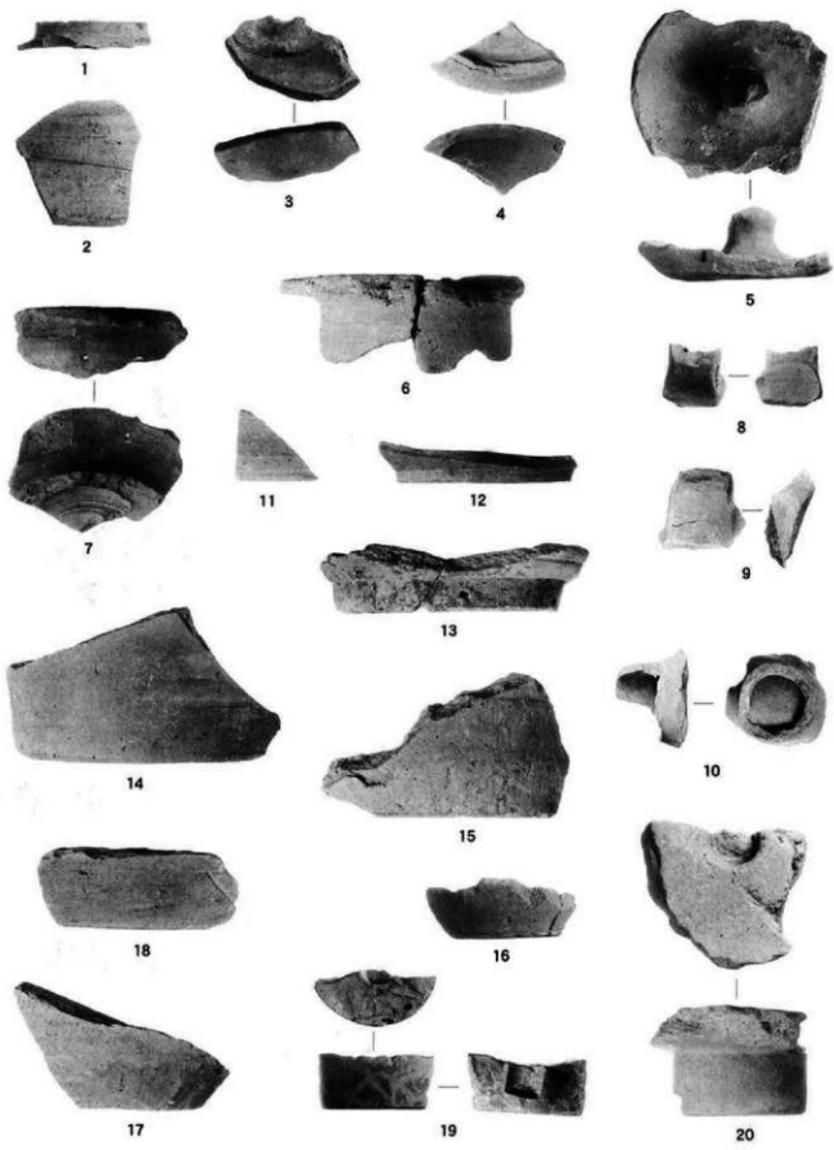
図版38 陶質土器 (1)



図版37 沖縄産無軸陶器 (4)



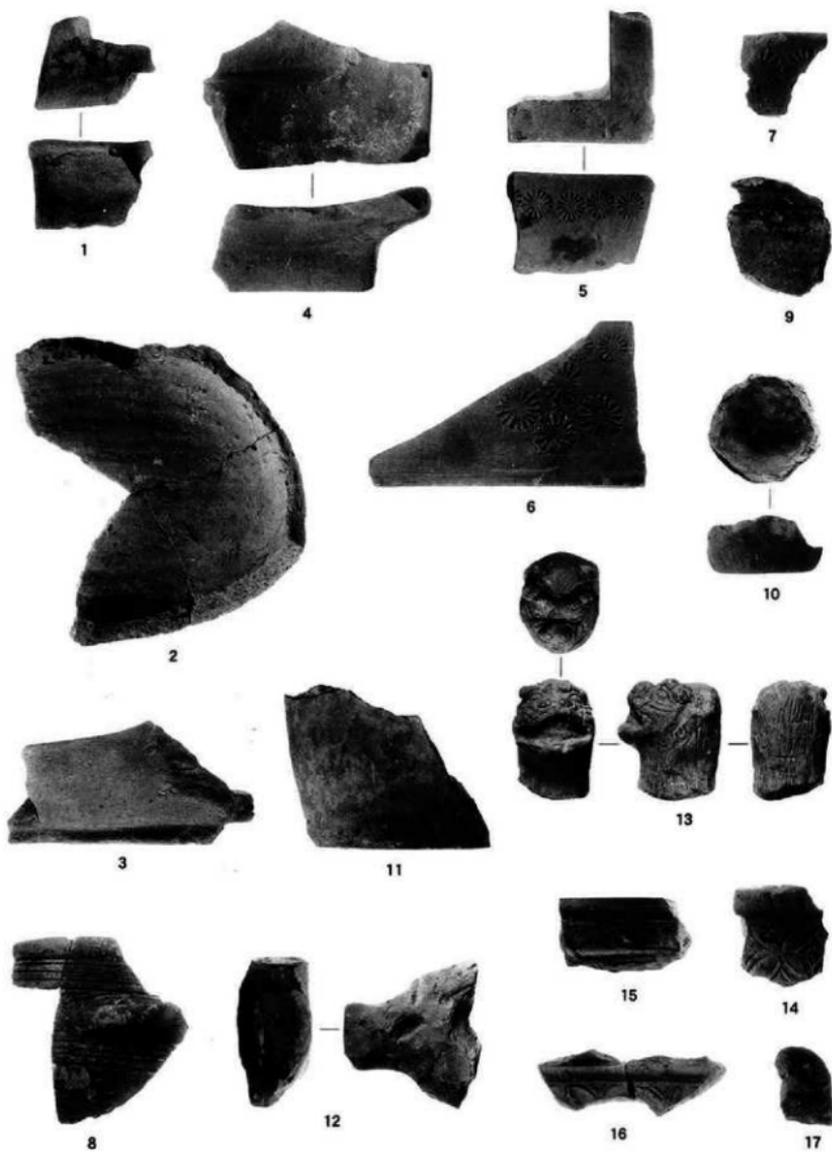
圖版39 陶質土器 (2)



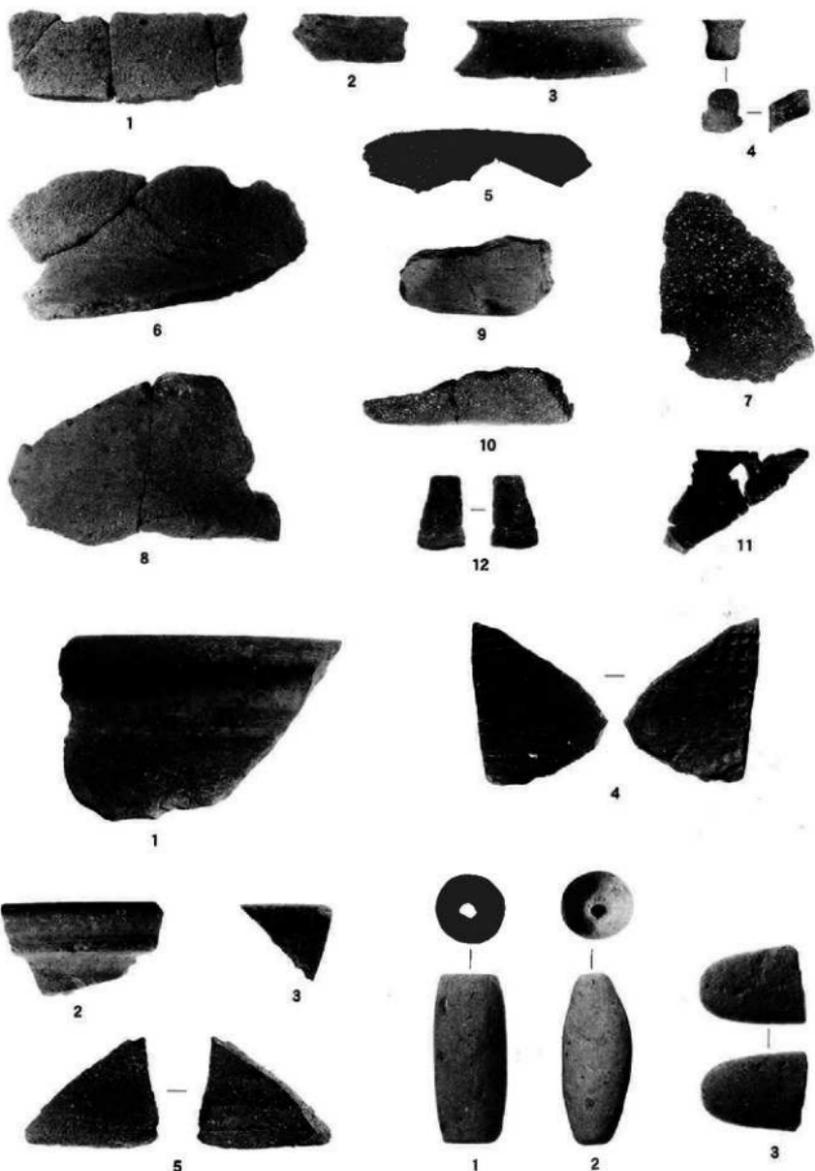
圖版40 陶質土器 (3)



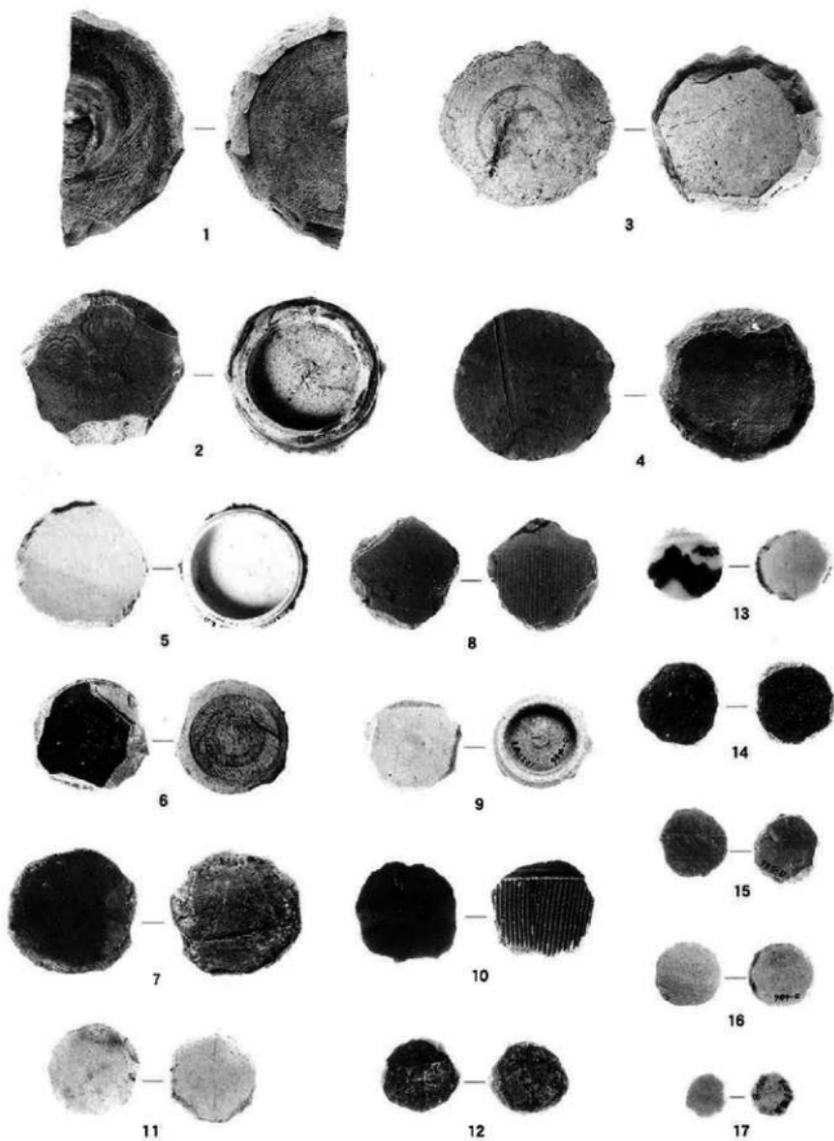
圖版41 瓦質土器 (1)



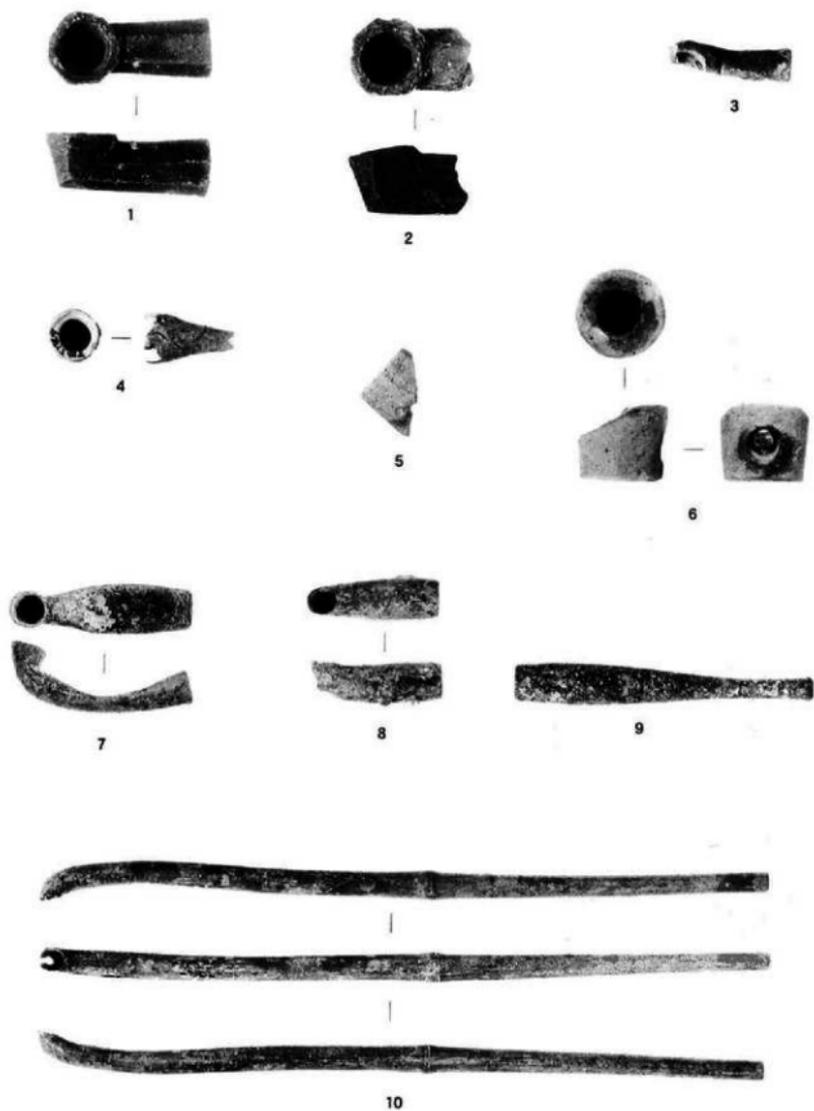
圖版42 瓦質土器 (2)



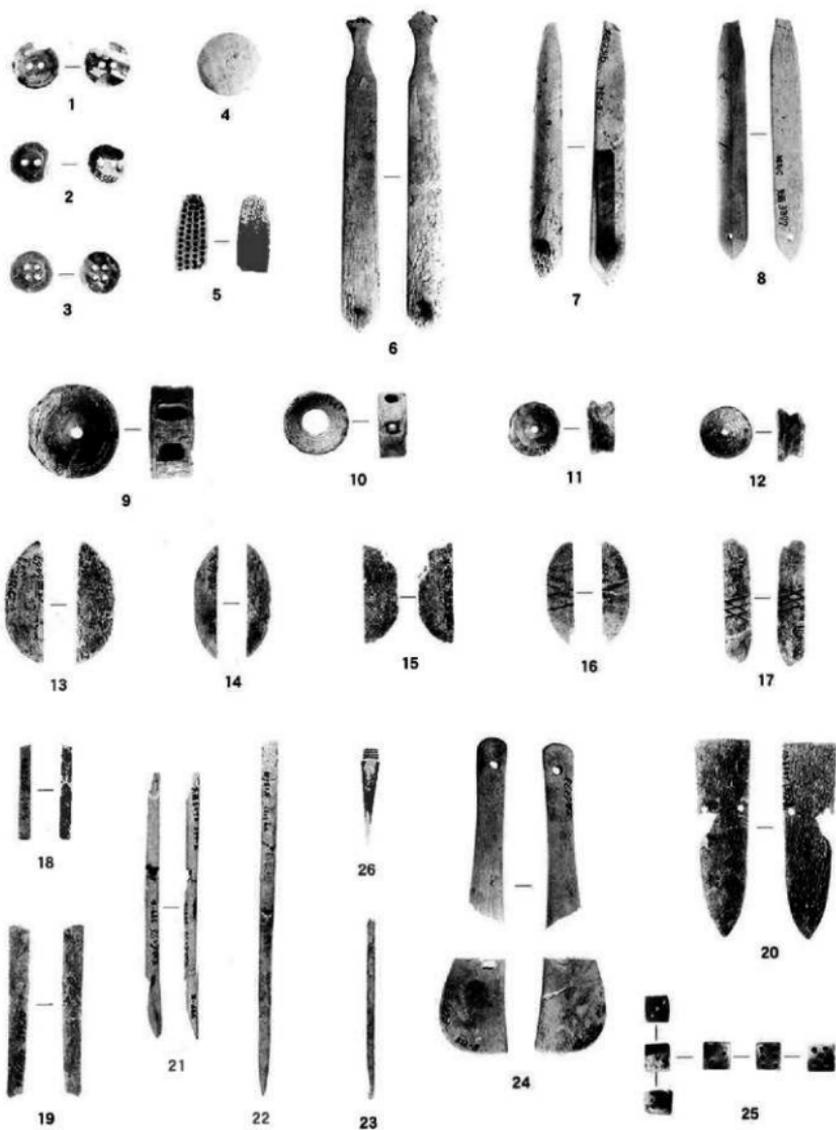
圖版43 土器・類須惠器・土製品



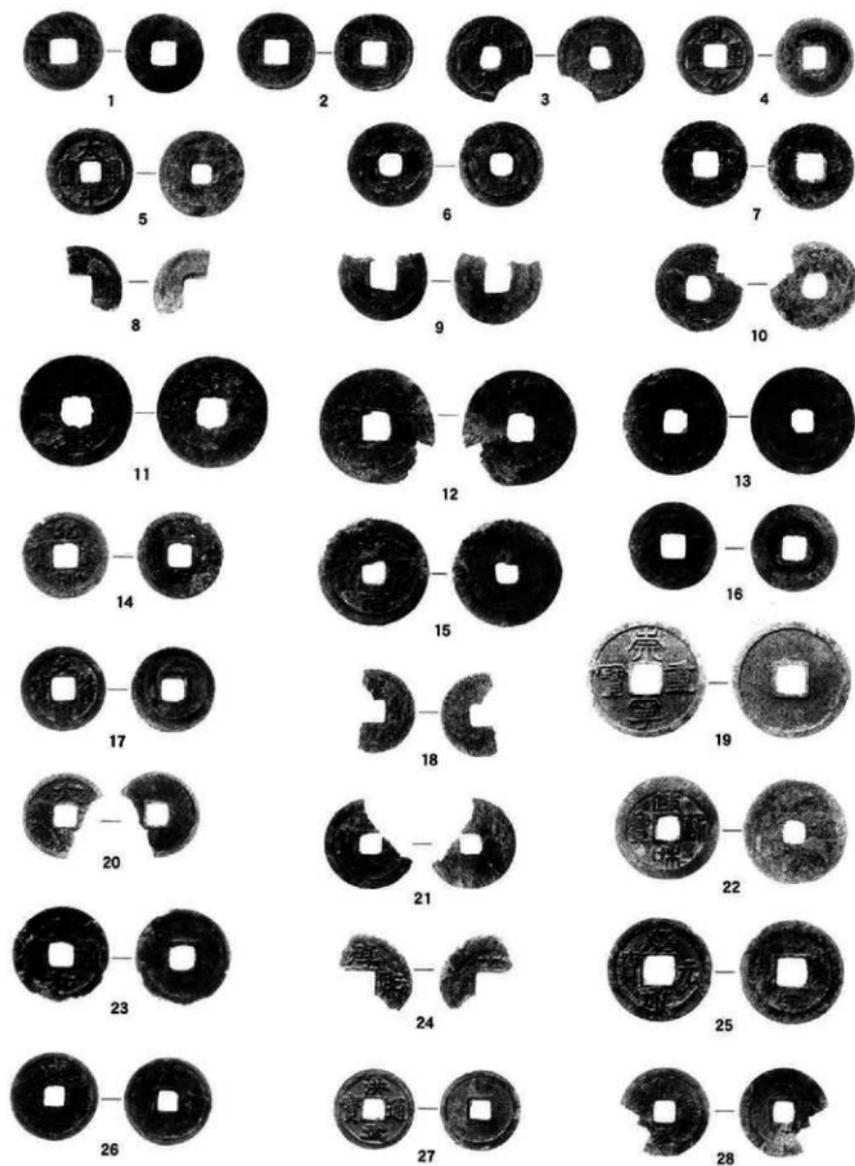
图版44 円盤状製品



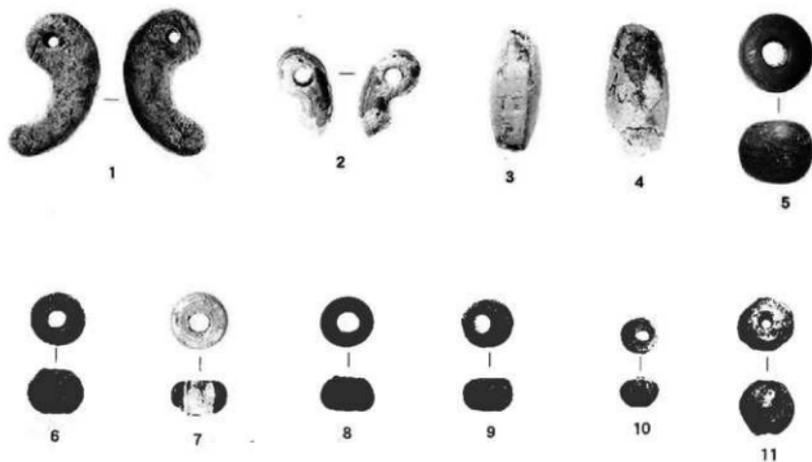
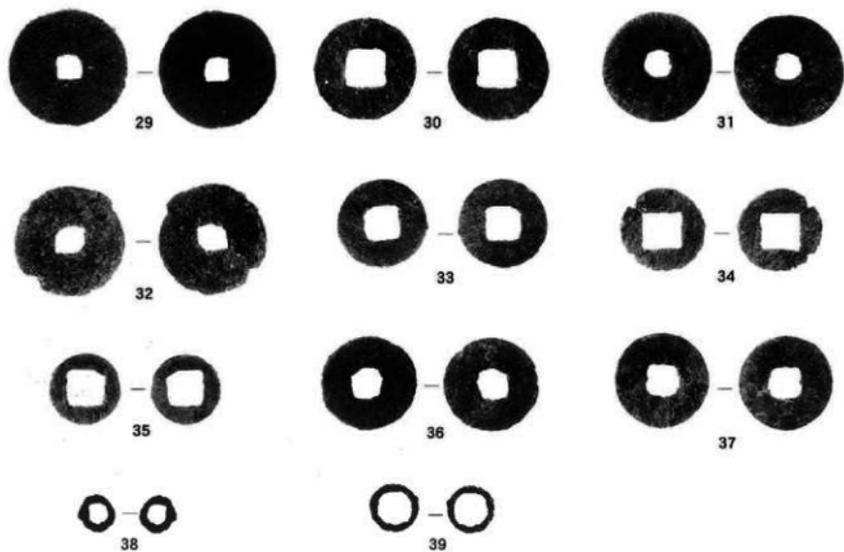
圖版45 煙管



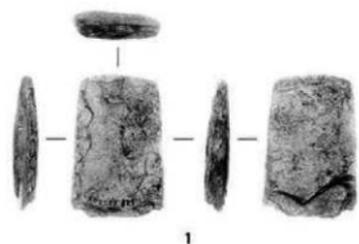
圖版46 貝製品・骨製品



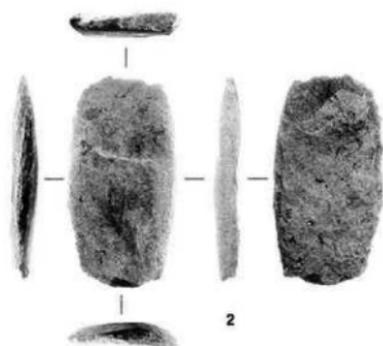
圖版47 錢貨 (有文)



圖版48 上：錢貨（無文）下：玉類



1



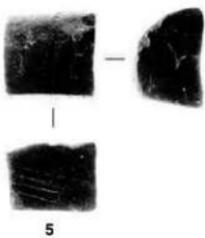
2



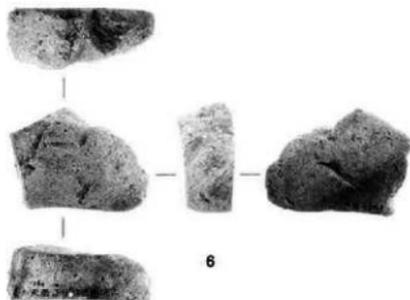
3



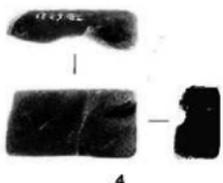
7



5

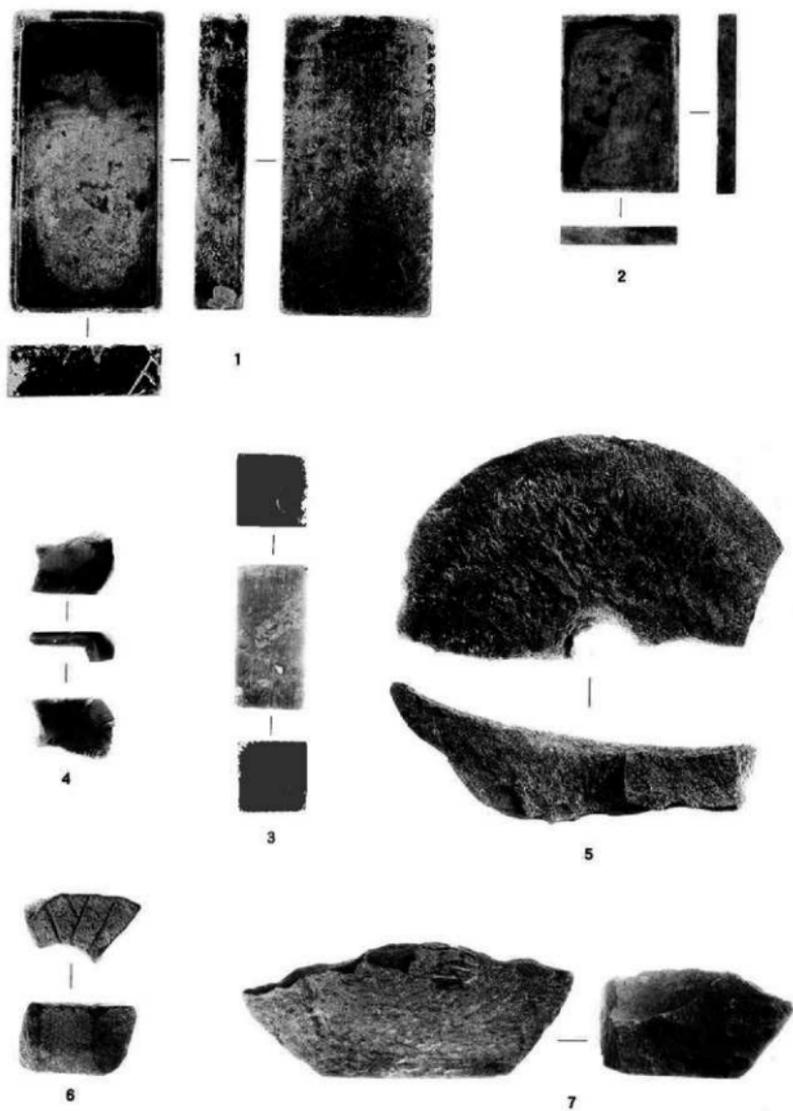


6

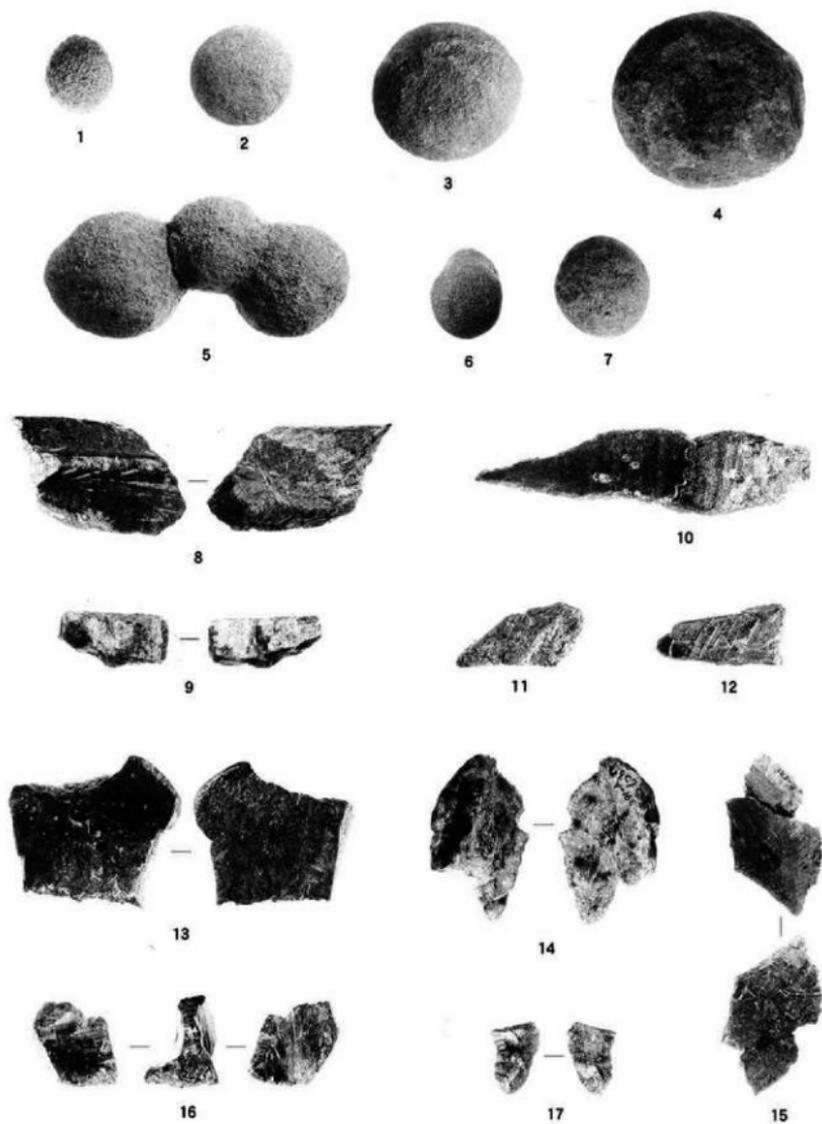


4

圖版50 石器・石製品 (1)



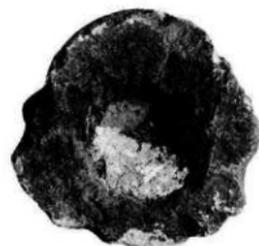
図版51 石器・石製品 (2)



圖版52 石器・石製品 (3) 滑石製品



1



3



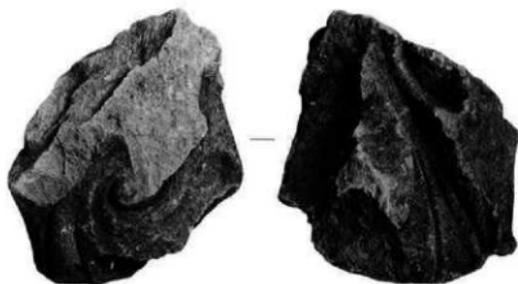
2



圖版53 石像 (1)



4



6



5



圖版54 石像(2)



1



2



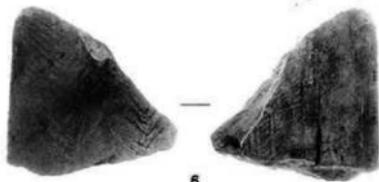
3



4



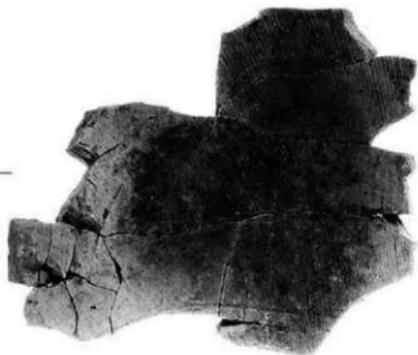
5



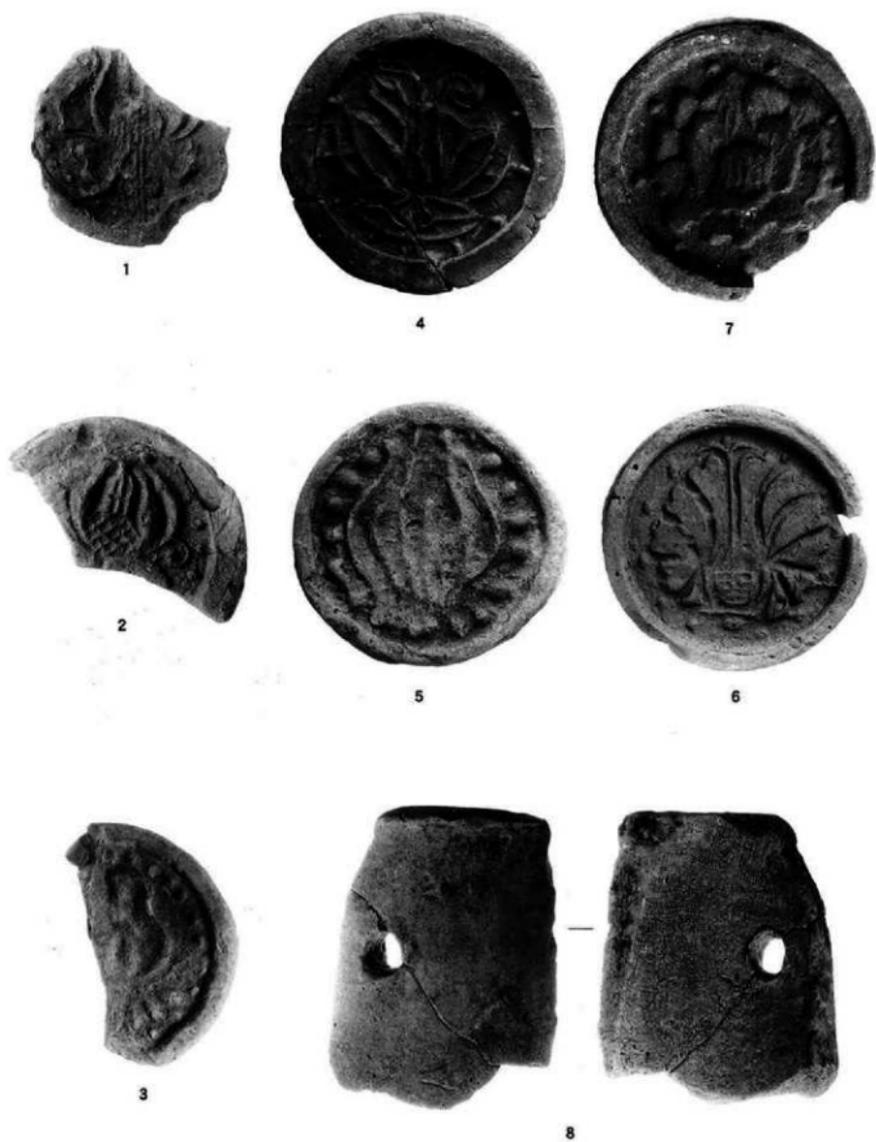
6



7



圖版55 高麗系瓦・大和系瓦



图版56 明朝系瓦



1



4



2



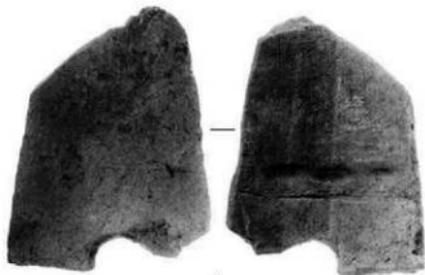
5



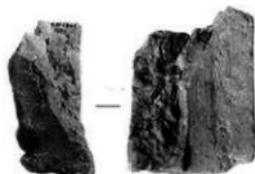
3



7



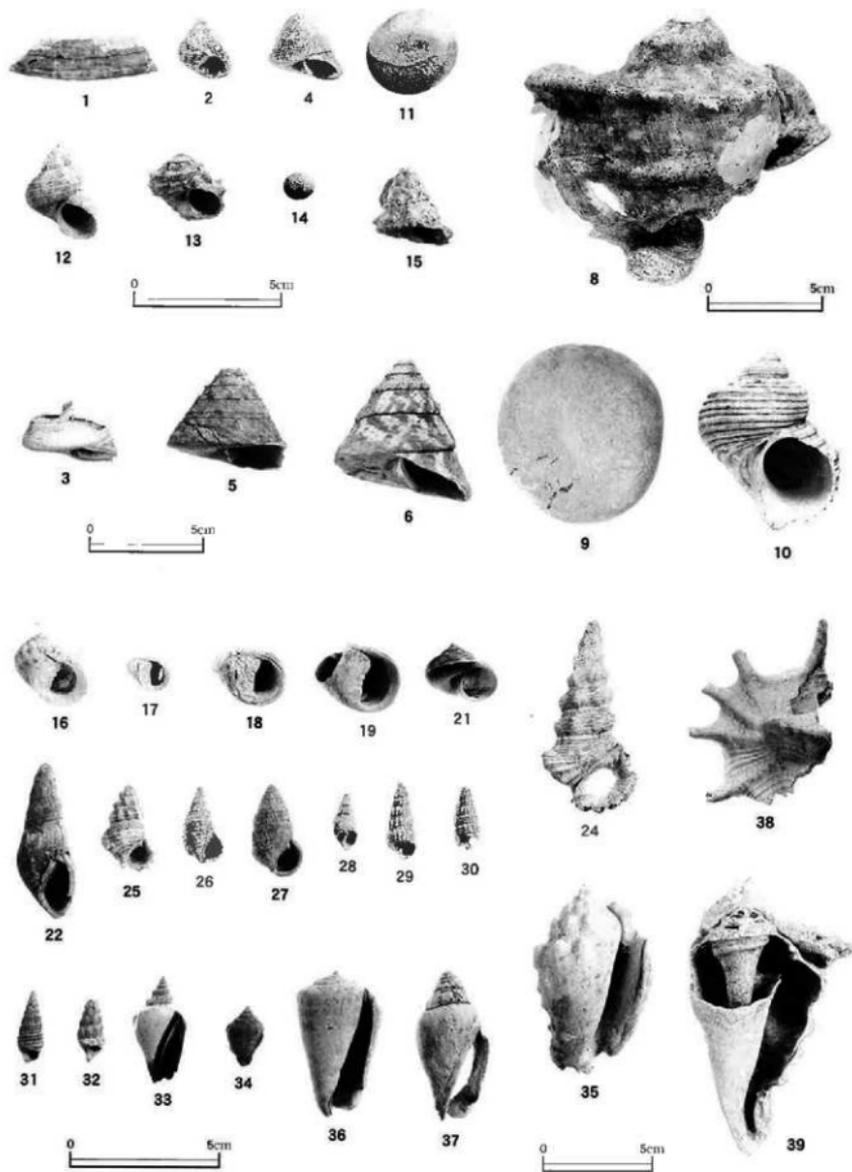
6



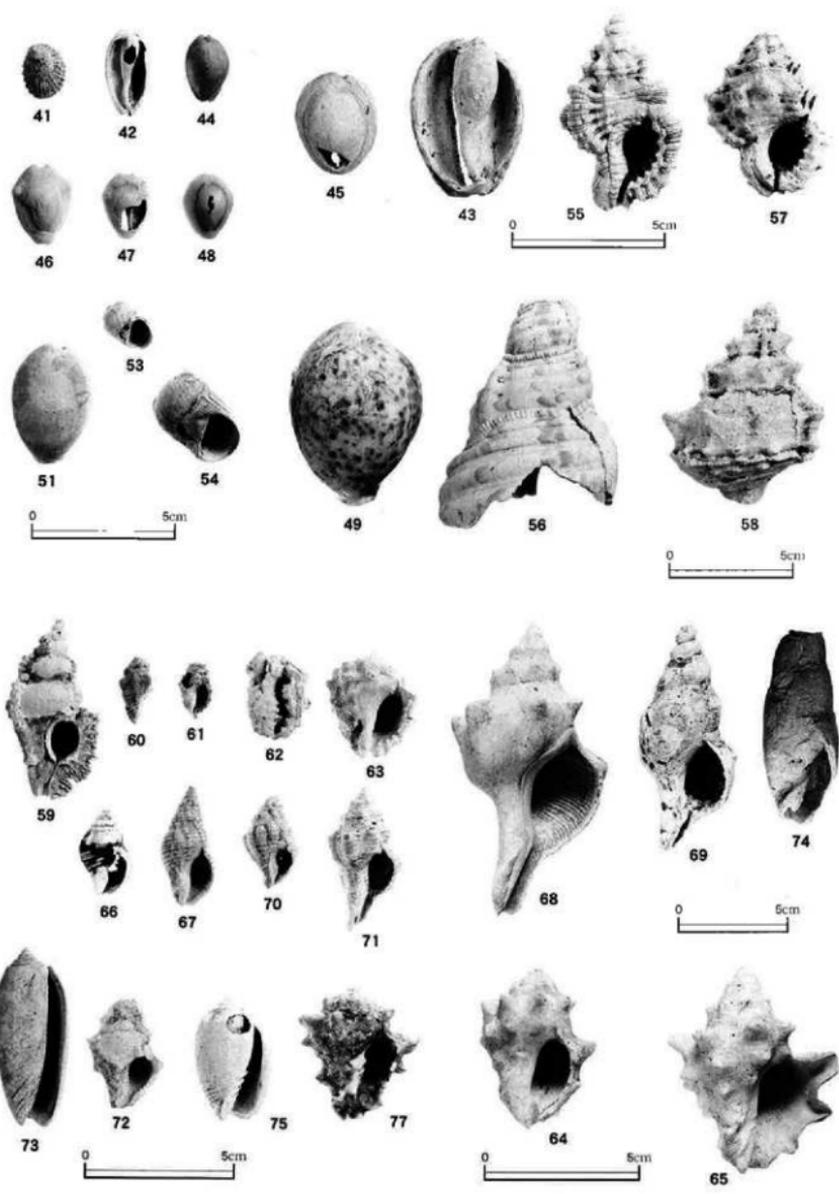
8



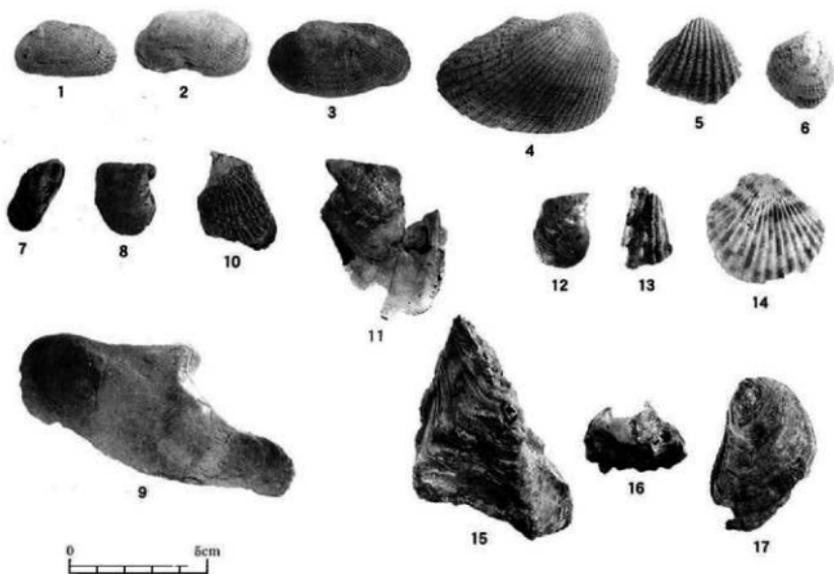
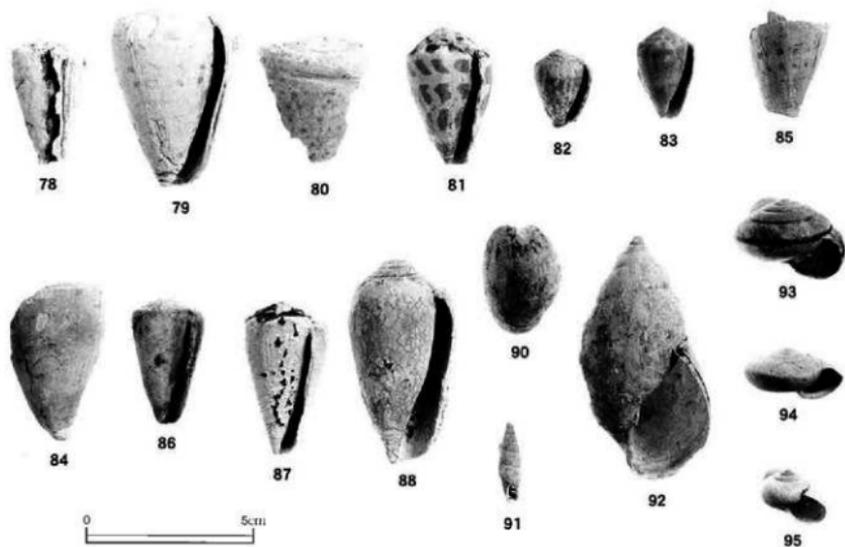
图版57 明朝系瓦·埴



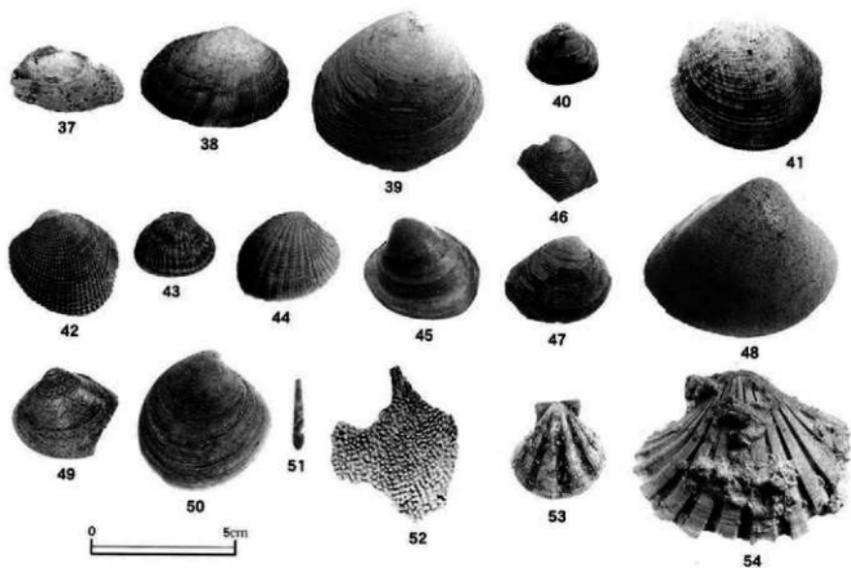
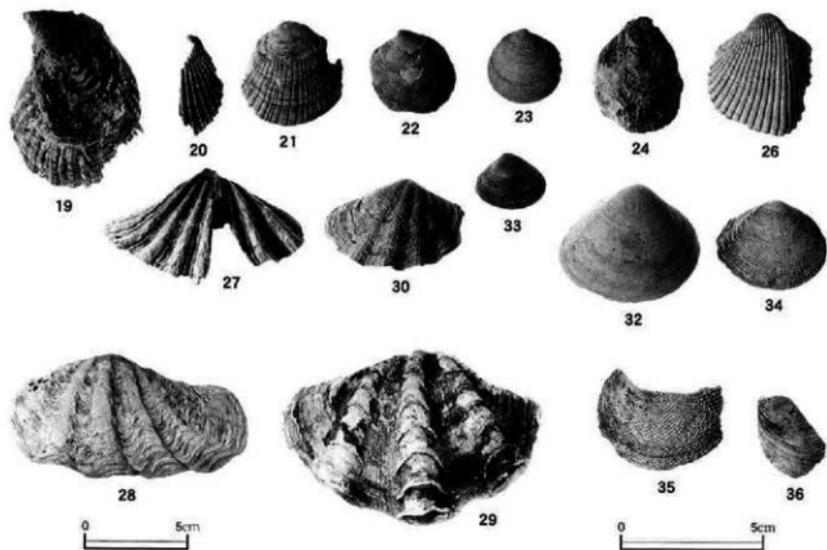
圖版58 貝(1)



図版59 貝(2)



图版60 貝(3)



図版61 貝(4)

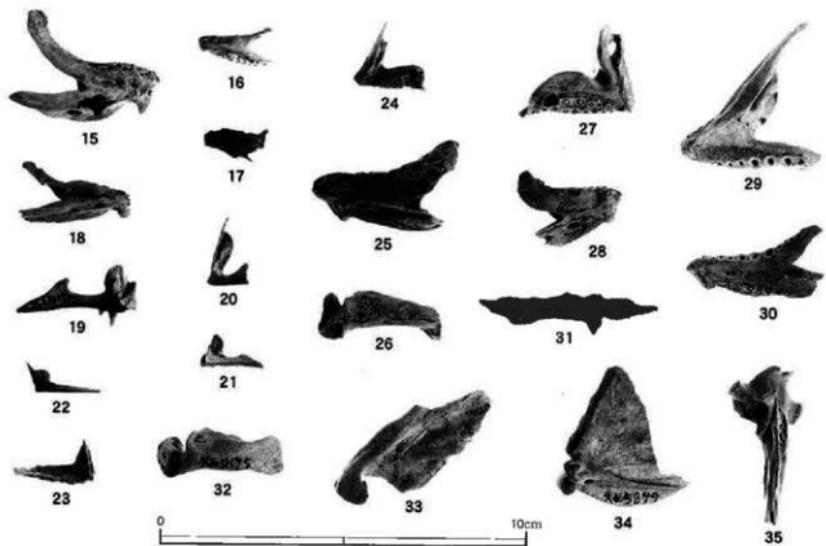
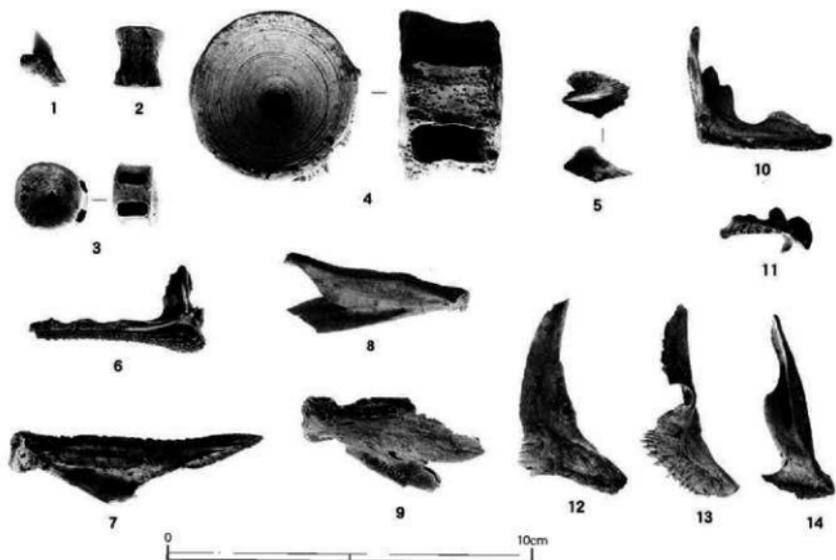
図版62

上

1. イタチザメ 歯
2. メジロザメA 脊椎骨
3. メジロザメB 脊椎骨
4. メジロザメB 脊椎骨
5. エイ 鱗
6. ハタ科Aa 左 前上顎骨
7. ハタ科Aa 右 歯骨
8. ハタ科Ab 左 歯骨
9. ハタ科B 右 歯骨
10. フェダイ科 キマダラヒメダイ 右 前上顎骨
11. フェダイ科 キマダラヒメダイ 右 主上顎骨
12. フェダイ科 キマダラヒメダイ 右 前鰓蓋骨
13. フェダイ科 ヒメフェダイ 右 前鰓蓋骨
14. フェダイ科 イソフエフキ 左 前上顎骨

下

15. フェダイ科A 右 歯骨
16. フェダイ科B 左 歯骨
17. フェダイ科C 左 歯骨
18. フェダイ科D 右 歯骨
19. フェダイ科E 左 前上顎骨
20. フェダイ科F 右 前上顎骨
21. フェダイ科G 右 前上顎骨
22. フェダイ科H 左 前上顎骨
23. フェダイ科I 左 前上顎骨
24. タイ科 クロダイ 右 前上顎骨
25. タイ科 クロダイ 左 歯骨
26. タイ科 クロダイ 左 主上顎骨
27. タイ科 タイワンドイ 左 前上顎骨
28. タイ科 タイワンドイ 右 歯骨
29. フェフキダイ科 ハマフエフキA 右 前上顎骨
30. フェフキダイ科 ハマフエフキA 右 歯骨
31. フェフキダイ科 ハマフエフキA 副楔骨
32. フェフキダイ科 ハマフエフキA 左 主上顎骨
33. フェフキダイ科 ハマフエフキA 左 口蓋
34. フェフキダイ科 ハマフエフキA 右 方骨
35. フェフキダイ科 ハマフエフキA 左 舌顎



图版62 鱼类 (1)

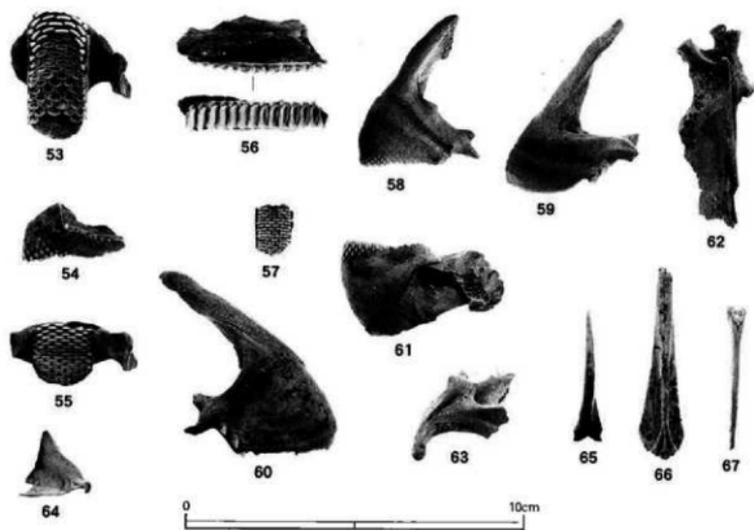
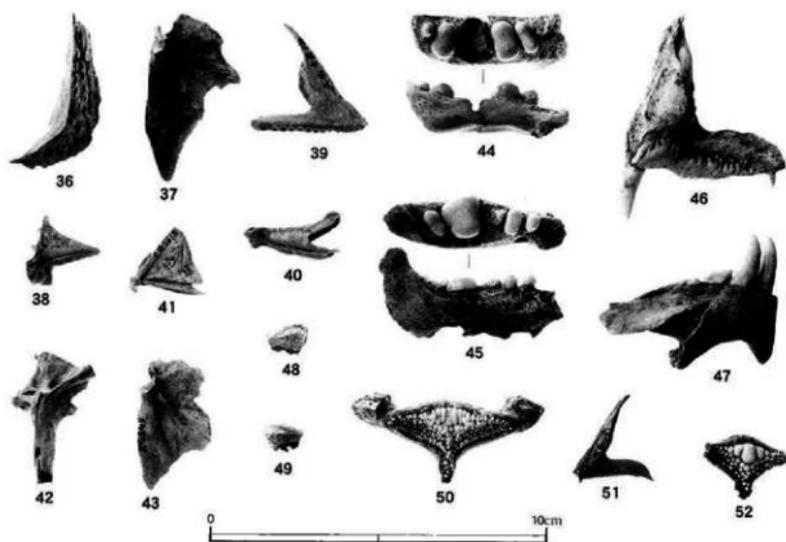
図版63

上

36. フェフキダイ科 ハマフエフキA 左 前鰓蓋骨
37. フェフキダイ科 ハマフエフキA 右 主鰓蓋骨
38. フェフキダイ科 ハマフエフキA 右 角骨
39. フェフキダイ科 ハマフエフキB 左 前上顎骨
40. フェフキダイ科 ハマフエフキB 左 歯骨
41. フェフキダイ科 ハマフエフキB 右 方骨
42. フェフキダイ科 ハマフエフキB 右 舌顎
43. フェフキダイ科 ハマフエフキB 右 主鰓蓋骨
44. フェフキダイ科 ヨコシマクロダイ 右 前上顎骨
45. フェフキダイ科 ヨコシマクロダイ 右 歯骨
46. ベラ科 コブダイ 右 前上顎骨
47. ベラ科 コブダイ 右 歯骨
48. ベラ科 コブダイ 右 上咽頭骨
49. ベラ科 コブダイ 左 上咽頭骨
50. ベラ科 コブダイ 下咽頭骨
51. ベラ科 コブダイ 近似種 右 前上顎骨
52. ベラ科 タキベラ 下咽頭骨

下

53. ブダイ科 ナガブダイ 下咽頭骨
54. ブダイ科 イロブダイ 左 前上顎骨
55. ブダイ科 イロブダイ 下咽頭骨
56. ブダイ科 ナンヨウブダイ 左 上咽頭骨
57. ブダイ科 ナンヨウブダイ 下咽頭骨
58. ブダイ科 左 前上顎骨
59. ブダイ科 左 前上顎骨
60. ブダイ科 右 前上顎骨
61. ブダイ科 左 歯骨
62. ブダイ科 左 舌顎
63. ブダイ類 左 口蓋
64. カサゴ類 右 方骨
65. 種不明 背鰓棘(第1 or 2)
66. 種不明 背鰓血管間棘
67. 種不明 第2背鰓棘



圖版63 魚類 (2)

図版64

上

キジ類

1. 左 大腿骨 近位端～遠位端

カモ類

2. 右 上腕骨 近位部～遠位部

3. 左 尺骨 近位端～遠位部

4. 右 尺骨 遠位端

ウミウ

5. 左 上腕骨 骨体

6. 右 上腕骨 遠位端

7. 右 大腿骨 遠位端

トリ類

8. 左 尺骨 骨体

9. 左 尺骨 近位端～遠位部

10. 左 脛骨 遠位部

下

ニワトリ

1. 左 鳥口骨 近位端

2. 左 肩甲骨 遠位端

3. 左 上腕骨 完存

4. 右 桡骨 近位端

5. 左 桡骨 遠位端

6. 右 尺骨 完存

7. 右 中手骨 完存

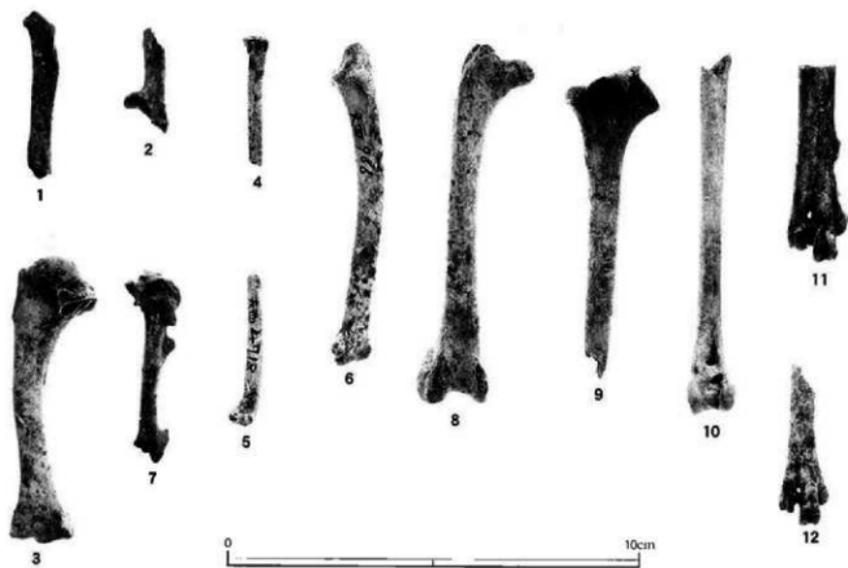
8. 右 大腿骨 完存 キズあり

9. 左 脛骨 近位端

10. 右 脛骨 近位部～遠位端

11. 右 中足骨 ♂ 遠位端

12. 右 中足骨 ♀ 遠位端



図版64 トリ・ニワトリ

図版65

上

イルカ類

1. 腰椎

ジュゴン

⇒ノ. 左 前頭骨 頬骨突起

ヨヅ. 環椎

マヅ. 棘突起

ノヅ. 右 上腕骨 近位骨端はずれ～遠位部

下

イヌ

1. 右 下顎骨 P₂

2. 左 尺骨 近位部～遠位部

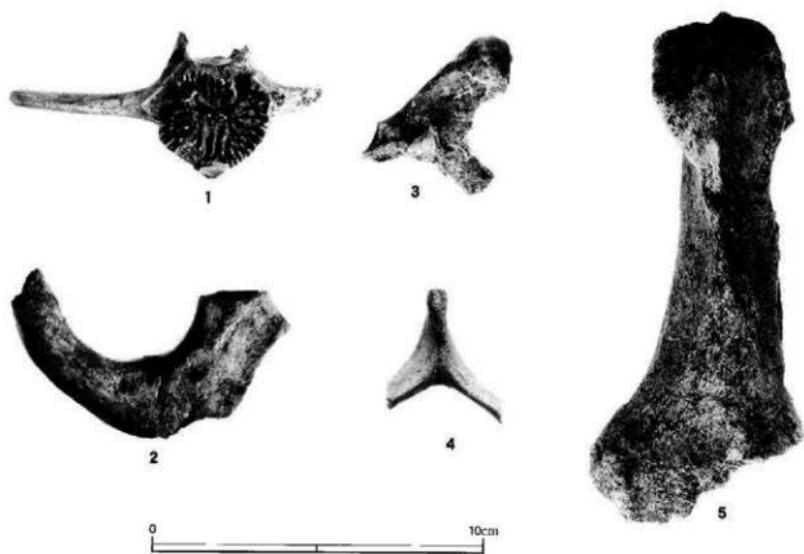
3. 右 脛骨 近位部～遠位部

ネコ

4. 左 寛骨 腸骨部～坐骨

5. 左 大腿骨 定存

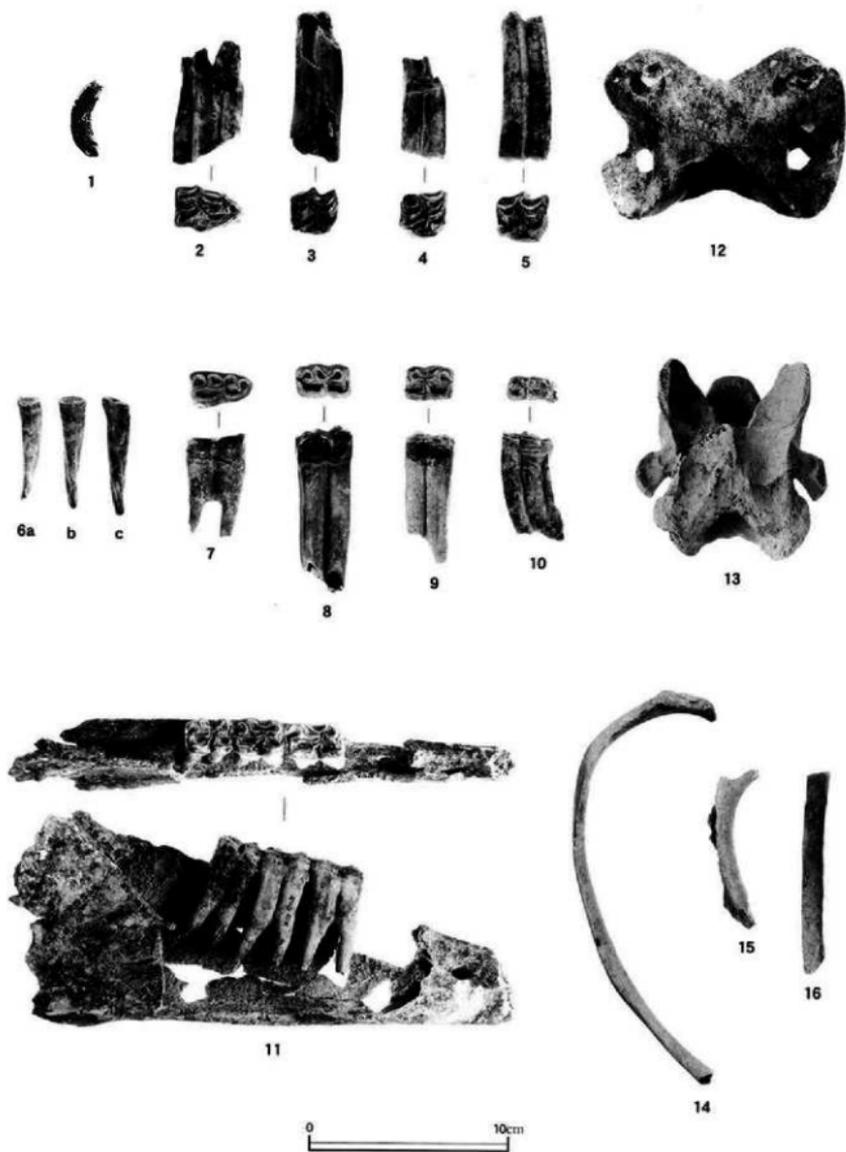
6. 右 踵骨 遠位端



図版65 イルカ類・ジュゴン・イヌ・ネコ

図版66

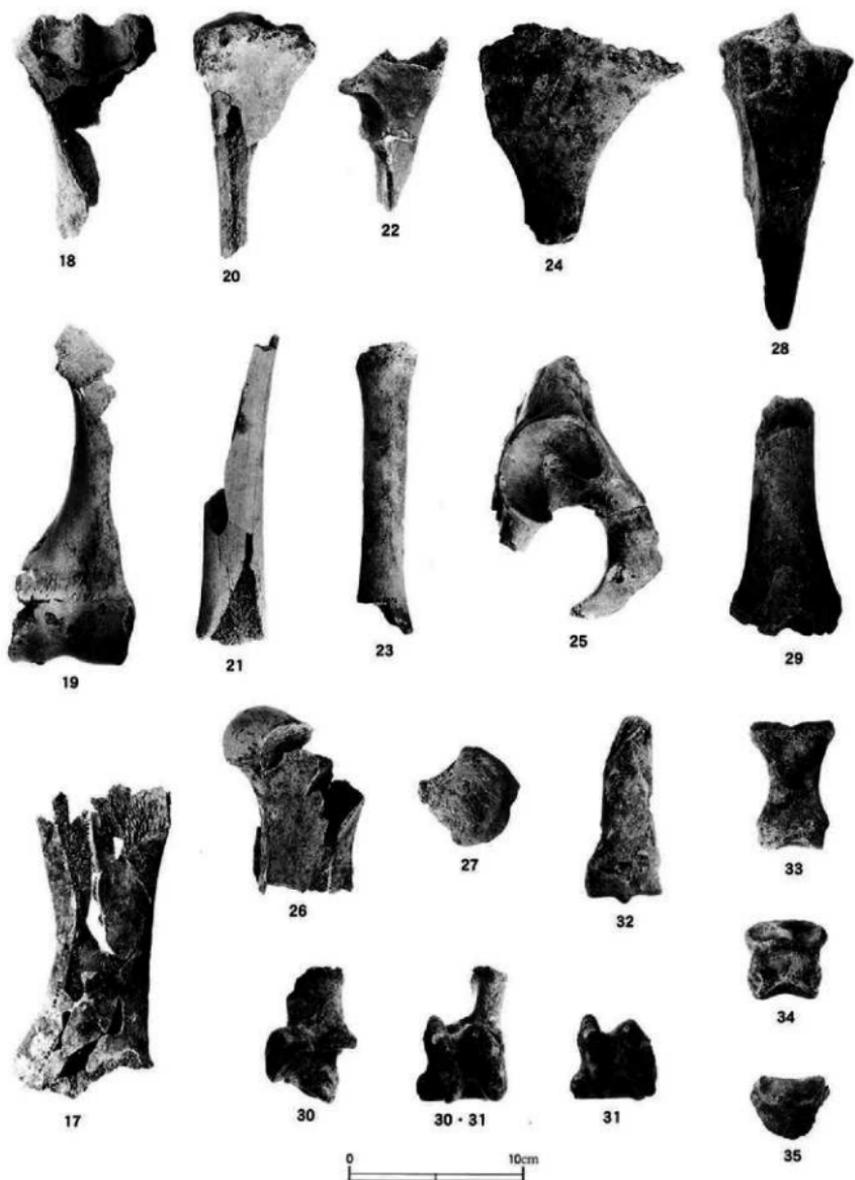
1. 右 上顎骨 犬歯
2. 右 上顎骨 P²
3. 右 上顎骨 P⁴
4. 右 上顎骨 M¹
5. 右 上顎骨 M²
6. 右 下顎骨 a. I₁ b. I₂ c. I₃
7. 右 下顎骨 P₂
8. 右 下顎骨 P₃
9. 左 下顎骨 P₄
10. 左 下顎骨 M₃
11. 右 下顎骨 P₃₄M₁
12. 環椎 キズあり
13. 頸椎 キズあり
14. 右 肋骨
15. 右 肋骨
16. 左 肋骨



図版66 ウマ (1)

図版67

17. 左 肩甲骨 骨体～遠位端
18. 左 上腕骨 近位端
19. 右 上腕骨 骨体～遠位端
20. 左 橈骨 近位端 キズあり
21. 左 橈骨 遠位部 キズあり
22. 左 尺骨 近位部
23. 左 中手骨 近位端～遠位部
24. 左 寛骨 腸骨部
25. 右 寛骨 臼部～恥骨 キズあり
26. 左 大腿骨 近位端 キズあり
27. 右 膝蓋骨
28. 右 脛骨 近位端 キズあり
29. 右 脛骨 遠位端 キズあり
30. 左 踵骨 遠位端 キズあり
- 30・31. 左 踵骨・距骨
31. 左 距骨
32. 右 中足骨 遠位端 キズあり
33. 左 基節骨 完存
34. 左 中節骨 完存
35. 左 末節骨 完存 キズあり



図版67 ウマ (2)

図版68

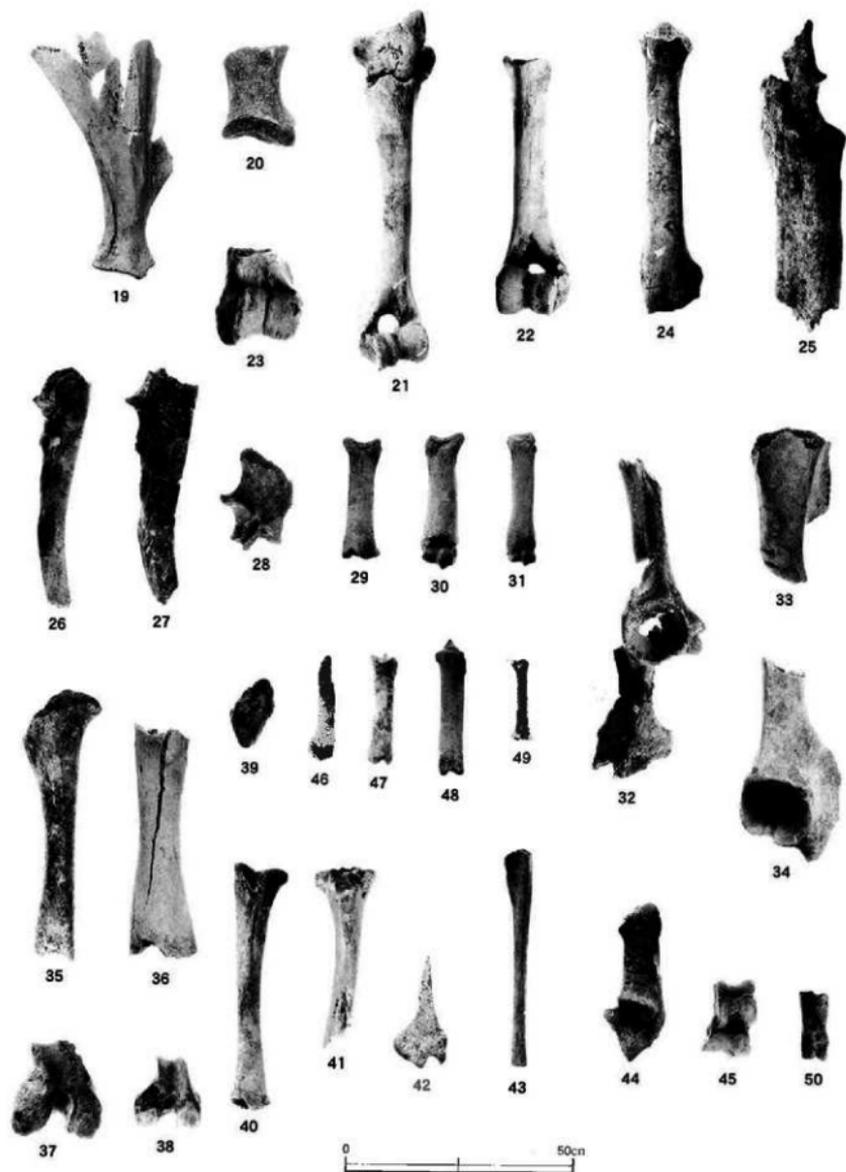
1. 右 前頭骨
2. 左右 頭頂骨 キズあり
3. 右 頭頂骨 キズあり
4. 右 頬骨
5. 右 上顎骨 $dm^{1234} M^{1-2}$
6. 右 上顎骨 $P^{24} M^{23}$
7. 左 上顎骨 $\updownarrow CP^{2,3,4} M^{1-2}$
8. 右 下顎骨 \updownarrow 犬歯
9. 右 下顎骨 ♀ 犬歯
10. 下顎骨 $\left[\begin{array}{l} \text{右 } dm_4 \\ \text{左 } dm_{34} M_1 \end{array} \right.$
11. 右 下顎骨 $d m_{34} M_{1-2}$ キズあり
12. 右 下顎骨 ♀ $C P_{23} M_{1,2-3}$ キズあり
13. 環椎 キズあり
14. 軸椎
15. 頸椎
16. 右 肋骨 キズあり
17. 右 肋骨 キズあり
18. 肋骨 破片



図版68 ブタ (1)

図版69

- | | | |
|-------|------------|--------------------|
| 19. 右 | 肩甲骨 | 骨体～遠位端 |
| 20. 右 | 肩甲骨 | 遠位端 キズあり |
| 21. 右 | 上腕骨 | 完存 キズあり (イノシシの可能性) |
| 22. 左 | 上腕骨 | 近位部～遠位端 キズあり |
| 23. 左 | 上腕骨 | 遠位端 キズあり |
| 24. 左 | 橈骨 | 完存 |
| 25. 右 | 〔 橈骨
尺骨 | 近位端～遠位部 |
| | | 近位部～遠位部 |
| 26. 左 | 尺骨 | 近位部～遠位部 キズあり |
| 27. 左 | 尺骨 | 近位部～遠位部 |
| 28. 左 | 尺骨 | 近位骨端はずれ |
| 29. 右 | 中手骨Ⅲ | 近位端～遠位骨端はずれ |
| 30. 左 | 中手骨Ⅲ | 完存 |
| 31. 右 | 中手骨Ⅳ | 完存 |
| 32. 右 | 寛骨 | 腸骨部～坐骨 |
| 33. 左 | 寛骨 | 腸骨部 キズあり |
| 34. 左 | 寛骨 | 腸骨部～臼部 キズあり |
| 35. 右 | 大腿骨 | 近位骨端はずれ～遠位部 |
| 36. 右 | 大腿骨 | 近位部～遠位部 |
| 37. 右 | 大腿骨 | 骨端のみ |
| 38. 右 | 大腿骨 | 骨端のみ |
| 39. 右 | 膝蓋骨 | |
| 40. 左 | 脛骨 | 両端はずれ キズあり |
| 41. 右 | 脛骨 | 近位端 |
| 42. 右 | 脛骨 | 遠位端 キズあり |
| 43. 右 | 腓骨 | 近位部～骨体 |
| 44. 右 | 踵骨 | 完存 |
| 45. 左 | 距骨 | 完存 |
| 46. 左 | 中足骨Ⅱ | 完存 |
| 47. 左 | 中足骨Ⅲ | 近位端～遠位骨端はずれ |
| 48. 右 | 中足骨Ⅳ | 近位端～遠位骨端はずれ |
| 49. 右 | 中足骨Ⅴ | 近位端～遠位骨端はずれ |
| 50. 右 | 基節骨 | 完存 |



図版69 ブタ (2)

図版70

1. 左 角突起
2. 左 上顎骨 切歯骨
3. 左 下顎骨 M_{1,2,3}
4. 頸椎
5. 胸椎
6. 右 肋骨 キズあり
7. 右 肋骨 キズあり
8. 右 肩甲骨 骨体～遠位部



図版70 ウシ (1)

図版71

9. 左 上腕骨 遠位端 キズあり
10. 左 橈骨 近位端～遠位端
11. 左 橈骨 近位端 キズあり
12. 右 尺骨 近位部～骨体
13. 右 中手骨 近位端 キズあり
14. 右 中手骨 遠位部 キズあり
15. 左 寛骨 腸骨部
16. 右 大腿骨 近位端
17. 右 大腿骨 遠位端
18. 右 脛骨 近位端～骨体
19. 左 脛骨 骨体～遠位端 キズあり
20. 右 踵骨 キズあり
21. 左 距骨
22. 右 第4中心足根骨 完存
23. 右 中足骨 近位端～遠位部
24. 左 基節骨 完存 キズあり
25. 右 中節骨 完存
26. 左 末節骨



図版71 ウシ (2)

図版72

シカ

1. 左 角 キズあり
2. 左 大腿骨 近位端
3. 左 大腿骨 遠位端 キズあり
4. 左 脛骨 遠位端 キズあり

ヤギ

5. 右 上顎骨 M¹
6. 右 上顎骨 M²
7. 右 下顎骨 M³
8. 右 下顎骨 M³
9. 右 上腕骨 遠位部
10. 右 上腕骨 遠位部
11. 右 橈骨 近位端～遠位部
12. 右 橈骨 近位部 キズあり
13. 左 尺骨 近位部
14. 右 寛骨 腸骨部
15. 右 寛骨 坐骨
16. 左 脛骨 骨体～遠位端

不明

17. 下顎骨 キズあり



図版72 シカ・ヤギ・不明

図版73

イヌ

1. 右 脛骨 遠位端

ヤギ

2. 左 寛骨 腸骨部

3. 左 脛骨 近位部

ウシ

4. 右 肋骨

5. 左 橈骨 遠位端

6. 左 橈骨 近位端

尺骨 近位部～骨体

7. 右 中手骨 遠位端

8. 左 大腿骨 遠位部

9. 右 中足骨 近位端

10. 右 橈骨 骨体

ウマ

11. 右 中手骨 近位部

12. 左 寛骨 腸骨部～臼部

13. 左 大腿骨 遠位端

14. 左 脛骨 近位部

15. 右 中足骨 近位端



图版73 切痕

第93表 ナンバーリング：出土地対照一覧

番号	出土地	番号	出土地	番号	出土地
406	K-17-12	595	K-17-11	726	K-17-10
407	K-17-12-1	596	K-17-10	727	K-17-9
408	K-17-12-2	597	K-17-10	728	K-17-8
409	K-17-12-3	598	K-17-10	729	K-17-7
410	K-17-12-4	599	K-17-10	730	K-17-6
411	K-17-12-5	600	K-17-10	731	K-17-5
412	K-17-12-6	601	K-17-10	732	K-17-4
413	K-17-12-7	602	K-17-10	733	K-17-3
414	K-17-12-8	603	K-17-10	734	K-17-2
415	K-17-12-9	604	K-17-10	735	K-17-1
416	K-17-12-10	605	K-17-10	736	K-17-0
417	K-17-12-11	606	K-17-10	737	K-17-0
418	K-17-12-12	607	K-17-10	738	K-17-0
419	K-17-12-13	608	K-17-10	739	K-17-0
420	K-17-12-14	609	K-17-10	740	K-17-0
421	K-17-12-15	610	K-17-10	741	K-17-0
422	K-17-12-16	611	K-17-10	742	K-17-0
423	K-17-12-17	612	K-17-10	743	K-17-0
424	K-17-12-18	613	K-17-10	744	K-17-0
425	K-17-12-19	614	K-17-10	745	K-17-0
426	K-17-12-20	615	K-17-10	746	K-17-0
427	K-17-12-21	616	K-17-10	747	K-17-0
428	K-17-12-22	617	K-17-10	748	K-17-0
429	K-17-12-23	618	K-17-10	749	K-17-0
430	K-17-12-24	619	K-17-10	750	K-17-0
431	K-17-12-25	620	K-17-10	751	K-17-0
432	K-17-12-26	621	K-17-10	752	K-17-0
433	K-17-12-27	622	K-17-10	753	K-17-0
434	K-17-12-28	623	K-17-10	754	K-17-0
435	K-17-12-29	624	K-17-10	755	K-17-0
436	K-17-12-30	625	K-17-10	756	K-17-0
437	K-17-12-31	626	K-17-10	757	K-17-0
438	K-17-12-32	627	K-17-10	758	K-17-0
439	K-17-12-33	628	K-17-10	759	K-17-0
440	K-17-12-34	629	K-17-10	760	K-17-0
441	K-17-12-35	630	K-17-10	761	K-17-0
442	K-17-12-36	631	K-17-10	762	K-17-0
443	K-17-12-37	632	K-17-10	763	K-17-0
444	K-17-12-38	633	K-17-10	764	K-17-0
445	K-17-12-39	634	K-17-10	765	K-17-0
446	K-17-12-40	635	K-17-10	766	K-17-0
447	K-17-12-41	636	K-17-10	767	K-17-0
448	K-17-12-42	637	K-17-10	768	K-17-0
449	K-17-12-43	638	K-17-10	769	K-17-0
450	K-17-12-44	639	K-17-10	770	K-17-0
451	K-17-12-45	640	K-17-10	771	K-17-0
452	K-17-12-46	641	K-17-10	772	K-17-0
453	K-17-12-47	642	K-17-10	773	K-17-0
454	K-17-12-48	643	K-17-10	774	K-17-0
455	K-17-12-49	644	K-17-10	775	K-17-0
456	K-17-12-50	645	K-17-10	776	K-17-0
457	K-17-12-51	646	K-17-10	777	K-17-0
458	K-17-12-52	647	K-17-10	778	K-17-0
459	K-17-12-53	648	K-17-10	779	K-17-0
460	K-17-12-54	649	K-17-10	780	K-17-0
461	K-17-12-55	650	K-17-10	781	K-17-0
462	K-17-12-56	651	K-17-10	782	K-17-0
463	K-17-12-57	652	K-17-10	783	K-17-0
464	K-17-12-58	653	K-17-10	784	K-17-0
465	K-17-12-59	654	K-17-10	785	K-17-0
466	K-17-12-60	655	K-17-10	786	K-17-0
467	K-17-12-61	656	K-17-10	787	K-17-0
468	K-17-12-62	657	K-17-10	788	K-17-0
469	K-17-12-63	658	K-17-10	789	K-17-0
470	K-17-12-64	659	K-17-10	790	K-17-0
471	K-17-12-65	660	K-17-10	791	K-17-0
472	K-17-12-66	661	K-17-10	792	K-17-0
473	K-17-12-67	662	K-17-10	793	K-17-0
474	K-17-12-68	663	K-17-10	794	K-17-0
475	K-17-12-69	664	K-17-10	795	K-17-0
476	K-17-12-70	665	K-17-10	796	K-17-0
477	K-17-12-71	666	K-17-10	797	K-17-0
478	K-17-12-72	667	K-17-10	798	K-17-0
479	K-17-12-73	668	K-17-10	799	K-17-0
480	K-17-12-74	669	K-17-10	800	K-17-0
481	K-17-12-75	670	K-17-10	801	K-17-0
482	K-17-12-76	671	K-17-10	802	K-17-0
483	K-17-12-77	672	K-17-10	803	K-17-0
484	K-17-12-78	673	K-17-10	804	K-17-0
485	K-17-12-79	674	K-17-10	805	K-17-0
486	K-17-12-80	675	K-17-10	806	K-17-0
487	K-17-12-81	676	K-17-10	807	K-17-0
488	K-17-12-82	677	K-17-10	808	K-17-0
489	K-17-12-83	678	K-17-10	809	K-17-0
490	K-17-12-84	679	K-17-10	810	K-17-0
491	K-17-12-85	680	K-17-10	811	K-17-0
492	K-17-12-86	681	K-17-10	812	K-17-0
493	K-17-12-87	682	K-17-10	813	K-17-0
494	K-17-12-88	683	K-17-10	814	K-17-0
495	K-17-12-89	684	K-17-10	815	K-17-0
496	K-17-12-90	685	K-17-10	816	K-17-0
497	K-17-12-91	686	K-17-10	817	K-17-0
498	K-17-12-92	687	K-17-10	818	K-17-0
499	K-17-12-93	688	K-17-10	819	K-17-0
500	K-17-12-94	689	K-17-10	820	K-17-0
501	K-17-12-95	690	K-17-10	821	K-17-0
502	K-17-12-96	691	K-17-10	822	K-17-0
503	K-17-12-97	692	K-17-10	823	K-17-0
504	K-17-12-98	693	K-17-10	824	K-17-0
505	K-17-12-99	694	K-17-10	825	K-17-0
506	K-17-12-100	695	K-17-10	826	K-17-0
507	K-17-12-101	696	K-17-10	827	K-17-0
508	K-17-12-102	697	K-17-10	828	K-17-0
509	K-17-12-103	698	K-17-10	829	K-17-0
510	K-17-12-104	699	K-17-10	830	K-17-0
511	K-17-12-105	700	K-17-10	831	K-17-0
512	K-17-12-106	701	K-17-10	832	K-17-0
513	K-17-12-107	702	K-17-10	833	K-17-0
514	K-17-12-108	703	K-17-10	834	K-17-0
515	K-17-12-109	704	K-17-10	835	K-17-0
516	K-17-12-110	705	K-17-10	836	K-17-0
517	K-17-12-111	706	K-17-10	837	K-17-0
518	K-17-12-112	707	K-17-10	838	K-17-0
519	K-17-12-113	708	K-17-10	839	K-17-0
520	K-17-12-114	709	K-17-10	840	K-17-0
521	K-17-12-115	710	K-17-10	841	K-17-0
522	K-17-12-116	711	K-17-10	842	K-17-0
523	K-17-12-117	712	K-17-10	843	K-17-0
524	K-17-12-118	713	K-17-10	844	K-17-0
525	K-17-12-119	714	K-17-10	845	K-17-0
526	K-17-12-120	715	K-17-10	846	K-17-0
527	K-17-12-121	716	K-17-10	847	K-17-0
528	K-17-12-122	717	K-17-10	848	K-17-0
529	K-17-12-123	718	K-17-10	849	K-17-0
530	K-17-12-124	719	K-17-10	850	K-17-0
531	K-17-12-125	720	K-17-10	851	K-17-0
532	K-17-12-126	721	K-17-10	852	K-17-0
533	K-17-12-127	722	K-17-10	853	K-17-0
534	K-17-12-128	723	K-17-10	854	K-17-0
535	K-17-12-129	724	K-17-10	855	K-17-0
536	K-17-12-130	725	K-17-10	856	K-17-0
537	K-17-12-131	726	K-17-10	857	K-17-0
538	K-17-12-132	727	K-17-10	858	K-17-0
539	K-17-12-133	728	K-17-10	859	K-17-0
540	K-17-12-134	729	K-17-10	860	K-17-0
541	K-17-12-135	730	K-17-10	861	K-17-0
542	K-17-12-136	731	K-17-10	862	K-17-0
543	K-17-12-137	732	K-17-10	863	K-17-0
544	K-17-12-138	733	K-17-10	864	K-17-0
545	K-17-12-139	734	K-17-10	865	K-17-0
546	K-17-12-140	735	K-17-10	866	K-17-0
547	K-17-12-141	736	K-17-10	867	K-17-0
548	K-17-12-142	737	K-17-10	868	K-17-0
549	K-17-12-143	738	K-17-10	869	K-17-0
550	K-17-12-144	739	K-17-10	870	K-17-0
551	K-17-12-145	740	K-17-10	871	K-17-0
552	K-17-12-146	741	K-17-10	872	K-17-0
553	K-17-12-147	742	K-17-10	873	K-17-0
554	K-17-12-148	743	K-17-10	874	K-17-0
555	K-17-12-149	744	K-17-10	875	K-17-0
556	K-17-12-150	745	K-17-10	876	K-17-0
557	K-17-12-151	746	K-17-10	877	K-17-0
558	K-17-12-152	747	K-17-10	878	K-17-0
559	K-17-12-153	748	K-17-10	879	K-17-0
560	K-17-12-154	749	K-17-10	880	K-17-0
561	K-17-12-155	750	K-17-10	881	K-17-0
562	K-17-12-156	751	K-17-10	882	K-17-0
563	K-17-12-157	752	K-17-10	883	K-17-0
564	K-17-12-158	753	K-17-10	884	K-17-0
565	K-17-12-159	754	K-17-10	885	K-17-0
566	K-17-12-160	755	K-17-10	886	K-17-0
567	K-17-12-161	756	K-17-10	887	K-17-0
568	K-17-12-162	757	K-17-10	888	K-17-0
569	K-17-12-163	758	K-17-10	889	K-17-0
570	K-17-12-164	759	K-17-10	890	K-17-0
571	K-17-12-165	760	K-17-10	891	K-17-0
572	K-17-12-166	761	K-17-10	892	K-17-0
573	K-17-12-167	762	K-17-10	893	K-17-0
574	K-17-12-168	763	K-17-10	894	K-17-0
575	K-17-12-169	764	K-17-10	895	K-17-0
576	K-17-12-170	765	K-17-10	896	K-17-0
577	K-17-12-171	766	K-17-10	897	K-17-0
578	K-17-12-172	767	K-17-10	898	K-17-0
579	K-17-12-173	768	K-17-10	899	K-17-0
580	K-17-12-174	769	K-17-10	900	K-17-0
581	K-17-12-175	770	K-17-10	901	K-17-0
582	K-17-12-176	771	K-17-10	902	K-17-0
583	K-17-12-177	772	K-17-10	903	K-17-0
584	K-17-12-178	773	K-17-10	904	K-17-0
585	K-17-12-179	774	K-17-10	905	K-17-0
586	K-17-12-180	775	K-17-10	906	K-17-0
587	K-17-12-181	776	K-17-10	907	K-17-0
588	K-17-12-182	777	K-17-10	908	K-17-0
589	K-17-12-183	778	K-17-10	909	K-17-0
590	K-17-12-184	779	K-17-10	910	K-17-0
591	K-17-12-185	780	K-17-10	911	K-17-0
592	K-17-12-186	781	K-17-10	912	K-17-0
593	K-17-12-187	782	K-17-10	913	K-17-0
594	K-17-12-188	783	K-17-10	914	K-17-0
595	K-17-12-189	784	K-17-10	915	K-17-0

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集

天 界 寺 跡 (II)

—首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—

発行年 平成14年(2002年)3月
発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター
編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098 (835) 8751～8752
印 刷 グローバル企画印刷(株)
〒 901-1111 南風原町兼城 577
TEL 098 (889) 3222